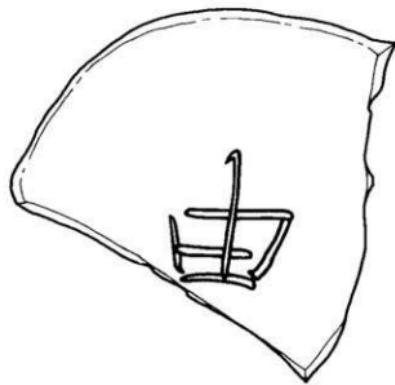


蛇喰遺跡



1999年3月
島根県八束郡玉湯町教育委員会

正誤表

(蛇喰遺跡出土柱根の樹種鑑定)

ページ	行	誤	正
163	2	吉野 級	古野 級
163	2	渡辺正巳	渡辺正巳
163	9	図1 (抜け)	(下記の図を挿入)
163	10	当社	文化財調査コンサルタント㈱
163	17	Torreya	Torreya
163	25	Castanea crenata	Castanea crenata
164	写真キャプション	カヤ:97P1 40倍 100倍 190倍 クリ:94P1 40倍 100倍 190倍	カヤ属:P3 約 20倍 約 60倍 約110倍 クリ:P1 約 20倍 約 60倍 約 60倍

【処理手順】

【処理内容】

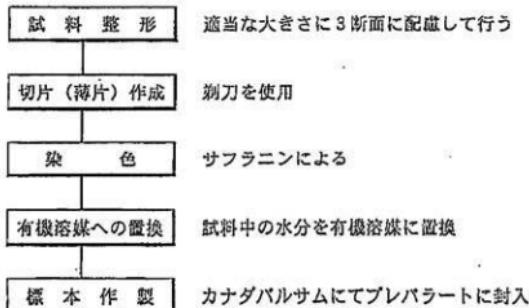


図 1 樹種鑑定用プレパラート作製フローチャート

正誤表

本文

ページ

7~8

誤

図面記載もれ

正

史跡出雲玉作跡（宮垣地区）



133 7行目

第120図1~15

第120図1~14

一覧表 注:P156~P161までページ数欠落のため、順次ページを入れて下さい。

ヘラ書き文字土器分類表

NO	誤	正
10	邊	邊カ
合計	(空白)	400 (ヲイレル)

蛇喰遺跡出土ヘラ書き須恵器一覧表

NO	誤	正
152	光	光
155~158	邊	邊カ

蛇喰遺跡出土平玉未成品一覧表

NO	誤	正
29	第40図17	第41図17
62	水晶	石英
63	水晶	石英
129	①	1
134~137	ET7SK01②-1	ET7SX012-a
139	ET7SK01②-1	ET7SX012-a
230	頁岩	石英

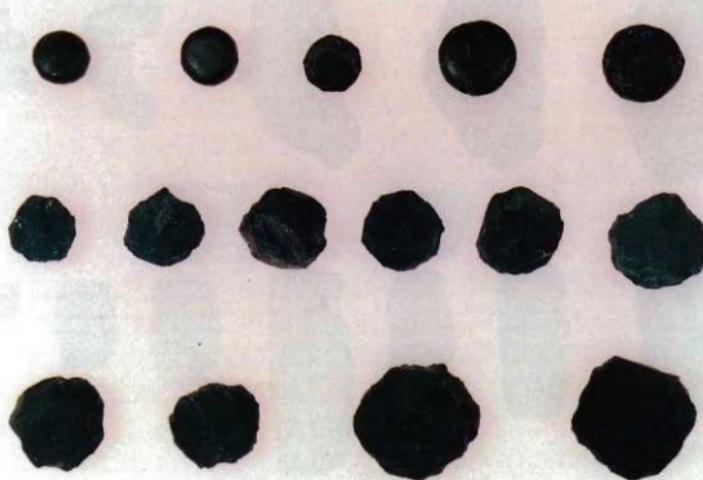
蛇喰遺跡出土勾玉未成品一覧表

NO	誤	正
347	第96図12	第96図5
348	第96図8.	第96図1

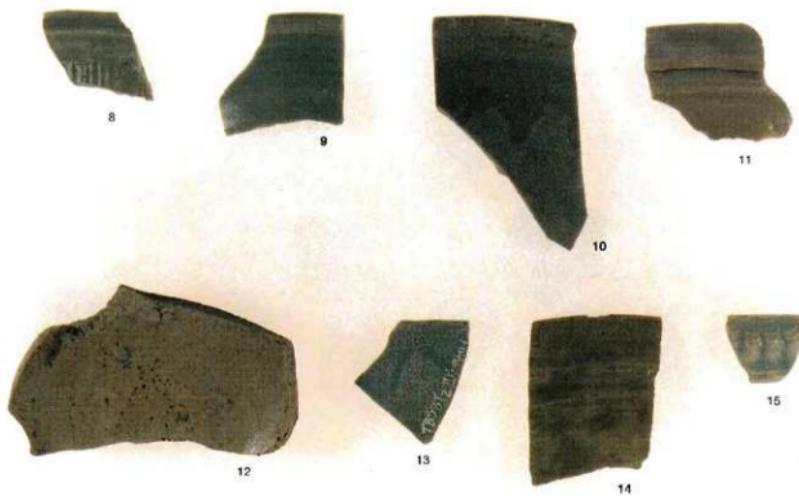
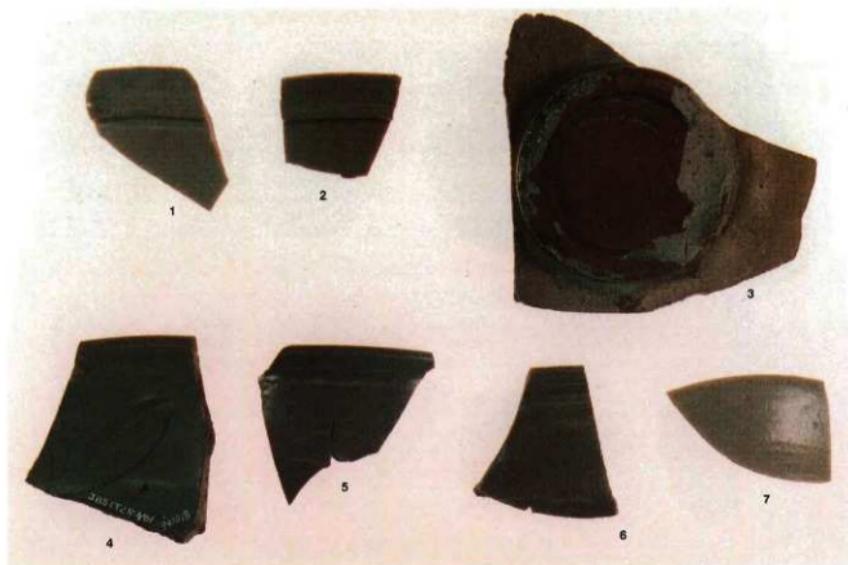
蛇喰遺跡報告書



蛇喰遺跡と花仙山



碧玉製平玉未成品



輸入陶磁器片 (第124図)

序

飛湯町は温泉と青めのうで全国的にその名を知られているように、古くから花仙山の山麓で玉を作っており、町内には数多くの玉作遺跡が存在しています。

この度、発掘調査を行いました蛇喰遺跡は、史跡出雲玉作跡に隣接している地点で、玉生産が廃れる律令時代にも依然として玉の生産を続けていたところです。今回の調査でもそれを裏付けるように多くの平玉未成品が出土しました。それとともに大量のヘラ書き土器が出土し、建物跡も確認できしたことから、この遺跡が単なる玉作遺跡ではなく、出雲地方における公的な玉の集積施設であった可能性もあり、古代史を解明する上で、非常に重要な遺跡であることが判明しました。この結果をふまえ、今後の遺跡の取り扱いの基礎資料とし、さらには住民の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を深めていただければ幸いと存じます。

古代から珍重されていた青めのうの輝きは現代も失われることなく、人の心をとらえて、はなしません。同じ想いをもって作られた青めのうの玉に古代人の労苦を感じながら、今ある私たちのさらなる発展を願わざにはいられません。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご協力いただきました地元関係者の皆さま、ご指導いただきました文化庁、島根県教育委員会をはじめとする関係各位に厚くお礼を申し上げて、報告書発刊の挨拶とさせていただきます。

平成11年3月

玉湯町教育委員会

教育長 兼 本 帳

例　　言

1. 本書は玉湯町教育委員会が、国庫補助事業として平成5年度から平成9年度にわたって実施した蛇喰遺跡（じゃばみいせき）発掘調査の報告書である。
2. 調査の目的は、遺跡の性格と範囲を明確にするとともに、隣接している史跡出雲玉作跡との関連性を調査し、将来の追加指定の際の基礎資料を得るために発掘調査を実施した。
3. 発掘調査地点は、島根県八束郡玉湯町玉造237、74、242、244、241-1、224-1、224-2、240-1、227-2、226-1、239-1、228、230、230-2、249、231-2、231-4である。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査指導 平川南（国立歴史民族博物館教授）増測徹（文化財保護部記念物課文化財調査官、現橋口女子大学助教授）松村恵司（同、現奈良文化財研究所考古第2調査室長）坂井秀弥（文化財保護部記念物課調査官）岸本直文（同文部技官）足立克巳（島根県文化財課調査第3係長）広江耕史（同文化財保護主事）柳浦俊一（同）

事務局 兼本暢（玉湯町教育委員会教育長）勝部衛（玉湯町立出雲玉作資料館長）

調査員 片岡詩子（玉湯町立出雲玉作資料館長補佐）金森みのり（同嘱託）

発掘作業 石原俊幸、岡本文市、岡本千代子、岡礼二、小室キヨエ、小室幸、作々木隆、佐藤安雄、坂本弘子、下山喜代子、杉谷安文、竹内トシ子、戸谷富夫、戸谷忠章、中島政恒、長崎二郎、野津良彦、福間逸子、福間きくよ、松浦実輔、松浦須美江、松本のり子、森脇茂、矢島マサコ、矢島幾子、吉田稔、吉田セツ子、渡部孝子、浦田定良、山本岸枝、山本トシ子

遺物整理 森山和子、高橋幸江、浪花真由美、細田純子、曾田葉子、曾田理沙子、福間加代子、井上明日香、白菊達也、松浦妙子、近藤純、吉木千尋、福間き、坂本

5. 発掘調査に関しては、永原賀計、長谷川逸郎、新宮康治氏をはじめ地元の方々に多大なご協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

6. 発掘調査並びに報告書作成にあたり、次の方々から有益なご助言、ご協力をいただいた。

松本岩雄（島根県文化財課課長補佐）、内田伸雄（調査第2係長）、平石充（同上事）、田中史生（関東学院大学講師）、秋山浩三（大阪府埋蔵文化財調査研究センター技師）

7. 本書の執筆、編集は片岡詩子が行い、以下のものが携わった。

実測 柳浦俊一、金津まり子、堀江五十鈴、伊藤裕紀、福間き、細田、金森、片岡

浮彫 難波純子、津森眞弓、高橋、浪花、金津、堀江、金森、

また、平川南先生にはお忙しい中、快く原稿執筆をお引き受けいただき、記して感謝します。

8. 本書に掲載した遺物の写真撮影は広江氏の協力のもとに片岡が行った。

9. 本書で使用した遺構、石材の略記号は以下のとおりである。

遺構 P（ピット）SI（竪穴住居状遺構）SB（掘立柱建物跡）SK（土壤）SD（溝状遺構）
SA（柵）SX（不明落ち込み）

石材 Ja:Jasper 碧玉Ag:Agate めのうCQ:Chalcedonic Quartz角石(玉髓)の一種。地元では色が單でなく、石材として不適切なものを便宜上、角石という。RC:Rock crystal水晶Cs:Crystalline schist
結晶片岩Qz:Quartz rock石英Sh:Shale頁岩Bs:Black siliceous shale黒色珪質頁岩Ob:obsidian黒曜石Sa:Sandstone砂岩Ch:Chlorite緑泥石An:Andesite安山岩

10. 本調査で出土した遺物および実測図、写真是玉湯町立出雲玉作資料館で保存している。

11. 掘図中の方位は国土調査法による第III標系の軸方向を示し、レベル高は海拔高を示す。

12. 掘図の縮尺は図中に明示した。

13. 題字は玉湯町長新宮女雄による。

挿図目次

第1図 蛇喰遺跡と周辺の遺跡	13 (序章)
第2図 蛇喰遺跡調査区配置図	7
第3図 第1調査区遺構配置図	9
第4図 A地区SD01・02・03実測図	10
第5図 A地区SD02覆土出土玉未成品実測図	11
第6図 A地区SD04・05・06実測図	13
第7図 A地区SD04覆土出土玉未成品実測図	15
第8図 A地区SD04覆土出土剥片(碧玉)実測図	16
第9図 A地区SD04 6層出土上器実測図	17
第10図 A地区包含層出土玉未成品実測図	18
第11図 A地区包含層出土玉未成品実測図	19
第12図 A地区包含層出土玉未成品実測図	20
第13図 A地区包含層出土玉未成品実測図	21
第14図 B地区暗茶褐色粘質土層遺物出土状況	22
第15図 B地区暗茶褐色粘質土層出土土器実測図	23
第16図 B地区暗茶褐色粘質土層出土玉未成品(碧玉)実測図	24
第17図 B地区暗茶褐色粘質土層出土剥片(碧玉)実測図	25
第18図 B地区暗茶褐色粘質土層出土玉未成品実測図	26
第19図 B地区暗茶褐色粘質土層出土敲石実測図	27
第20図 C地区SD01・02実測図	29
第21図 C地区SD03実測図	31
第22図 C地区SD01・02・03覆土出土上器実測図	33
第23図 C地区SD01・02・03覆土出土玉未成品実測図	34
第24図 C地区SD02・03覆土出土玉未成品実測図	35
第25図 C地区石組遺構実測図	36
第26図 C地区包含層出土玉未成品実測図	37
第27図 C地区包含層出土土器型溝実測図	38
第28図 第2調査区遺構配置図	39
第29図 A地区遺構配置図	41
第30図 A地区土層断面図	43
第31図 A地区SB01・02・03実測図	44
第32図 A地区柱根ピット実測図	45

第33図	A地区P1・10出土柱根実測図	46
第34図	A地区P12・13・SK01実測図	47
第35図	A地区P12・SK01覆土川上砥石実測図	48
第36図	A地区2、4、5、7、9層出土土器実測図	49
第37図	A地区7層出土土器実測図	50
第38図	A地区8層出土土器実測図	51
第39図	A地区11層、獨立柱建物跡出土土器実測図	52
第40図	A地区1層出土玉未成品、石鏃実測図	53
第41図	A地区2層出土玉未成品実測図	54
第42図	A地区2層出土玉未成品実測図	55
第43図	A地区2層出土玉未成品、砾石実測図	56
第44図	A地区4層出土玉未成品実測図	57
第45図	A地区4、5層出土玉未成品実測図	58
第46図	A地区5、7、8、11層出土玉未成品石鏃実測図	59
第47図	A地区5、8層、地山直上出土玉未成品実測図	60
第48図	A地区6層出土土器実測図	61
第49図	A地区8層出土砥石実測図	62
第50図	B地区SK01実測図	63
第51図	B地区SD01実測図	64
第52図	C地区SD01実測図	65
第53図	C地区P1・SD01覆土出土土器実測図	66
第54図	C地区SD01覆土川上玉未成品実測図	67
第55図	C地区SX01・02実測図	68
第56図	C地区SX01 4、5層出土土器実測図	69
第57図	C地区SX02 4、5層出土土器実測図	70
第58図	C地区SX01・02覆土出土玉未成品実測図	71
第59図	C地区SX01・02覆土出土玉未成品、砥石実測図	72
第60図	C地区SI01覆土遺物出土状況	73
第61図	C地区SI01覆土出土土器実測図(1)	75
第62図	C地区SI01覆土出土土器実測図(2)	76
第63図	C地区SI01覆土出土土器実測図(3)	77
第64図	C地区SI01覆土出土土器実測図(4)	78

第65図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(5)	79
第66図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(6)	80
第67図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(7)	81
第68図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(8)	82
第69図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(9)	83
第70図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(10)	84
第71図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(11)	85
第72図	C地区SI01覆土出土上土器実測図(12)	86
第73図	C地区SI01覆土出土上土器「白田」実測図(1)	87
第74図	C地区SI01覆土出土上土器「白田」実測図(2)	88
第75図	C地区SI01覆土出土上土器「山」実測図	89
第76図	C地区SI01覆土出土上土器「台」実測図	90
第77図	C地区SI01覆土出土上土器実測図	91
第78図	C地区SI01覆土出土未成品実測図	92
第79図	C地区SI01覆土出土未成品、砥石実測図	93
第80図	C地区SI01実測図	95
第81図	C地区SI01床面出土上土器実測図	97
第82図	C地区SI01内P5出土土器実測図	98
第83図	C地区SI01内溝・P7出土上土器実測図	99
第84図	C地区SI01付近1層出土上土器実測図	100
第85図	C地区SI01付近1層出土玉未成品実測図	101
第86図	C地区SI01付近2層出土上土器実測図	102
第87図	C地区SI01付近2層出土上土器実測図	103
第88図	C地区SI01付近2層出土上土器実測図	104
第89図	B・C地区包含層出土上土器実測図	105
第90図	B・C地区包含層出土玉未成品実測図	106
第91図	B・C地区包含層出土砥石実測図	107
第92図	第3調査区遺構配置図	109
第93図	SK01・SD01・02・SX01実測図	110
第94図	SX02実測図	111
第95図	SK01・SD01・SX01・02覆土出土上土器実測図	112
第96図	SK01・SX01覆土出土玉未成品実測図	113

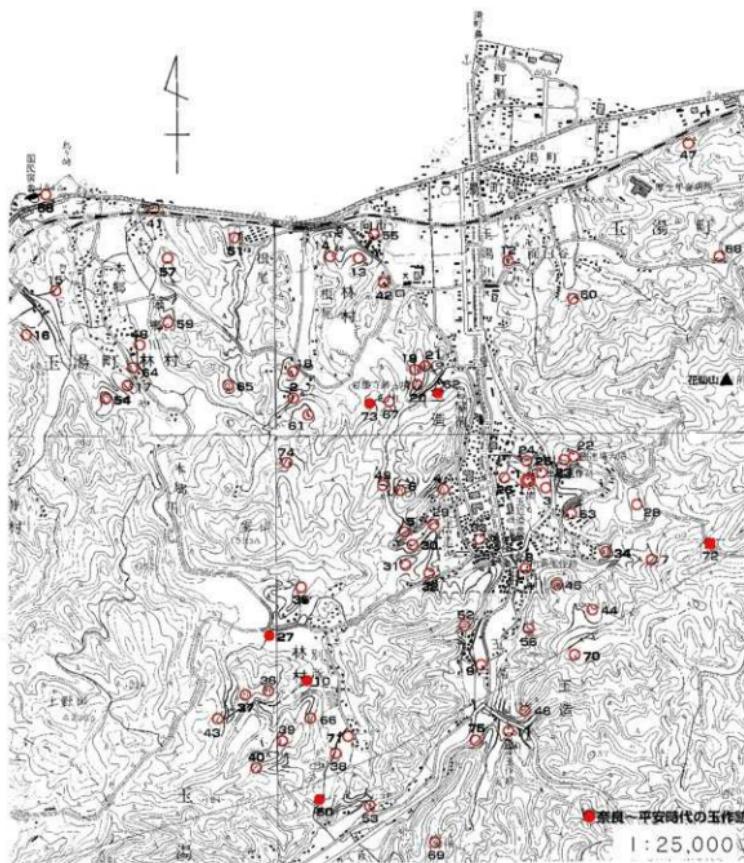
第97図 SD01・SX01・02覆土出土玉未成品実測図	114
第98図 SX01・02覆土出土土製品実測図	115
第99図 SK02・P1～P11実測図	116
第100図 包含層出土土器実測図	117
第101図 包含層出土土器実測図	118
第102図 包含層出土玉未成品実測図	119
第103図 包含層出土砥石実測図	120
第104図 第4調査区遺構配置図	121
第105図 A地区SD01・P1～P11実測図	123
第106図 A地区包含層出土玉未成品、ガラス玉実測図	124
第107図 B地区SK01実測図	125
第108図 B地区SK01覆土出土土器実測図	126
第109図 B地区SK02実測図	127
第110図 B地区SD01実測図	128
第111図 B地区ピット群実測図	129
第112図 B地区包含層出土玉未成品実測図	130
第113図 B地区包含層出土玉未成品実測図	131
第114図 B地区包含層出土砥石実測図	132
第115図 C地区集石遺構実測図	133
第116図 C地区SD01・SX01・02実測図	134
第117図 C地区SD01覆土出土土器実測図	134
第118図 C地区SD02・03実測図	135
第119図 C地区SD02覆土出土玉未成品実測図	135
第120図 C地区包含層出土玉未成品実測図	136
第121図 C地区包含層出土玉未成品実測図	137
第122図 C地区包含層出土砥石、玉未成品実測図	138
第123図 A・B・C地区包含層出土土器実測図	139
第124図 蛇喰遺跡出土輸入陶磁器実測図	140
第125図 第1・2・3調査区包含層出土土製品実測図	141
第126図 蛇喰遺跡出土鉄製品	142

目 次

序

例言

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に毛る経緯と経過	3
第3章 調査の概要	4
第4章 蛇喰遺跡の調査	6
第1調査区	6
A地区の調査	6
B地区の調査	11
C地区の調査	12
第2調査区	17
A地区の調査	17
B地区の調査	47
C地区の調査	50
第3調査区	108
第4調査区	118
A地区の調査	120
B地区の調査	120
C地区の調査	126
第5章	
1. 島根県玉湯町蛇喰遺跡出土のヘラ書き須恵器 (平川 南)	143
2. 蛇喰遺跡出土の玉について (片岡詩子)	148
3.まとめ (片岡詩子)	153
第6章 自然科学分析	
蛇喰遺跡出土柱根の樹種鑑定 (古野毅・渡邊正巳)	163



第1図 蛇喰遺跡と周辺の遺跡

- | | | | |
|-------------------|------------------------------------|-------------|------------|
| 1. 鮑喰遺跡 | 21. 岩谷寺跡横穴群 | 41. 穂佐古墳群 | 61. 穂佐遺跡 |
| 2. 古墳遺跡 | 22. 徳山場古墳 | 42. 扇原古墳 | 62. 幸ノ木遺跡 |
| 3. 出雲玉作跡 (宮地区) | 23. 鹿島場横穴 | 43. 沙子谷タカラ跡 | 63. 光輪高古墳 |
| 4. 波止遺跡 | 24. 大室玉作跡群 | 44. 萩谷大山跡 | 64. 鶴田遺跡 |
| 5. 波止古墳 | 25. ifarukizumi no shirakami kofun | 45. 小造寄宿山城跡 | 65. 井原町古城跡 |
| 6. 平床1遺跡 | 26. 小丸山古墳 | 46. 高桂谷タカラ跡 | 66. 神田遺跡 |
| 7. 向新宮遺跡 | 27. 有ノ木遺跡 | 47. 鹿次郎古墳群 | 67. 君原古墳群 |
| 8. 山呂玉作跡 (宮ノ上地区) | 28. 施加原古墳群 | 48. 六反田遺跡 | 68. 長忍越跡 |
| 9. 須原遺跡 | 29. 花立八古墳群 | 49. 日燒堀遺跡 | 69. 鹿山城跡 |
| 10. ソリ田遺跡 | 30. 花立墓穴群 | 50. 大1遺跡 | 70. 高文城跡 |
| 11. 山呂玉作跡 (下ノ宮地区) | 31. 高佐古墳群 | 51. 小今松古墳 | 71. 松ノ前廻寺 |
| 12. 小丸山古墳 | 32. 太門山跡横穴群 | 52. 遠木谷遺跡 | 72. 鶴野古跡 |
| 13. 林垂寺古墳 | 33. 玉治塚山古墳 | 53. 西遺跡 | 73. 若尾山遺跡 |
| 14. 蛇道寺古墳群 | 34. 新竹塚古墳群 | 54. モコ谷古墳群 | 74. 稲尾山古墳群 |
| 15. 林小泊群 | 35. 長崎山古墳群 | 55. 向市遺跡 | 75. 大野田遺跡 |
| 16. 霍古墳群 | 36. 大野田古墳群 | 56. 古室古墳 | |
| 17. 鮑喰古墳群 | 37. 大岱山跡横穴群 | 57. 中寺古墳群 | |
| 18. 鶴尾森山古墳群 | 38. 猪ノアツ山 | 58. 馬ヶ越遺跡 | |
| 19. 岩谷寺跡横穴群 | 39. 玉ノ島横穴群 | 59. 雅ノ木谷山跡群 | |
| 20. 岩谷寺跡横穴群 | 40. 寺ノ空横穴群 | 60. 下板古墳群 | |

第1章 位置と環境

玉湯町は松江市の西南約8kmに位置し、総面積36.84m²、人口約6100人の町である。宍道湖南岸の縁の山々に開まれた谷合に、古くから玉造温泉としてひらけていた。すでに奈良時代の文献『出雲国風土記』(733年)に大勢の老若男女で賑わっていたことが記され、清少納言の「枕草子」でも、名湯のうわさが都まで知れわたっていたことがわかる。温泉街東側にある良質な碧玉を産出する花仙山(標高199m)を背景に古代から玉作りが盛んな地で、玉造という地名も『出雲国風土記』に「長作山」、「玉作川」、「玉作街」の記載がみられるように、そこから由来する。

蛇喰遺跡は、八束郡玉湯町玉造地内に所在する。花仙山西麓の標高25~36mの緩斜面にあり、現在は畠地、荒地、宅地となっており、総面積約1.2haが遺跡の対象である。本遺跡の東側には国指定を受けている史跡出雲玉作跡が隣接し、さらに西側に約100m下ると玉造温泉街のほぼ中央を流れる玉湯川の右岸に出る。蛇喰遺跡という語源は明らかではないが、地すべり、山崩れ地帯に多く付けられている地名である。地すべりの後は緩斜面ができるため、耕地がひらかれ、人が住む場所となる。本遺跡も例にもれず、地下水がこんこんと湧き出る地すべり地帯である。

旧石器時代～縄文時代

後期旧石器時代の遺跡として鳥ヶ崎遺跡がある。宍道湖に面する畠地や南側の丘陵上で縦長剥片、石核が採集されている。また、湖岸では縄文時代後期の磨消文上器の破片が発見されている。

弥生時代

玉湯吉妻山線道路改良工事に伴う発掘調査で見つかった大野田遺跡がある。史跡出雲玉作跡玉ノ宮地区に隣接する畠地にある幅7~8mの川跡から、ナスピ形農耕具や火肅臼が出土しており、弥生時代後期のものと考えられている。

古墳時代

玉材の原産地という地の利を活かし、数多くの玉作遺跡が存在している。とくにこの時代においては大量の玉生産が行われた。そのうち宮垣地区、宮ノ上地区、玉ノ宮地区の3ヶ所が国指定を受けている。宮垣地区では昭和44年、46年の3次にわたって発掘調査が行われ、その結果、大量の玉未成品が出上るとともに占墳時代中期を中心とした工房跡が約30軒検出されている。宮ノ上地区は玉湯川右岸の谷合に位置する長作湯神社境内に所在する。「出雲国風土記」にも記載されている歴史の古い神社で、この地区で実施された発掘調査では、玉類とともに複合口縁をもつ多量の古式土師が出土し、弥生時代終末期から古墳時代初期に、さらには占墳時代末期にも玉作りが行われていたことが確認されている。玉ノ宮地区は史跡出雲玉作跡のなかで、最も南側に位置する玉作遺跡で、谷筋に遺跡が広がっている。発掘調査では明確な遺構は確認されなかったが、玉作り関連の遺物がまとまって出土しており、玉作工房址の存在が伺える。また、同地区では7世紀代と推定される精練炉が検出され、鉄滓や炉壁など多数の製鉄関係の遺物が出土している。周辺の玉作遺跡としては、玉作工房址が検出された平床遺跡、口焼廻遺跡、めのう製玉未成品が多数出土する花仙山北麓の狐廻遺跡などがある。

また、玉湯川周辺には多くの古墳が築造されている。蛇喰遺跡西側にのびる低い尾根上には小丸山古墳がある。墳丘は楕円形を呈し、横穴式石室と思われる石材が一部露出しており、試掘溝で幅1mの周溝を確認している。史跡公園東側の低丘陵上に築かれた徳連場古墳は5世紀代と考えられる小型の円墳。石棺は綱掛突起をもつ舟形石棺の一種で、付近でとれる白色凝灰岩が使われている。玉湯川左岸の玉造築山古墳も徳連場古墳と同時期の古墳で舟形石棺を2基保有するなど、舟形石棺の存在が目立つ。報恩寺古墳と扇廻古墳は全長50m前後のいずれも町内で最大級の前方後円墳で、5~6世紀代のもと考えられている。古墳時代後期の6~7世紀代になると岩屋寺横穴、花立横穴など、出雲地方で多くみられる横穴がつくられる。また、同時期には『出雲国風土記』にその地名の起源が記されている林村地内にも多くの古墳が築造される。町内で最大規模を誇る林古墳群は宍道湖に突出す低い丘陵上に約50基の古墳が密集している。大部分は円墳であるが、8号墳は方墳で、封鎖石にかんぬき状のリーフが施されている石棺式石室をもつ。43号墳は全長約17.5mのミニ前方後円墳。6世紀中期~後期にかけて築造されたもので、出雲で最も古いタイプに属する。盗掘を免れ、石室からは200点を越える副葬品が発見された。この地区には玉作遺跡も多く存在し、6町の玉作工房址が検出された塙床遺跡をはじめ、ソリ田遺跡、宮畠遺跡、神田遺跡、大口遺跡などがある。

奈良・平安時代

律令時代になると全国的に玉の生産は激減するが、ここ玉湯町内では引続き玉作りの生産が行われていた。この時代の文献である『出雲国計会張』(733年)、『古語拾遺』(807年)、『延喜式』(927年)に朝廷に献上した記録が残っている。林村の六反田遺跡では、発掘調査により半玉未成品やスラグが数多く出土している。玉造の岩屋玉作跡では水晶の半玉未成品を主体とする玉作工房址が確認されている。また、意宇郡の郡司である林臣の私寺と考えられる松ノ前磨寺も林の地に建立されており、礎石や軒丸瓦、鬼板瓦などの古瓦が見つかっている他、園場整備による試掘調査では白磁合子などの輸入陶磁器も出土している。

鎌倉・室町時代

玉湯町内にはいくつかの中世の山城が残っている。とくに玉造から大谷にかけては古代から奥出雲に通じる重要な街道であったため、玉湯川の谷に面した丘陵上に集中して築かれている。天文11年秋には尼子攻めの大内氏の軍がこの谷を通過している記録も残っている。なかでも玉作湯神社の背後にそびえる標高108mの玉造要害山城は、小規模ながら保存状態が非常に優れている山城である。山頂や山腹にいくつもの曲輪が造成され、土塁や掘切、横台などがみられ、頂上には井戸も残っている。城は鎌倉時代末期のもので、玉造が湯庄と呼ばれていた時代の領主である湯氏が城主であったと考えられている。また、林村にも林の守の居城と伝えられる山城が本郷川下流の右岸にある小高い丘陵上に築かれ、曲輪、土塁、堀切が比較的良好な状態で残っている。

第2章 調査に至る経緯と経過

玉湯町は、町内だけでも約30ヶ所の玉作遺跡が集中していることからもわかるように花仙山のもとに多くの玉が生産されてきた。とくに史跡出雲玉作跡は大正11年10月にすでに国の史跡として指定を受け、昭和44年、46年の発掘調査の結果、全国にさきがけ、史跡公園として昭和49年に整備された。この史跡公園に隣接している蛇喰遺跡の周辺でも以前から玉本成品や文字のある須恵器がたくさん採集され、昭和61年に島根県が実施した生産遺跡分布調査でその範囲が明確になり、奈良～平安時代の玉作遺跡として周知の遺跡となった。平成4年に玉湯町が蛇喰遺跡周辺に温泉施設建設事業の計画を打ち出したため、当年10月28日に文化庁の増額微技官を招き、島根県教育委員会、玉湯町助役、玉湯町企画観光課、玉湯町教育委員会で協議を実施した。その結果、温泉と玉を結びつけるという発想は資料館や史跡の活用面で大いに好ましいことではあるが、建設予定地は史跡指定地と一体になった遺跡と考えられるので、実施計画を立案する前に遺跡の残存状況や正確な範囲を発掘調査によって確認する必要がある。その結果しだいで、主要な建物を配置し、周辺は遺跡を取り込んだ整備が望ましい。昭和60年に策定された保存管理計画においても「公園西側の畑にも遺跡が広がっていると考えられるので、所有者の理解を得て、計画的に調査を行い、結果によっては追加指定することが必要である。」とされていることから、開発の事前調査ではなく、史跡出雲玉作跡（宮垣地区）の周辺部の広がりを確認するための調査が必要である。このことから国庫補助を受けての調査が決定し、翌年の平成5年から当初は3ヶ月をかけて調査を実施する運びとなった。調査方法は遺跡の包含層及び遺構の有無を確認し、遺跡の範囲を明確にすると目的からトレンチ掘りによる調査を実施し、遺構が検出された時点で埋めし、現状保存という形で調査を進めた。平成5年12月には第一次調査終了後、現地説明会を開催した。統いて同月に平成6年度調査区が借地となるので、調査実施の理解と協力をお願いするために地権者説明会を開いた。平成6年6月には、蛇喰遺跡地内の一部が玉湯町の建設工事にかかることが判明し、急速、発掘調査を実施した。調査後、島根県と協議した結果、開発対象地には重要な遺構、遺物がないことから工事はやむを得ないと判断した。また、同年の11月には、ヘラ書き土器が多数出土した竪穴住居状遺構など重要な遺構が検出されたので、現地説明会を開催した。平成8年度には今までの調査結果をふまえて、玉湯町長、県教委、文化庁日本直文技官の出席のもと、蛇喰遺跡における今後の対応を検討した。その結果、将来、史跡出雲玉作跡の追加指定を考慮するなら、一部だけでも明確な遺構を検出し、確実な基礎資料とした方がよいのではないかという指摘があり、翌年の平成9年度には、平成6年度調査で柱根を伴う柱穴が検出された付近を中心に、範囲を広げて調査を実施した。その結果、建物跡の柱穴の並びを検出し、掘立柱建物跡であることを確認した上で、全調査を終了した。

第3章 調査の概要

発掘調査は国庫補助を受け、平成5年～平成9年までの5次にわたり、以下のように実施した。

第1次調査（平成5年7月12日～平成6年3月16日）

元大和紡績保養所跡地。2470m²が対象。標高25～31m。本調査区の最も南側にあり、狭い谷あいに位置する。便所跡や風呂跡、さらにはコンクリートの廃材が出るなどかなり搅乱をうけている。A、C地区北側の緩斜面で溝状遺構と石組み遺構の一部を検出した。遺物は玉未成品の他に砥石、はずみ車、スラグ、土器は古式土師、須恵器、輸入陶磁器、綠釉などが出土している。「林」の文字が残る須恵器の底部も出土している。B地区では明確な遺構は検出されなかつたものの、完形品の土師器とともに碧玉製の玉未成品が集中して出土した。

第2次調査（平成6年9月19日～平成7年3月15日）

本遺跡北側の丘陵緩斜面約3800m²が対象。標高31～36.6m。以前から玉未成品やヘラ書き土器が最も多く採集されている畠地である。検出された主な遺構は、柱根が残る柱穴と竪穴住居状遺構。竪穴住居状遺構からは大量のヘラ書き土器が集中して出土した。その他、A地区では野鍛冶跡と思われる焼土面、B地区では溝状遺構が、C地区では遺構の性格が明確ではないが、多くの水晶製平玉未成品を出土した落ち込みを検出した。その他、この地区では内磨き砥石、筋砥石、奈良～平安時代の須恵器を中心に、綠釉、輸入陶磁器、円面鏡、鉄製品も出土する。

第3次調査（平成7年6月8日～10月31日）

史跡公園の最西端に隣接する地区。元大和紡績保養所の茶室跡。現在は荒地である。標高32.5～34m。対象面積は2055m²。建物があった北側地区は造成のためすでに土地が改変され、遺物、遺構はほとんど残存していなかった。平成6年度調査区に隣接している本地區南端の地表下約1.2m付近で溝状遺構と落ち込みを検出。水晶製平玉未成品を中心とした遺物が出土した。須恵器が多く出土しており、ヘラ書き土器もみられた。土師器は小片で摩滅したものが多い。その他、土鍤、土製支脚なども出土。

第4次調査（平成8年5月15日～10月11日）

本遺跡南西部の緩斜面で、史跡出土玉作跡に隣接する畠。標高32.2～37.55m。3316m²が調査対象面積。史跡公園に接しているA地区的東側地点は、覆土がかなり分厚く堆積しており、包含層は確認できたが、明確な遺構は検出できなかった。A地区南側は比較的の地山が浅く、ビット群と溝状遺構を検出した。調査区西側のC地区では、地山に掘り込まれた溝状遺構が検出され、めのう製勾玉未成品が出土した。その他、集石遺構も確認したが、いずれも小規模なトレンチ掘りのため目的、性格は把握できなかった。史跡公園から続いている緩斜面で玉作工房址の検出が期待されたが、残念ながら確認できなかった。包含層からは各種玉未成品、砥石、スラグ、須恵器、土師器、古式土師などが出土。ヘラ書き土器は他の地区に比較すると少量だが、「桐家」、「林」などがみられた。

第5次調査（平成9年9月25日～12月18日）

調査対象面積は677m²。本遺跡北側緩斜面の畠で、平成6年度調査において検出した柱穴の続

きを確認するために、再度、周辺を精査した。その結果、柱根を残すピット群が検出され、掘立柱建物跡が存在していたことが明らかになった。残念ながら東側は隣接している民家の床下に延びているので、検出は不可能であった。その他に、溝状遺構、落ち込みなども検出。建物跡の周辺から出土した遺物は平玉、丸玉、勾玉などの玉未成品の他、箭頭石が出上している。土器は包含層の最深部で弥生土器もみられたが、多くは須恵器を中心で、特に奈良時代以降のものが多く出土した。



現地説明会（平成6年11月24日）

第4章 蛇喰遺跡の調査

第1調査区（第3図）

平成5年度に調査を実施した地区。本調査区最南端にあり、南北35m、東西90mの細長い谷間。大和紡績保養所が建てられていた以前は畑として利用されていたが、15年前に建物が撤去されてからは荒地となっていた。すでに地形が改変され、3段の平坦地を造り出している。調査の便宜上、標高の高い地点からA地区（30～31m）、B地区（28.4～28.5m）、C地区（25～28m）とし、それぞれにトレントを設定して、調査を実施した。

A地区

最上段の加工段に3ヶ所のトレントを設定。中央部に東西を長軸としたトレントとそれを中心に南北に1ヶ所ずつ設定して、調査を実施した。

SD01・02・03（第4図・第5図）

北側調査区から3条の溝を検出。設定したトレントの上層部は土管が出土するなどすでに擾乱を受けていた。いずれも表土下0.3mの黒褐色粘質土に掘り込んでおり、溝内には砂まじりの暗茶褐色粘質土が堆積している。SD01は平面形が鉄アレイ形を呈し、幅0.3～0.6m、深さ0.2mを測る浅い溝。4方向に分岐するが、西方向にのびる溝は旧便所により切られている。溝の底部は平坦。遺物は碧玉、角石の剥片が出土。須恵器、土師器も若干出土しているが、小片のため時期不明。SD02はSD01の南隣に検出された。トレントの壁と旧便所に遮られ、全容は明らかではなく、0.2mと浅い。遺物は土器の小片が少量と、碧玉、瑪瑙、角石製の玉未成品や剥片が出土している。第5図1～6は毛木未成品。1は碧玉製勾玉未成品。半月状の剥片素材。側面には丁寧な剥離調整がみられ、縁辺部には細かな潰れが残る。2は石英製丸玉未成品。断面は多角形を呈すが、細かい敲打痕が結晶面に残る。3は方形状に整形された緑泥石製白玉未成品。4は角石製、5は碧玉製で、いずれも石核かと思われる。6は白めのう製の剥片素材。剥離調整を加え、断面は楕円形を呈す。勾玉を意識したものか。SD03は幅0.1m、深さ0.2mを測る幅狭い溝状構造。北東方向にのびるが、トレントの両壁に阻まれ、長さ0.7mしか検出できなかった。

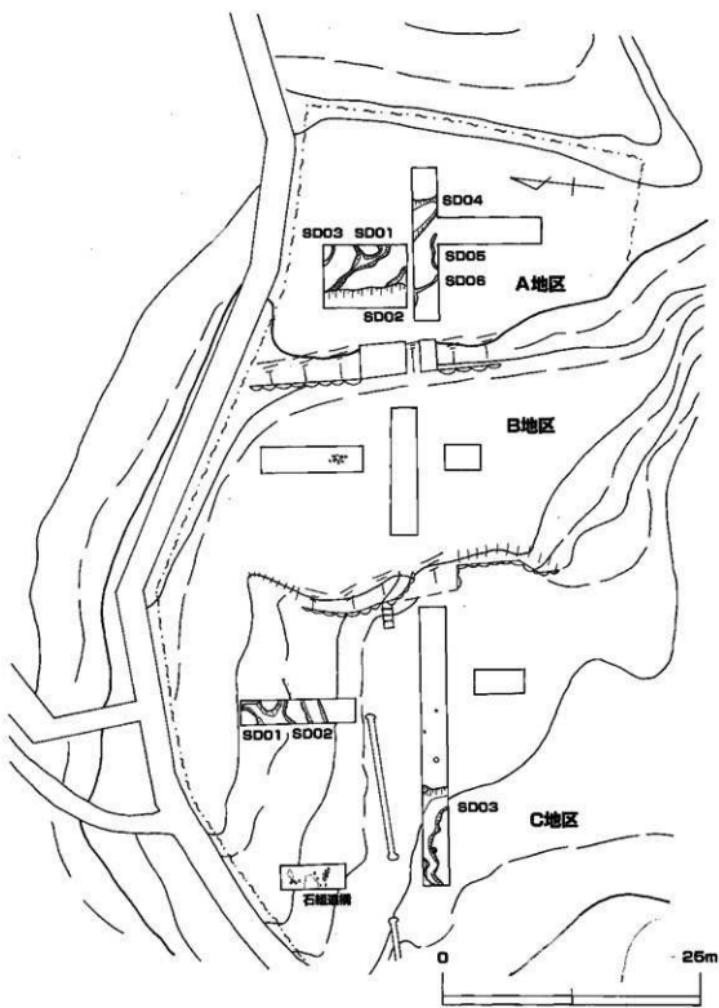
SD04・05・06（第6図～第9図）

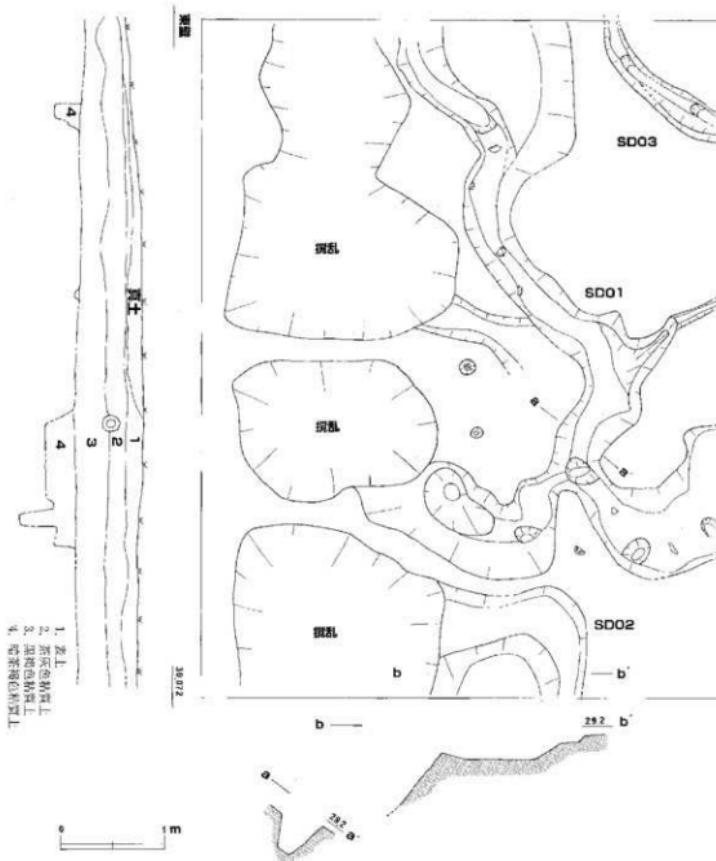
A地区のほぼ中央部に東西を長軸に2×12mのトレントを設定した。上層部に残るコンクリートの基礎部分の廃材を取り除くと、暗茶褐色土に3条の溝状構造が掘り込まれていた。SD04は南北方向に走る。幅3.9m、最深部0.6mを測り、北側にはテラス状の平坦面をもち、西方向にやや傾斜する。この平坦面から溝底面にかけては拳大から人頭大の石が点在する。覆土は上層から茶褐色土、灰褐色土、灰褐色粘質土と3層に別れる。灰褐色土には地山の黄色砂質土が混入する。この層には碧玉、めのう、右英、角石の玉材を含み、特に碧玉が多く出土した。第7図1は碧玉製管玉未成品。四角柱状を呈し、断面は直方体をなす。裏面には大きく抉れた主要剥離面が残り、側面の縁辺部には細かな打裂調整が認められる。第7図2は頁岩製平玉未成品。断面は五角形を呈す。素材面を残し、側面に剥離調整を入れる。第8図3～11は碧玉製。3は板状の石核。4は剥離調整のある板状剥片素材。自然面を大きく残す。縁辺部には細かな剥離痕がみられる。



第2図 蛇喰遺跡調査区配置図

1:500



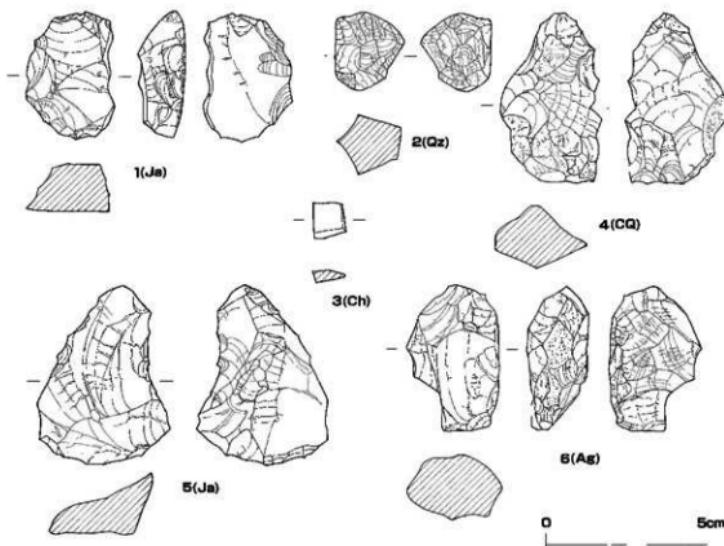


第4図 A地区SD01・02・03実測図

5は縦長の剥片素材。6は直方体を呈する石核。一部に自然面が残る。7~9は加工痕のある剥片。10は石核あるいは剥離調整のある剥片素材か。11は石核。灰褐色粘質土の底面には砂が混じり、水が湧き出す。ここからは須恵器の蓋と高台環（第9図1、2）が出土した。いずれも奈良時代以降のものである。SD05は残存長2.8m、幅0.2m、最深部0.2mを測る。トレンチ南壁から延び、東端で閉じる。SD06は南北に走る溝だが両端ともトレンチの壁につきあたり、全容は明らかではない。幅0.2m、最深部0.3mを測る。遺物の出土はみられない。

遺構に伴わない遺物（第10図～第13図）

第10図はいずれも半玉未成品。1~4は猪玉製。1はほぼ正円形で断面は梢円形。研磨痕が残る。2~4は平坦な素材面もしくは主要剥離面を残し、剥離調整を施す。3、4の断面は直方体を呈す。5、6は石英製。小粒で、全面に細かな剥離調整が残る。5は断面が分厚く、丸玉になる可能性がある。



第5図 A地区SD02覆土出土玉未成品実測図

ある。7は頁岩製で研磨痕が残る。8、9は黒色珪質頁岩製。断面はレンズ状を呈す。第11図は碧玉製。10、12は管玉未成品。10は剥片素材。両面に主要剥離面を大きく残す。側面の縁辺部には剥離調整の際にできた細かな潰れもみられる。12は大型品。長軸方向に細かな研磨を施す。断面は7面の平坦面をつくる。11は勾玉未成品。全面に剥離調整を加える。とくに腹部を意識して、側縁部には細かな剥離調整を入れる。13は剥離調整のある剥片素材。断面はひし形。14は円盤状の剥片素材。目的器種は不明。周縁部から剥離調整を加え、打裂痕も残る。断面は三角形に近い形。15は剥離調整のある剥片素材。断面は五角形。16は片面に大きく自然面を残す石核。第12図17は碧玉製。剥離調整のある剥片素材。色がうす緑で、質がやや粗朶。製作途中で廃棄されたものか。18~20はめのう製勾玉未成品。18、19は半月形をなす。板状素材を使用し、断面は隅丸方形を呈す。18、20には腹部を意識した剥離調整を加える。19は白表面を一部に残したまま剥離作業を行い、部分的にやや粗い研磨を施す。第13図21は結晶片岩製内磨き砥石。両端は欠失している。全面を使用し、両面の長軸方向には浅い溝状の凹みが残る。角が丸くなっているのは使用のためと考えられる。22は平砥石。手ごろな自然石を砥石として利用する。4面を砥面として使用し、断面は立方体を呈す。2面には長軸方向に細かい擦痕が残る。

B地区

谷間の中ほどにある加工段に3ヶ所のトレンチを設定した。明確な遺構の検出には至らなかった。南側のトレンチは廃材が詰まったごみ穴であった。中央部に東西を長軸に設定したトレン

チではコンクリートの基礎部分が検出された。それを除去して掘り進むと深さ0.63mで西方向にやや傾斜する自然地形を検出した。いずれも遺物がわずかに混在していた。

暗褐色粘質土層出土遺物（第14図～第19図）

北側トレンチでは表土下約0.6mの暗茶褐色粘質土で径0.5×0.4mの大石を中心に土師器が一個体ずつ原位置で土に押し潰された状態で出土し、復元するとほぼ完形品となった。周辺には小石も点在している。出土した土師器は高杯（第15図1～3）と甕（第15図4、5）であった。いずれも風化が著しい。1の杯部は楕円形をなし、内湾気味に立ち上がる。口縁部外面にはナデ調整がみられる。2、3は脚部のみ残存するが、裾部が八の字状にひらく。4の口縁部はやや肥厚する。5は単純口縁で、逆八の字状にひらく。体部内面にはヘラケズリ調整がみられる。いずれも古墳時代中期～後期のものと思われる。暗茶褐色粘質土には遺物を大量に含むことから遺構の存在が考えられ、さらに掘り進んだが、深さ0.9m地点で遺物の出土がみられなくなったので、発掘をとりやめた。この土層には玉材が多量に含まれており、とくに碧玉の出土が目立った。第16図～第18図はいずれも碧玉製。第16図は未成品。1は勾玉未成品で半月形を呈す。上要剥離面を残し、縁辺部と側面に剥離調整を入れる。断面は直方体を呈す。2～9は剥離調整のある剥片素材。7、9は板状、2～6、8は角柱状を呈す。第17図は加工痕のある剥片。大小様々だが、いずれも剥離調整の際にできた剥片。10～13は横長剥片。14～17は縦長剥片。この包含層からは多量の剥片が出土し、とくに横長剥片が多い。第18図は石核。20は大型品で幅広の剥離痕が残る。21は調整剥片の可能性もある。第19図22、23は石核を転用した敲打石。22は一端部に、23は両端部に細かい敲打痕が残り、それによる剥離痕が認められる。その他、めのう、角石の剥片が少量と水晶の丸玉になると思われる調整剥片が数点出土した。

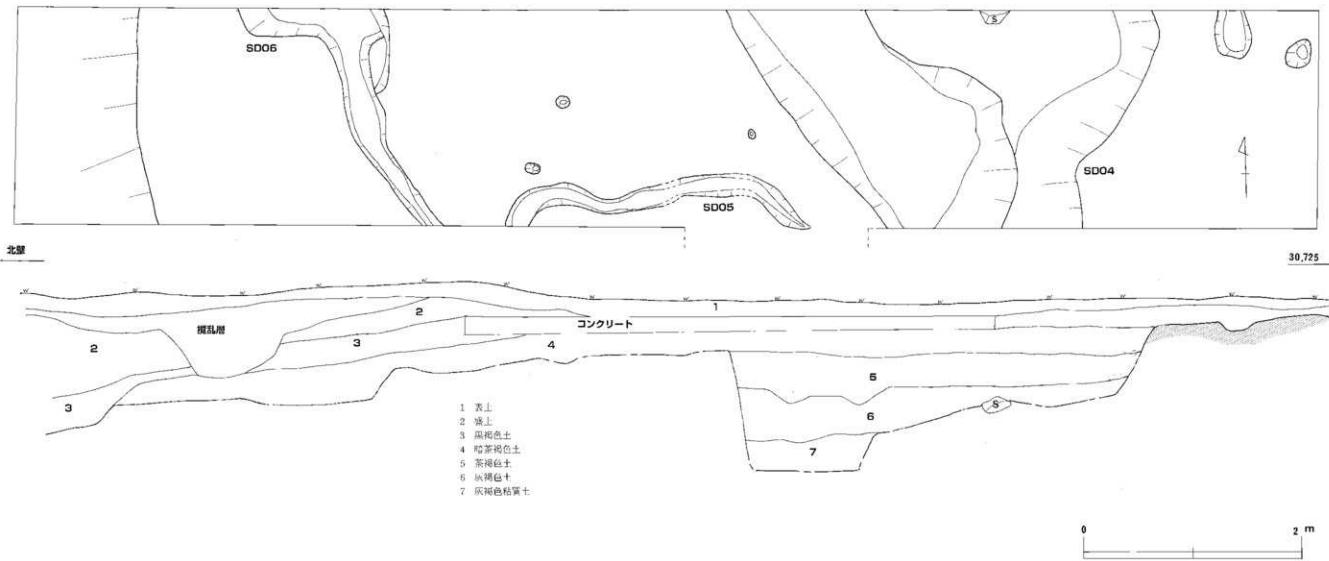
C地区

谷間の中央部に東西11mの長いトレンチを設定し、それをはさむ形で南側に1ヶ所、北側緩斜面に2ヶ所のトレンチを設定した。南側トレンチは表土からすでにコンクリートの基礎がのぞいており、掘り進むと、浅い地点で地山にぶつかった。遺構は検出されなかった。北側緩斜面に2条の溝状遺構と右組み遺構が、谷部の中央では溝状遺構が確認された。

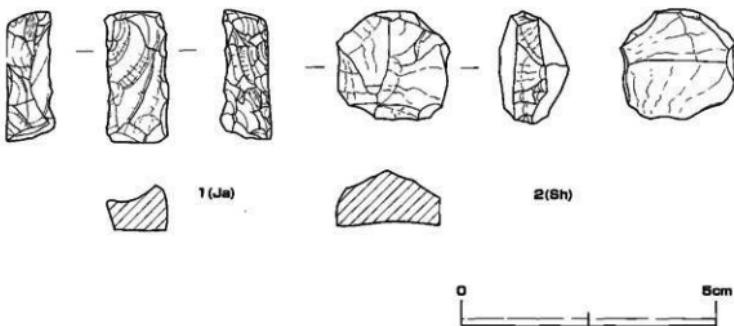
SD01-02-03（第20図～第24図）

SD01と02は北側緩斜面で検出された。SD01は表土下0.8m、SD02は0.4m下の赤褐色粘質土に掘り込まれていた。SD01は幅0.6～1.6m、深さ0.45m。溝は東西方向に流れ、東側で二股に分岐する。SD02はSD01よりやや南側に平行して走り、東西にまっすぐにのびる。幅1.4m、深さ0.5m。SD01、SD02ともに壁はやや傾斜をもって立ち上がり、底面は平坦である。覆土は2層に分かれ、上層に茶褐色粘質土、下層に砂を含む黒褐色粘質土が堆積し、水が湧き出している。底面では石敷の間に遺物が点在しており、土器は摩滅した小片が多い。周辺からの流れ込みによるものと考えられ、溝の時期は特定できない。

SD01の茶褐色粘質土からは土師器の把手（第22図1）が出土する。黒褐色粘質土からは須恵器（第22図2）、土師器（第22図4～8）が出土する。2は壺で、底部から内湾気味に立ち上がる。4～7は甕。4、5は複合口縁をもつもので、長くのびて外反し、頸部は短く屈曲する。4は摩滅が



第6図 A地区SD04・05・06実測図

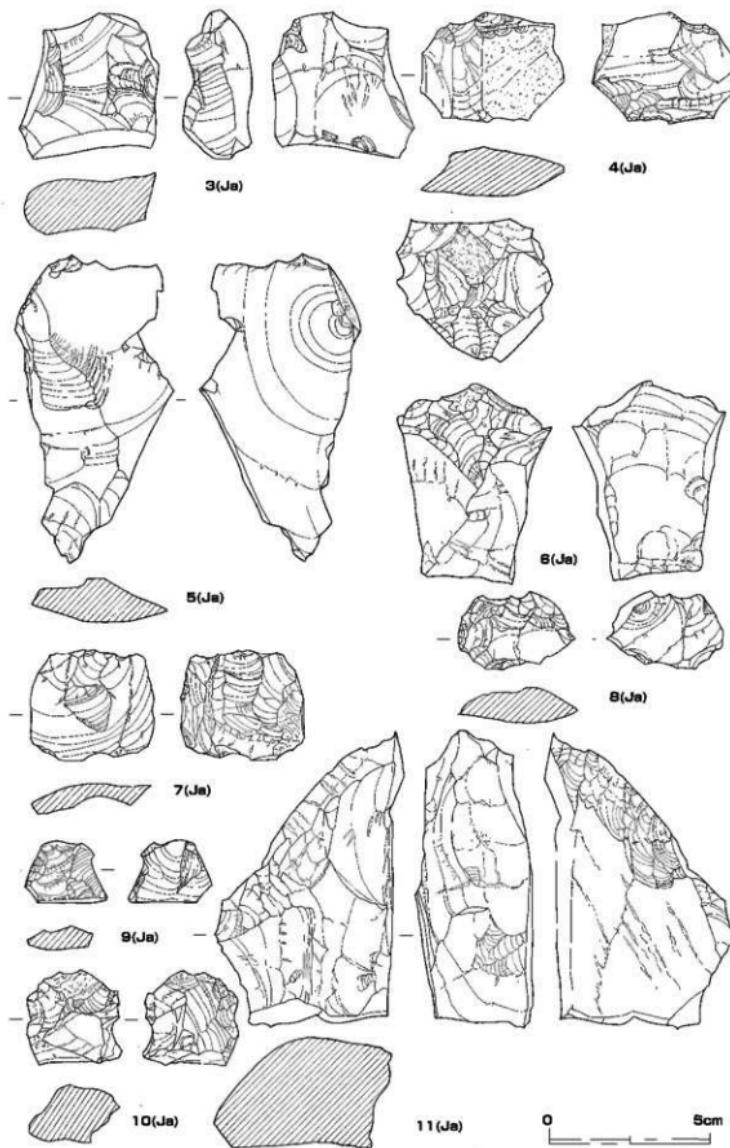


第7図 A地区SD04櫻土出土玉未成品実測図

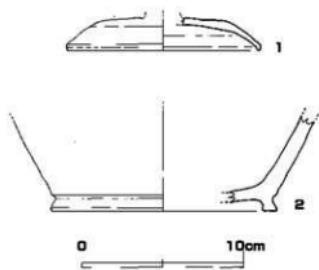
著しく、調整は不明。5の頸部には櫛描き沈線文が施される。弥生時代後期～古墳時代前期のもの。6は複合口縁が退化し、口縁部が短く立ち上がる。8の土師器はハの字状に短くひらく低脚だが、器種は不明。6、8は弥生時代後期の上器で、溝の底面に張りついた状態で出土した。7は単純口縁で、口縁部はくの字状に屈曲する。体部の内面には指頭圧痕が残る。古墳時代中期～後期のものと思われる。その他に埴輪片も出土した。玉未成品は碧玉製円核（第23図1）が出土。片面に自然面を大きく残す。下縁部には剥離の際の打裂痕も残る。

SD02の黒褐色粘質土からはヘラ書き文字のある須恵器の小型の环（第22図3）が出土。体部外面と底部の2ヶ所に文字が記されているが、判読できない。9世紀初頭前後のものか。第22図9～11、13は土師器。そのうち9～11は高杯で、杯部は口縁部が大きく外反し、口縁部と底部の境に段をもつ。10は脚部の裾がハの字状に広がる。これらは古墳時代中期のものと思われる。13は甕。単純口縁でやや直立気味にひらく。12は弥生時代末～古墳時代前期の古式土師。複合口縁をもつ甕で、口縁部が短く、やや外傾する。第23図3はめのう製敲石。両端部には敲打の際にできた剥離痕が認められる。周縁部には使用痕と思われる細かい敲打痕が残り、摩滅も著しい。6は緑泥石製有孔円盤。欠損品だが、全面に研磨が施され、片面穿孔を行う。第24図6は平砥石。断面は直方体で、平面の2面を砥面として使用。表面には長軸方向に擦痕が残る。

SD03は地山に掘り込まれた溝で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは0.1m未満と浅く、東西方に向に蛇行気味にのびる。拳大～人頭大の石が溝の底面に張り付いた状態で検出された。黒褐色粘質土の覆土に遺物を少量含む。底面は砂が混じり水が湧き出る。出土遺物は土師器、須恵器、白磁、土材、スラグがみられる。上器は小片が多く、図示できるものは少ない。第22図14は土師器の小皿。完形品で、底部から逆ハの字状に短くひらく。中世のものか。第23図2は碧玉製勾玉未成品。両面に平坦な素材面を残す。側縁部の中央部には抉り状の加工痕がみられ、側面には勾玉の背面を意識した剥離調整が認められる。第23図4、5は円筒形。剥離調整のある剥片素材。いずれも結晶面を残し、剥離調整と敲打を施す。第24図7は平砥石。2面を砥面として使用する。表面に擦痕がわずかに認められる。縁辺部にはU字状の短い溝が残り、摩滅している。



第8図 A地区SD04覆土出土剥片（碧玉）実測図



第9図 A地区SD04
6層出土土器実測図

かどうかは不明である。石組み遺構の周辺にも密集した石の小群がみられ、碧玉や楕円形溝、土師器の小片が出土した。

遺構に伴わない遺物（第26図、第27図、第124図）

玉未成品や「林」などへら書き文字のある須恵器、羽口、スラグなどが出土している。第26図23は碧玉管玉未成品。四角柱状を呈し、側面と平面に研磨を入れる。第27図26は鉄滓。形態が渦曲しており、楕円形溝に相当する。両面に鋸が厚く付着している。第124図1-3は白磁碗。1、2は大きな玉縁をもつ。3は高台をやや高く削り出し、幅広の高台をもつ。底部の器肉も厚く、内外面は露胎となる。4-6は龍泉窯系青磁碗。いずれも濃いオーリーブ色を呈す。4の内面には花文がみられる。

第2調査区（第28図）

94年度、97年度の二次にわたって調査を実施した地区。史跡公園の西側隣接地で、本遺跡北東部に広がる丘陵の緩斜面。現在は畠地および荒れ地となっている。調査地は借地のため、調査日数に制約があり、性急な調査をせざるえなかった。調査区東側の標高の高い地点から各畠地ごとにA地区、B地区、C地区と分割し、調査を実施した。

A地区（第29図）

A地区は面積896m²で南北に広がる。この地区は湧水が著しく、調査は毎日水汲みから始まった。94年度調査の際、柱根の残る柱穴が検出されたので、引き続き97年度に柱穴の並びを確認するため再度、調査を実施した。丘陵北側は地山が浅く、耕作でかなり擾乱をうけている。この地山は南側にむかって深くなる。94年度調査では2×4mのトレンチを10ヶ所設定し、遺構が確認された時点での調査を切り上げた。97年度調査では、94年度調査の際、地山上層面で遺構が確認されたトレンチについては調査を行わず、地山面で検出された柱根の残る柱穴を中心に範囲を広げて調査を実施した。その結果、掘立柱建物跡、上塙、溝状遺構などを確認した。

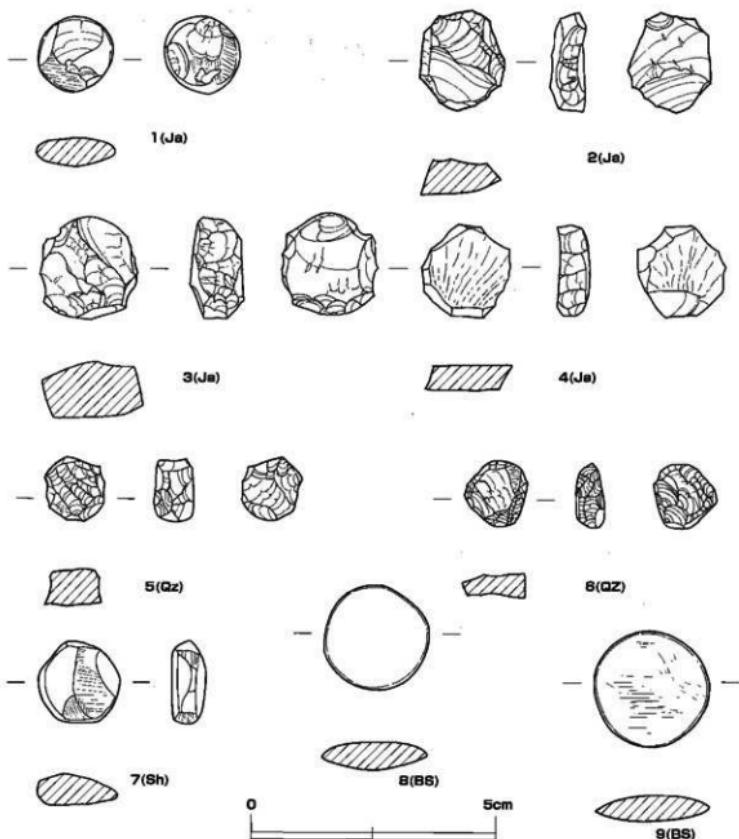
土層堆積状況（第30図）

A地区的畠に東西セクションを2ヶ所設定した。A-aの土層は中央よりやや南側に設定。1層は畠の耕作土。0.3mほど堆積する。東側では表土下0.5~0.6m地点で黄白色砂質土の地山が検出される。地山は多少の凸凹はあるがほぼ平坦で、人工的に削平していると思われる。地山直上には固くしまった茶灰褐色粘質土(5層)が0.5mの厚さをもってほぼ水平に堆積する。標高35m

筋砥石としても使用されたものか。

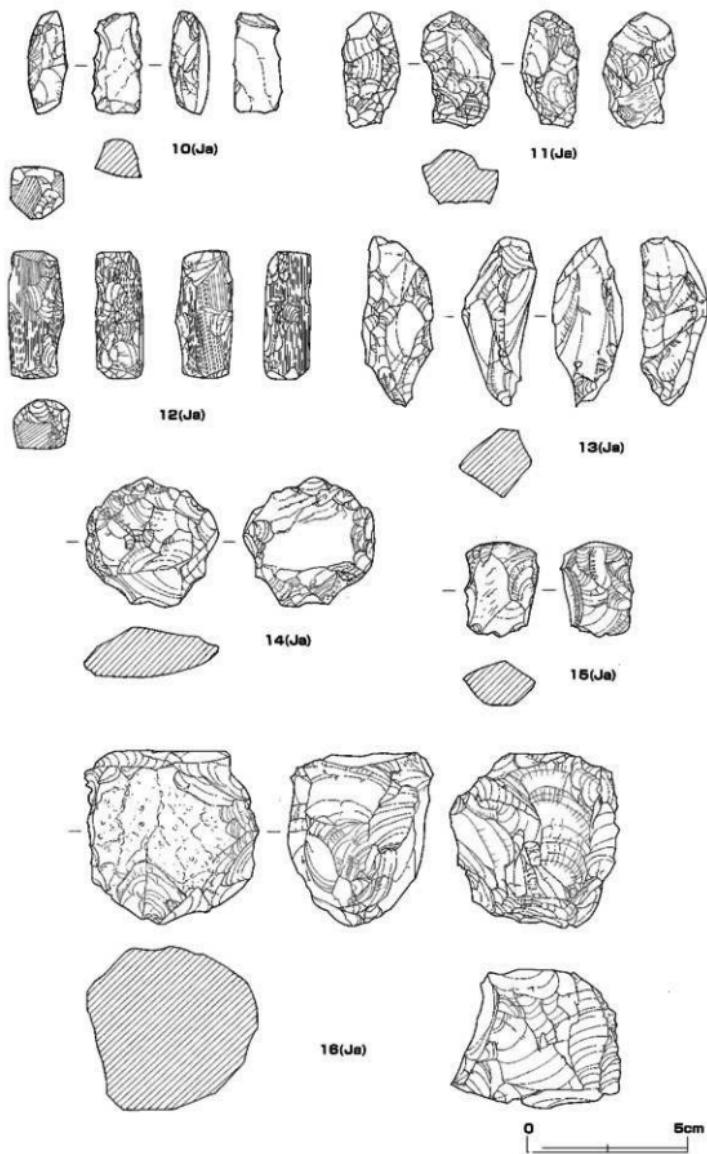
石組み遺構（第25図）

C地区の最西端の北側緩斜面で確認された。表土下0.2mで検出され、トレンチ西壁から密集した石が舌状に突き出している。中央部に径0.1mほどの石をほぼ平らに敷き詰め、それを囲むように厚さ0.3mのやや大きめの石を配している。断面は中央部が凹んだ状態で、最大高は0.5mと低い。時期および人為的な構築物

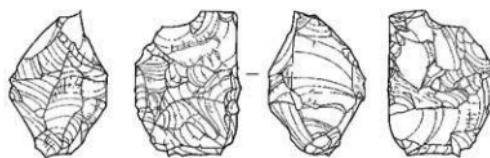


第10図 A地区包含層出土玉未成品実測図

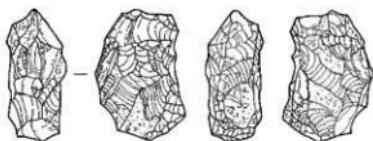
のコンターラインに沿うように地山にL字状に掘り込まれた加工段を確認した。實際には幅0.52mを測る壁帶溝（SD02）が掘られている。この溝は内側には0.15mの黒茶色土（19層）が堆積し、ここから木片が出土した。この加工段の内面には地山のブロックが混じる暗茶色土（7層）が堆積する。さらに0.5mほど掘り下げ、黄白色砂質土の地山のブロックが大きくなり、包含量も多くなったところで、底面とした。この底面には弥生土器が貼り付いた状態で出土した。住居跡の可能性もある。底面には 0.5×0.5 mの試掘溝を設けて地山面の確認を実施したが、検出には至らなかった。A地区東側と西側に一段低いB地区の地山の高低差が1.92mであることを考慮すると、この付近の旧地形は谷地形となっており、堆積土がかなり分厚いものと推定できる。暗茶色土（7層）には深さ0.1mほどの掘り方が確認できる。内面には主に暗灰茶色土（8層）が堆積するが、上層では搅乱を受けており、焼土や炭の混入した掘り方もみられる。この8層からは奈良時代以



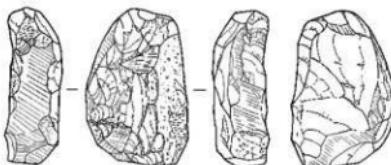
第11図 A地区包含層出土玉未成品実測図



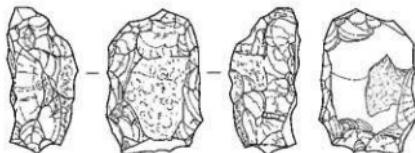
17(Ag)



18(Ag)



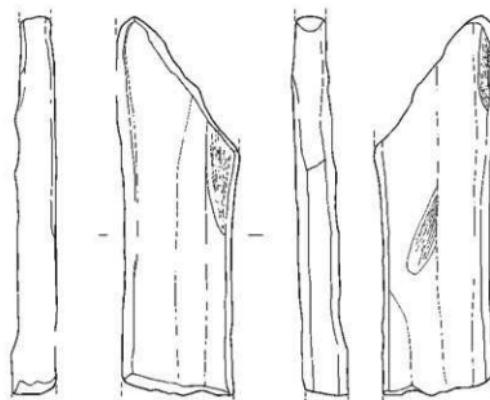
19(Ag)



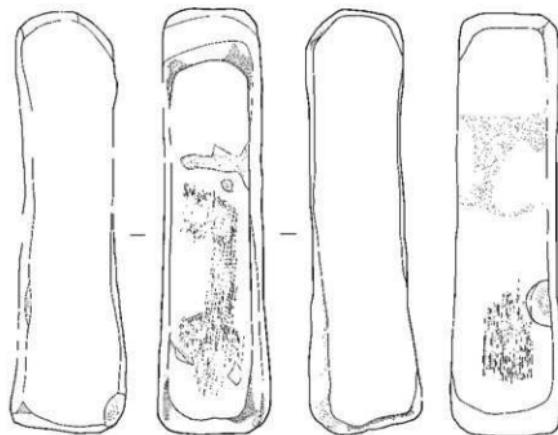
20(Ag)

0 5cm

第12図 A地区包含層出土玉未成品実測図



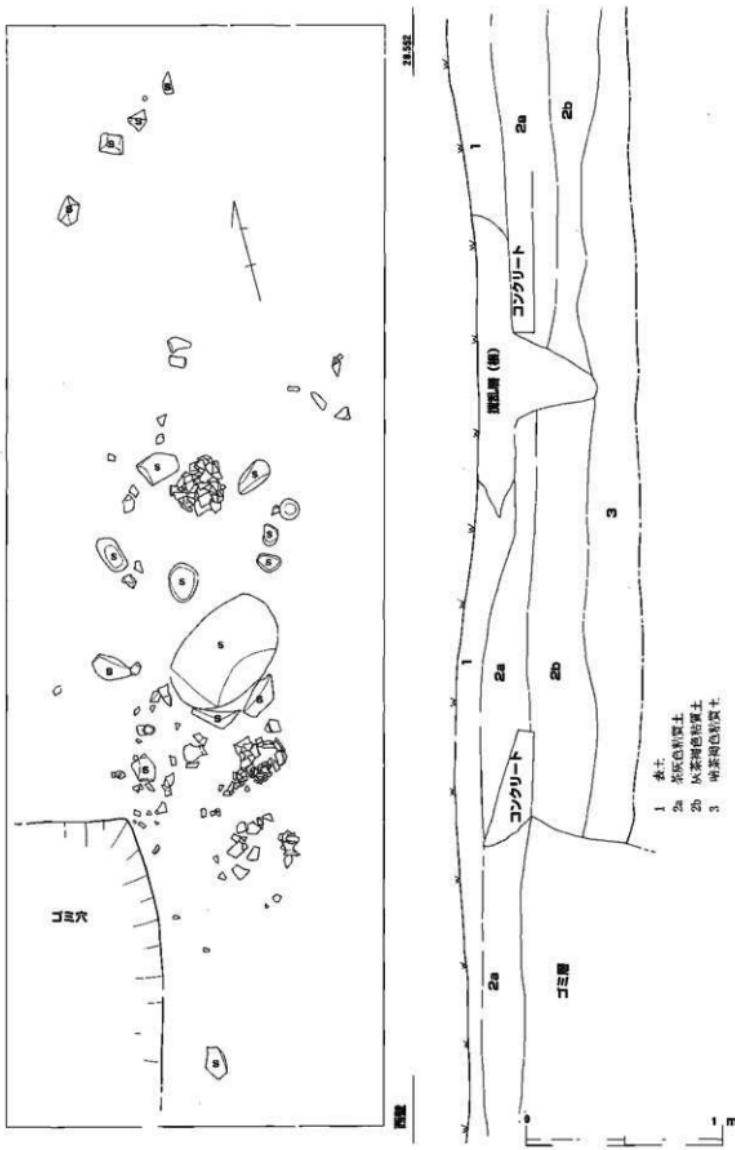
21



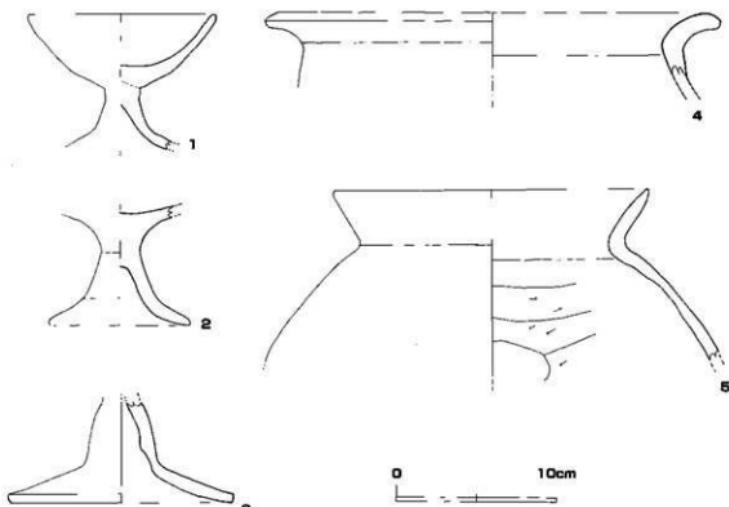
22



第13図 A地区包含層出土石実測図



第14図 B地区暗茶褐色粘質土層遺物出土状況



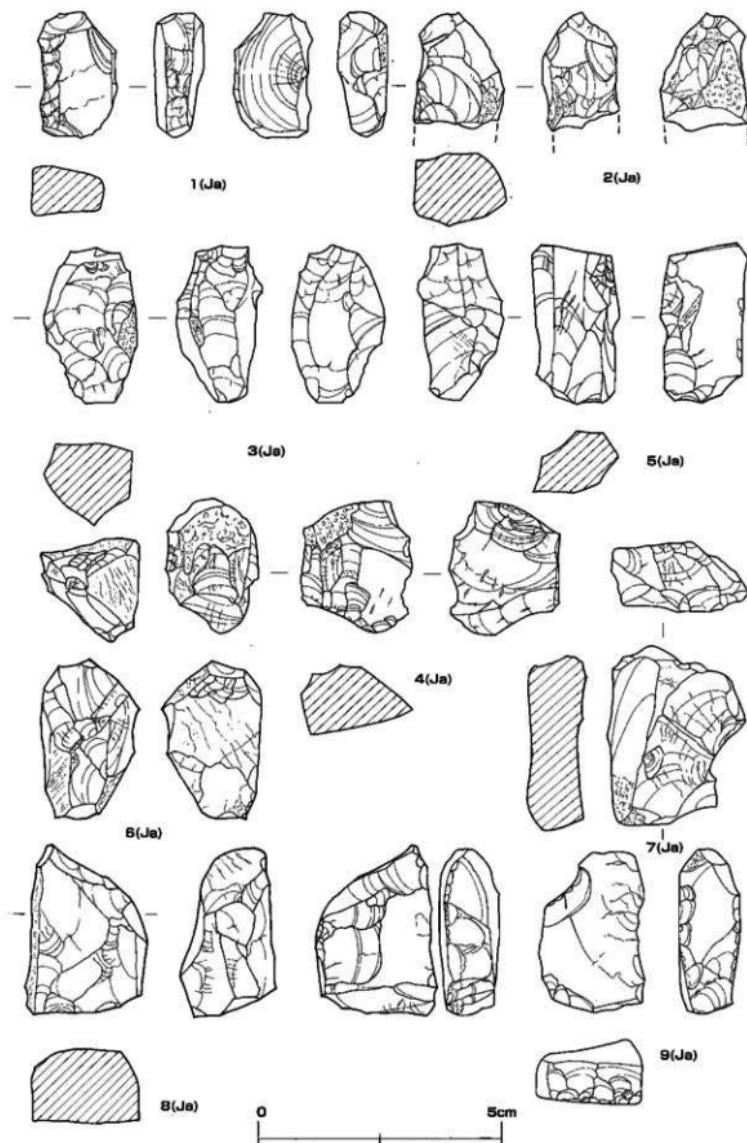
第15図 B地区暗茶褐色粘質土層出土土器実測図

降の遺物が多量に出上している。このセクションの中央部付近から東側で検出されている地山と7、8層が堆積する上面は標高34m前後のほぼ同レベルで、奈良時代後半以降の出土遺物が出士していることから、この時代の田地表面と考えられる。掘立柱建物跡もこの地山上で検出されている。

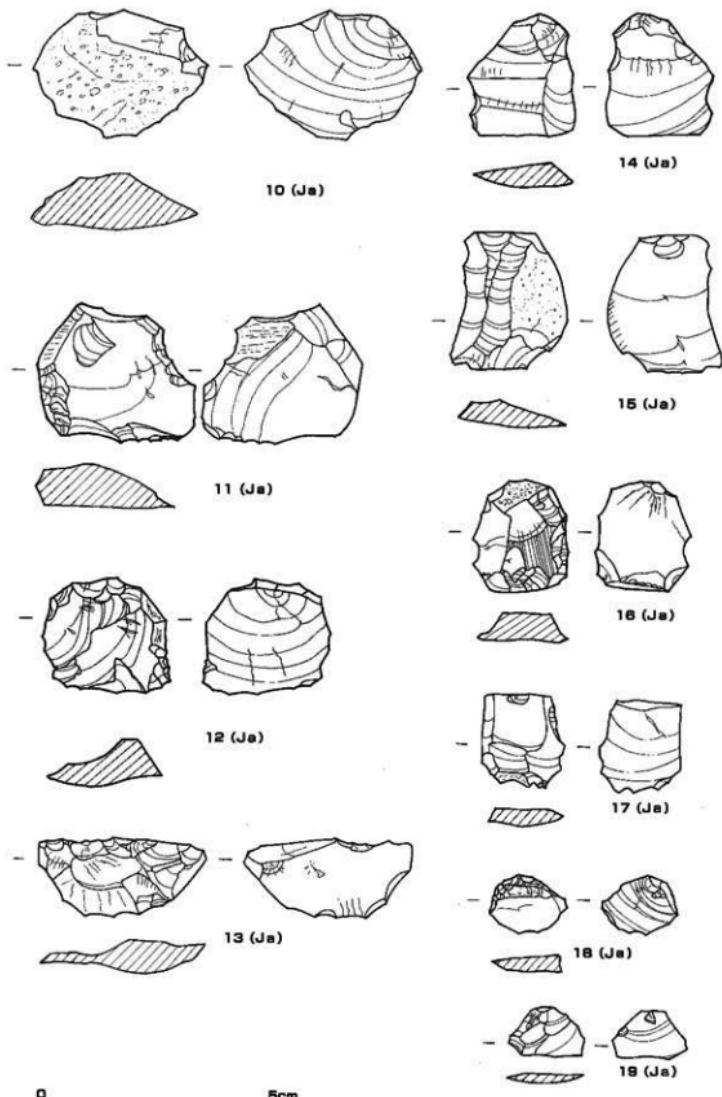
B-bはそれよりやや北側に設定したセクション。表七(1層)、黄灰褐色粘質土(2層)、灰褐色粘質土(4層)は耕作時の搅乱を受けており、2層には耕作の際に区割りした痕跡も残る。茶灰褐色粘質土(5層)と地山のブロックが混入する暗橙灰褐色粘質土(6層)も、西側に下るにつれて地表面に近くなることから搅乱を受けている。表七下0.7mで黄白色砂質土の地山を検出。地山にはピット状の落ち込みが2穴確認される。A-aより約0.5m低いコンターラインに掘り込まれている加工段が検出された。覆土は暗茶色土(7層)が0.4mほど堆積している。壁際には溝と思われる掘り方がみられるが、全面検出には至らなかったので明らかではない。7層の上層には暗灰茶色土(8層)が0.2m堆積し、奈良時代後半以降の遺物が多く出土した。また西端には溝(SD01)が検出される。

掘立柱建物跡（第31図）

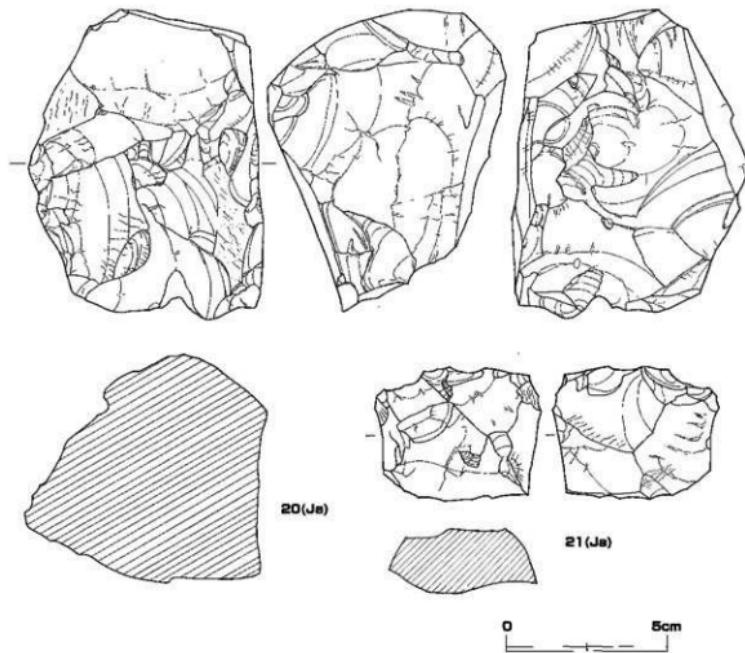
本調査区の東端部では柱穴と思われるピットが集中して検出された。地山を平坦に造成して、掘立柱建物を建ててる。ここでは少なくとも重複した3棟の建物跡を復元することができたが、いずれも調査時には判別にくく、図上で復元した。また、それ以外にも明らかに柱穴であるピットもあったが、東北部が民家の壁に隣接していたこともあり、残念ながら建物の全形を伺い知ることはできなかった。ただ、平坦面の範囲が限られていることやピットの重複や主軸が同一方向の東北部にのびることを考えると、多くの建物があったというよりはむしろ数回にわたっ



第16図 B地区暗茶褐色粘質土層出土玉未成品（碧玉）実測図



第17図 B地区暗茶褐色粘質土層出土剥片(碧玉)実測図

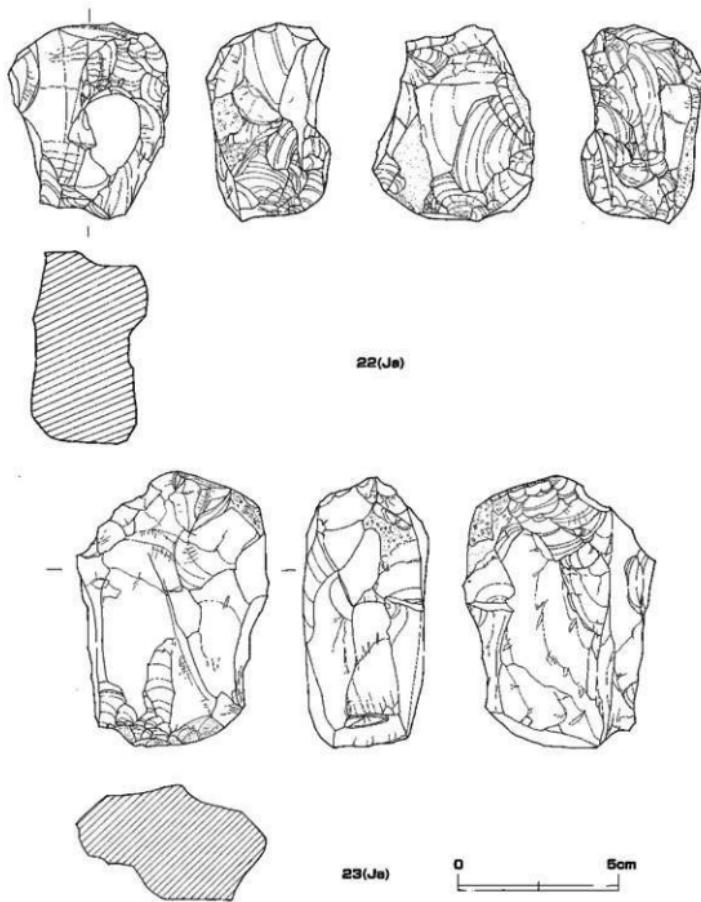


第18図 B地区暗茶褐色粘質土層出土玉未成品実測図

て立て替えたものではないかと推察できる。また、建物跡から2m西側には高さ0.1mの低い加工段があり、それに沿うよう南北に柵列が並ぶ。時期は年代を特定できる土器が少なく明確ではないが、9世紀代を中心とした建物跡と思われる。

SB01（第31図～第33図）

SB01の主軸は西側が加工段で区切られているので西南方向にのびると考えられる。北端は調査が一部にとどまつたので、全形を把握できなかった。建物の規模は2×1間以上あり、検出した範囲は梁行き4.8m、桁行き2mを測る。柱間は約2.5mで、ほぼ等間隔に並んでいる。ピットの平面形はほぼ円形を呈す。このうち、P1、P2、P3は柱根が残るが、いずれも上端部は欠失している。P1はやや不整形な凹形を呈し、上面径0.65×0.75m、深さ0.45mを測る。さらに柱を固定するために中央部に径0.35×0.42m、底部径0.3m、深さ0.1mほど掘り込む。断面は階段状を呈す。底部はやや丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。東側のテラス部分に長さ400mm、幅30mmの木片が出土する。柱（第33図1）は中央ピットのやや東よりにまっすぐに立つ。径150mm、残存長340mmを測る。底部は平坦であるが、腐食が著しく、加工痕は不明。ピット内の上層観察は地下からの湧水と豪雨のため観察できなかった。P2は径0.5×0.5m、深さ0.55mを測る。正円形をなし、壁は直立気味に立ち上がる。柱根はやや東壁よりに埋まっている。P3は上面径



第19図 B地区暗茶褐色粘質土層出土石実測図

0.48×0.55 m、深さ 0.5 mを測る不整形な円形。P1と同様、中央部に径 0.35×0.42 m、深さ 0.3 mの穴が残る。底面は湧水が著しく明確には検出できなかったが、壁は急角度をもって立ち上がる。ピット内の覆土は3層に分れる。1層は地山の土と粘土が混じる茶黄灰褐色粘質土。穴を掘った際に廃棄した土を埋め戻した土と思われる。2層は灰色粘土、3層は灰白色粘土。2層の灰色粘土は柱を覆うような形で堆積している。3層の灰白色粘土はやや固くしまっており、根固めの粘土と考えられる。柱根は東壁に沿うような形で出土。径 0.15 mで、残存長 0.28 mを測る。樹種はカヤ属である。下端部は腐食している。覆土から炭化物に混じって土師器の壺の口縁と壺の底部が出土した。奈良時代以降のものと思われる。

SB02（第31図）

SB02はSB01とほぼ重複した形で検出されたが、若干主軸がSB01よりやや西よりに振ると考えられる。2×1間以上の規模で、西側に廻を作つ。廻幅は1.3mを測る。P7は径0.33×0.35m、深さ0.23mを測る。底面からやや角度をもって立ち上がる。覆土は茶黄灰褐色粘質土、灰色粘土上、灰白色粘土が堆積する。中央に柱と思われる腐食した径0.5mほどの丸太状の木材が残る。加工痕は認められない。ピット上面にも浮いた状態で木材の断片が残る。西側には深さ0.05mを測る浅い凹みが残るが、P7との関係は明らかではない。

SB03（第31図）

SB02から0.8m東側で検出された。東端は民家が隣接しているため建物の全形を伺い知ることはできなかった。検出できた範囲は梁行きが4.5mであった。

SA01（第31図）

掘立柱建物跡の西側に高さ0.05mの低い加工段があり、それに沿うように径0.2～0.25m、深さ0.15～0.21mの小ピットが0.5m間隔で東西に並ぶ。柵列もしくは杭列の痕跡と考えられる。

その他のピット

P10・11（第31図、第32図）

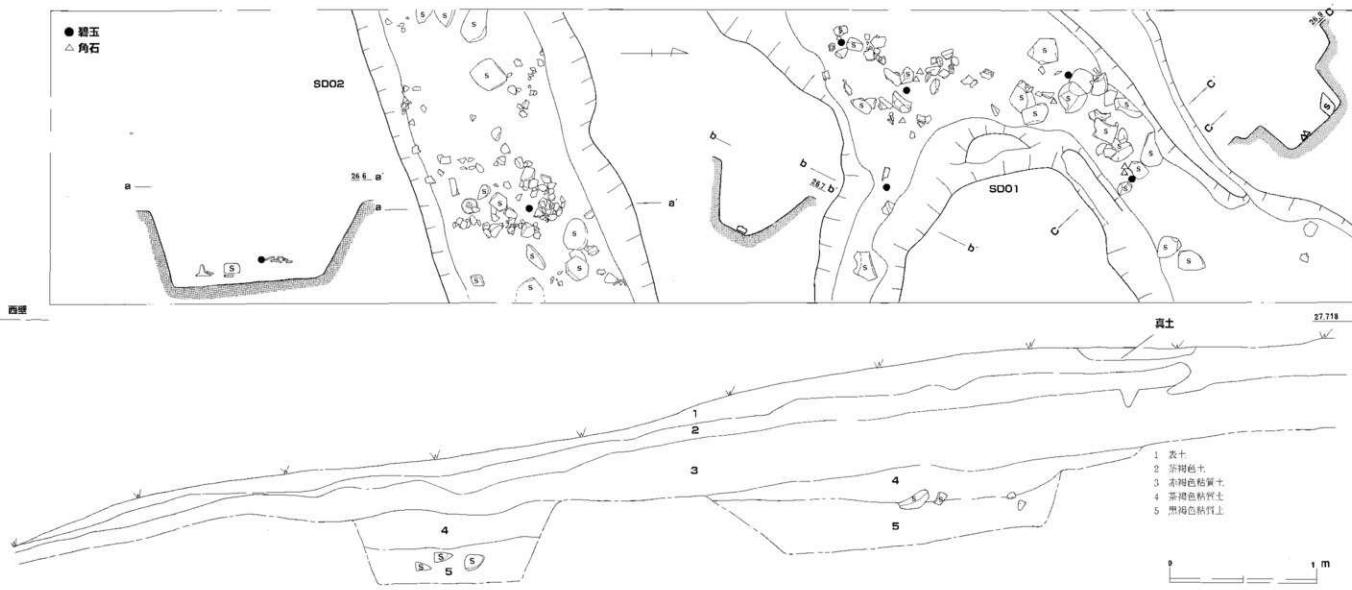
P10、P11はSB01かSB02に伴うピットと考えられるが、詳細は不明。立て替えの際の柱穴か。P10はほぼ正円形を呈し、径は0.4×0.45m、深さは0.5mを測る。底面はやや凸凹だが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴の内面には茶黄灰褐色粘質土、灰色粘土が堆積する。東壁よりに柱（第33図2）が直立した状態で埋まっていた。柱は残存長0.32m、径0.19mを測る。柱の外面には丁寧に面取りが施され、底面はノミ状工具により平坦に加工される。樹種はカヤ属である。遺物は須恵器、土師器の小片と碧玉の剥片が少量出土した。唯一図示できたのは須恵器の壺（第39図61）。口縁端部がやや肥厚して屈曲し、内面に稜をもつ。8世紀後半のものと思われる。P11は梢円形を呈す。柱穴の東寄りから断面が多角形を呈す木片が出土。残存長0.08m、径0.05mを測る。

P12・13（第34図、第35図1）

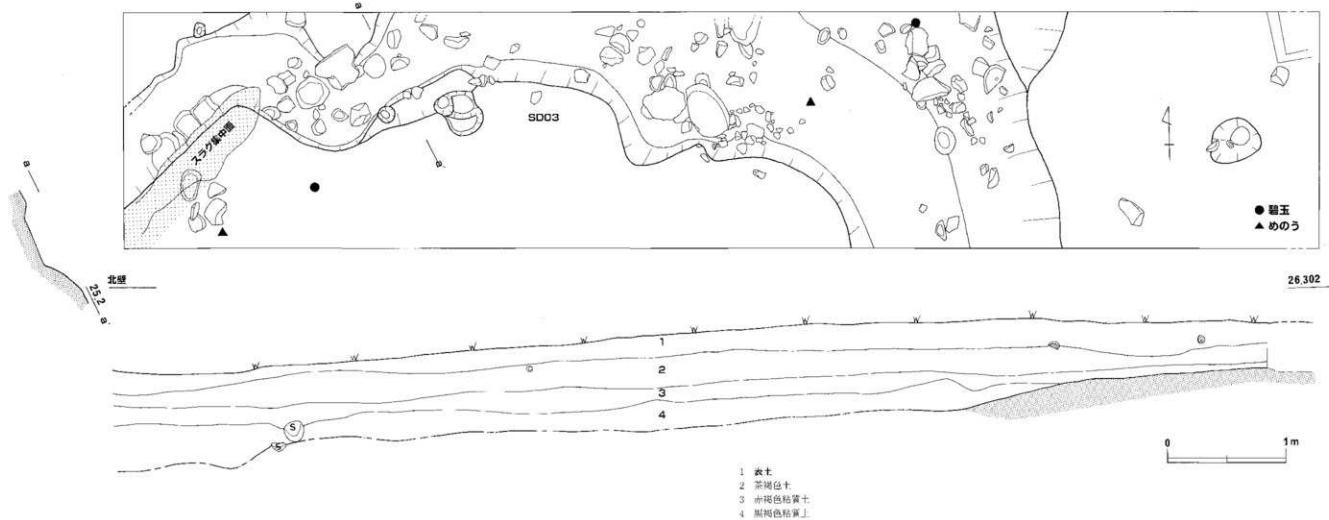
P12は径0.65mのほぼ正円形を呈す。西側はやや段をもつ。壁は傾斜をもって立ち上がる。底面には断面がかまぼこ状に半截された木製品とそれにのりかかるようにして筋砥石（第35図1）が出土した。石材は花崗岩質。両面の平坦面に溝が残るが、風化が著しく、溝の稜線は明瞭ではない。表面は蛇行している溝が全面に、片面には側縁部に沿って2条の溝が認められる。覆土は底面に灰白色粘土が見られ、その上層部には地山のブロックが混じる黄白色粘土が堆積する。P13はSB02およびSB03のP1とP12の間に検出された。平面形は隅丸方形をなし、長径0.75m、短径0.65mを測る。深さは最も深い所で0.45mを測るが、底面は東側から西側へやや傾斜する。内面は上層に茶黄白色粘質土、下層に白黄色粘質土が堆積する。他の柱穴と比較すると平面形や堆積土が明らかに違うので柱穴以外の性格を持つものと考えられる。

建物跡に伴う遺物（第39図62）

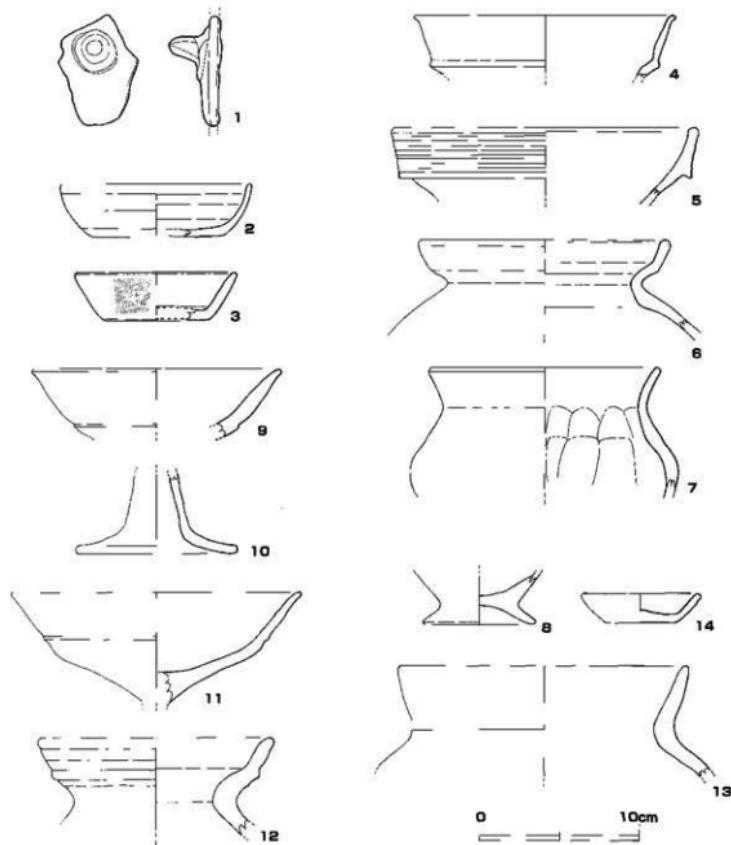
付近から須恵器、土師器、碧玉の剥片が出土したが、図示できたのは須恵器の壺だけである。



第20図 C地区SD01・02実測図



第21図 C地区SD03実測図

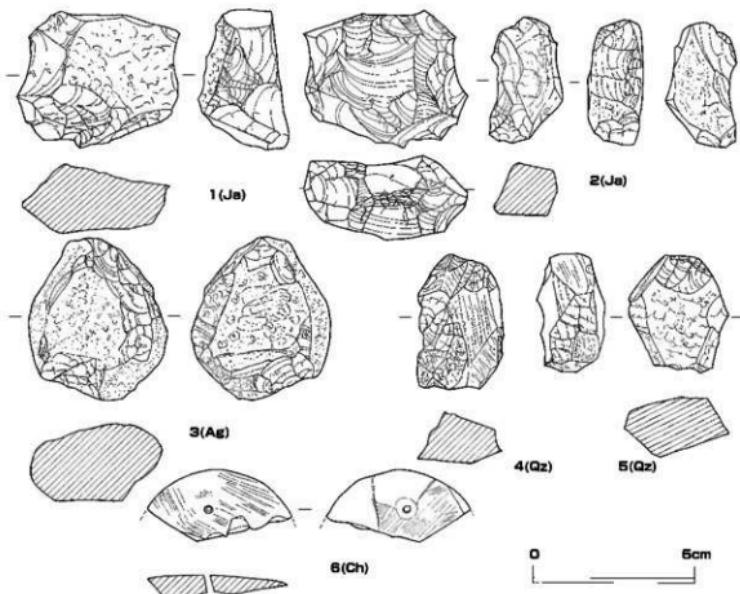


第22図 C地区SD01・02・03覆土出土土器実測図

口径9.5cm、器高2cmを測り、八の字形を呈す。端部内面はヘラケズリにより平坦に仕上げた後、回転ナデ仕上げ。外面は自然釉がかかり、調整は不明。葵壺形の短頸壺に伴うものか。国府V形式以降のものと思われる。

SK01（第34図、第35図2）

掘立柱建物跡の南側に検出された。平面形は楕円形を呈し、長径2.4m、短径1.3m、最深部0.45mを測る。地山面に掘り込まれ、断面形はなだらかな船底型を呈す。覆土は上層から茶黄灰色粘質土、灰色粘土、白灰色粘土がほぼ水平に堆積する。底面には板状の石が散かれ、上面には拳大から人頭大の石が無造作に放り込んである状況であった。出土遺物は東壁付近でやや浮いた状態で砥石片が、中央付近で筋砥石（第35図2）が砥面を下にした状態で出土した。この



第23図 C地区SD01・02・03覆土出土玉未成品実測図

砥石は片面だけを砥面として使用。溝は長軸方向に、長短の溝がそれぞれ3条ずつ残る。筋砥石として使用した後、平砥石としても活用されたためか溝の断面は潰れて丸くなり、深い溝となる。また、長軸の先端部には敲打痕も認められる。その他に石の間から5片の木片が出土した。そのうちの1本は先端が焦げていた。土壤の西側は94年度調査時のトレンチに突き当たり、検出できなかったが、西壁から鎌倉時代のものと思われる松竹梅の文様が描かれている塗り物椀が出土した。混入品と考えられる。

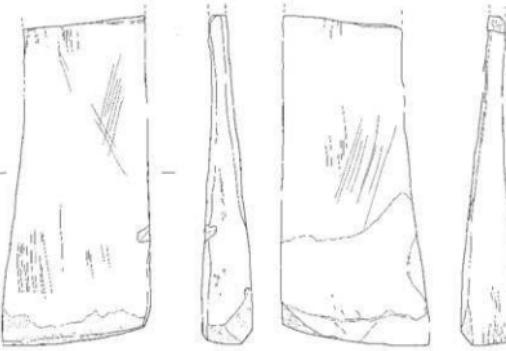
遺構に伴わない遺物

A地区で掘立柱建物跡付近の包含層中には多量の遺物が含まれていた。とくに製塙土器の出土が目立ったが、小片が多く、ほとんど図示できなかった。

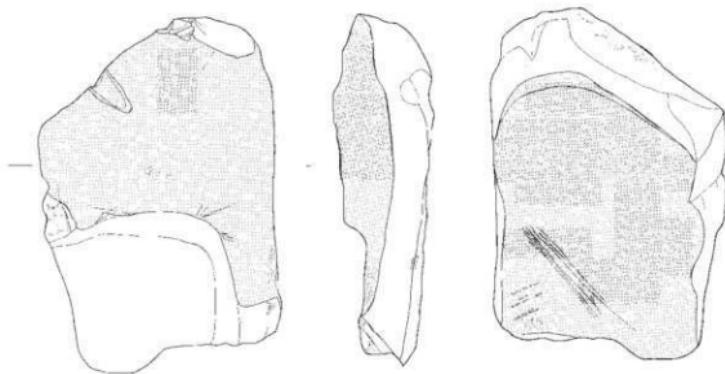
須恵器・土師器・輸入陶磁器

2層（第36図1～3、23、第124図7～9、11）

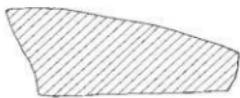
第36図1～3、23は須恵器。1、2は皿。1は風化が著しいが、回転糸切りの痕跡がある。3は口縁部がくの字状に短く屈曲する鉢。23は須恵器製把手。ヘラケズリ痕が残る。第124図は輸入陶磁器。7は自磁の皿で、灰白色の釉がうすくかかる。8は青磁。小片のため器形は明確ではないが、外面には櫛目文、内面には櫛目文と草文を施す。灰緑色を呈す。同安窯系青磁か。9は淡緑色を呈す青磁だが、器形は小片のため定かではない。



6

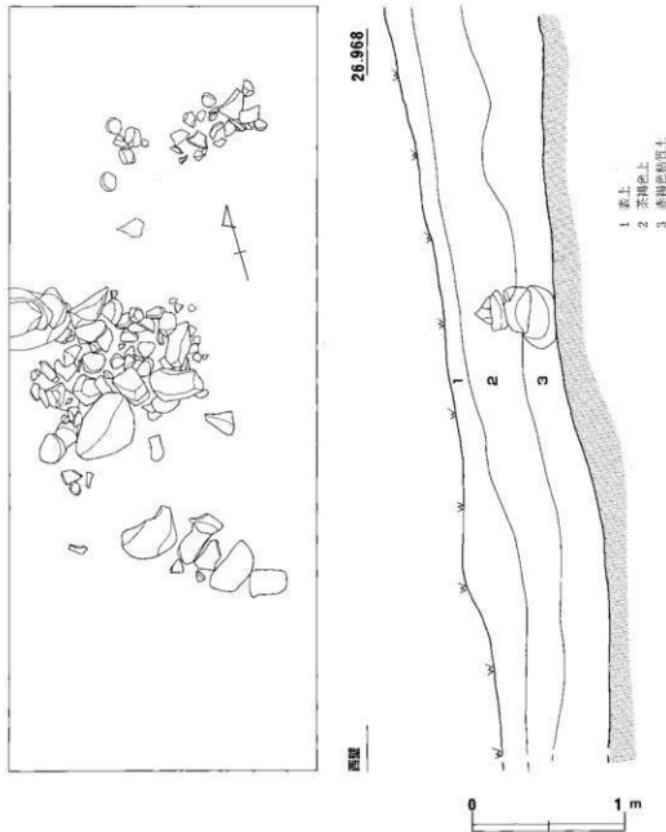


7

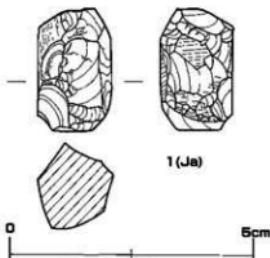


0 5cm

第24図 C地区SD02・03覆土出土砥石実測図



第25図 C地区石組遺構実測図



第26図 C地区包含層
出土玉未成品実測図

から逆ハの字状にひらく。

5層（第36図9、24）

9は高台皿。逆ハの字状に短く立ち上がる。24は土師器製瓶の把手。指頭圧痕が残る。

6層（第36図10、11）

10、11は6層出土の赤褐色を呈す土師質の須恵器。10は外方向に大きくひらく坏。11は壺と
考えられ、底部には回転糸切り痕が残る。

7層（第37図25、26、第124図12）

7層の地山に貼り付いた状態で出土した。25、26とも複合口縁をもつ弥生土器。いずれも口
縁部がやや短く内傾し、頸部は屈曲する。体部内面には横方向の丁寧なヘラケズリが施される。
25は壺。口縁部外面には3条の凹線文が施される。26は鉢。口縁部外面にはやや深くて太い凹
線文を施す。頸部には2個一対の孔が穿たれる。両者とも弥生時代後期のものと推定される。
第124図12は白磁碗の高台部分。高台は露胎で削り出しはわずかである。

8層（第38図）

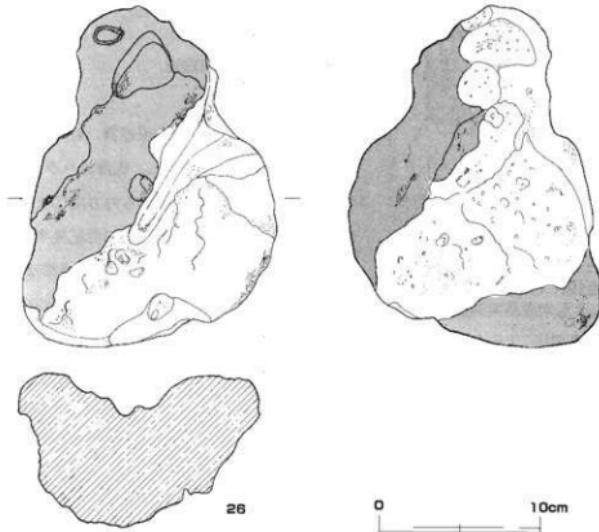
27~33、35~40は須恵器。27~29は壺。27、29の口縁端部の断面は三角形で短く、直立気味
に屈曲する。28の天井部にはヘラ切り後ナデ調整が施されている。30は坏、31は高台坏。32は
口縁部がくの字状に屈曲する鉢。33はすり鉢の底部。内面には使用痕が残る。34は土師器の壺。
単純口縁で、やや外傾する。35、36は皿。底部には回転糸切り痕を残す。36の口縁端部内面に
は稜がみられる。37は高台皿。高台はやや外によりに付き、ひらき気味に短く立ち上がる。口縁
端部は平坦に仕上げる。底部内面には静止ナデを施す。38は高台坏を利用した転用観。体部内
外面とも使用のため滑らかになり、わずかに墨と思われる黒色物が付着する。39、40は円面観。
いずれも台脚部をもち、長方形の透かし孔を穿ち、断面がM字状の突帯を巡らす。外面には回
転ナデを施す。40の観面の裏側には静止ナデ調整が残る。外縁はやや欠けており明確ではない
が、陸部は低く、海部は浅く、両者の境は不明瞭である。陸部は磨滅している。奈良時代後期
のものか。41~46は赤褐色を呈す土師質の坏。いずれも体部は逆ハの字状にひらき、器壁はう
すい。体部外面は回転ナデによる起伏が著しい。底部は回転糸切り後木調整。国府V形式以降
で、9世紀後半のものと思われる。47、48は土師器。47は小皿。体部は短く逆ハの字状に立ち上
がり、底部には回転糸切り痕が残る。中世のものか。48は高坏の脚部。風化が著しく調整は不

3層（第124図11）

11は玉縁をもつ白磁碗。

4層（第36図4~8）

第36図4~8は4層出土の須恵器。4、5は皿。4は口縁
端部が短く外方向に屈曲し、底部はヘラ切り後ナデ調
整を施している。5は底部から外方向に大きくひらく。
底部には回転糸切り痕を残す。9世紀後半のものか。6
は坏。内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し、や
や内傾する。国府IV形式に属す。7、8は高台坏で底部



第27図 C地区包含層出土椀型渦実測図

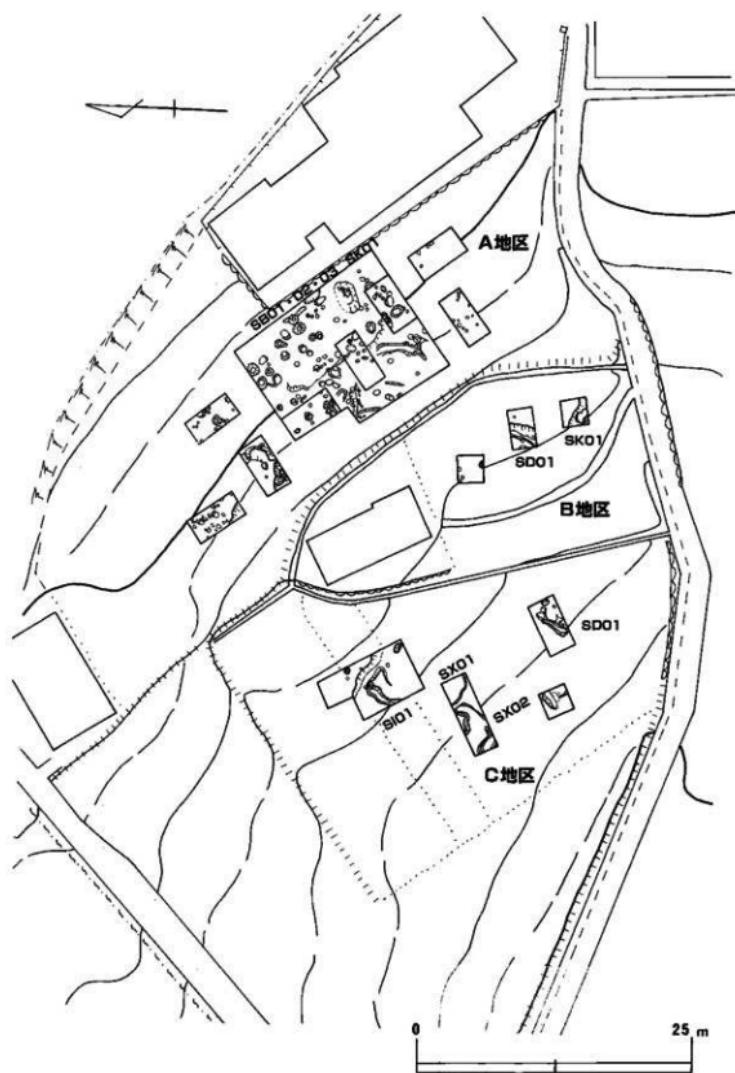
明だが、外面にミガキの痕跡がわずかに認められる。49はふいごの羽口。スサが混入する。外面にはナデ調整が認められる。

9層（第36図12～22）

12～16は須恵器。12は高台坏。小型品で高台は直立気味に付く。13は皿。口縁端部が短く嘴状に尖り、内側に稜がつく。14、15は蓋。14は柴壺形の短頸壺に伴う蓋と思われる。口縁部はやや内傾気味に直立する。15の口縁端部は嘴状に短く内傾する。16は皿。17～19は赤褐色を呈する土師質の坏。いずれも底部から逆ハの字状に大きくひらく。17は底部に回転糸切り痕を残す。国庁V形式以降のものか。18、19は摩滅が著しく調整は不明。20は甌。21は瓶。体部内面に横方向のケズリ、外面には刷毛目調整が残る。22は外面に円形浮文の残る須恵器片。

11層（第39図）

いずれも須恵器。50～52は蓋で、口縁端部が短く屈曲する。50の端部はやや平坦に仕上げる。51、52は扁平なつまみをもつ。大井部外面はヘラ切り後、回転ナデを施す。50、52の大井部内面は「白」、「門」のヘラ書き文字が残る。52の内面には静止ナデ調整を施した後に文字を入れる。53、54は皿。底部は回転ナデ仕上げ。54の口縁端部内面には稜がつく。55は坏。口縁端部が短く屈曲し、内側に稜がつく。54、55の底部には回転糸切り痕を残す。56は高台坏。高台はハの字状に短くつく。体部は外傾して立ち上がる。57は甌。口縁部外面に沈線をひいた後に波状文を施す。58は壺。口縁部は逆ハの字状に短く外反し、やや肩部は張る。回転ナデ仕上げ。59は高坏の脚部。内面にはしづり痕を残し、外面は回転ナデ仕上げ。60は椀形を呈す土師質の土器。摩滅が著しく、調整痕は不明。赤褐色を帯び、表面の凹凸が著しい。53～55は国庁IV形



第28図 第2調査区遺構配置図

式、56が国行V形式以降か。

玉未成品・砥石・石鎌・ガラス玉

1層（第40図）

玉未成品と石鎌が出土した。1は水晶製の丸玉未成品。細かい剥離調整がみられる。2~9は平玉未成品。そのうち2~4は水晶および石英製。研磨を施し、ほぼ完形品に近いが、3、4にはわずかに敲打痕が残る。4の断面は梢円形を呈す。5は黒色珪質頁岩の完形品。6は頁岩製で、研磨による擦痕が残る。側面は平坦で、断面は隅丸方形。7~9は碧玉製。7は全面に研磨。8の表面には研磨を入れ、裏面には主要剥離面を残す。側面は一定方向からの細かい剥離調整を入れる。断面は直方体。9は両面の素材面を活かし、周縁部と側面に剥離調整を施す。10は水晶製切り子玉。片面穿孔。ほぼ完形品。11は碧玉製管玉未成品。全面に細かな剥離調整を加え、上下端面は平坦に加工し、四角柱状にする。12は黒曜石製石鎌。断面はレンズ状で、側縁部からの規則的な剥離調整が残る。

2層（第41図、第42図、第43図）

第41図13~23は平玉未成品。13~16は石英および水晶。全面に剥離調整を加え、断面をほぼ直方体に整形する。17~21は頁岩。18は側面に素材面を残すが、17、19~21はほぼ側面と周縁部に剥離調整が認められる。両面は素材の平坦面を活かし、断面を4面体に近付ける。22は黒色珪質頁岩。研磨によりやや稜線が残るもののはほぼ完形品。23は碧玉。表面と側面に剥離調整を加える。裏面に主要剥離面を残し、三角形の断面を呈す。

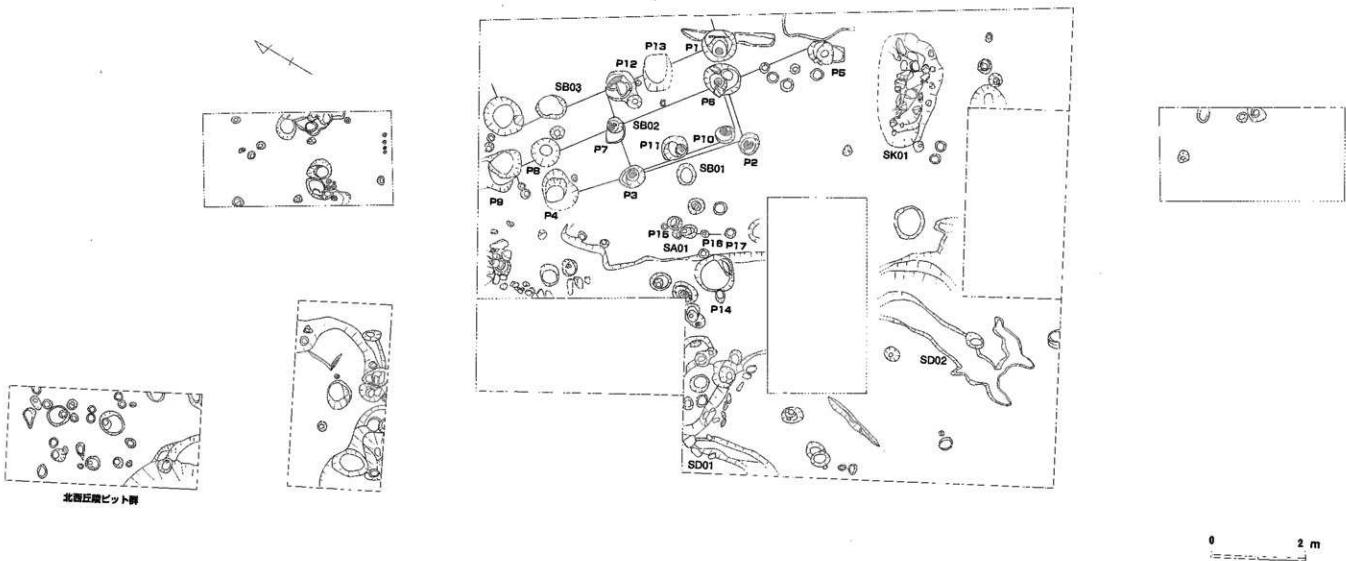
第42図24~27は碧玉製管玉未成品。24、26、27は全面に剥離調整を加え、四角柱状にして、研磨を施す。24、27には敲打痕が認められ、断面は円柱形に近い。25は剥片素材の素材面を活かし、側面に剥離調整を入れる。28はめのう製勾玉未成品。腹面になる部分には細かい敲打を入れる。断面は梢円形に近い。第43図29~32は碧玉製。29、31、32は剥離調整のある剥片素材で、31の周縁部には粗い敲打痕、29、32の周縁部には剥離痕が残る。30は石核。画面から剥片素材をとる。33は平砥石。欠損品だが、全面を砥面として使用。

4層（第44図、第45図46~50）

第44図34~40は平玉未成品。34~37、40は石英。34、40は平坦な主要剥離面を残し、剥離調整を行う。35~37はわずかに敲打痕や剥離調整が残るが、全面に研磨を施す。ほぼ完形品。38、39は頁岩製。38は平面の縁辺部に磨き残しと思われる稜線が残る。39は全面に研磨痕が残る。側面には研磨により面取りがなされる。第44図41~43は水晶および石英の結晶面を活かした剥離調整が認められる剥片素材。43の一部には敲打痕が認められる。44は石英製石核。45は綠泥石の白玉未成品。断面はほぼ直方体で、全面に粗い研磨が残る。第45図46、47、49はめのう製。46は片面穿孔がみられる勾玉未成品。仕上げ研磨を施す。47は両側面に剥離調整を施す板状の剥片素材。49は平面形が直方体を呈す。石核か。48は碧玉製勾玉未成品。研磨を施すが、部分的に細かな剥離痕を残す。腹部には明瞭な稜線が残る。50は角石製の石核。残核と思われる。

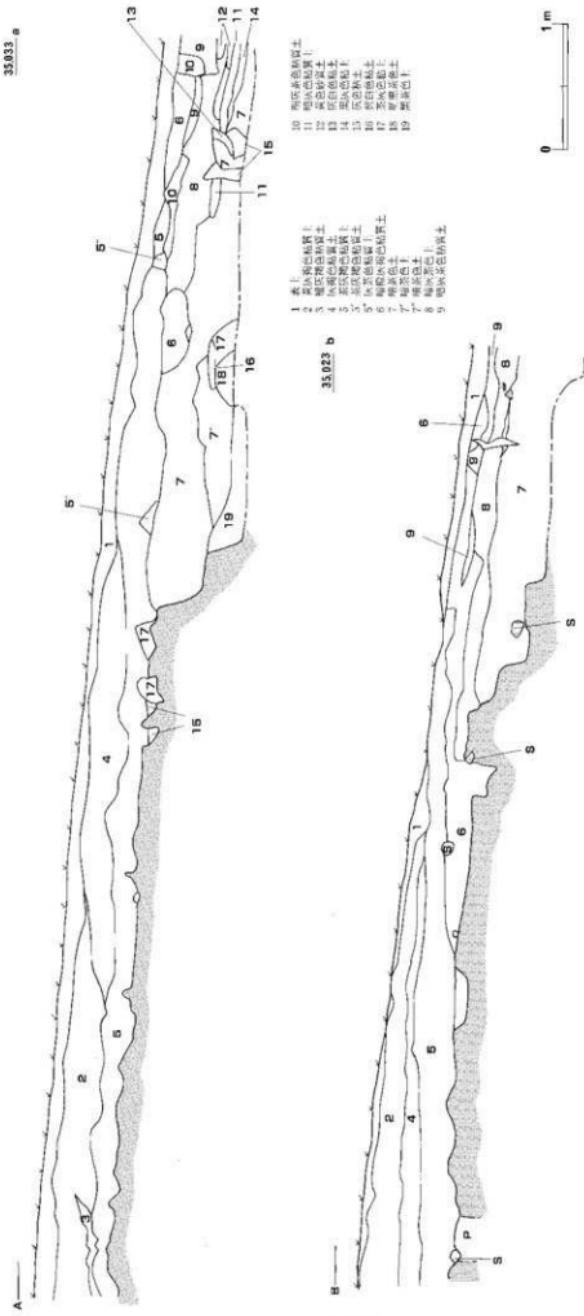
5層（第45図51~54、第46図55~60、第47図67、68）

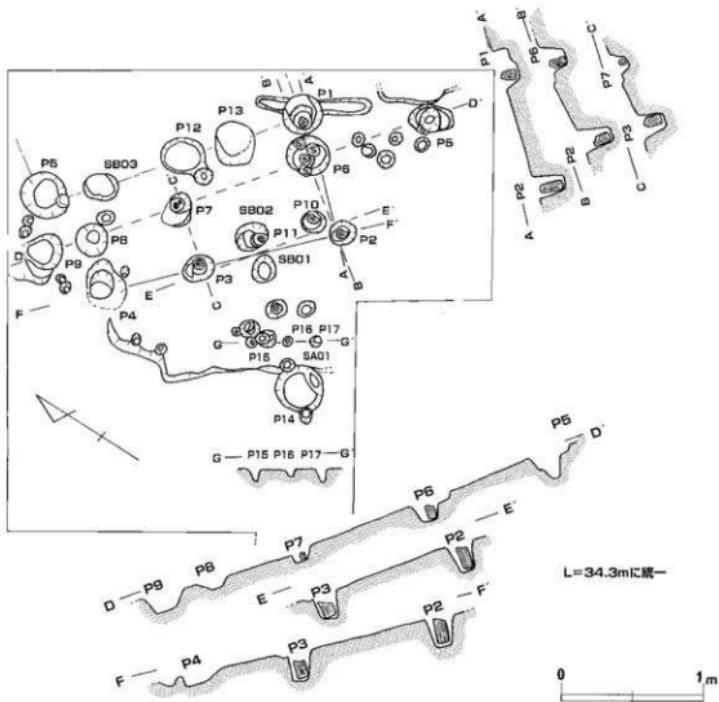
第45図51~54は5層川土の碧玉製平玉未成品。51、52は平面に素材面の平坦面を活かし側面に



第29図 A地区造構配図

第30图 A地区土层断面图





第31図 A地区SB01・02・03実測図

剥離調整を入れる。断面は直方体に近い。53、54は研磨を施したほぼ完形品。第46図55～58は平玉未成品。55～57は石英製。55、56は素材面を残し、57は全面に剥離調整を施す。58は頁岩製。剥脱痕が著しいが、全面に研磨を施す。側面は研磨により面取り状の稜線が残る。59は角石製石核。60は水晶製丸玉。球状を呈し、全面を細かく敲打する。第47図67、68は石核。67は角石、68は碧玉製。

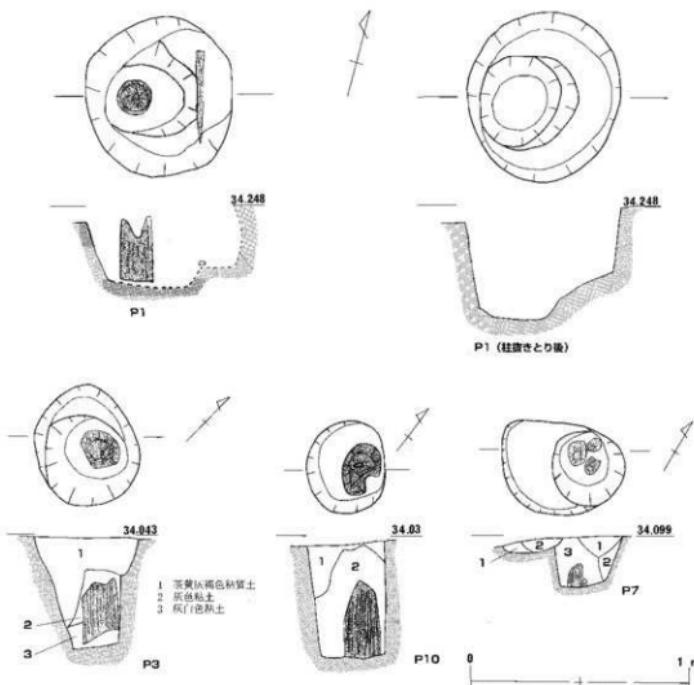
6層（第48図72）

P14の上面にあたる6層で出土した筋砥石。両端とも欠失しているが、重量のある大形品。片面に6条の浅いU字状の溝が残る。使用頻度が少ないうちに廃棄されたものと思われる。

7層（第46図66）

7層から出土した頁岩製石鋸。両面中央部に素材面を残し、側縁部に連続の剥離調整を入れる。

8層（第47図69、70、第49図）



第32図 A地区柱根ピット実測図

第47図69、70は碧玉製石核。70の断面は直方体に近い。第49図73、74は平砥石。73は四角柱を呈し、全面を砥面として使用する。そのうちの2面は使用によりかなり磨り減っており、砥面が凹む。74は自然石を利用した砥石。両端は欠失している。断面は多角形で、4面を砥面として使用する。長軸方向に研磨する。

9層（第46図61～64）

第46図61～63は石英製平玉未成品。剥離調整がみられる。62の縁辺部に細かい敲打痕が残る。64は水晶製丸玉未成品。研磨直前の細かい敲打痕が潰れた状態で残る。

11層（第46図65）

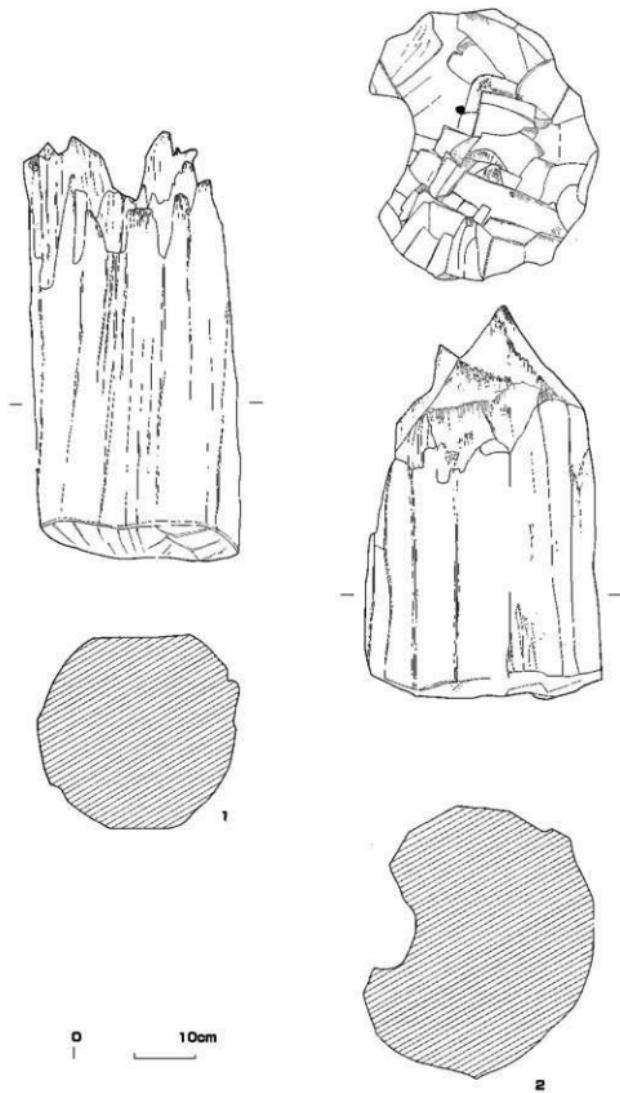
コバルトブルーのガラス玉。直径5.4mm。穿孔がある。

地山（第47図71）

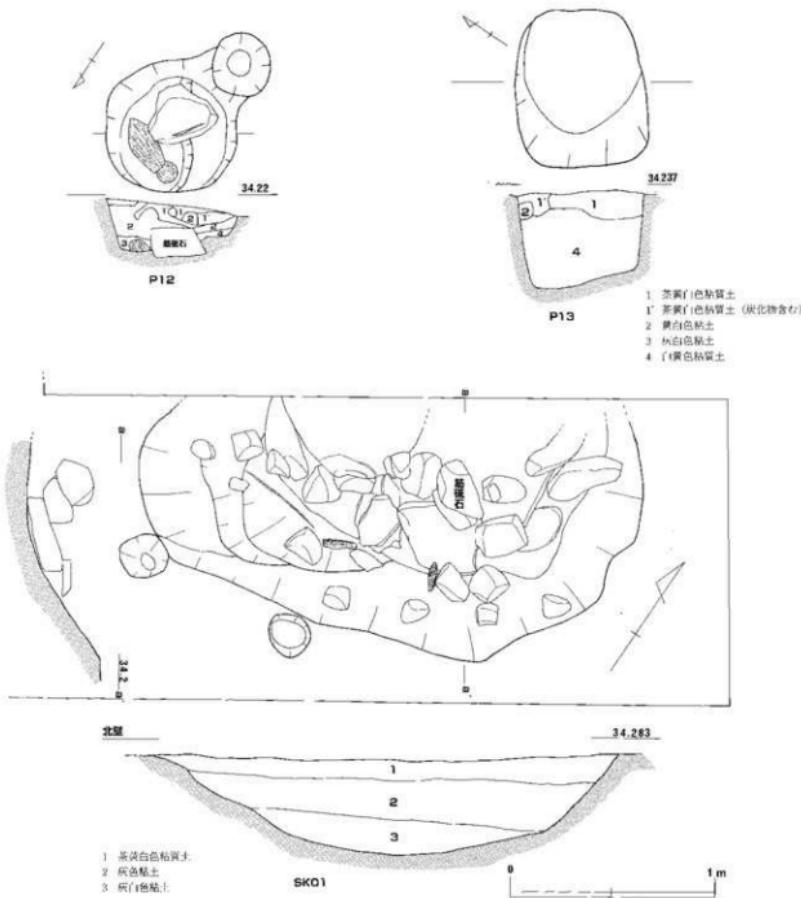
A地区東側の地山から出土。角石製石核で、端部が欠失している。周縁部に素材面が残る。

鉄製品（第126図1～5）

2層から出土した。釘状の鉄製品と考えられる。3の断面は立方体を呈す。2、5は断面が直方体をなす。



第33図 A地区P1・10出土柱根実測図



第34図 A地区P12・13・SK01実測図

B 地区

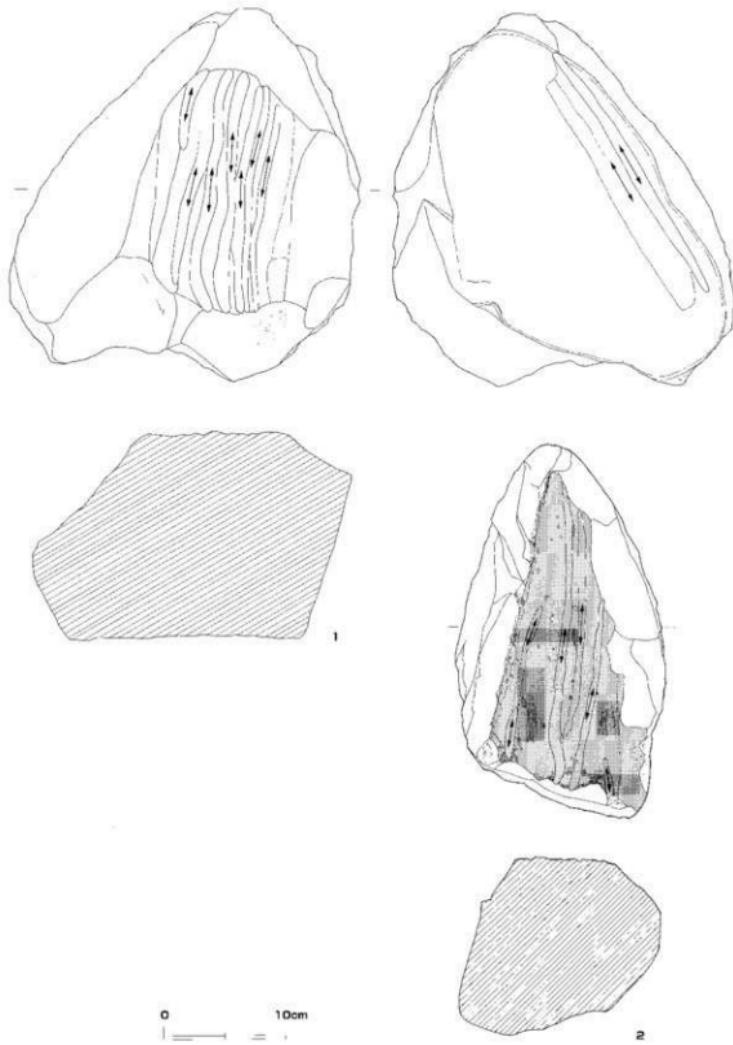
B地区は調査面積293m²のせまい畠地。調査範囲が限られているので、2×2mのトレチを2ヶ所と2×3mのトレチを1ヶ所設定した。土壌と溝状遺構が検出された。

SK01（第50図）

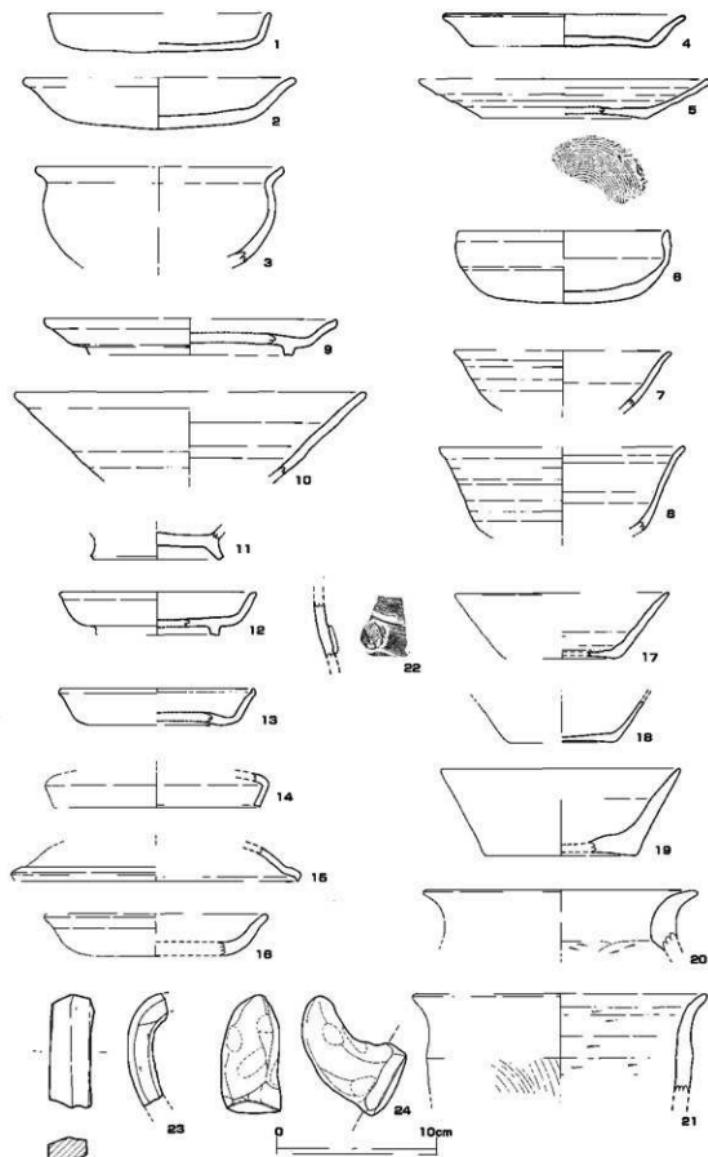
史跡公園から温泉街に抜ける遊歩道の南側に設定したトレチの南よりで検出された。地山に掘り込まれ、西側に向かって緩やかに傾斜する。土師器片が1点出土した。

SD01（第51図）

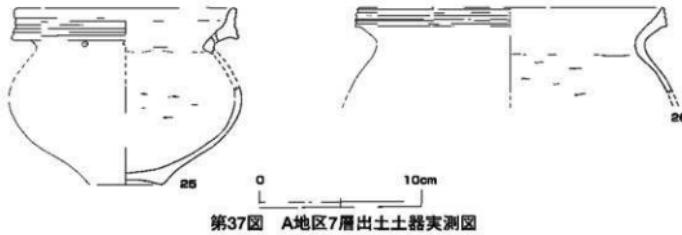
SK01のやや北側で検出された。表土下0.55mの黒褐色粘質土に幅0.9m、深さ0.1mの深い溝が掘り込んでいた。この溝は南北にやや湾曲気味に走るが、両端はトレチの壁に阻まれ、全



第35図 A地区ピット12・SK01覆土出土砥石実測図



第36図 A地区2、4、5、6、9層出土土器実測図



第37図 A地区7層出土土器実測図

形を把握できなかった。底面はやや西方向に傾き、東壁はなだらかに落ちる。内面には灰褐色粘質土がうすく堆積する。奈良時代後半以降の須恵器片が出土した。

C地区

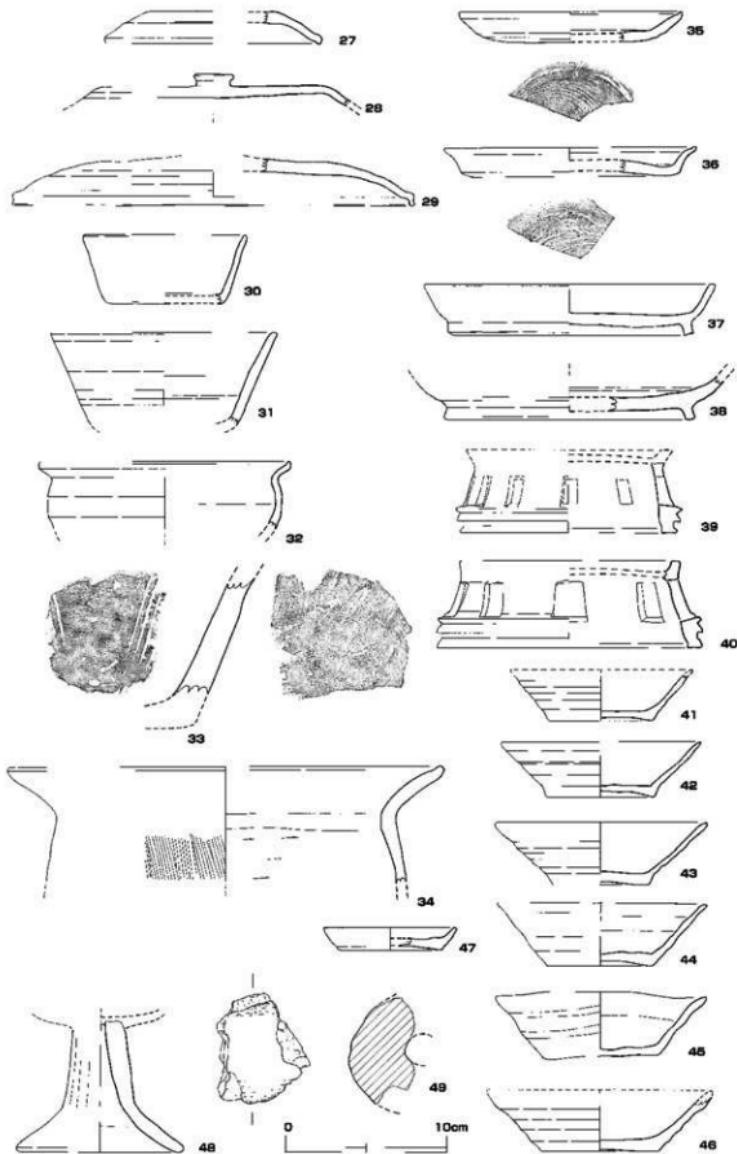
この地区は土器や瓦未成品の採集品が最も多い地点。面積は369m²で、元は畑地であったが、現在は荒地となっている。当初の調査時点では2m幅のトレンチを4ヶ所設定していたが、本調査区の北東部で大量の遺物が出土したことから調査範囲を広げた。この地区からは溝状遺構、落ち込み、豊穴住居状遺構が検出された。

SD01(第52図～第54図)

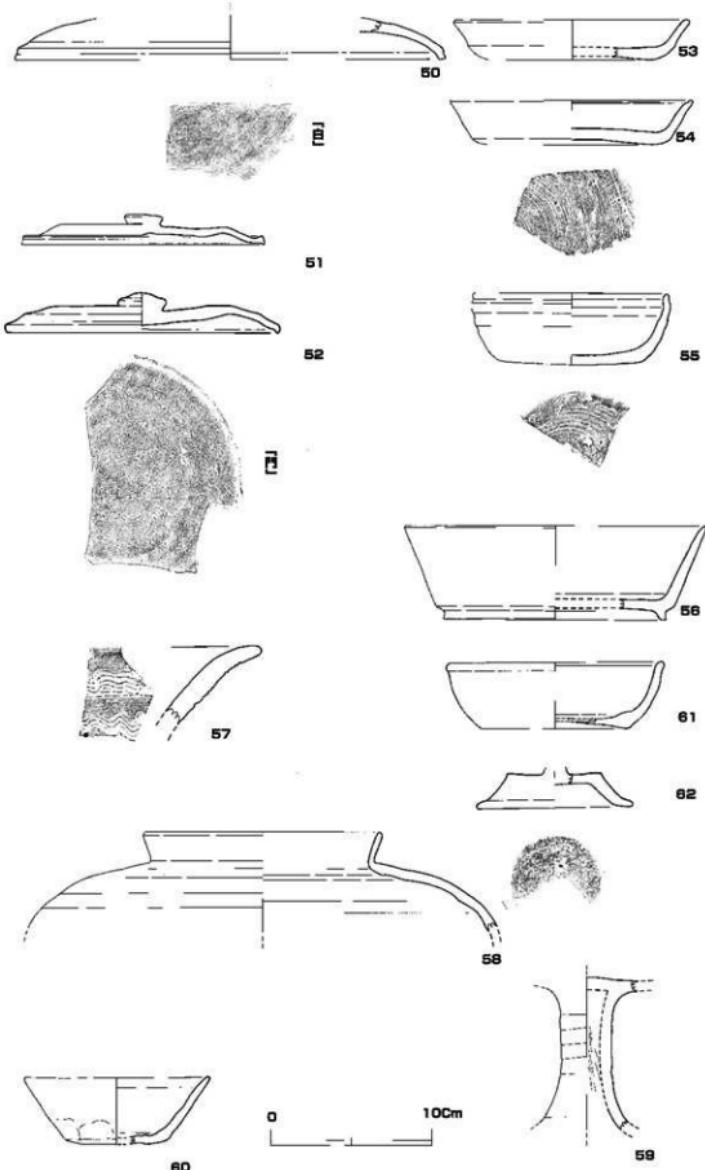
本調査区のやや南側付近で検出され、弓なり状に東西に走る。全長2.5m、幅0.4m、深さ0.3mを測り、両端は丸く閉じる。明灰褐色粘質土に掘り込まれており、溝の底面はやや丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。溝から口縁端部が嘴状に屈曲する須恵器の蓋(第53図2)、甕、土師器の甕、小皿や碧玉の瓦材が出土した。図示した54図1は碧玉製石核。最大長80mm、最大幅75mm、最大厚50mmを測る。断面は不整形な直方体を呈す。溝の屈曲部分と中央部の南壁上面には2つの人石が検出された。礎石の可能性もあるのでこの人石の周辺を試掘棒で精査したが、並列するものは発見できなかった。これらはすでに地表から顔をのぞかせており、原位置から動いていると考えられる。溝の屈曲部分にある大石に「白田原」の文字入り須恵器皿が寄りかかった状態で出土した。この溝の西端に隣接する形で検出されたP1からは、須恵器の蓋(第53図1)、口縁に波状文の残る甕の破片、碧玉の原石が出土した。蓋は口縁端部が短く屈曲し、内側にやや稜をつくる。大井部外側はヘラケズリが残る。国府IV形式以降のものか。

SX01 (第55図、第56図、第58図1、第59図13、第126図5)

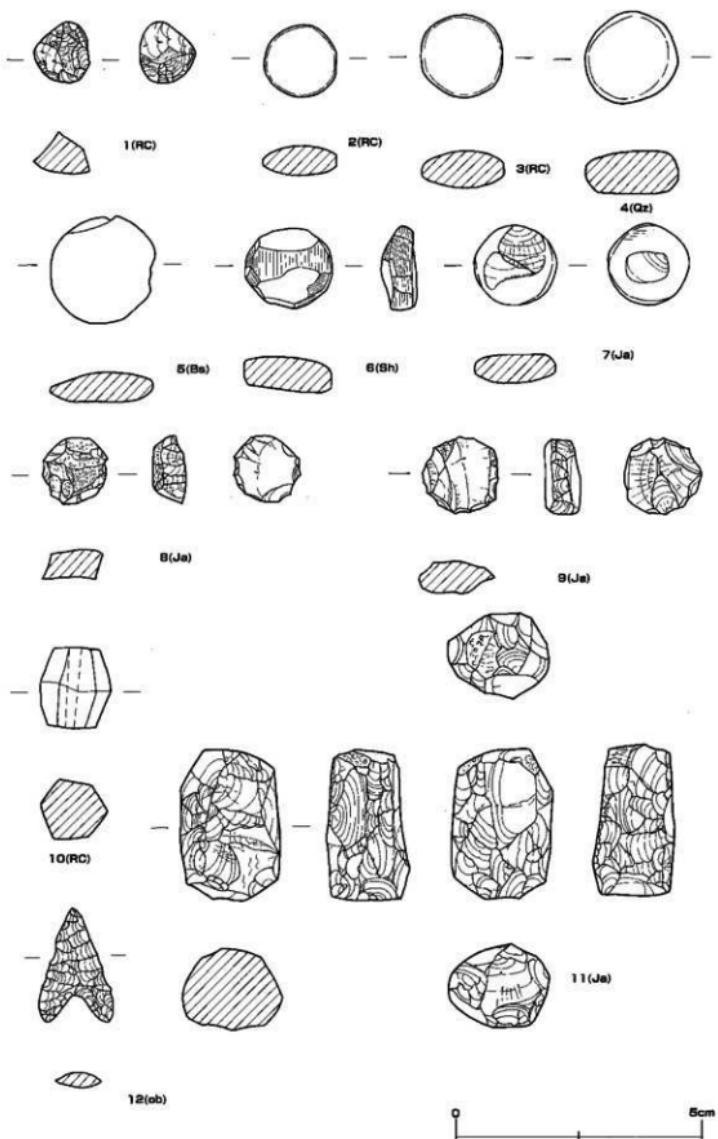
本調査区の中央部に東西に設定したトレントの表土下0.3mで加工段の一部が検出された。平面形は不整形。両端はトレントの壁に突き当たり検出できなかったが、北東にのびる。茶褐色土に掘り込まれ、壁は垂直に立ち上がる。覆土は上層に黒色粘質土が0.3m、下層に暗褐色粘質土が0.1mほど堆積し、やや西側に傾斜する。底面が確認しにくい土質だったため、遺物の出土をみなくなったところで掘り下げるのを中止して、底面とした。上層からは須恵器製蓋、高台壺、甕、土師器の壺底部などが出土した。第56図1、2は蓋。は口縁端部が短く屈曲し、端部内面に強いナデによる凹線をつくる。2の大井部外側にはヘラケズリが残る。3は高台甕。底部から短く立ち上がり、外方向に広がる。高台はやや内よりに付く。4は甕。底部は回転糸切り痕を残す。焼成不良で、灰白色を呈す。5は高台壺。底部からややふくらみをもって立ち上がり、ゆ



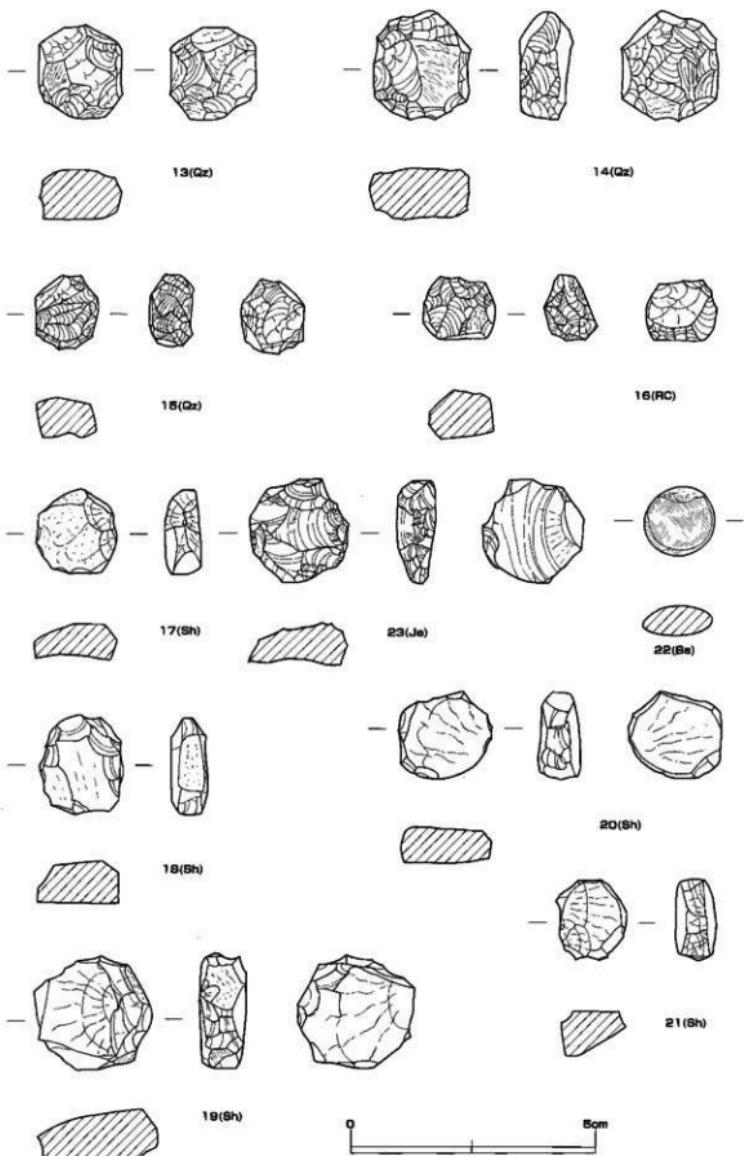
第38図 A地区8層出土土器実測図



第39図 A地区11層、堀立柱建物跡出土土器実測図



第40図 A地区1層出土玉未成品、石錐実測図

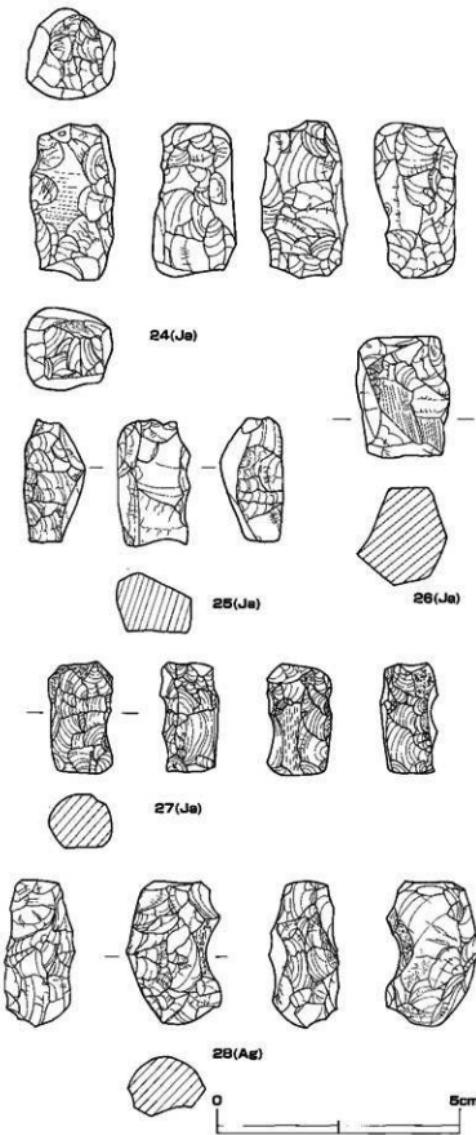


第41図 A地区2層出土玉未成品実測図

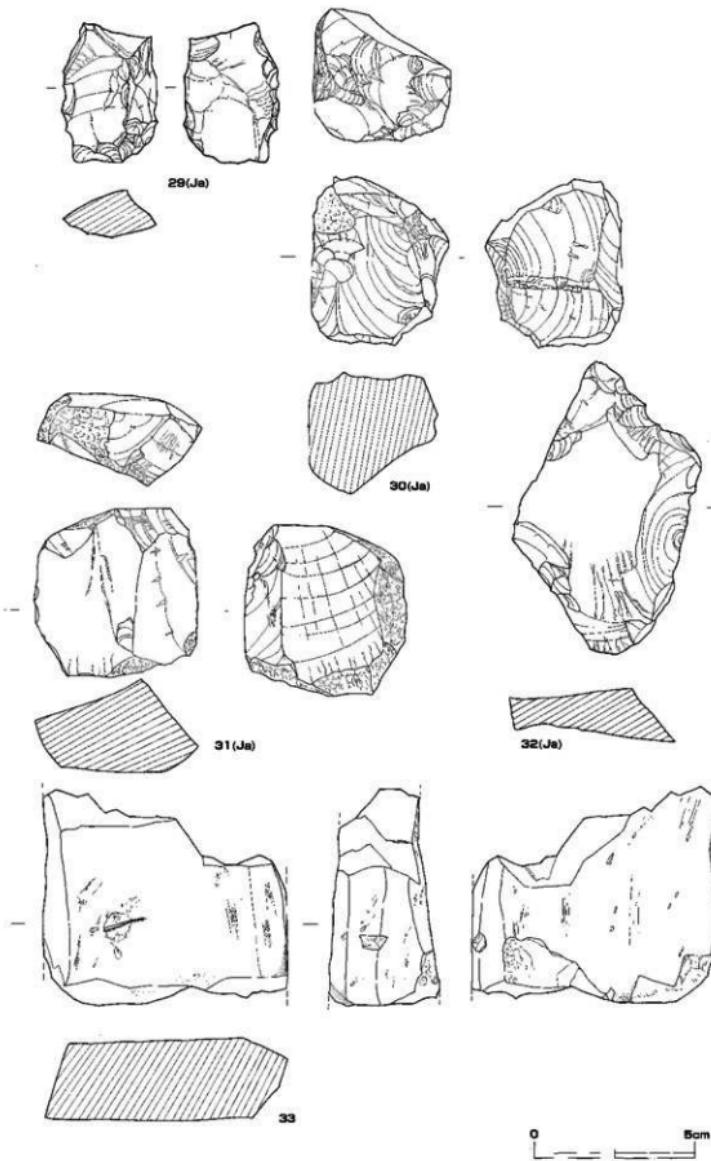
るやかに外反する。器壁はうすい。高台は短く、直立して付く。底部内面には不整方向のナデが、外面には板目状の圧痕が残る。玉は水晶製の未成品が出土した。図示した丸玉未成品（第58図1）は、全面に剥離調整を施す。第59図13は下層から出土した結晶片岩製の内磨き砥石。一端は欠失している。全面を使用し、裏面の中央部は摩滅が著しく凹む。第126図5は底面から出土した鉄製鉗具。馬蹄形を呈し、フレームの中央部にトの字状に軸棒と差棒をつける。馬具と思われる。

SX02（第55図、第57図、第58図2~9、第59図10~12）

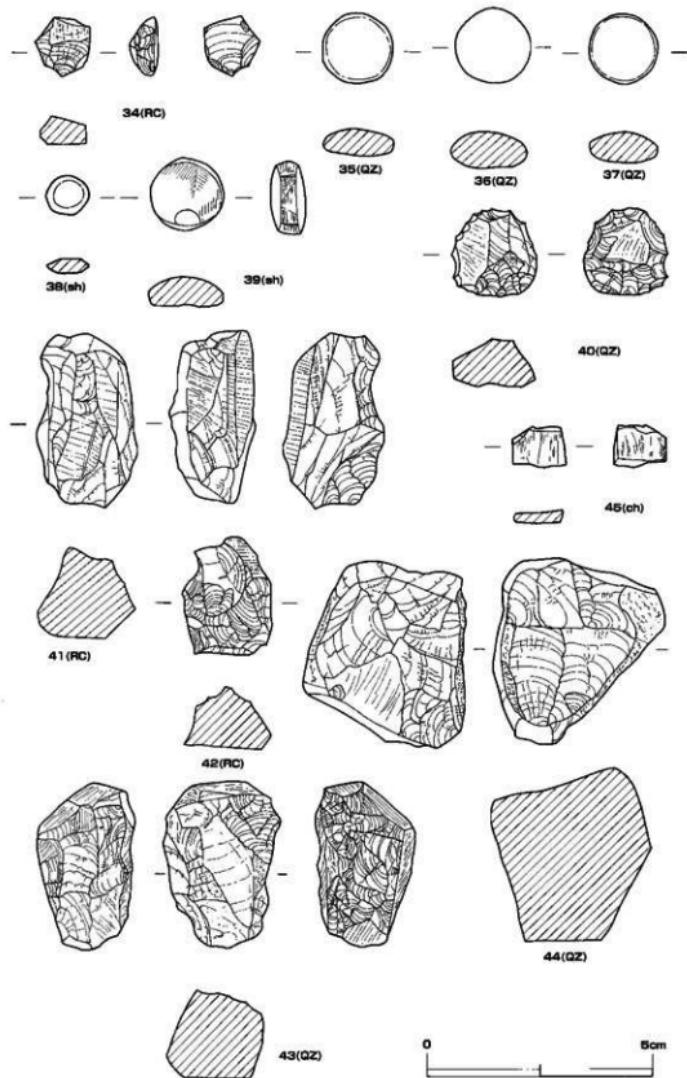
SX02はSX01の西約0.4mで検出された。トレチの南壁から北壁にL字状にのびる加工段で、茶褐色土にやや鋭角に掘り込む。堆積上は上層に黒色粘質土が0.1m、下層に暗褐色粘質土が0.35m、西方向に傾きながら堆積する。遺物の出土量は多く、とくに水晶製平玉未成品が目立った。第57図1、5、7は上層から出土。1、5は須恵器で蓋と高台壺。7は上師器の皿。第58図2~6は上層から出土した玉未成品。2~5は石英および水晶製。2は平玉未成品。3は剥片素材に剥離調整を加えたもの。4、



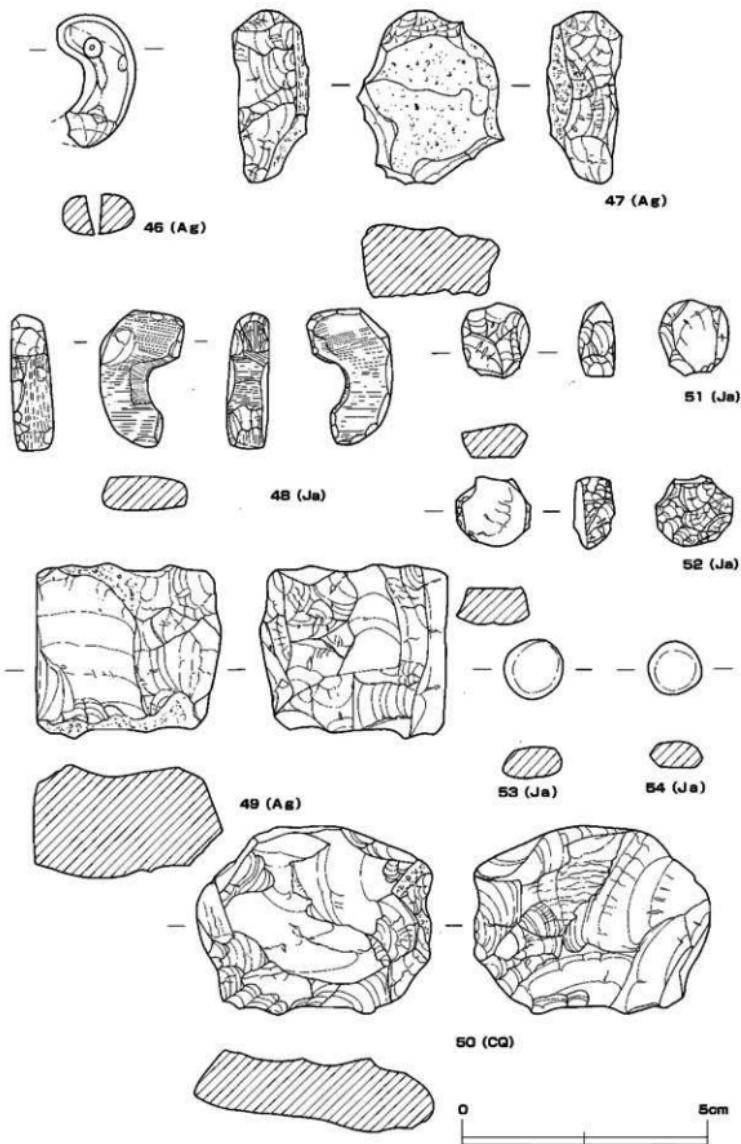
第42図 A地区2層出土玉未成品実測図



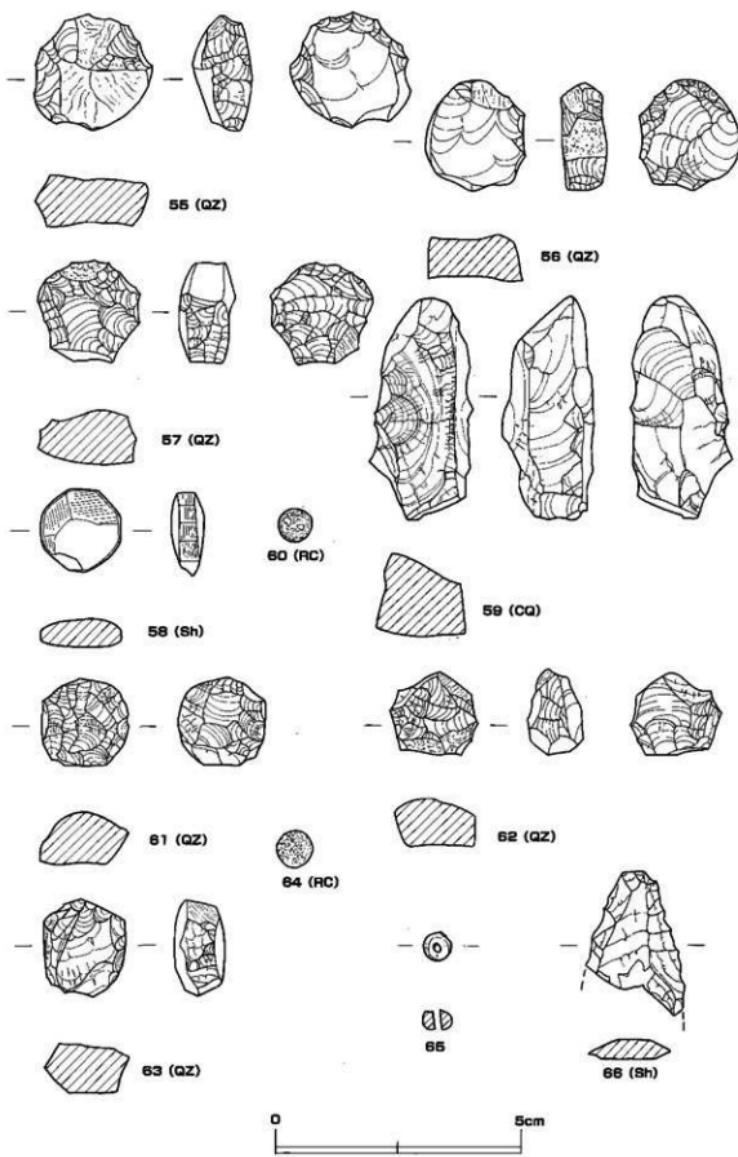
第43図 A地区2層出土玉未成品、砥石実測図



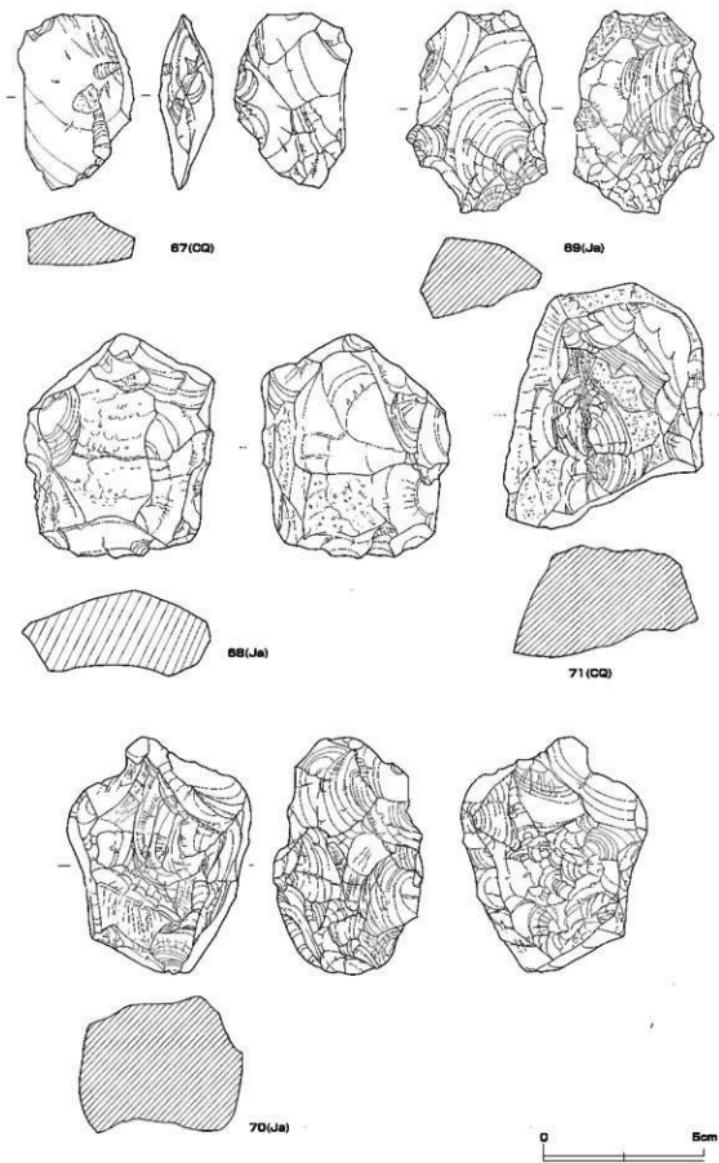
第44図 A地区4層出土玉未成品実測図



第45図 A地区4、5層出土玉未成品実測図

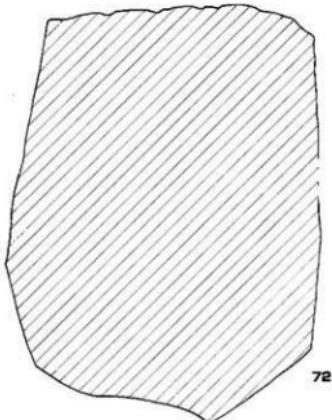
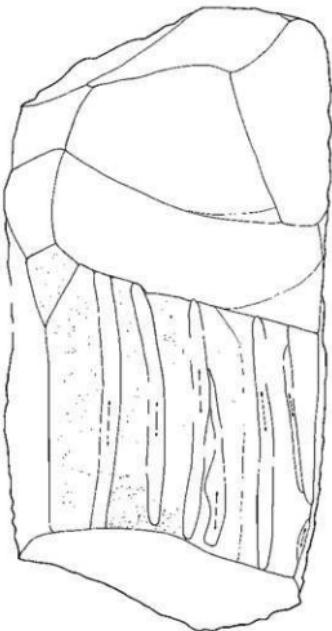


第46図 A地区5、7、8、11層出土玉未成品、石器実測図



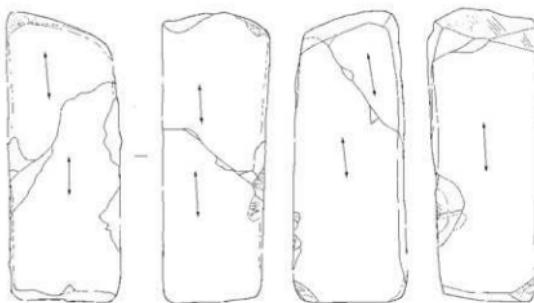
第47図 A地区5、8層、地山直上出土玉未成品実測図

5は結晶面の残す原石に剥離痕が認められる。石核の可能性もある。6は頁岩製平玉未成品。全面に研磨を施すが、稜線が残る。径16.4mm、厚さ7.8mmを測る。断面はかまぼこ形。第59図10は角石製の剥片素材。厚さは7mmとうすい。第57図2~4、6、9~18は下層から出土した須恵器。2、3は蓋。2は口縁端部が短く崩れ出し、端部内面に棱が入る。天井部外面には回転糸切り痕が残る。3は口縁部と天井部の境が明瞭で八の字状にひらく。端部はやや肥厚する。天井部外面にはヘラケズリの痕跡がある。4、6、8、9は皿。いずれも底部から逆八の字状に短く立ち上がる。8の口縁部は崩れ出し、端部内面にやや棱をもつ。底部にはヘラ書きの文字が一部残る。9は大型品。4、8、9には回転糸切り痕が残り、6の底部には板目状の圧痕がみられる。10~12は壺。10の底部には、ヘラ切り離しの後ナデ調整を施し、「白田」の文字を刻む。11、12の底部切り離しは回転糸切りによるもの。11は器壁がうすく、底部より緩やかに外反する。12は底部から直線的に外方向にのびる。底部にはヘラ書き文字の一部が残る。13は高台皿。底部は回転糸切りにより切り離され、「林」の字の一部が残る。14は上師器の高台壺。赤褐色を呈す土師質の須恵器。調整は摩滅が著しく不明。15は高台壺。体部は直線的に外方向にひらく。高台はやや外側につく。底部はヘラ切りによるものと思われ、爪形の圧痕が残る。「白田」の文字が見える。皿、壺類の時期は国庁V形式以降で、9世紀代のものと思われる。16は小型の短頸壺。口縁部は短く直線的に立ち上がり、肩部はやや張る。17は口縁部が逆八の字状に短くひらく壺。外面には平行叩き、内面には同

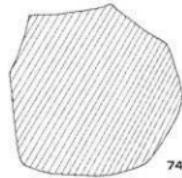
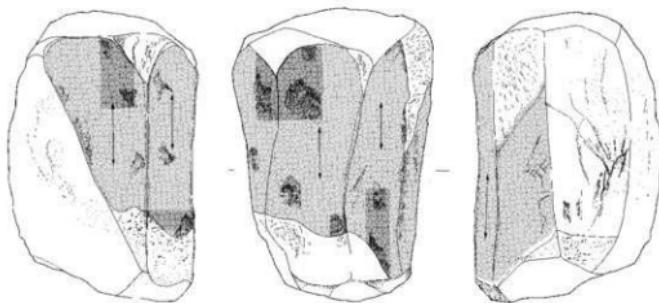


0 10cm

第48図 A地区6層出土砥石実測図



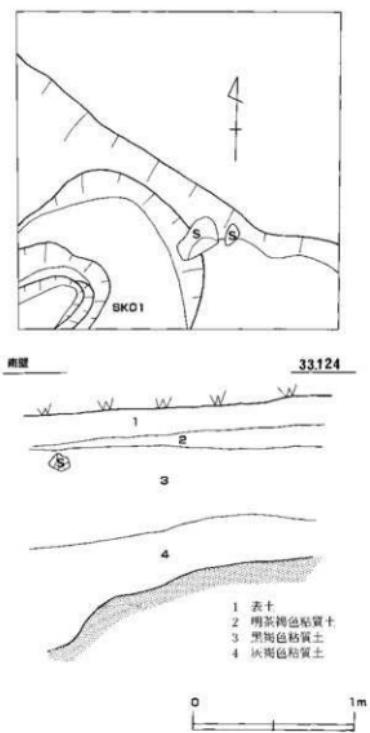
73



74

0 10cm

第49図 A地区8層出土砥石実測図



第50図 B地区SK01実測図

の灰茶褐色粘質土が0.15m堆積する。

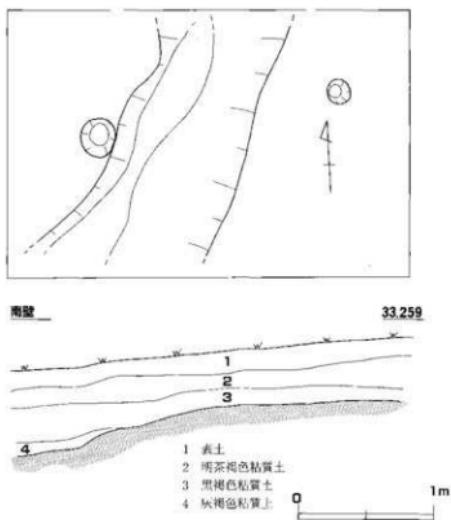
SI01 (第60図、第80図~83図)

C地区の東北端で検出された竪穴住居状遺構。遺構のすぐ東側には上の畑との境界になっている溝が走り、北側には果実の柵がある。蛇喰跡跡内で以前から最も遺物が多量に出土する地点で、今回の調査でも表土からほぼ完形品に近い須恵器が出土した。当初、 2×4 mのトレンチを設定して調査を進めていたが、東側で落ち込みの壁を検出し、遺物が多量に出土したので、この付近を中心と範囲を広げ、一部に上層觀察用の畔を残し、最終的には 24m^2 を調査した。年度末の発掘であったので、調査費と時間的制約があり、全面を検出することができなかつたため、竪穴住居址であるかは判断に苦しむが、壁際に側溝状のものが巡ること、煤のついた土師器壺や鍋、土製支脚など煮炊き用具がみられることから、人々の生活の場として利用されていたと考え、竪穴住居状遺構とした。耕作土は0.1mの厚さで堆積し、とくにトレンチ北側ではそれを除去すると地山が検出されることから、耕作時に削平され、遺構もかなり破壊されている

心円タタキが施される。18は双耳壺の耳部か。ヘラケズリ痕が残る。その他、図示できなかったが、土師器の壺、高壺、壺なども出土している。第58図7~9は下層から出土した玉未成品。7は全面に細かい敲打痕を残す水晶製丸玉未成品。両面からの穿孔が認められるが、途中で中止している。8は水晶製平玉未成品。結晶面を残し、剥離調整を加える。9は碧玉製平玉未成品。やや粗い剥離調整を加える。第59図10、11も下層から出土。11は碧玉製の敲石。上端部は大きく欠失しているが、下端部には細かい敲打と、それによる細長い剥離痕が残る。石核を転用したものと考えられる。第59図12は砂岩製筋砥石。風化が著しいが、表面に7条、裏面には1条の溝がみられる。溝の断面はやや深めのU字状を呈す。

SD02・03 (第55図)

加工段の平坦面には2条の溝も検出された。SD02はくの字状に曲がり、東端は加工段の壁に、北端はトレンチの北壁に突き当たる。SD03は東西方向にS字状に屈曲しながらのび、東端は丸く閉じる。両者とも断面はすり鉢状を呈し、内面には砂混じり

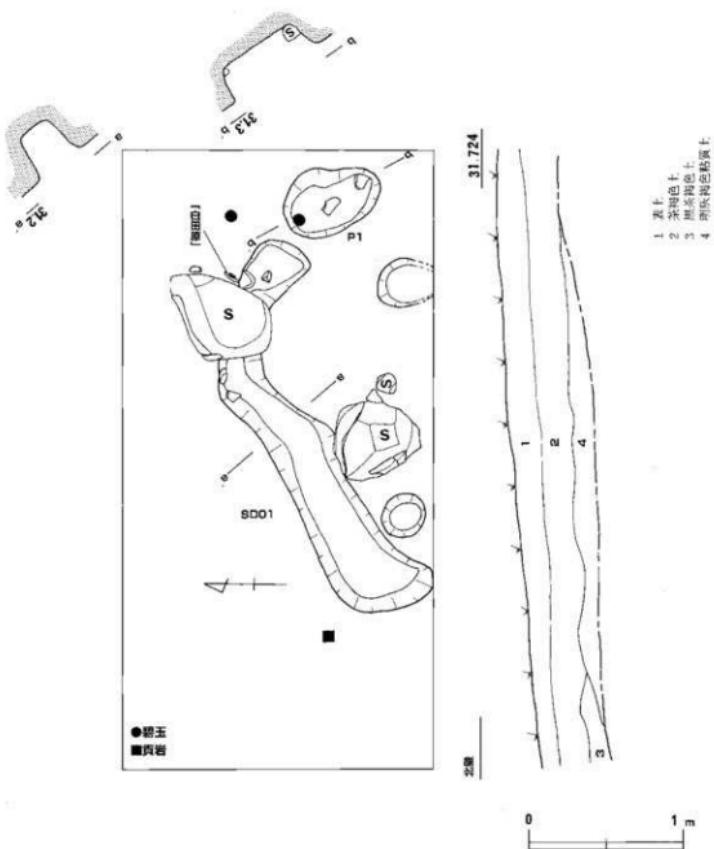


第51図 B地区SD01実測図

めかと思われる。この地山直上からの出土遺物は須恵器（第81図1~11）、土師器（第81図12、13）、図示できなかったが、碧玉製の原材料が2点、剥片素材1点、チップが1点出土した。1、2は口縁端部が短く屈曲する蓋で、1は回転糸切りによる切り離しがみられ、天井部周囲にはヘラケズリ痕が残る。天井部には中央がやや凹む扁平なつまみがつく。3、4は底部から逆ハの字状にひらく坏で、底部にはヘラ切りの痕が残る。4の底部には「内」の文字が記される。5は口縁端部が肥厚し、内面に稜をもつ坏。6は高台皿。底部からひらき気味に立ち上がり、口縁部は外反する。7~10は高台环。底部から外方向にひらき、底部はハの字状の短い高台がつく。10の底部には「由」の字が記される。5~10の底部はいずれも回転糸切りによる切り離しがみられる。11は脚环の脚部。端部が外方向に屈曲する。内面の縁に「有」の字がある。これらの須恵器は国庁IV・V形式に併行し、8世紀後半~9世紀初頭と考えられる。12、13は口縁部が外反する土師器の甕。摩滅が著しく調整は不明だが、須恵器とほぼ同時期と推定される。

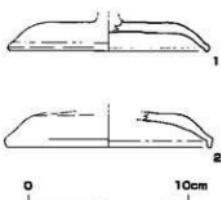
壁際には幅0.3mの側溝状のものが浅く残り、北側で短く消滅している。この側溝の北端に直交する形でSD01が検出されたが、新旧の関係は明らかではない。SD01は東西方向にやや蛇行しながら走る溝で、東端部は丸く閉じ、西端部はトレンチ壁の西南角に突き当たる。この溝は0.1~0.2mと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。溝からは多くの須恵器が出土した。第83図1~7は蓋。1~4は口縁端部が短く屈曲し、端部内面に稜を持つタイプだが、2、3にみられる稜は形骸化している。切り離しは1は回転糸切りによる切り離しで、天井部周囲には回転ヘラケズリ痕が残る。3はヘラ切りの痕跡がみられる。5~7は口縁端部が垂直に屈曲する。8、9は坏。8は内湾

と思われる。掘り込みの壁は北東にのび、検出した規模は3.2mを測る。南東端は畠地の境界である溝の方向にのび、北西端はトレンチの壁に遮られる。層序は1層が耕作土、2層が明茶褐色粘質土で、旧表土と考えられる。落ち込みは2層の明茶褐色粘質土に掘り込んであり、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。内面には黒褐色粘質土が0.3~0.4mの厚さで堆積し、多量の遺物が出土する。床面は土質に変化が乏しく、明確に見極めることができなかったが、覆土と比較すると土壤が密になって固くしまり、土色が明るくなった地点を床面とした。床面は南西に向かってやや傾斜する。これは耕作で擾乱を受けたた



第52図 C地区SD01実測図

氣味に立ち上がり、口縁部が短く屈曲し、9は底部から逆ハの字状にひらくタイプ。底部にはわずかに回転糸切りの痕跡がみられる。10、11は高台壺。10は底部から外反氣味に外方向にひらき、口縁端部の内面には回線状のくぼみがつく。11の底部には静止糸切りの痕跡がみられる。12、13は皿。14~17は高台皿。切り離しはいずれも回転糸切りによるもの。14~16の口縁端部は短く屈曲し、内面に稜をもつ。高台は短く、垂直氣味につく。17は口縁端部がほぼ垂直に屈曲する。14、17の底部は回転糸切りの後回転ナデ調整を施し、高台を貼り付ける。18は高台壺と思われる。外面には金属容器の写しと考えられる突當がめぐる。20は鉢。口縁部が短く屈曲する。21は葵臺形の短頸壺。いずれも国序IV・V形式に属し、8世紀後半~9世紀初頭のものと考えられる。22は小型の瓶。



第53図 C地区P1・SD01
覆土出土土器実測図

溝の東端部にはやや南北方向にのびる楕円形のP7が検出された。ここからは須恵器の鉢（第83図19）や土師器片、炭化物が出土した。トレンチ南端で検出したP5からも土師器片、須恵器片、碧玉のチップ、炭化物が出土した。図示できる須恵器は4点あった。第82図1、2は高台皿。やや内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。1の底部はヘラ切りによる切り離し。3は蓋。上部がやや凹んだ扁平なつまみをもち、口縁部は直立てのび、端部内面がわずかに凹む。天井部は回転糸切りによる切り離し。4は高台坏。その他にも「由」が1点、「白田原」が1点とヘラ書き文字のある須恵器が出土したが器形は定かではない。これらを含めて住居内から4穴のビットが検出されたが、柱穴になるかどうかは判然としない。住居外で検出されたP3は平面形が円形をなし、階段状の断面をもち、中央部が凹んでいることから、柱穴の可能性がある。ここからは奈良時代後半の須恵器坏の破片が出土した。

SI01覆土内出土遺物

須恵器

蓋(第61図、62図)

A型式（第61図1～30）

口縁部がひさし状にのび、平坦になり、口縁端部はやや外傾して屈曲し、嘴状を呈す。頂部に扁平なつまみがつく。

A-I（1～9）天井部がドーム形を呈し、器高がやや高い。天井部の切り離しはヘラ切りによるものと思われる。1、8の天井部には回転ナデ調整が、4、7の天井部にはナデ調整が残る。2、3、5の天井部には回転ヘラケズリ調整を施した後、回転ナデ仕上げを行う。

A-II（15～17）天井部が平坦になる。切り離しは回転糸切りによるものと思われる。その後、天井部に回転ヘラ削り調整を施し、回転ナデ仕上げをする。

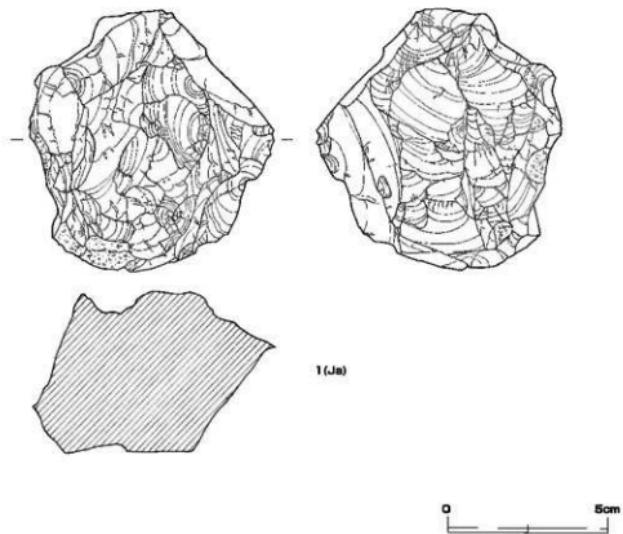
A-III（18～20）天井部が平坦になり、端部外面の中央部は強いナデによりやや凹む。天井部の切り離しはヘラ切りによる。天井部周囲にはヘラケズリ調整が残る。いずれも回転ナデ仕上げをする。

A-IV（23～30）天井部が平坦になり、器高が低い。切り離しはヘラ切りによる。23、24、26、29、30が回転ナデ仕上げ、25、27、30は天井部がナデ、口縁部には回転ナデ仕上げを施す。

A-V（10～14）10～14は天井部外面に金属器の模倣と思われる1条ないし2条の沈線が巡る。10の天井部は回転糸切りによる切り離しで未調整である。11は天井部が陥落する。12は回転糸切り後、回転ナデを施す。14は天井部外面をヘラケズリ後回転ナデ仕上げ。

B型式（第62図33、34、37、38）

口縁端部が外傾気味に屈曲し、端部内面には稜線がつく。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。33は回転ナデ仕上げ、34、37は天井部外面にナデ、口縁部には回転ナデ仕上げ。



第54図 C地区SD01覆土出土玉未成品実測図

C型式（第62図42～54）

天井部がほぼ平坦で、口縁端部は短く屈曲し、断面は三角形をなす。口縁部内面には稜がつく。頂部に扁平なつまみがつくが、46、47は中央部がやや凹む。切り離しは回転糸切りによる。天井部の周囲には回転ヘラケズリ調整を施す。仕上げは回転ナデ調整。団扇IV形式に併行すると思われる。

C-1 (42～44) 口縁端部がやや外方向に短く屈曲する。

C-2(45～51) 口縁端部がやや内側に屈曲する。49の天井部はやや丸味を帯びる。51の大井部外面には沈線を施す。

C-3(52～54) 口縁端部が肥厚し、内面の稜線がやや不明瞭。端部を平坦に仕上げる。

D型式（第62図35、36）

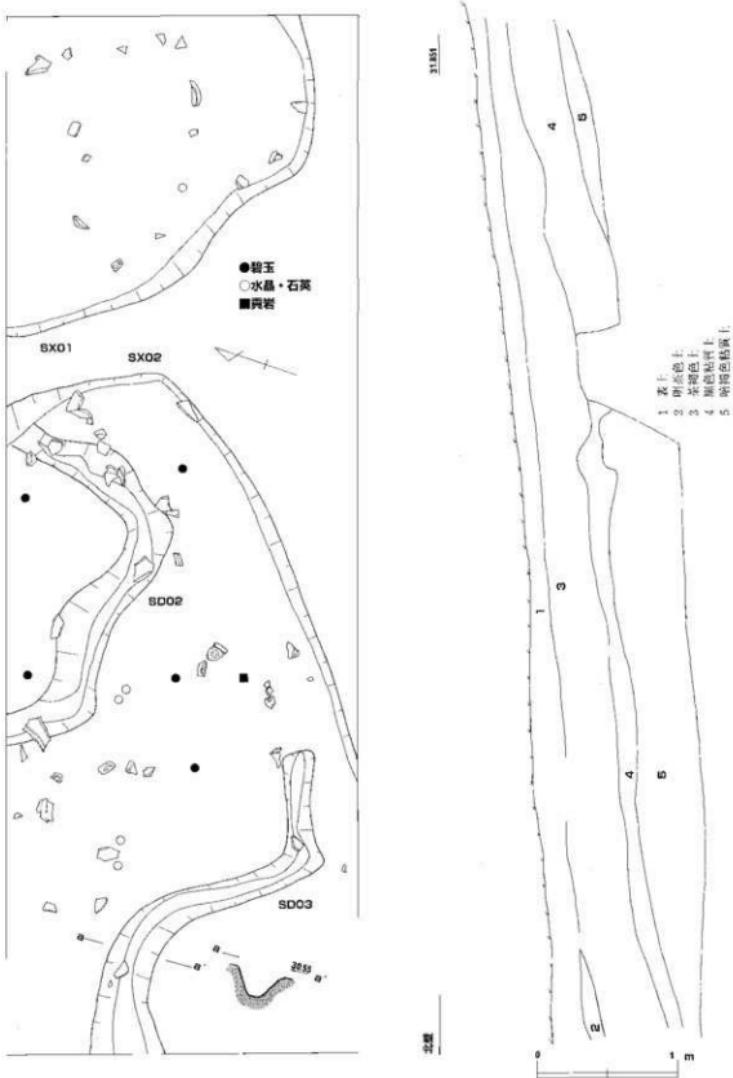
口径の大きい大型品。口縁端部が平坦になり、ほぼ垂直に屈曲し、端部内面には鋭い稜をつける。36は残存部がわずかで明確ではないが、天井部の周縁部に突帶状のものが残る。団扇V形式に属する。

E型式（第62図55～57）

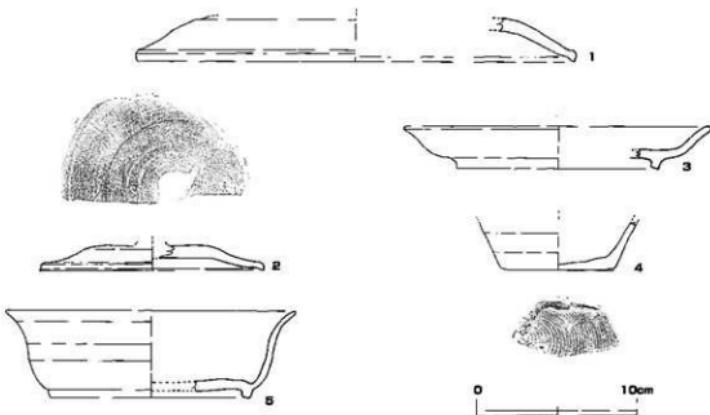
短頸壺の蓋。いずれも天井部の平坦面が広く、口縁部は内傾気味に直立する。55には天井部外面に2条の沈線が残る。口縁端部には面取りが行なわれ、内面には稜線がつく。57の大井部縁部にも沈線がみられ、径の大きい輪状のつまみがつく。金属性容器を模したものか。

その他（第61図31、32、第62図39、58～62）

31は擬宝珠状のつまみをもつが、摩滅が著しく調整は不明。淡褐色を呈し、やや土師質。32



第55図 C地区SX01・02実測図



第56図 C地区SX01 4、5層出土土器実測図

は器高の高い笠形を呈す。天井部の周縁部に沈線を施す。ヘラケズリ調整の後回転ナデ仕上げを行う。39は口縁部が外方向に直線的にのび、口縁部に4条の沈線がみられる。器高は低い。58は天井部が丸みを帯び、外面には形骸化した稜線が残る。口縁端部はやや凹む。6世紀末～7世纪代のものと考えられる混入品。59～62はいずれも蓋の天井部のみで、天井部外面には回転ナデが残る。59には低い擬宝珠状のつまみが、その他には扁平なつまみがつく。

皿 (第63図、64図)

A型式 (第63図64～77)

器形は底部から外方向に緩やかにのび、口縁端部は外反する。

A-1 (64～75) 底部はヘラ切り離し後ナデ調整。国府V形式に属するとと思われる。

A-2 (76) 底部は回転糸切りによる切り離しの後、未調整。国府IV形式か。

B型式 (第63図78～96)

器形は底部から逆八の字状に直線的に立ち上がる。底部はヘラ切りによる切り離しの後ナデ調整を行う。96の口縁部外面にはややアクセントがつく。A型式と比較すると、口縁と底部の境界が明瞭なものが多く、若干、器壁が厚い。国府V形式以降のものか。

C型式 (第64図97～103)

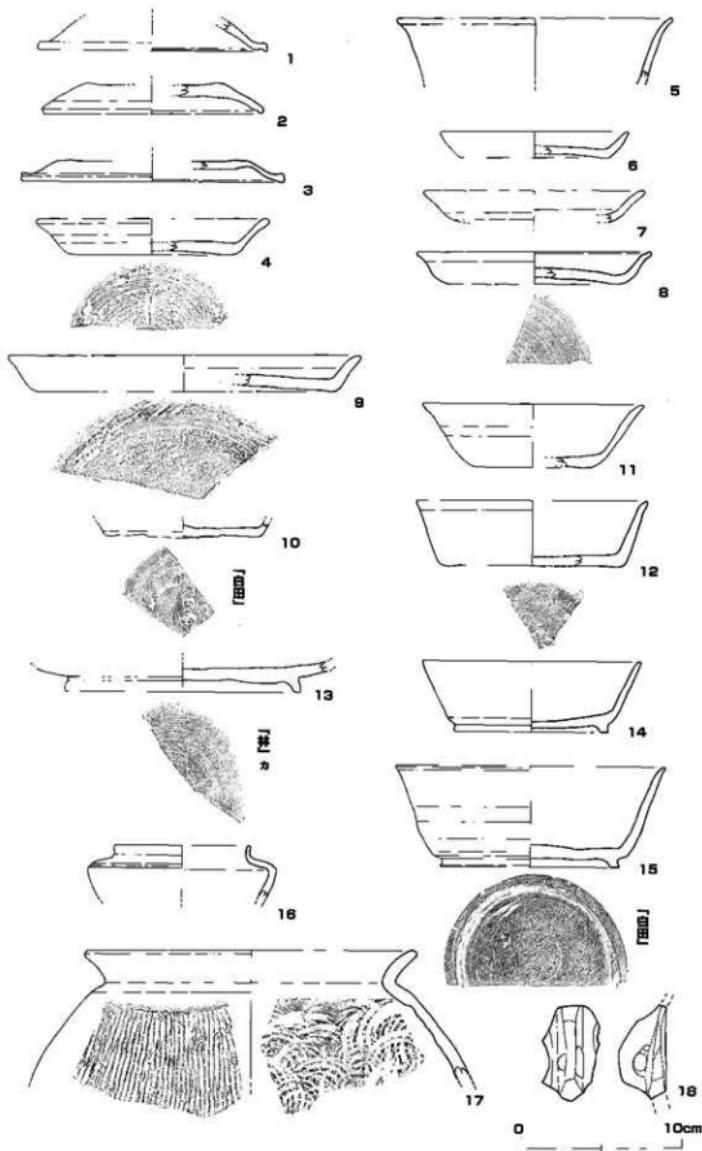
器形は底部から緩やかに外方向にのび、口縁端部内面に段をもち、稜がつく。底部は回転糸切りによる切り離し。国府IV形式と思われる。

C-1 (97～100) 口縁端部が内側に屈曲する。底部は回転糸切りの後ナデ調整。

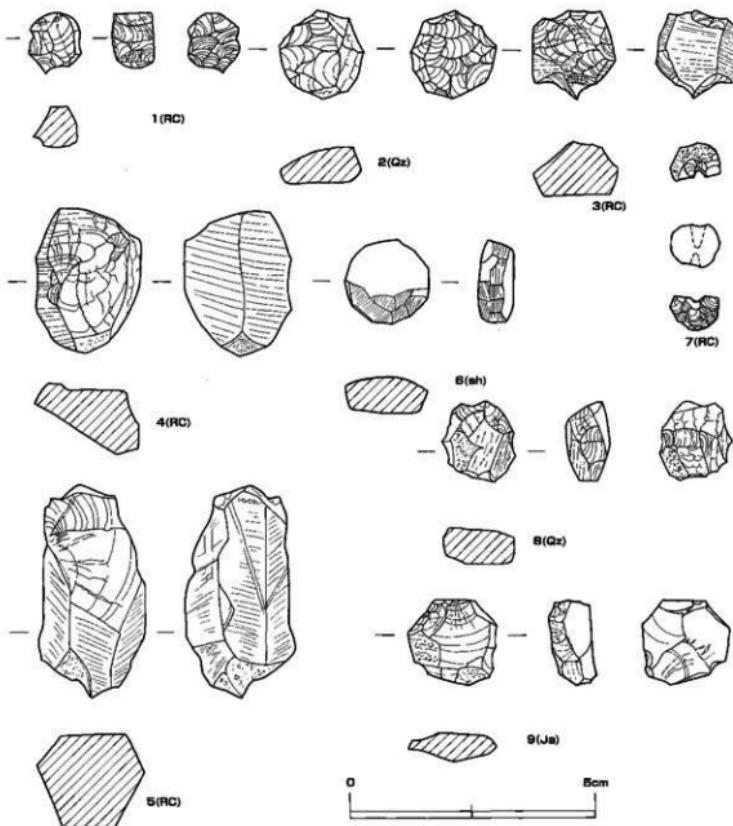
C-2 (101～103) 口縁端部はまっすぐにのび、内側に段がつく。底部は回転糸切りの後ナデ調整を行う。

その他 (第64図104)

104は底部から逆八の字状に立ち上がる。底部調整は不明。焼成は不良で灰白色を呈す。9世纪後半のものと思われる。105はB型式に近い大型品。



第57図 C地区SX02 4、5層出土土器実測図



第58図 C地区SX01・02覆土出土玉未成品実測図

高台皿（第64図106～119、第65図120～127、138）

A型式（第64図107～110）

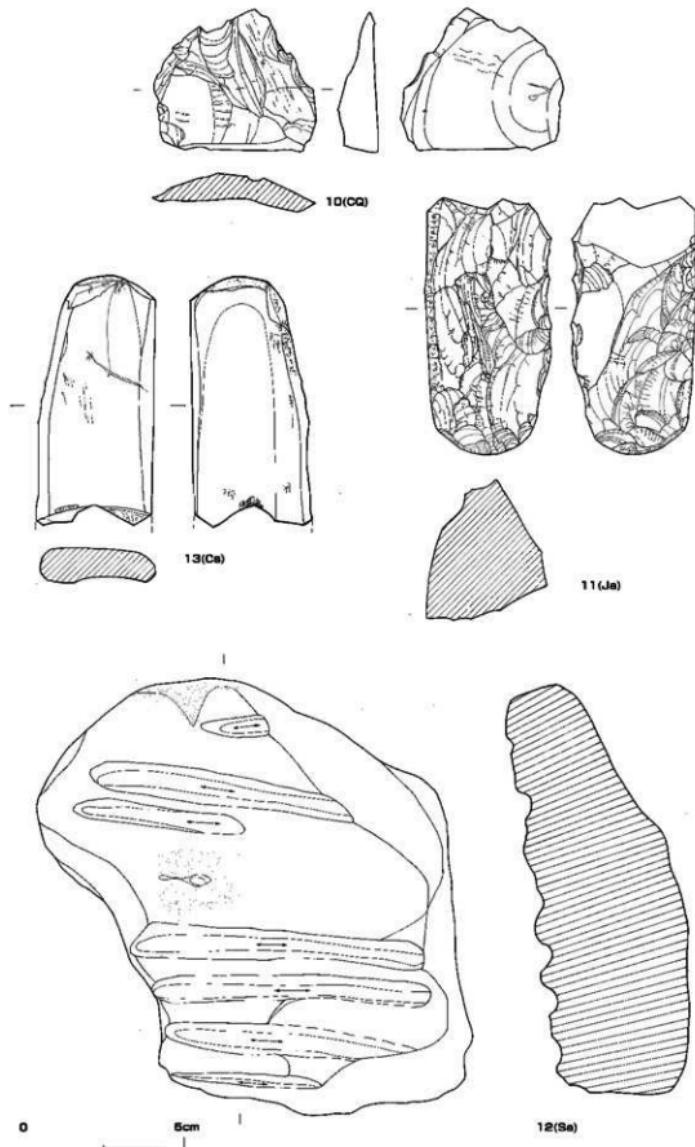
皿部は底部からやや内湾気味に外方向にひらき、口縁部はやや強く外反する。高台はやや外向きに踏ん張る。高台接地面はほぼ平坦に削り、端部の稜が鋭い。底部切り離しは不明だが、高台貼り付け後に回転ナデ調整を施す。

B型式（第64図111～114）

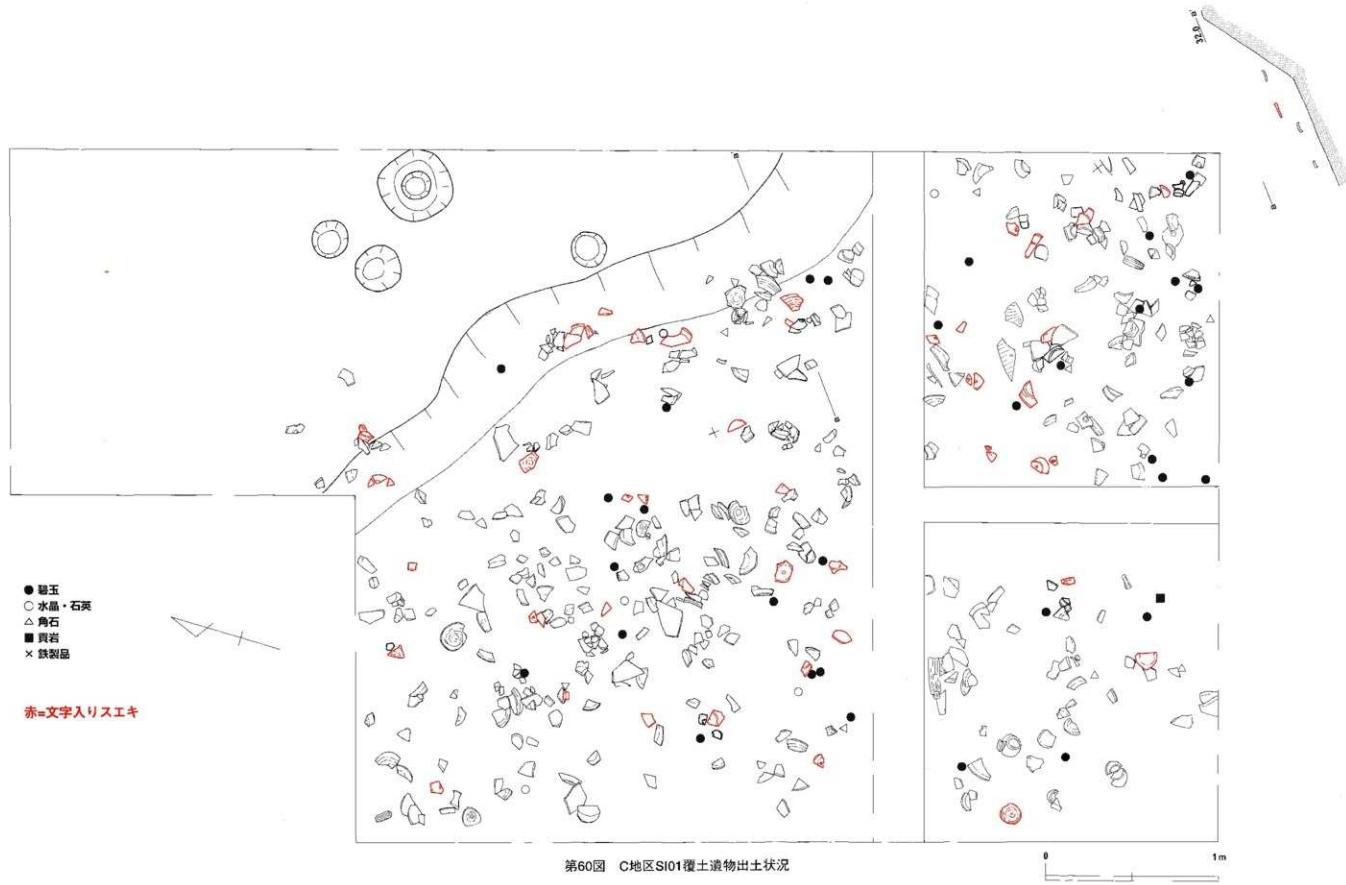
皿部は底部から緩やかに外反する。底部切り離しはヘラ切りによるものと思われる。

C型式（第65図120～123）

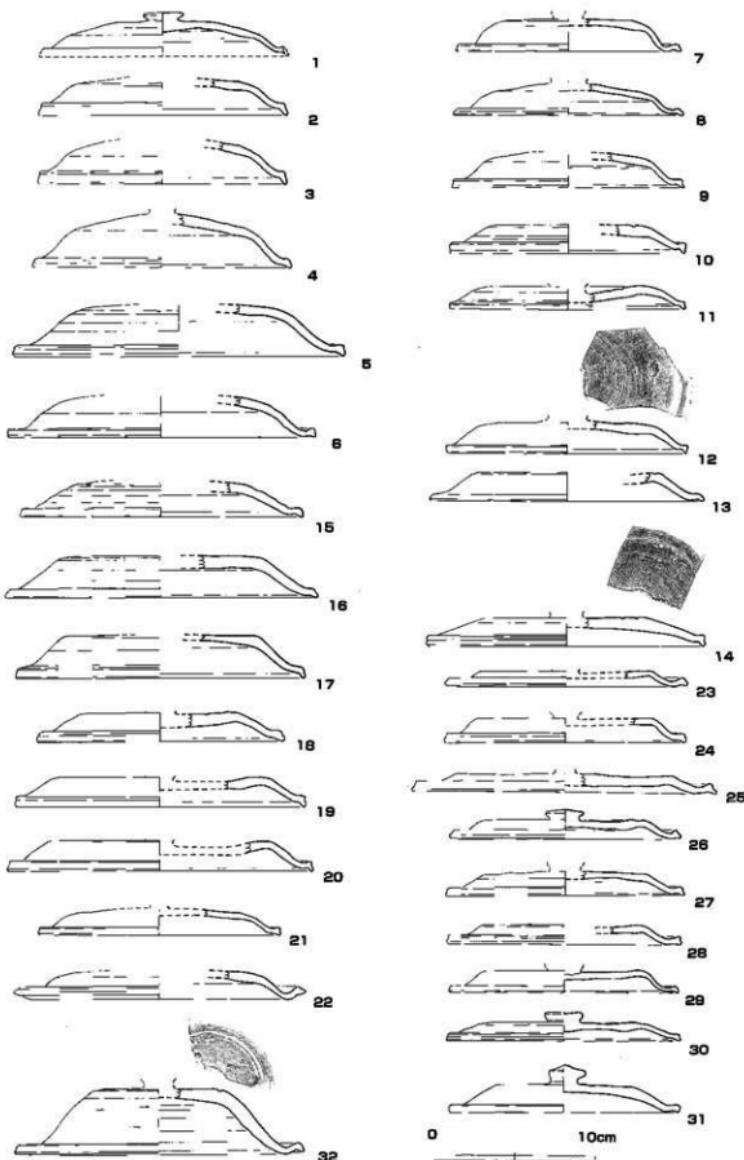
皿部は逆ハの字状に短く立ち上がり、端部はやや肥厚する。太くて短い高台がつく。切り離し、調整は不明。



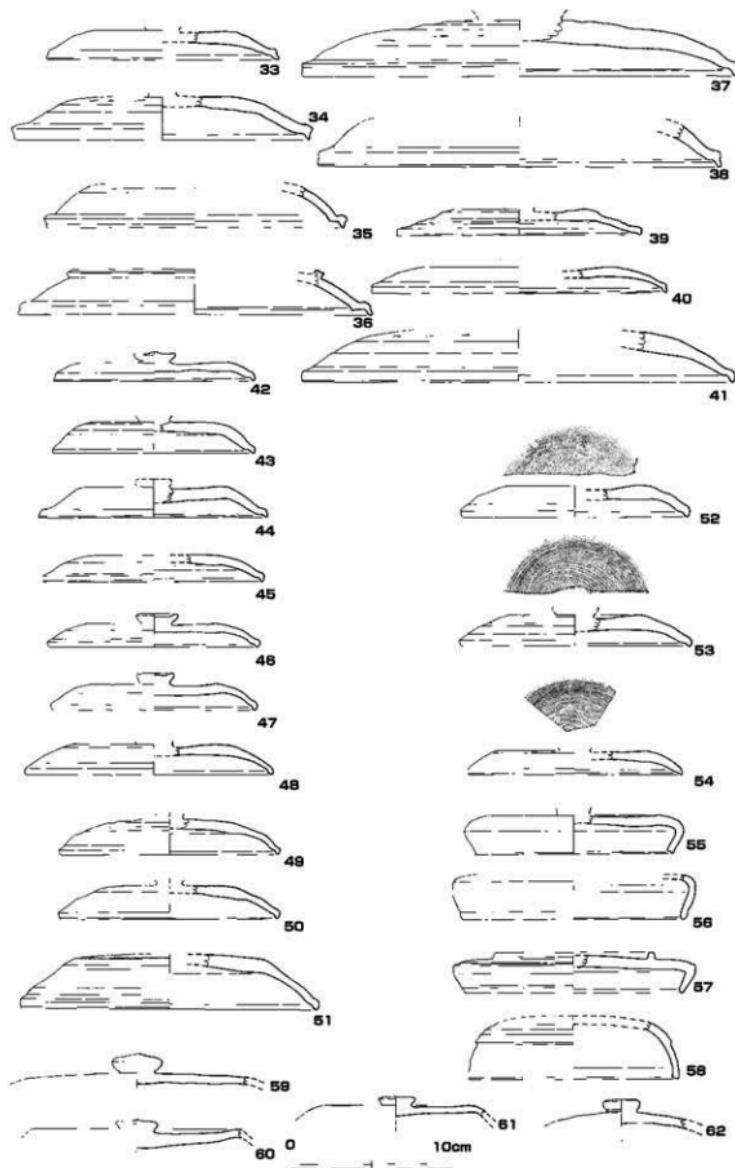
第59図 C地区SX01・02覆土出土玉未成品、砥石実測図



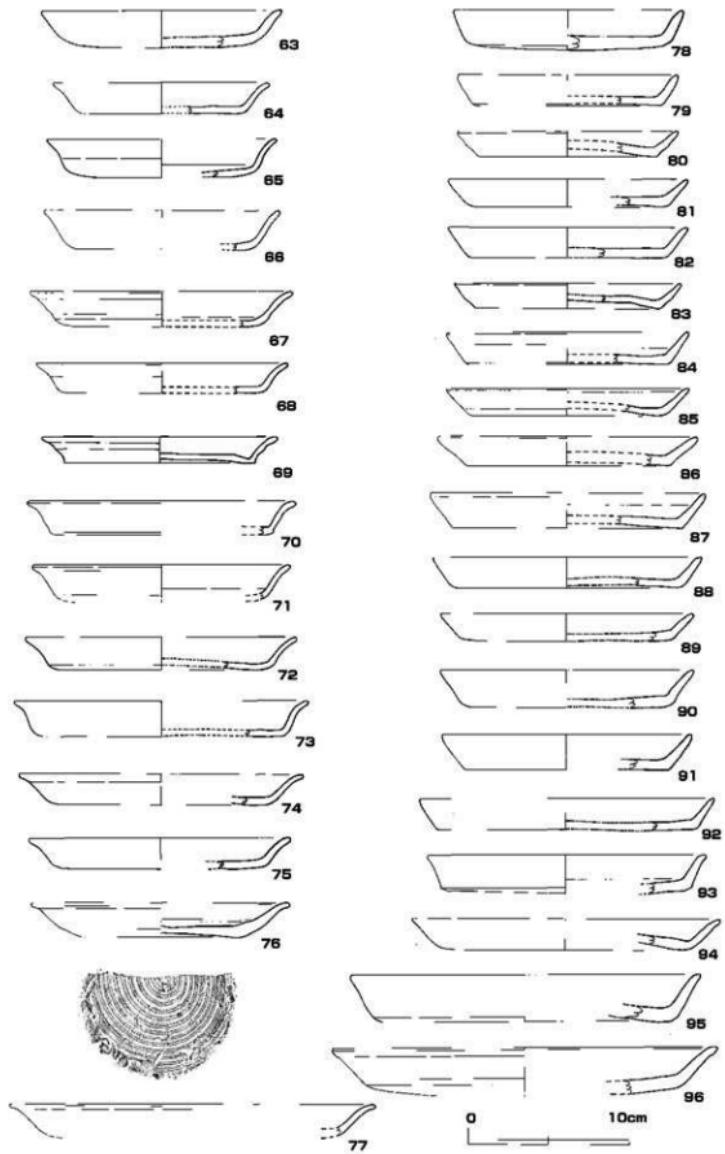
第60図 C地区SI01覆土遺物出土状況



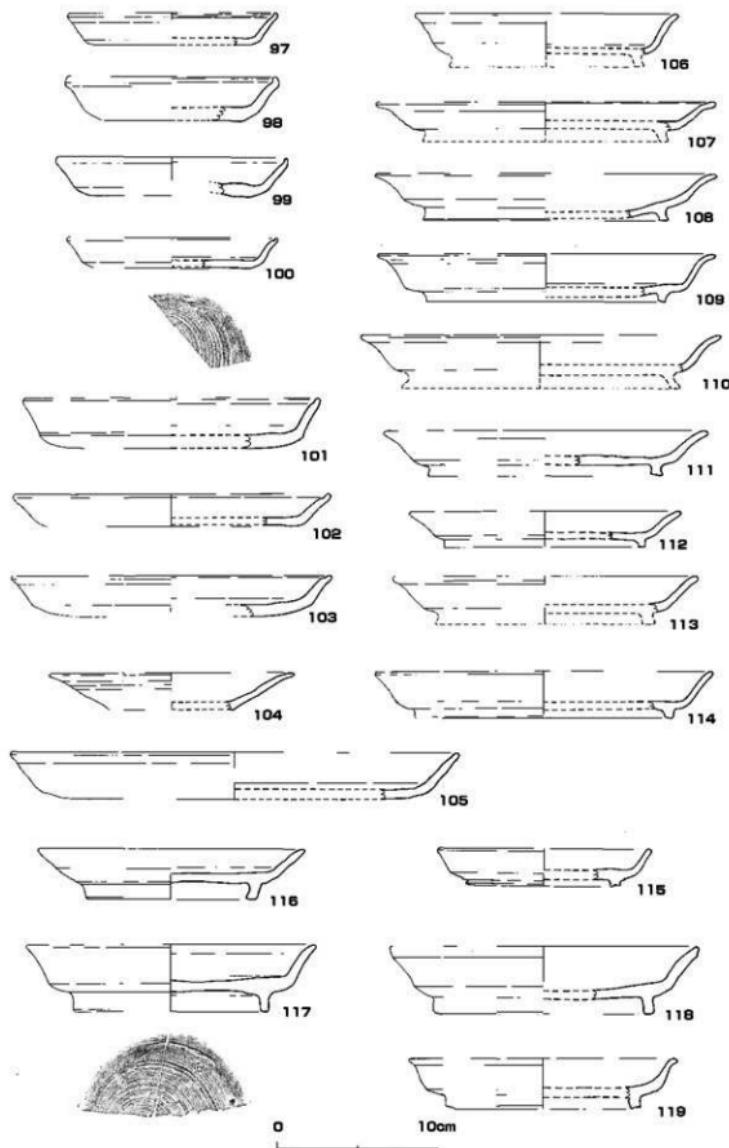
第61図 C地区SI01覆土出土土器実測図 (1)



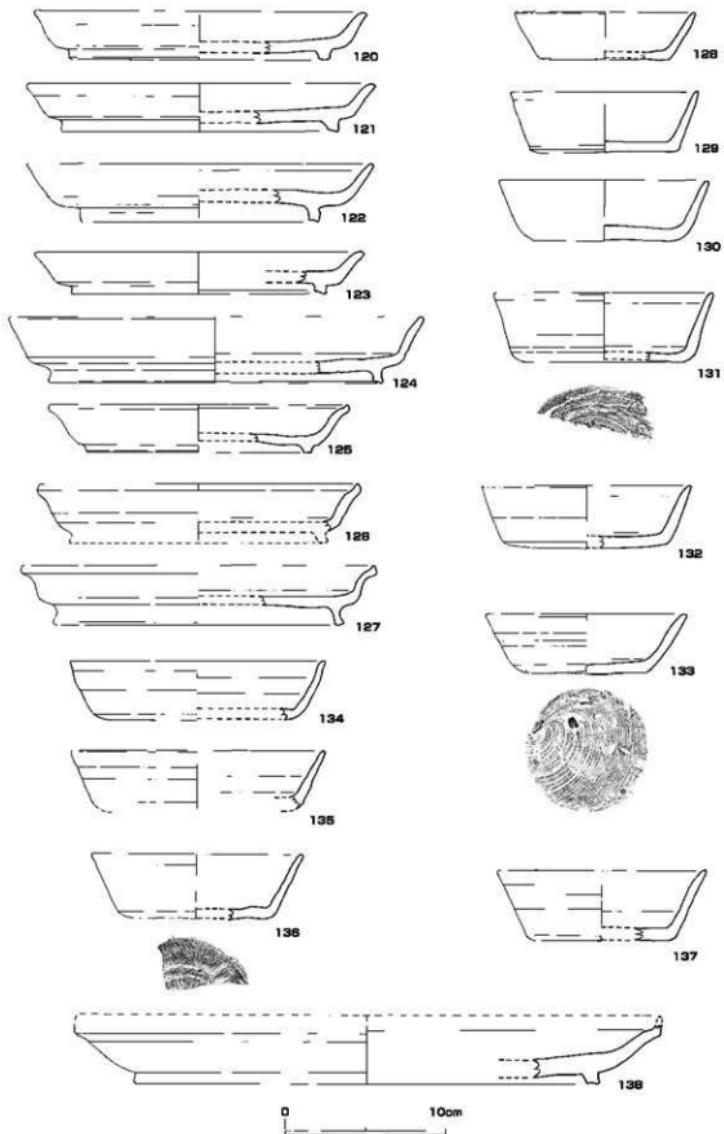
第62図 C地区SI01覆土出土土器実測図（2）



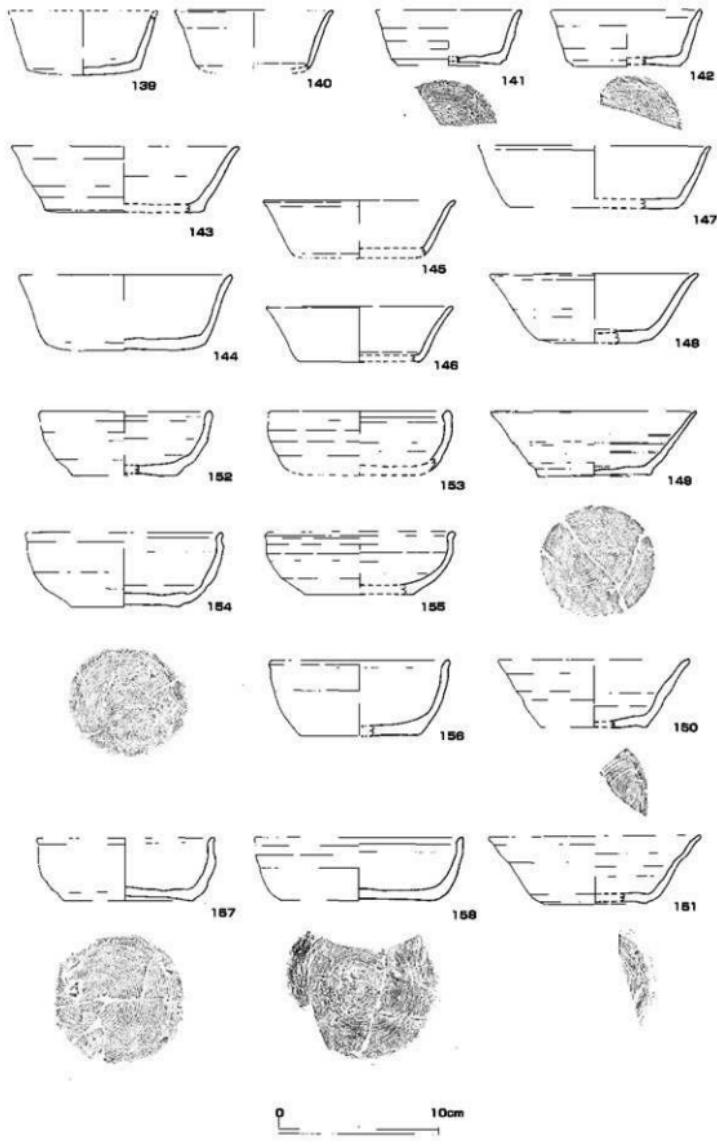
第63図 C地区SI01縕土出土土器実測図 (3)



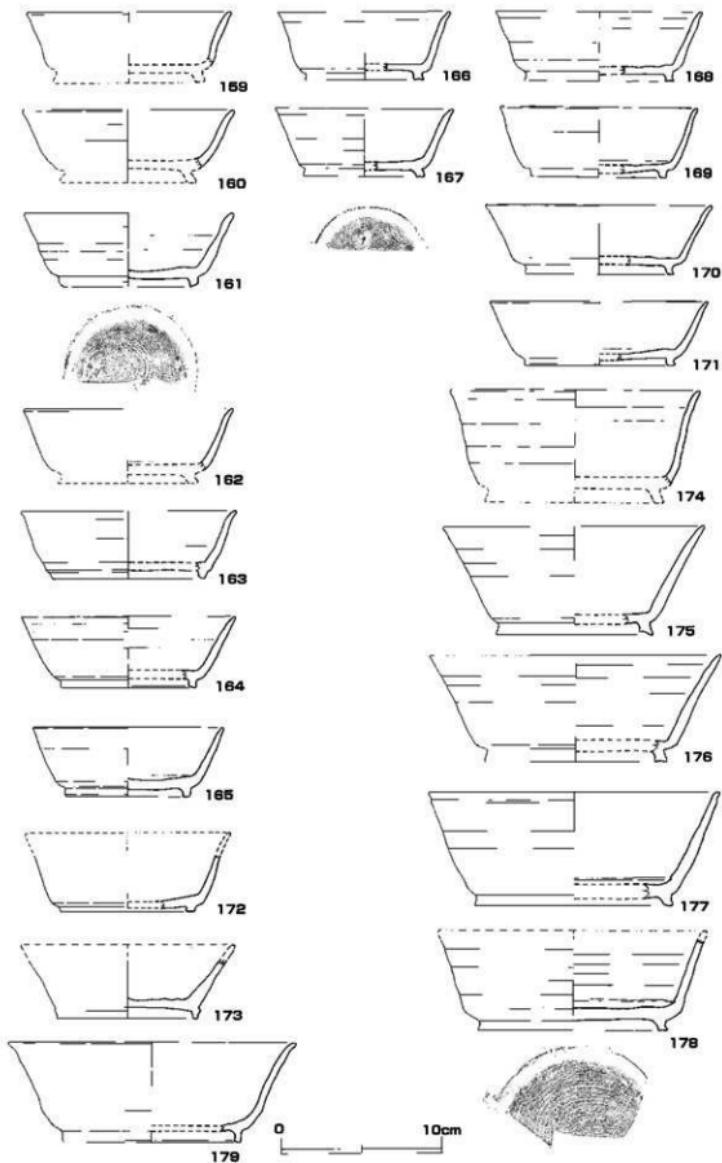
第64図 C地区SI01覆土出土土器実測図(4)



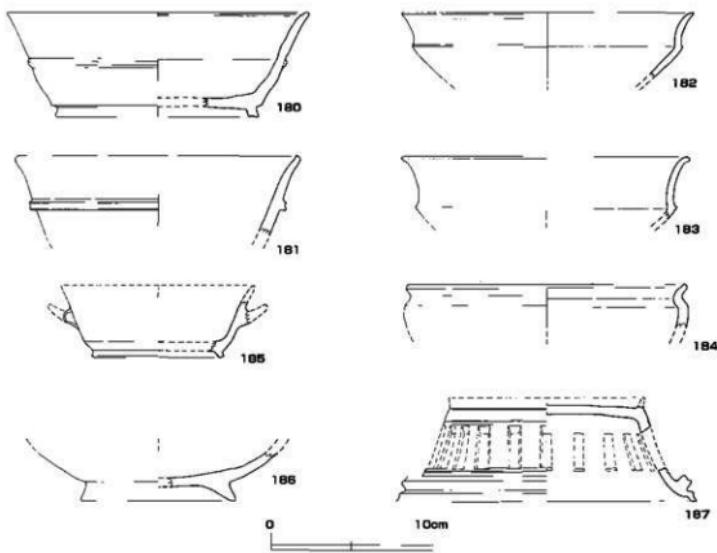
第65図 C地区SI01覆土出土土器実測図（5）



第66図 C地区SI01覆土出土土器実測図（6）



第67図 C地区SII-01覆土出土土器実測図(7)



第68図 C地区SI01層出土土器実測図(8)

D型式 (第65図125~127、138)

口縁端部の内面に段がつき、稜線が入る。125の底部は回転糸切り後未調整。127の高台はやや長い。138は大型品で、口縁端部はほぼ垂直に屈曲し、内面に段がつく。高台は太くて短い。国庁IV形式に属し、8世紀後半のものと推定される。

E型式 (第64図116~118)

底部は回転糸切りによる切り離しがみられ、長めの高台が内よりにつく。皿部は底部から外方向に大きくひらく。

その他 (第64図115、119、第65図124)

115は小型品で逆ハの字状にひらく。高台は短い。119は皿部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部で屈曲する。124は大型品で口縁部はやや外方向に立ち上がる。口縁部と底部の境界が明瞭である。高台底部には回転ケズリ痕がみられ、沈線状の凹線も確認できる。

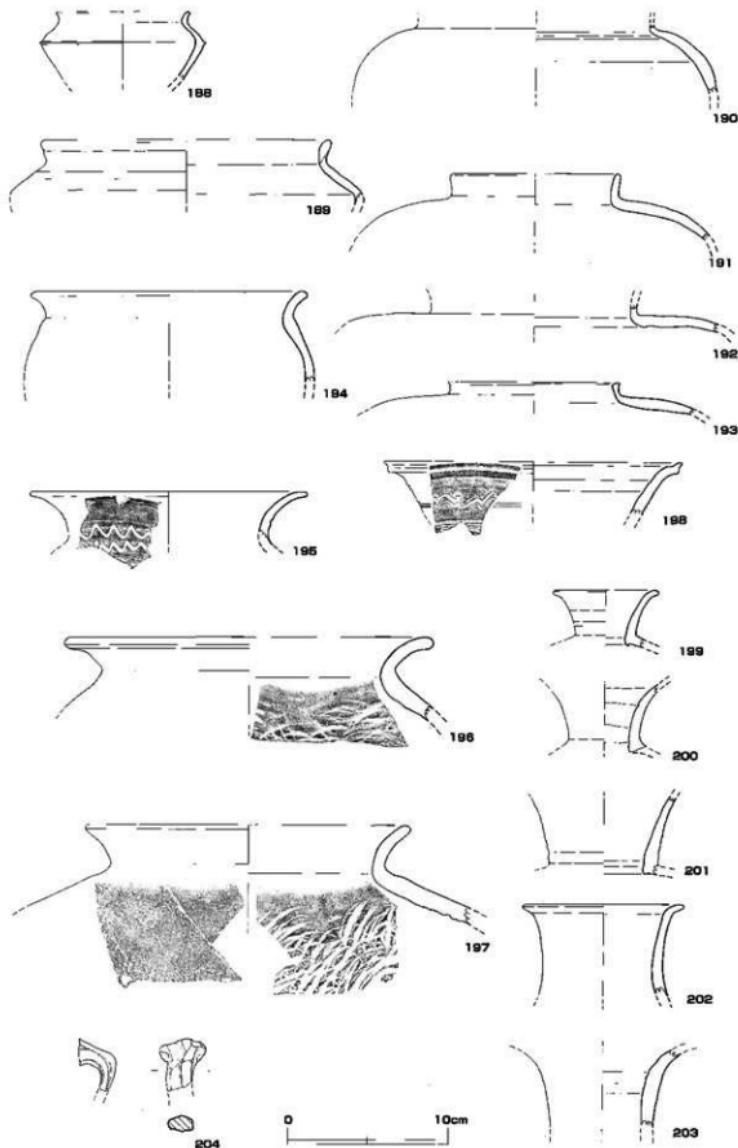
环 (第65図128~137、第66図138~158)

A型式 (第65図128~133、136)

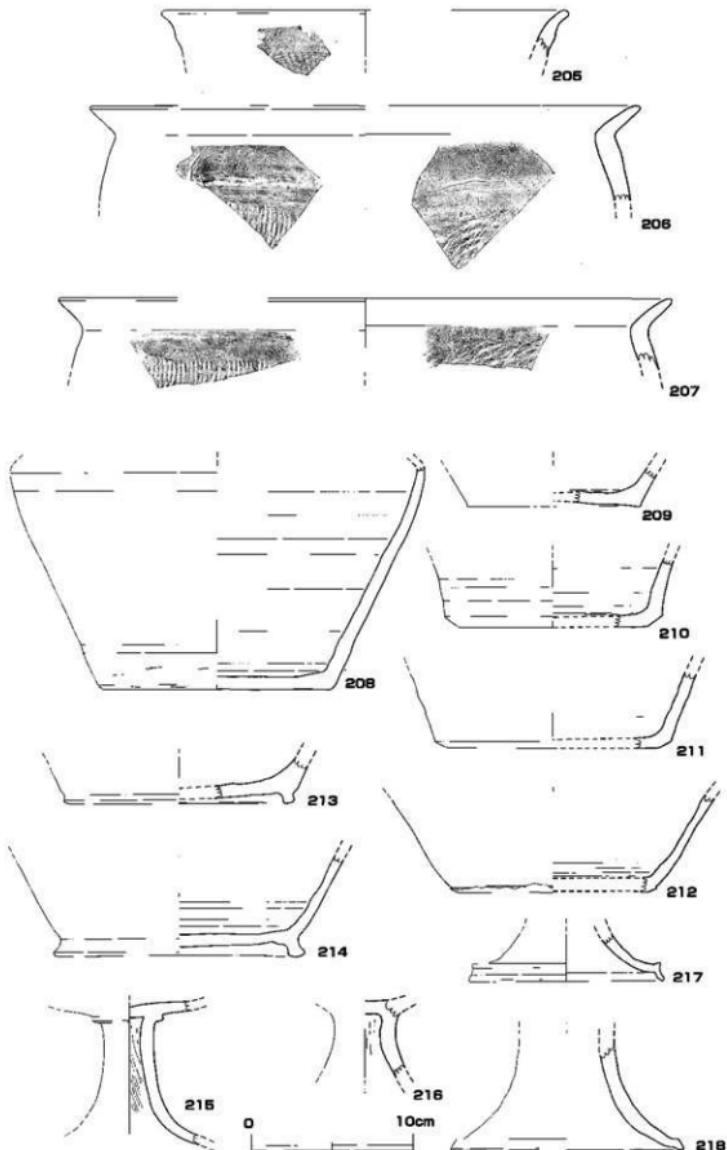
器形は底部から逆ハの字状に直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りによる切り離しの後未調整。128はやや小型品で硬質。129は淡褐色。130~133、136は灰白色を呈し、焼成はやや不良。国庁V形式以降か。

B型式 (第65図139~142)

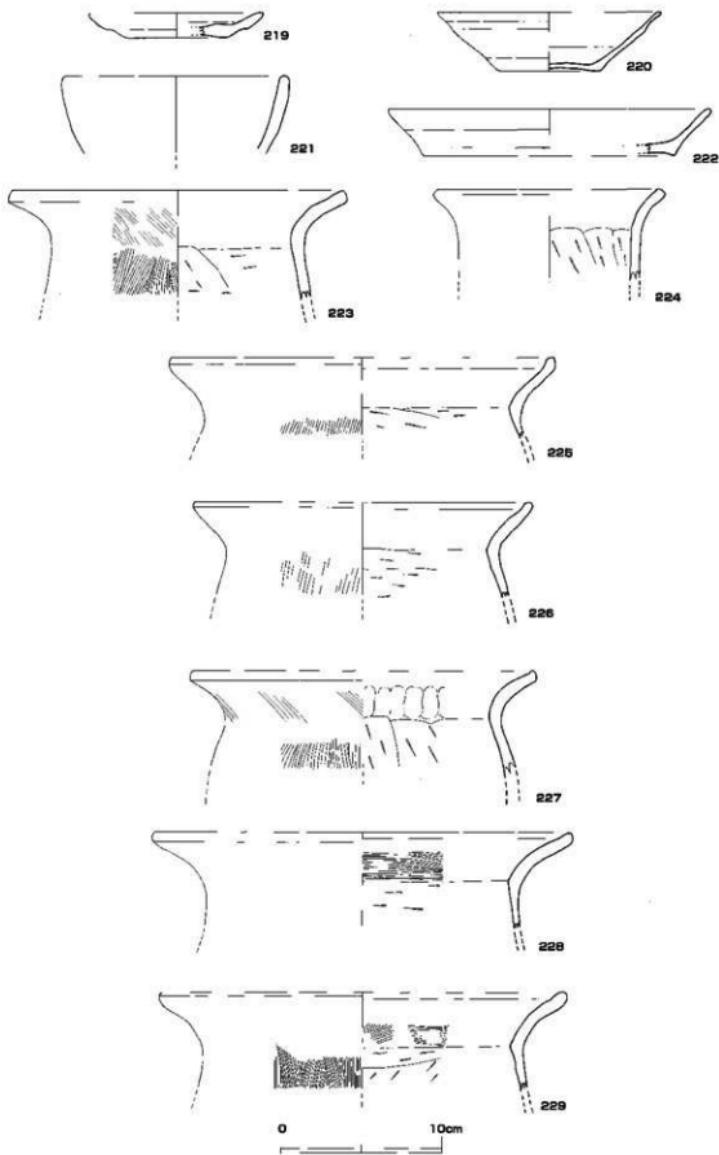
小型品で、底部から外傾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。139の底部外面には手持



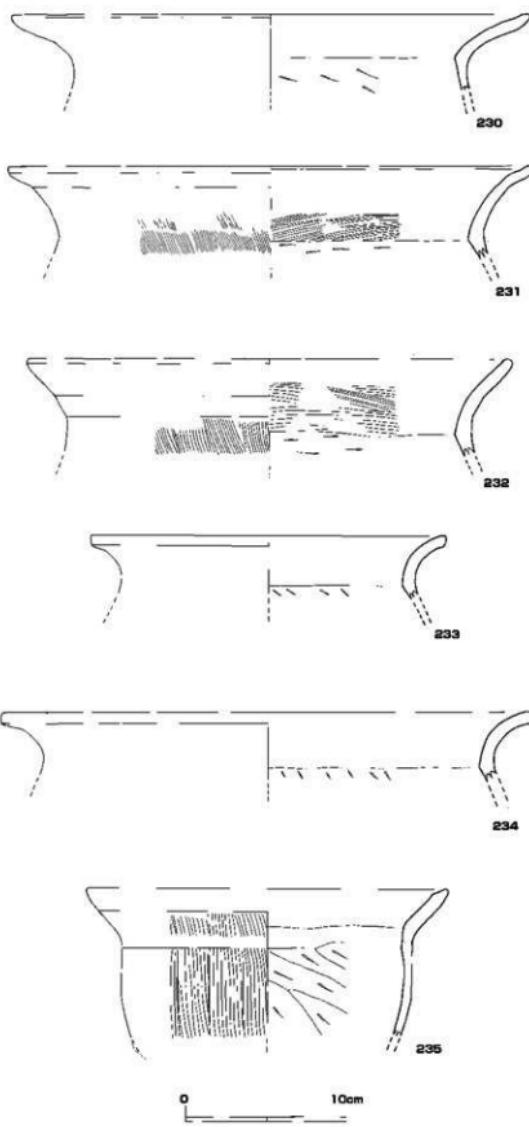
第69図 C地区SI01覆土出土土器実測図 (9)



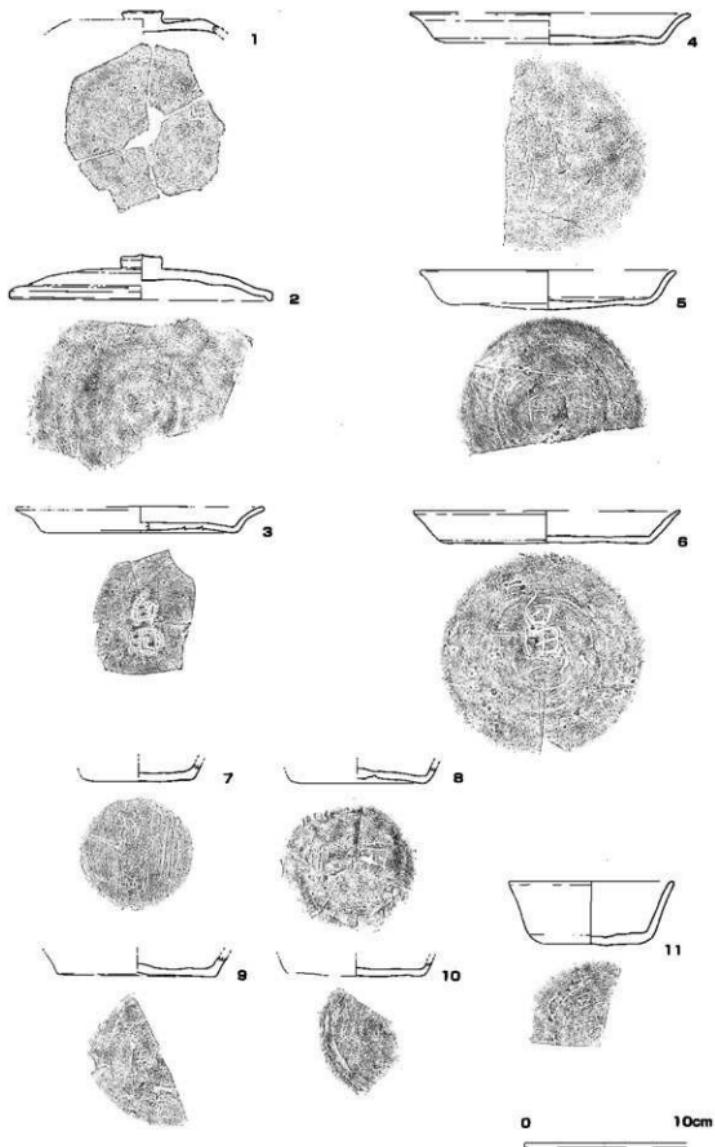
第70図 C地区SI01覆土出土土器実測図 (10)



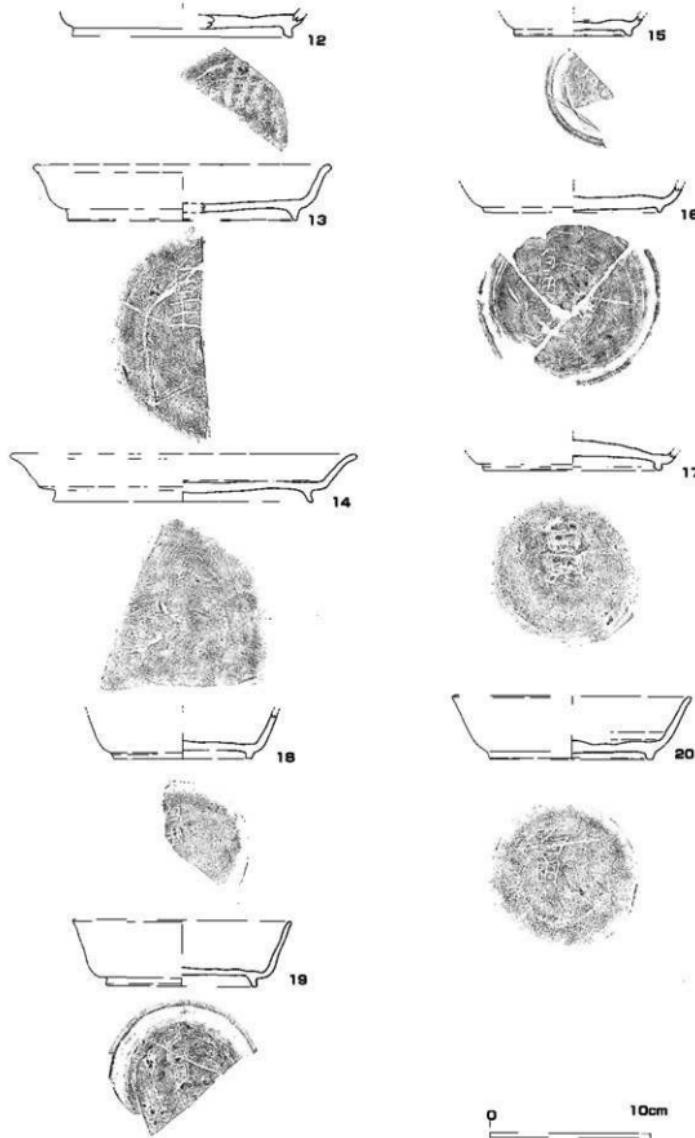
第71図 C地区SI01覆土出土土器実測図 (11)



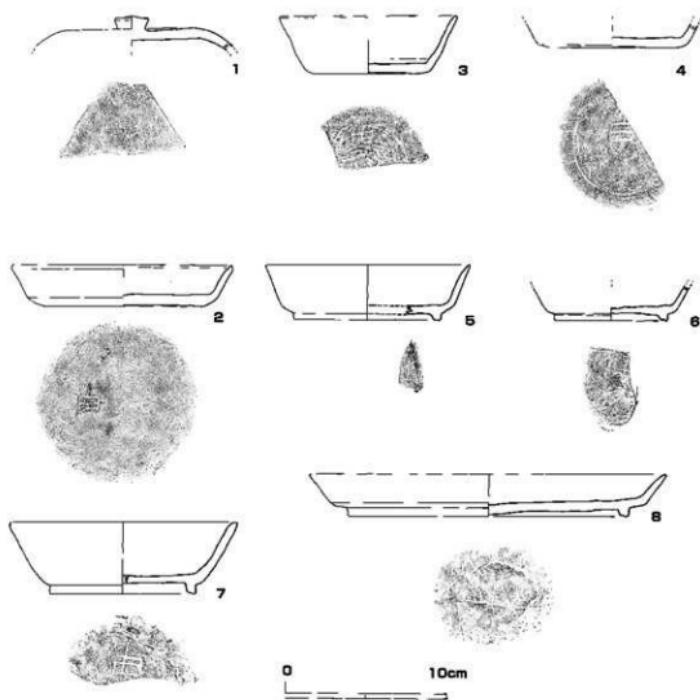
第72図 C地区SI01覆土出土土器実測図 (12)



第73図 C地区SI01覆土出土ヘラ書き土器「白田」実測図(1)



第74図 C地区SI01覆土出土ヘラ書き土器「白田」実測図(2)



第75図 C地区SI01櫛土出土ヘラ書き土器「由」実測図

ちへラケズリの痕跡が残る。141、142の底部は回転糸切りによる切り離しの後未調整。

C型式（第65図137、第66図143～147）

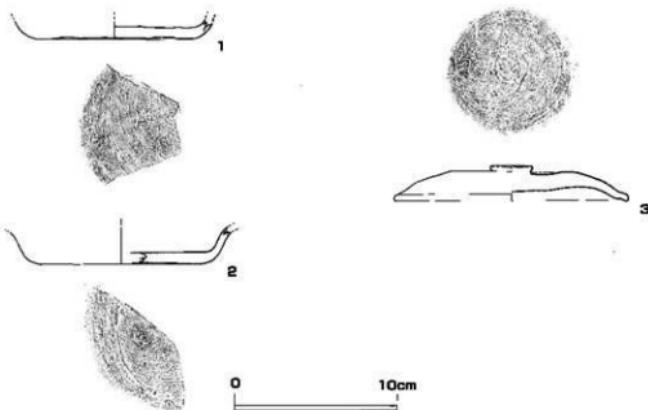
底部から外傾気味に立ち上がる。137、144、147の底部はヘラ切りによる切り離し。145、146はやや小型品。145、147の口縁端部はやや外方向につまみだす。

D型式（第66図148～151）

底部から逆八の字状に大きくひらく。口径と底径の差がある。底部は回転糸切りによる切り離しの後未調整。器壁が薄く、土師質で軟質。148はやや内湾気味に立ち上がり、149の内面には沈線をらせん状に巡らす。148、149は淡褐色を呈す。150、151の体部外面は起伏が顕著にみられる。意図的に凹凸をつくりだしている可能性がある。国府V形式以降の時期で、9世紀末のものと思われる。

E型式（第66図152～158）

底部から内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りの後未調整。国府IV形式に属する。152、153は口縁端部が肥厚する。154～158は口縁端部がややくびれて、内面に稜をもつ。



第76図 C地区SI01覆土出土ヘラ書き土器「白」実測図

高台坏（第67図159～178、第68図180、181）

A型式（第67図159～165）

底部からやや外傾して立ち上がる。高台はほぼ直立して外側につく。底部は回転糸切りの後、未調整。口縁端部は若干鋭い。

A-1（159～161）口縁端部がやや丸味を帯びる。

A-2（162～165）口縁部は先細りになり、鋭い。

A-3（166、167）A-2の小型品。器形、調整は同じだが、短いハの字状の高台が付く。

B型式（第67図168～171）

底部から外傾して立ち上がる。高台はやや外よりにハの字状に短くつく。底部はヘラ切りによる切り離しの後、ナデ調整を行う。

C型式（第67図174～179）

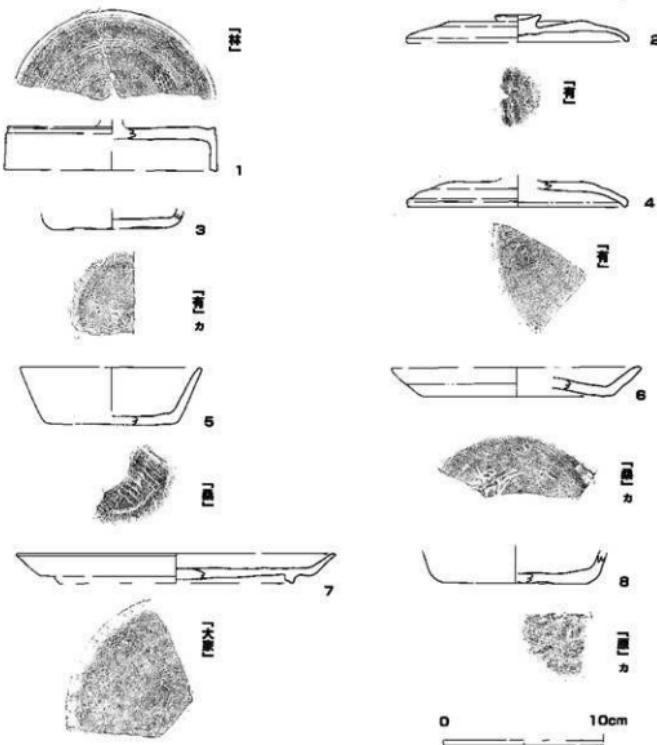
大型品。器高が高く、坏部が深い。底部から逆ハの字状に大きく広がる。175～178は太い高台がハの字状にやや外よりにつく。177の口縁端部はやや屈曲する。178の底部には回転糸切りによる切り離しがみられる。内面は使用による摩耗が著しい。国庁V形式以降のものか。

D型式（第68図180、181）

底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁端部の内面にわずかだが段がつく。体部外面中央に突帶を巡らす。金属容器の模倣と考えられる。短い高台がハの字状につく。

鉢・把手付き坏・硯・不明器種（第68図182～187）

182、183は口縁部がくの字状に大きく外反する。器種不明。184は鉢。口縁部が短く屈曲する。185は把手付き坏。低いハの字状の高台がやや外側に付く。国庁V形式に属する。186は高台坏を転用した硯と考えられる。静止糸切りによるもので、未調整。底部内外面が使用されており、摩滅が著しい。底部外面には赤色顔料が付着する。187は円面硯。切り離しは回転糸切りによる

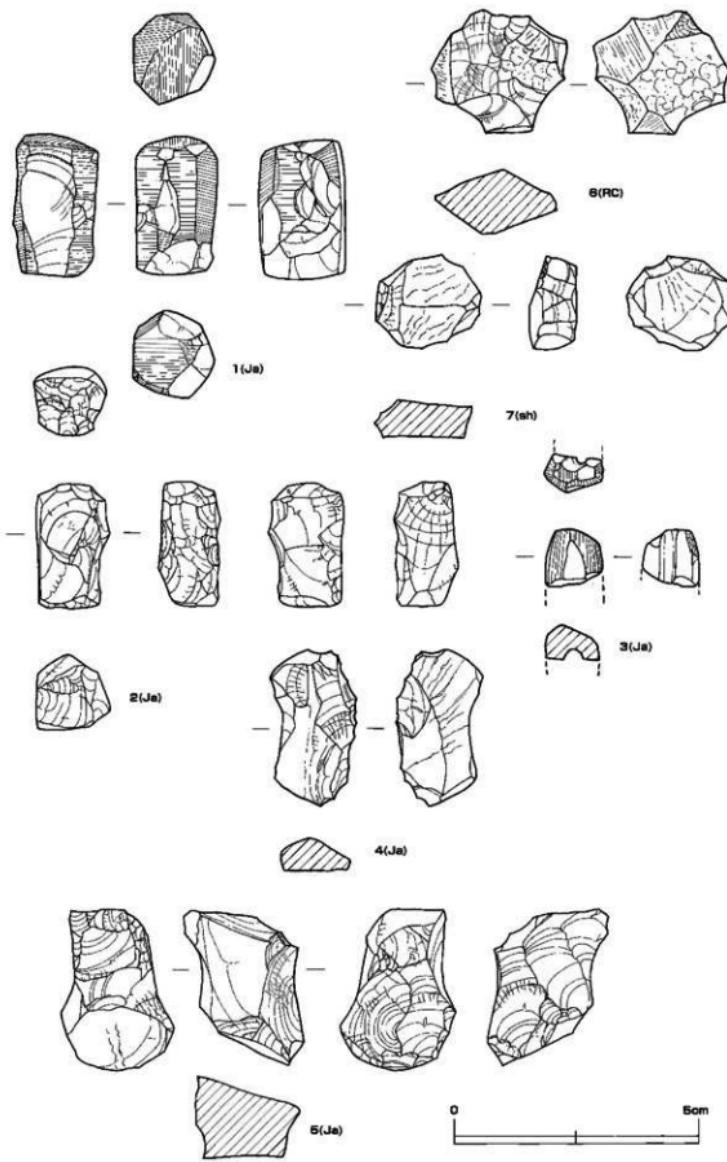


第77図 C地区SI01覆土出土ヘラ書き土器実測図

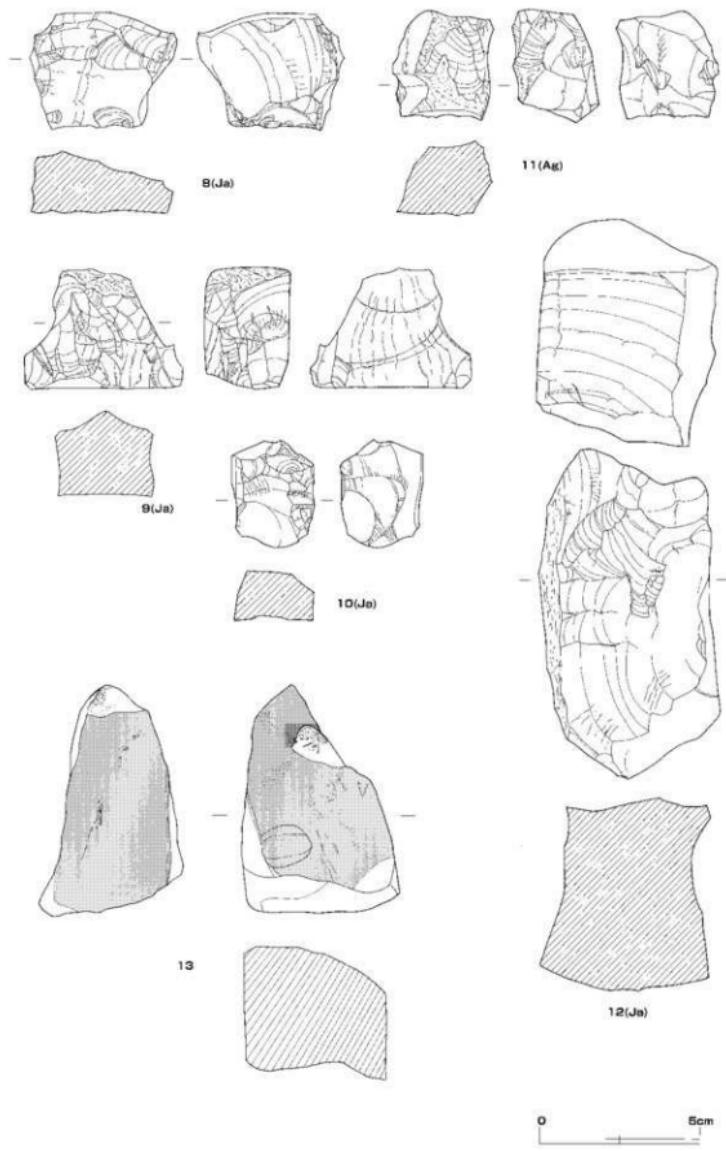
もので、回転ナデを施す。外縁部は破損している。陸部の中央部に使用痕がわずかにみられる。器形は八の字状を呈すが、脚部の端部はやや屈曲する。上方と下方の側面にそれぞれ2条がペアになった細い沈線を巡らす。また台脚部には方形の透かしを入れ、側面下方には1条の突帯を巡らす。焼成は良好で美しい青灰色を呈す。

壺・甕・罐・平瓶・瓶（第69図、第70図）

188は小壺。口縁部が短く屈曲し、体部はくの字状に張り、頂部には鋭い突線が巡る。189～194は短頸壺。189～193は口縁部が短く立ち上る蓋壺形土器。192、193の肩部はやや張る。193は口縁端部が平坦である。194の口縁部はくの字状に屈曲し、体部はやや丸身を帯びる。195の口縁部はやや長くのび、外反し、外面にはヘラによる2条の波状文が施される。198～203は壺の頸部。200の内面には粘土の継ぎ目痕が残る。198は半截竹管による2本の波状文と沈線が口縁部外面に施される。199は平瓶の口頸部と思われる。204は平瓶の把手。全面にナデ調整がみられる。196、197、206、207は甕。口縁部がくの字状に屈曲する。いずれも体部内面には同心円タタキが、体部外面には平行タタキが残る。205は甕。口縁部は逆ハの字状にひらき、外面には



第78図 C地区SI01覆土出土玉未成品実測図



第79図 C地区SI01覆土出土玉未成品、砥石実測図

平行タタキが残る。208～214は壺。213、214は高台がつく。208、214の外面には回転ヘラケズリの後、回転ナデ仕上げを施す。215～218は高壺の脚部。215は壺部と脚部の境に突帯をつけ、壺部内面は使用痕が残る。215、216ともに内面にしばり痕がみられる。217、218は脚部がスカート状にひらき、先端部が屈曲する。

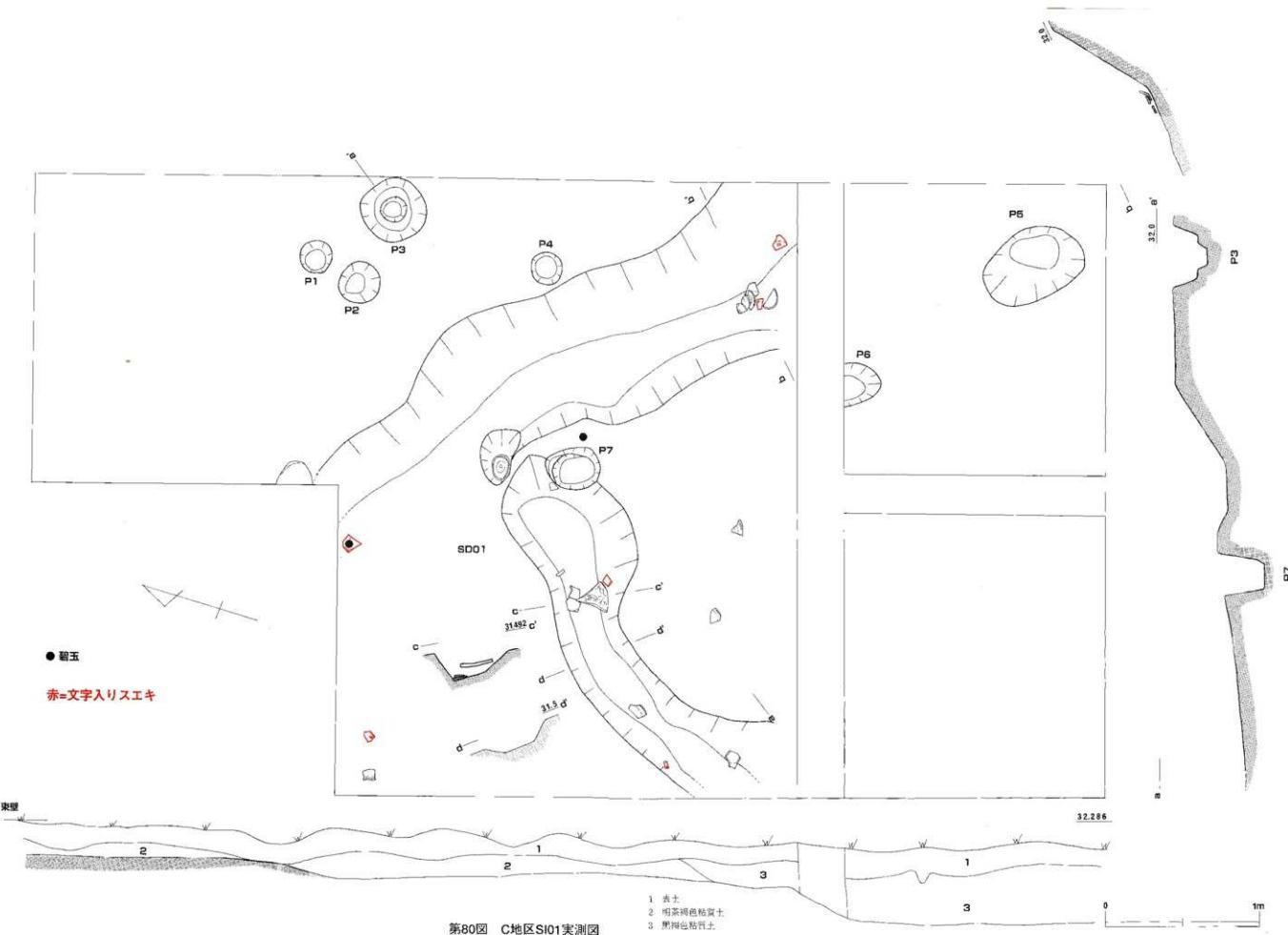
土師器（第71図、第72図）

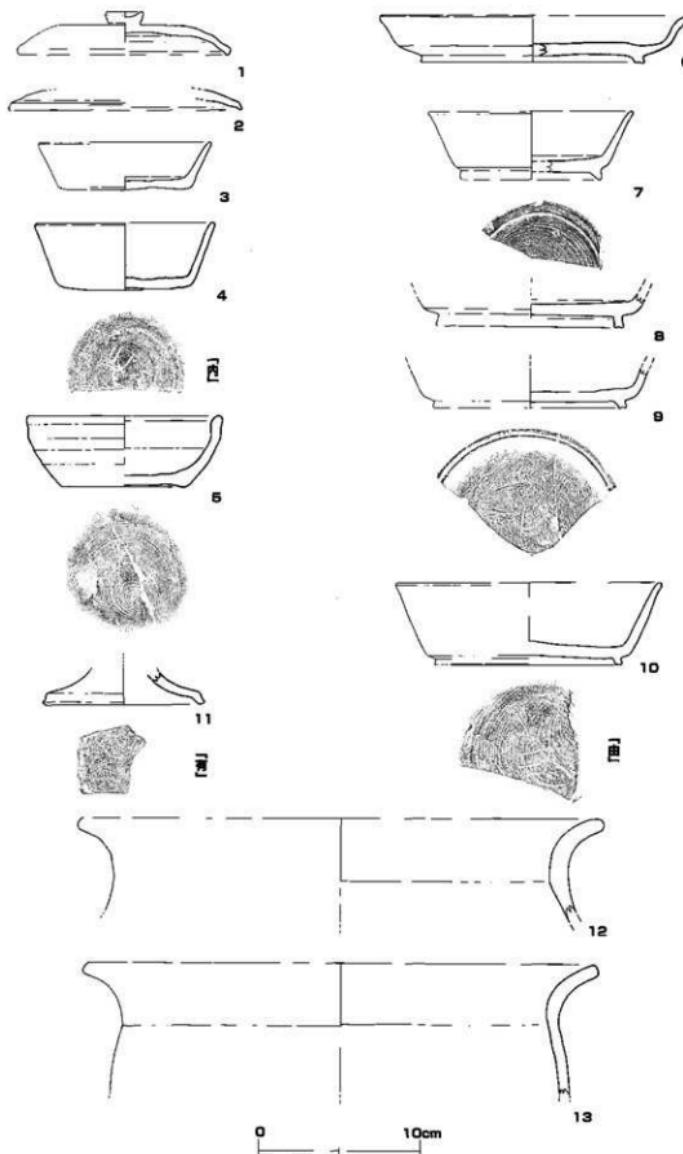
219は小皿。220は壺。底部から外方向に直線的にひらく。いずれも風化が著しく調整不明。221は楕形を呈す製塙土器。二次焼成をうけており、表面の凹凸が著しい。外面には白色物質が付着する。222は丹塗土器。内外面ともに赤色塗彩を施す。低い高台をもち、底部から短く逆ハの字状に立ち上がる。223～235は甌。ぐの字状の口縁が外反しながらひらき、胴部はさほど張らないものが多いと思われる。口縁内面には刷毛目調整の後ヨコナデ、外面にはヨコナデ調整で、頸部から下は外面には刷毛目調整、内面にはヘラケズリを施すものが多い。そのうち223、224、227、233、234は口縁端部を平坦に仕上げる。235は鍋。口縁部は逆ハの字状にひらき、胴部は張らない。外面に煤が付着する。その他、小片のため図示できなかったが、多量の製塙土器が出土し、二次焼成を受けたもののが多かった。

ヘラ書き土器（第73図～77図）

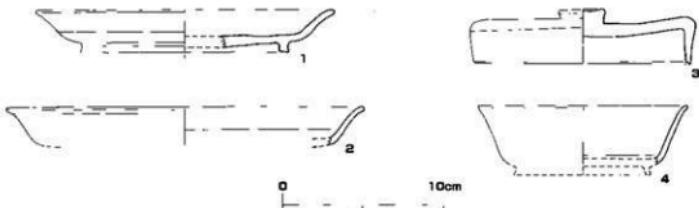
SI01の覆土中からは多数のヘラ書き土器が出土した。内訳は出土総数62点のうち、「白田」21点、「由」16点、「白」6点、「有」5点、「人家」3点、「内」、「邊」（？）、「桑」が2点、「白田原」、「門」、「大宮元寺」、「由田」が1点だった。この文字が記された目的や表記の意味は判然としないが、少なくとも由、有は湯につながり、地元玉湯町の地名を表したものと考えられる。文字にはそれぞれくせがあり、連筆なものもあれば、子供が殴り書きをしたようなものもある。また、ヘラ状工具の使い方、あるいは筆圧しだいで、太い文字や細い文字が観察される。このことから文字を記すのに複数の人が関わったことがわかる。器種はいずれも蛇喰遺跡で多くみられる蓋、皿、壺類である。切り離しはヘラ切りの後、ナデ調整を施すものが多い。特に文字を記す部分には意識的に強くナデしていると思われ、砂粒の動きがはっきりと認められ、ナデによる平坦面をつくりだすものもみられる（第77図6、7）。また、回転糸切りによる切り離しの後、文字が記されている付近だけをナデしているものもある（第76図）。とくに「白」の文字のある須恵器はいずれも焼成が不良で、軟質で白灰色である。また、文字のタイプも同じで書き慣れた字であることから、同一人物が「白」の文字を記し、同じ窯で焼いた可能性が考えられる。「白田」の記載がある皿（第73図3～5、第74図14）は、口縁部がシャープに外反し、底部の切り離しはヘラ切りによる。「由」の文字がみられる壺や皿（第75図3、5、7、8）は底部から逆ハの字状に立ち上がるタイプが多いが、口縁部内面に段をもつ皿（第75図2）は湯峰窯跡採集の須恵器に顕著にみられる特徴をもち、底部には回転糸切り痕が残る。国庁IV形式に属し、8世紀後半のものと推定される。

文字が記されている部位は、蓋は大井部内面に、壺、皿には底部外面の人日につかないところに記されているが、金属容器を模倣したと思われる蓋だけは、「林」の文字が天井部外面に記されている（第77図1）。文字の記されている位置は、壺や皿にはほとんどが中央よりにみられ





第81図 C地区SI01床面出土土器実測図



第82図 C地区SI01内P5出土土器実測図

るが、蓋は口縁部外縁近くに記すものが多い（第73図1、2、第77図2、4）。文字はいずれも焼成前に記されている。

玉未成品・砥石（第78図、第79図）

覆上内からは須恵器以外に多量の玉関係の遺物、鉄製品が7点、スラグが14点、桃の種子を含む炭化物が出上した。そのうち最も多く出上した玉材は碧玉である。研磨調整のあるものが1点、穿孔のあるものが1点、四角柱状未成品1点、原石4点、石核3点、剥片素材が3点、剥離調整が認められる剥片素材が6点、チップが241点出土した。本品は原石1点、剥離調整が認められる剥片素材が3点、加工痕の残る剥片が2点、チップが86点、めのうはチップが7点、頁岩製平玉未成品が1点、砥石片が1点出土した。第78図1～5は碧玉製。1～3は管玉未成品。1はかなり剥離しているが、全面に研磨を施す。2は四角柱状未成品。3は残存部はわずかだが、穿孔、研磨が残る。4は剥離調整が認められる剥片だが、勾玉を意識したものか。5は石核、断面は直方体を呈す。6は水晶製剥片素材。剥離調整が認められる。断面はひし形を呈す。7は頁岩製平玉未成品。両面は素材面を活かし、側面に剥離調整を入れる。第79図8～12は石核。8～10、12は碧玉、11はめのう製。大小様々だが、いずれも断面はほぼ直方体を呈す。13は砥石。原形は不明だが、3面を砥面として使用。平面の角に浅い溝状の凹みが残る。

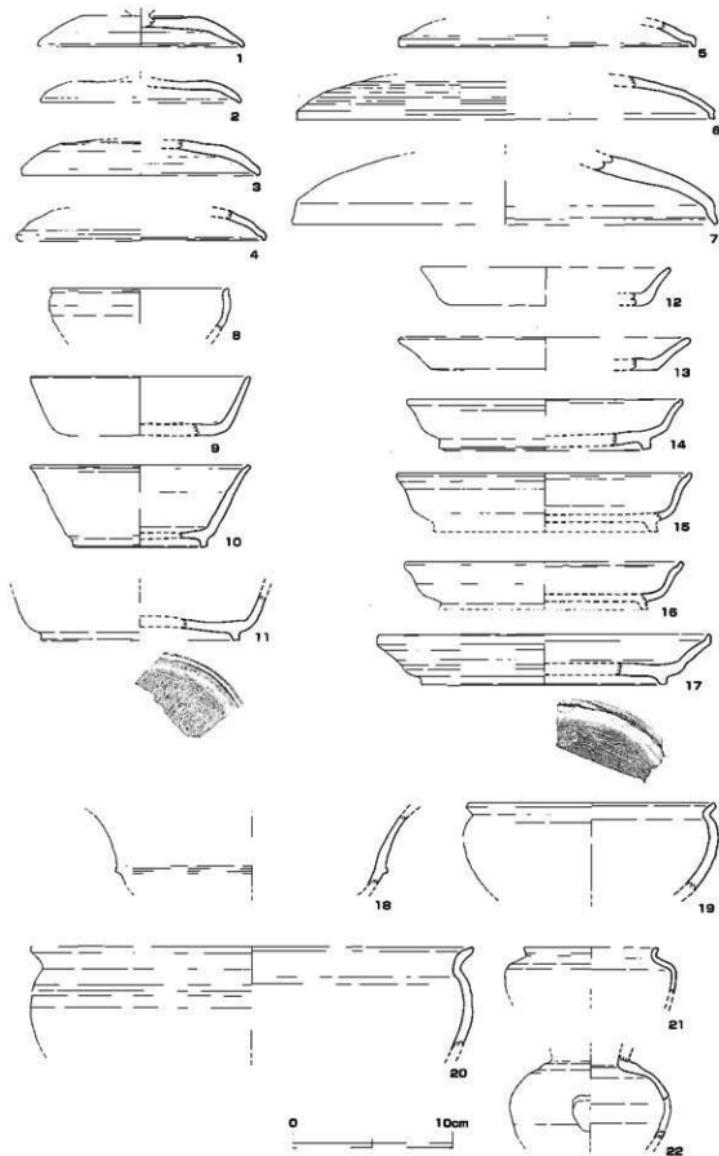
鉄製品（第126図7～13）

第126図7～13は鉄製品。7～10はいずれも断面が扁平。7の断面は三角形を呈し、小刀状のものと思われる。8はやや幅広でタガネ状工具か。10は先端部が鋭利になる。11～13は釘状のもので、断面はやや立方体に近い方形をもつ。

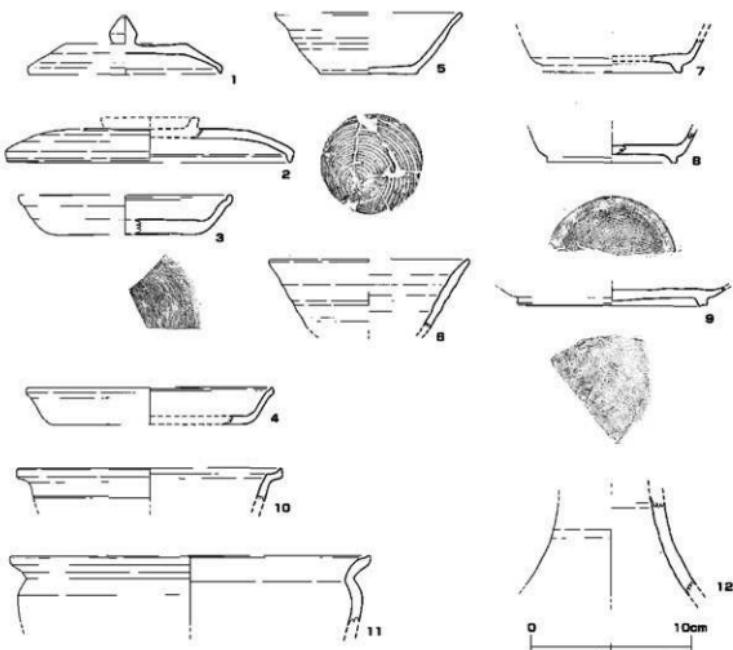
SI01付近層出土遺物(第84図、第85図1、2)

第84図1、2は蓋。いずれも口縁端部が垂直に屈曲し、断面は三角形をつくる。天井部にはヘラケズリの後、回転ナデを調整する。1は細長い擬宝珠状つまみがつき、2には輪状のつまみがつくと思われる。3、4は皿で、口縁端部内面に稜がつくもの。3の底部には回転糸切り痕が残る。皿は国字IV形式で8世紀後半のものか。5は底部から外方向に大きくひらく坏。底部は回転糸切りによる切り離し。橙褐色を呈す土師質の須恵器。国字IV形式で9世紀後半のものと思われる。6～8は高台坏。いずれも回転糸切り痕が残る。10は口縁端部が屈曲し、内面に稜がつく。外面には細い弦線が残る。器種は不明。11は口縁部がくの字状に外反する鉢か。12は高坏の脚部。

第85図1は碧玉製管玉未成品。一端が欠失しているが、四角柱状未成品である。2は頁岩製平



第83図 C地区SI01内溝・P7出土土器実測図

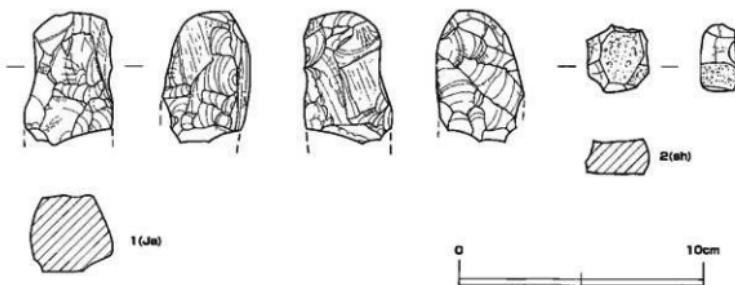


第84図 C地区SI01付近1層出土土器実測図

玉未成品。ほとんど素材面を残し、縁辺部と側面にわずかに剥離調整が認められる。

SI01付近2層出土遺物（第86図～88図）

1～41は須恵器、42～47は土師器。1～13は蓋。1は口縁部がやや平坦にのび、端部が嘴状に屈曲するものの。2～10は短く屈曲し、端部に稜がつくタイプ。10の端部はやや丸味を帯びる。11～13は扁平なつまみがつく。12、13はヘラ切りによる切り離しの後、回転ナデ調整を施す。13の内面には「白出」のヘラ書き文字が残る。14～21は壺。14～16は底部から逆八の字状に立ち上がる。14の底部にはヘラ切り痕、15、16の底部には回転糸切り痕が残る。国府V形式以降のものと思われるが、14の時期はやや下る。17～21はLJ縁端部がくびれるタイプ。19、20は端部内面に稜をもつ。国府IV形式で8世紀後半のものだが、17はやや新しい。87図22、23は皿。24～28は高台皿。底部外面には回転糸切りによる切り離しの後、ナデ調整を施す。24～26はLJ縁端部が短く屈曲し、内面に稜をもつ。26の底部外面には「山」が記され、湯鉢窯のものと類似している。国府IV形式か。26、28の底部内面は使用のための摩滅が著しい。29～36は高台壺。いずれも底部は回転糸切りによる切り離しがみられる。29は「白出」、32には「山」の文字が記されている。29には底部全面に、32は文字を記されている付近のみにナデ調整を行う。88図37～39は短頸壺。37、38の肩部には稜がつく。40は甕。口縁部は外反する。くびれ部から肩部外面に



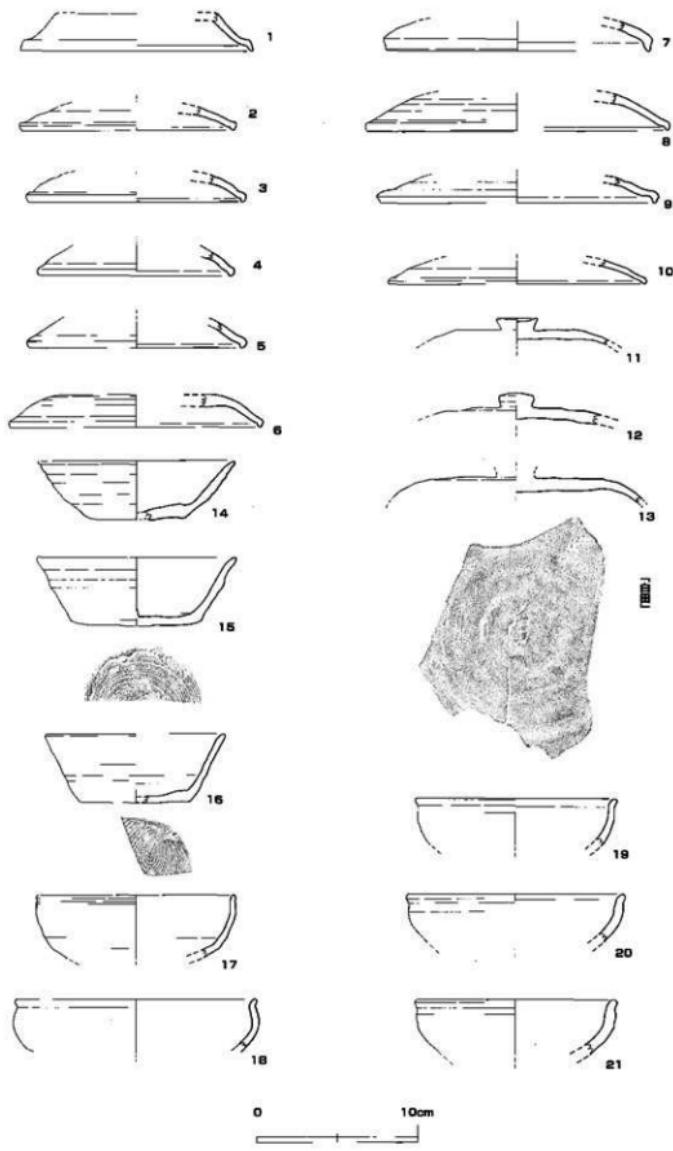
第85図 C地区SI01付近1層出土玉未成品実測図

は平行タタキ、内面には同心円タタキが残る。41は小壺。底部から外傾して立ち上がり、短い口縁部がほぼ直立してつく。肩部は鋭角に張り、肩部上面にはほぼ正方形の透かしが4個所に入り、上下には浅い沈線が1条ずつめぐる。底部は回転糸切りにより切り離され、短いハの字状の高台がつく。ほぼ完形品。水滴として使われたものか。42は皿。赤褐色を呈す土師質の須恵器。43~47は土師器。43は丹塗土師の皿。底部はヘラ磨き調整によるものと思われ、丸身を帯びる。内外面に丹が付着する。44は器壁が厚い砲弾形をした製塙土器。表面の凹凸が著しい。45~47は口縁部が外反する甕。体部内面にはケズリ痕が残る。

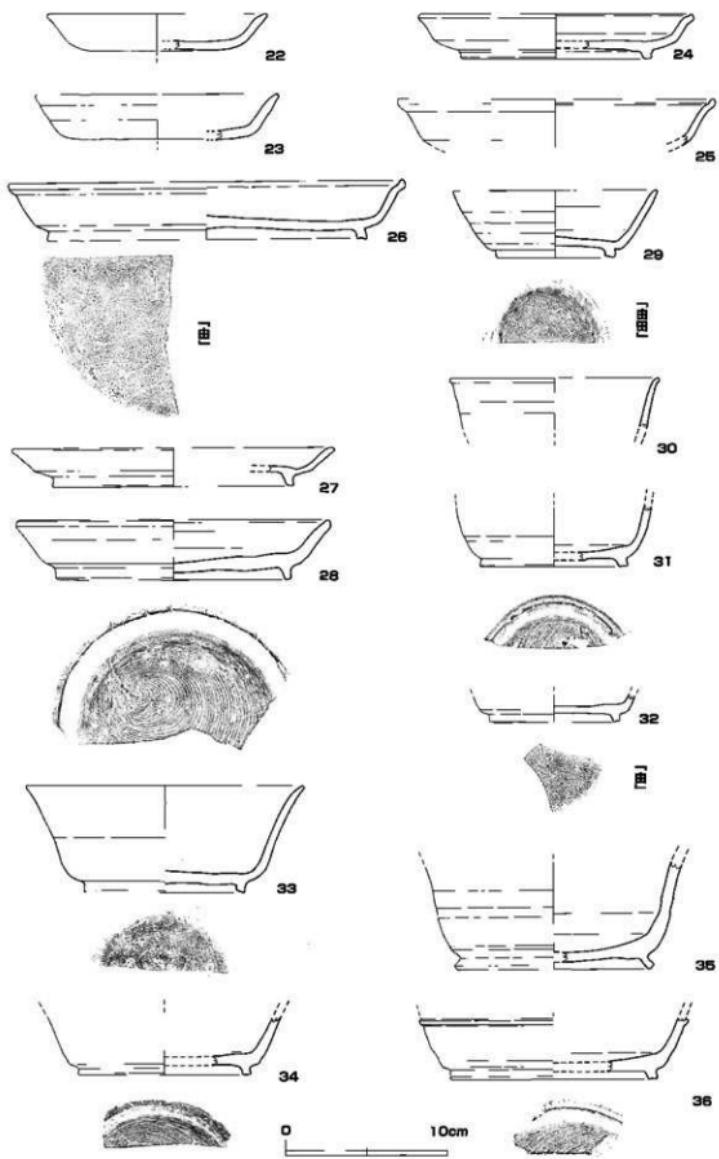
B・C地区の遺構に伴わない遺物（第89図～第91図、第124図13～15）

第89図1~6はB地区出土の須恵器。1、2は皿。1の口縁端部は外反する。2は端部内面に稜がつく。3は口縁端部が短く屈曲する壺。4は高台壺。短い高台が底部のやや外側につく。国庁V形式に属す。5は高台皿。底部は回転糸切りによる切り離し。6は甕。外面は平行タタキ、内面には同心円タタキが残る。7~11はC地区出土。7、13は蓋。8~10は皿。口縁部が緩やかに外反する。11は高壺の壺部と思われる。12は壺。皿、壺ともに底部に回転糸切り痕を残す。国庁V形式のものか。第124図は輸入陶磁器。13は龍泉窯青磁。外面に錦運弁文を施す。淡緑色の釉がかかる。14も龍泉窯青磁。淡いオリーブ色を呈す。

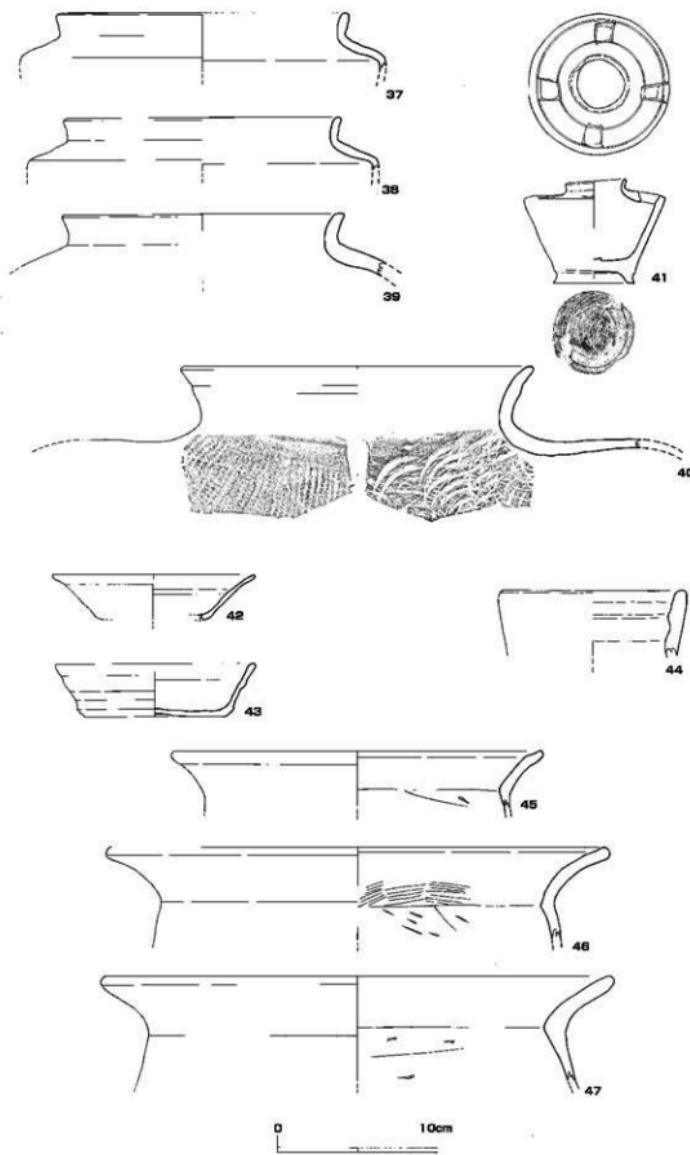
第90図1~10はB地区出土の平玉未成品。1、2は黒色珪質頁岩製の完形品。断面がレンズ状を呈す。3~6は頁岩製。いずれも主要剥離面を大きく残し、側面に剥離調整を入れる、断面はほぼ立方体を呈すが、3、4はやや分厚い。7は碧玉製。完成品だが、わずかに研磨痕が残る。8~10は石英および水晶製。8はほぼ完成品で全面に研磨を施す。断面は梢円形を呈す。9、10は全面に剥離調整を行なう。11~19はC地区出土。そのうち11~18は平玉未成品。11は黒色珪質頁岩製で、やや粗い研磨痕が残るがほぼ完成品。12は頁岩製。両面に素材面を大きく残し、縁辺部と側面に剥離調整を入れる。13、14、17、18は石英製。13、14はやや分厚い断面をもつが、周縁部から剥離調整を行う。17、18は仕上げ研磨を行なう完成品。断面は梢円形を呈す。17は径7.7×7.7mmと小型品。15、16は碧玉製。16は両面に主要剥離面を大きく残し、側面に剥離調整を入れる。断面は立方体を呈す。19は丸玉未完成品。潰れた状態の細かい敲打痕が全面に残る。両面穿孔。第91図は延石。20はB地区、21、22はC地区出土。いずれも欠損品。20は砂岩系。



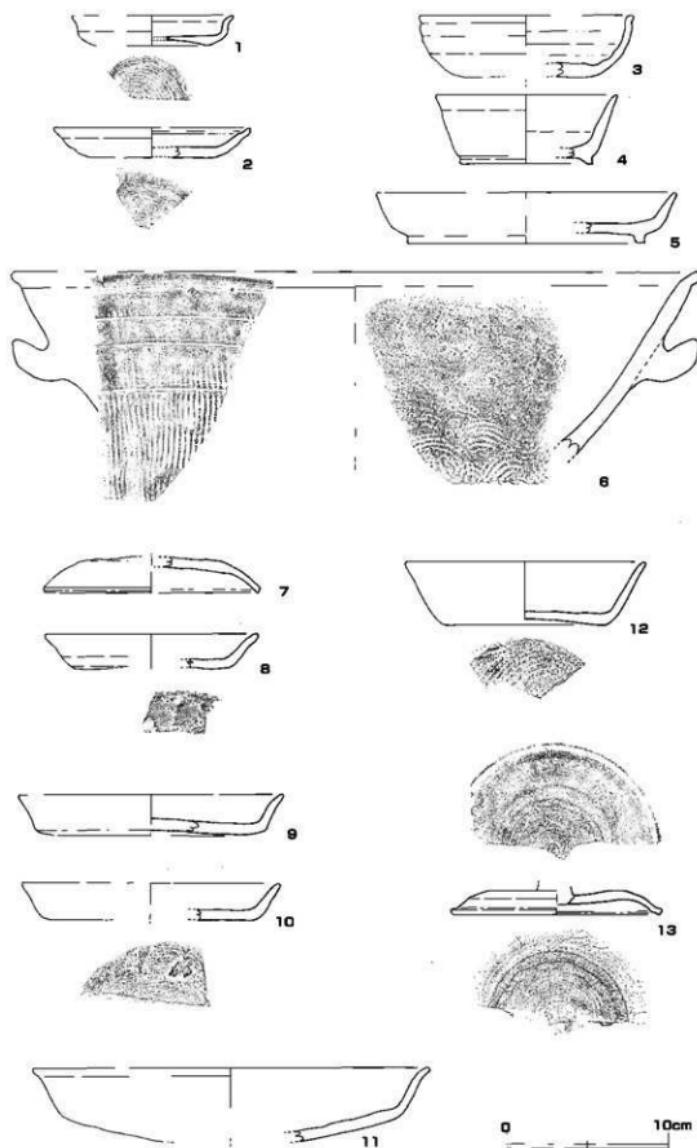
第86図 C地区SI01付近2層出土土器実測図



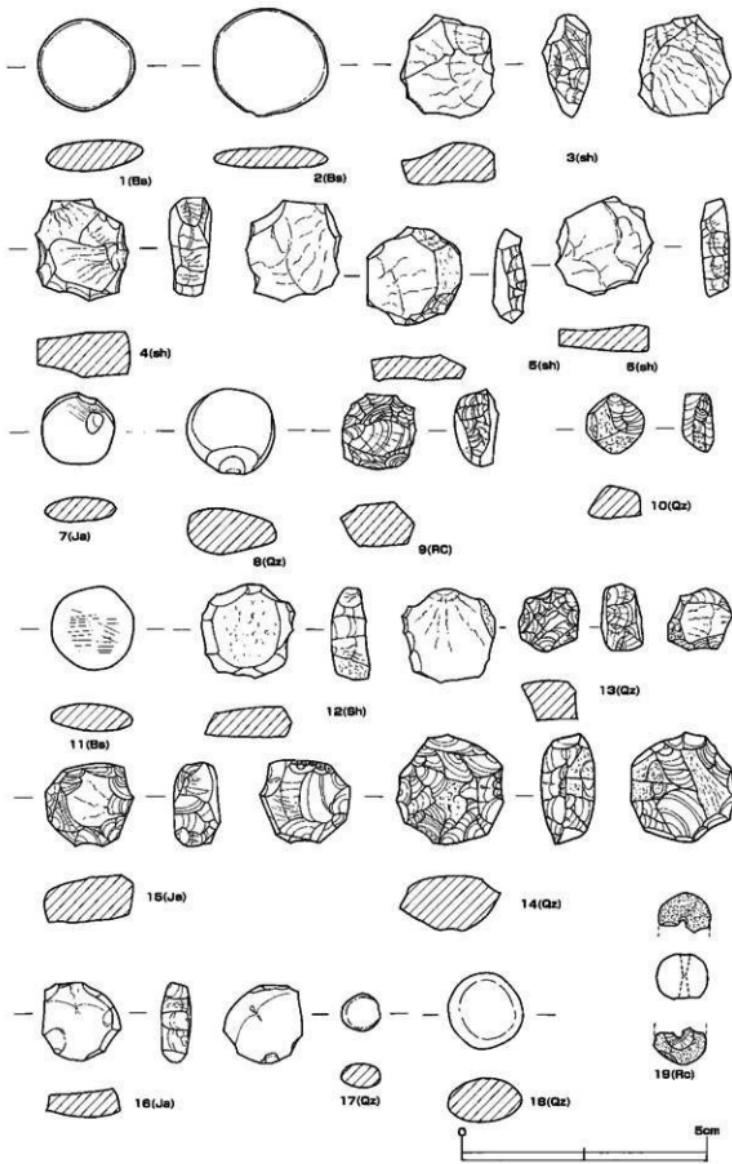
第87図 C地区SI01付近2層出土土器実測図



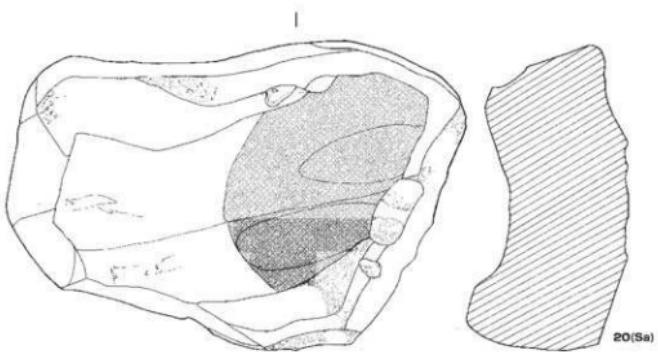
第88図 C地区SI01付近2層出土土器実測図



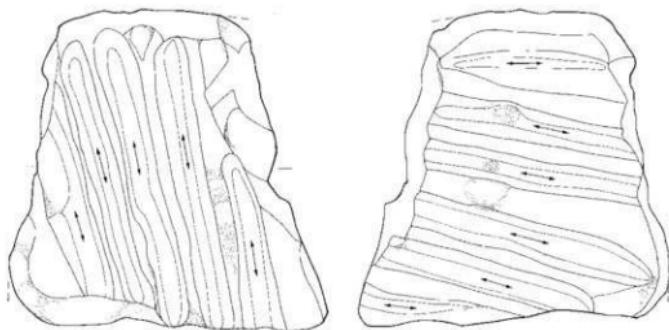
第89図 B・C地区包含層出土土器実測図



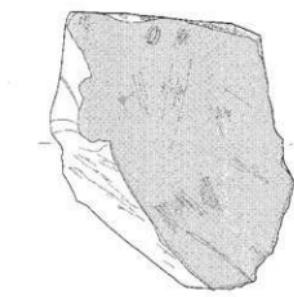
第90図 B・C地区包含層出土玉未成品実測図



20(Sa)



21(Sa)



22

0
10cm

第91図 B・C地区包含層出土砥石実測図

表面は摩滅が著しい。幅広の凹みが残る。21は筋砥石。2面を砥面として、表面は長軸に5条、裏面は短軸に6条の溝が残る。いずれもほぼまっすぐにのび、断面は幅広のU字状を呈す。22は平坦面の2面を砥面として利用する。片面に断面がV字状の溝が残っている。

第3調査区（第92図）

平成7年度に調査を実施した地区。人和紡績保養所跡地で、すでに土地が平坦に造成されている。史跡公園から西側にのびる小道をはさんで、北側に11ヶ所、南側に10ヶ所のトレンチを設定した。北側調査区では変容が著しく、建物跡の瓦礫が多くみられたが、遺構の検出には至らなかった。南側調査区の遊歩道沿いに設定したトレンチでは、ゴミ層を除去した後、表土下1.2m地点でSK01、SD01・02、SX01・02が、調査区の最西端の地山では、SK02やピット群が検出された。

SK01（第93図、第95図11～13、第96図2、3）

SK01は南北方向にのびる楕円形で、長軸1.2m、短軸0.7m、最も深いところで0.23mを測る。黒色粘質土に掘り込まれ、やや丸みを帯びた底面から西壁はほぼ垂直に、東壁はやや傾斜をもって立ち上がる。内部の上層には黒茶褐色粘質土が、下層には茶褐色粘質土がうすく堆積する。出土遺物は玉未成品や須恵器などがある。黒茶褐色粘質土では坏（第95図12）と占式土師の甕（第95図13）が出土した。甕は細長く、外方向に広がる複合口縁をもつ。口縁端部はやや平坦に仕上げる。古墳時代前期のものと推定される。玉関係では、碧玉製の玉未成品（第96図2、3）が出土する。2は石核もしくは素材をはぎ取った後の残核と考えられる。3は角柱状の剥片素材。茶褐色粘質土からは須恵器の甕（第95図11）が出土。口縁部外面には波状文が施される。

SK02（第99図）

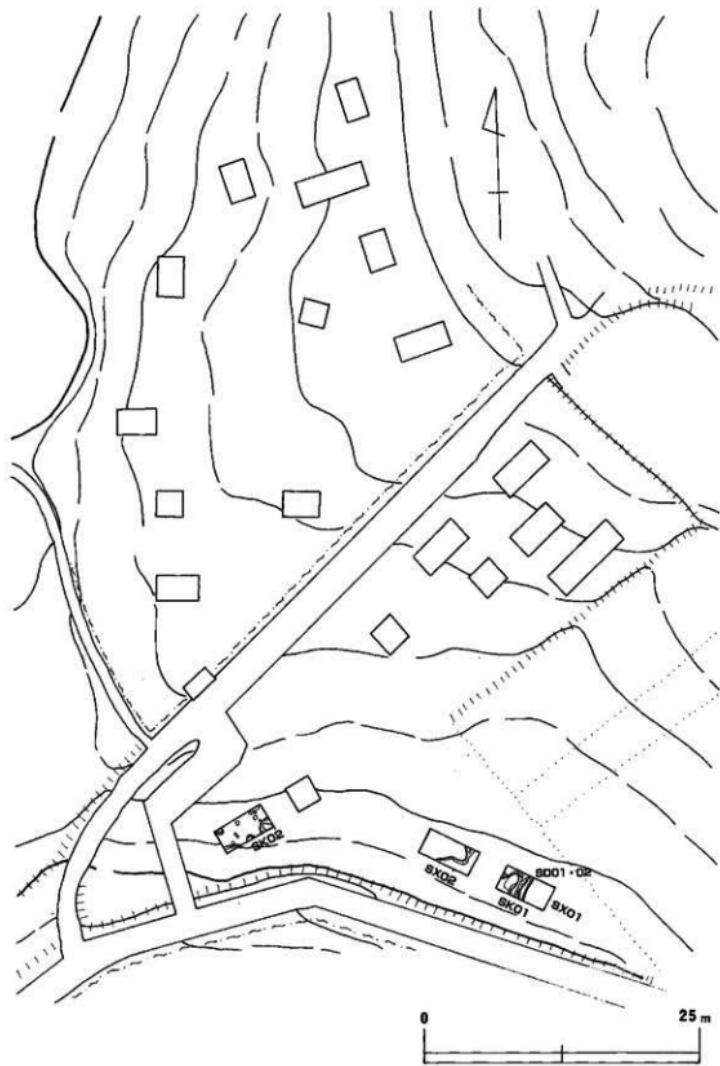
SK02は調査区最西端のトレンチの南東角に一部が検出された。浅い地山に掘り込まれ、底面は凸凹で、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はみられない。

SD01・02（第93図、第95図14、15、第97図7）

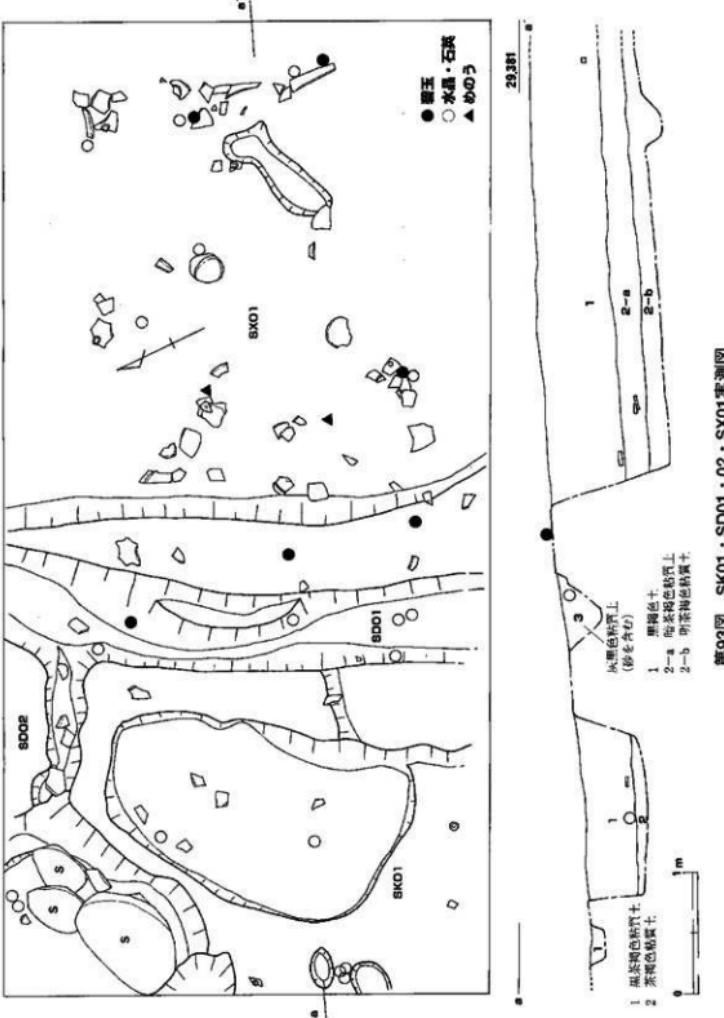
いずれもSK01とSX01にはさまれた形で検出された。SD01は南北方向にほぼまっすぐに走る。幅0.3～0.4m、深さ0.15mを測る。断面はすり鉢状を呈し、砂混じりの灰黒色粘質土が堆積する。溝の東側には幅0.08mほどの細長いテラス状の平坦面をもつ。遺物は平玉未成品や白磁片が出土する。図示できた須恵器は「白」の文字のある坏底部と高台坏（第95図14、15）がある。いずれも底部に回転糸切りの後ナデ調整を施す。8世紀後半のものか。第97図7は碧玉製。角柱状の剥片素材に剥離調整を加える。側面に階段状の深い剥離痕が残る。SD02は幅0.15mほどの浅い溝で、SD01の北端部に切られた形で検出される。遺物は須恵器片が出土。

SX01・02（第93図、第94図、第95図1～10、16～18、第96図1、4～6、第97図、98図）

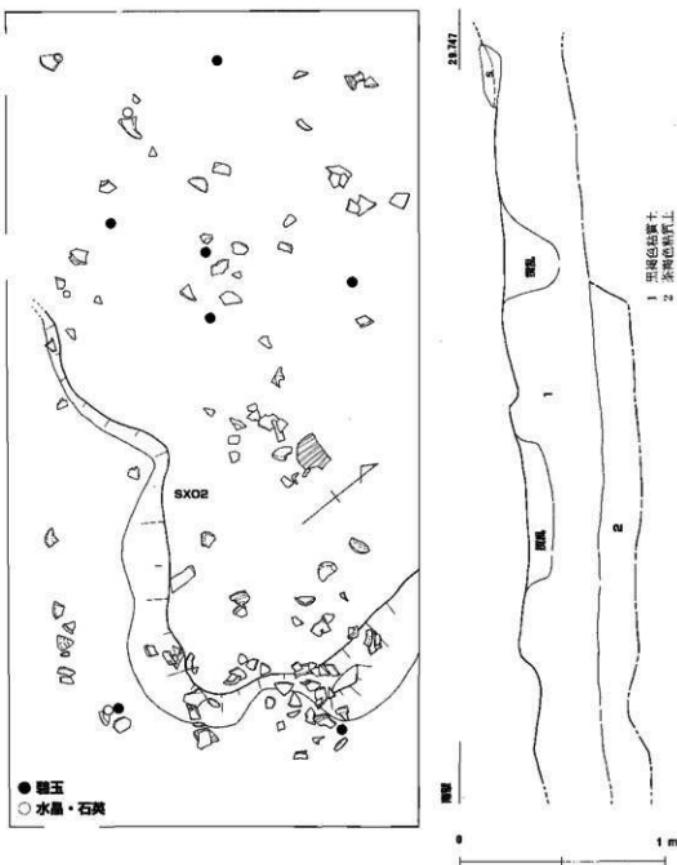
SX01はL字状に掘り込まれており、南北にのびる。深さは0.5m。西壁は急角度をもって立ち上がる。底部は平坦で、上層から黒褐色土、暗茶褐色粘質土、明茶褐色粘質土が堆積する。底面には浅いピット状の掘り込みがみられる。東側はトレンチの壁に隣まれ、全形を伺い知ることはできない。遺物は須恵器、土師器、土製品、玉未成品などが出土している。須恵器にはヘラ書き土器も混じる。土製支脚などもでていることから住居跡の可能性もある。黒褐色土から



第92図 第3調査区構造配置図

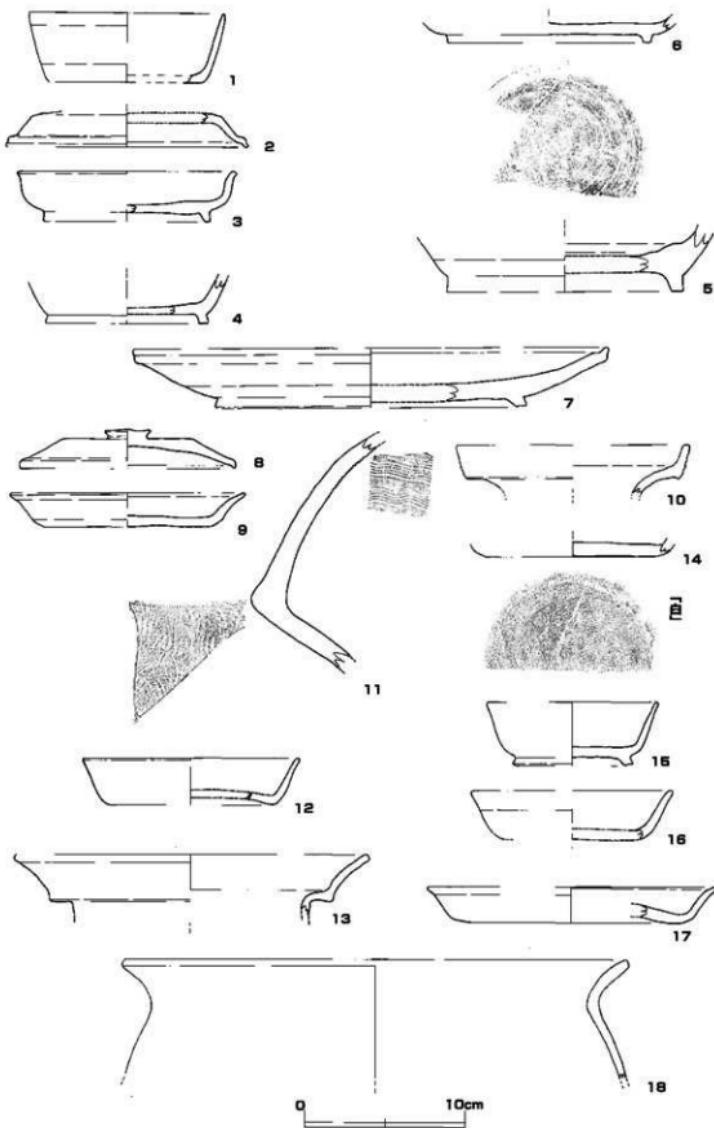


第93図 SK01 · SD01 · 02 · SX01実測図

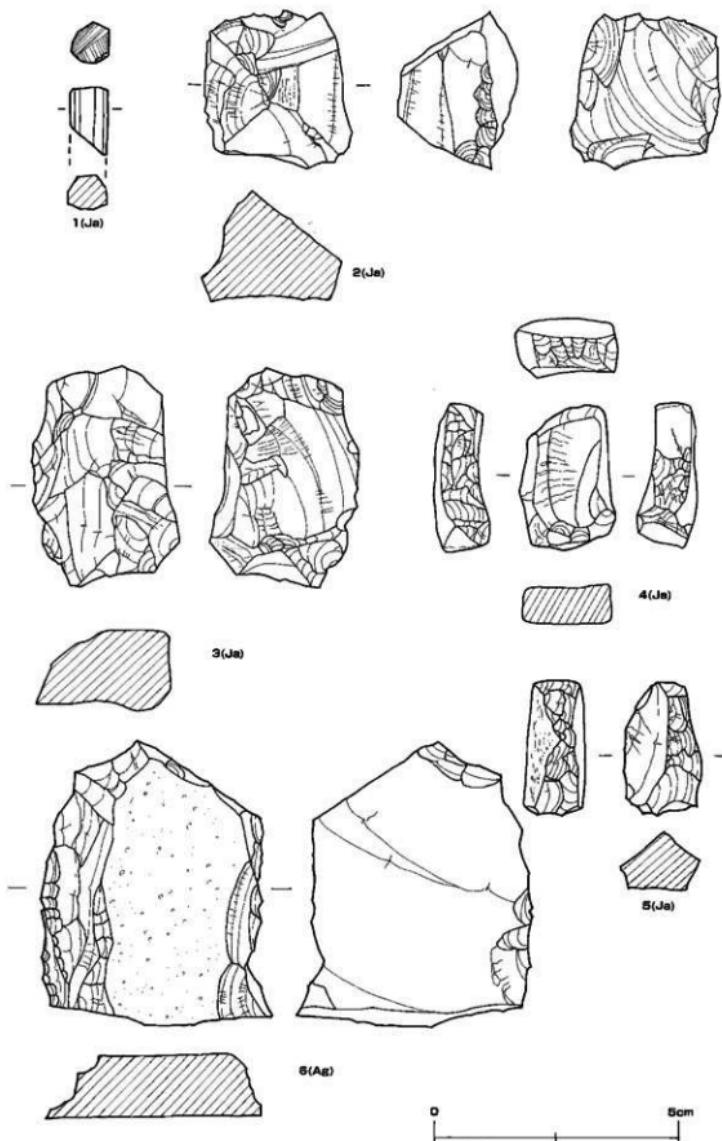


第94図 SX02実測図

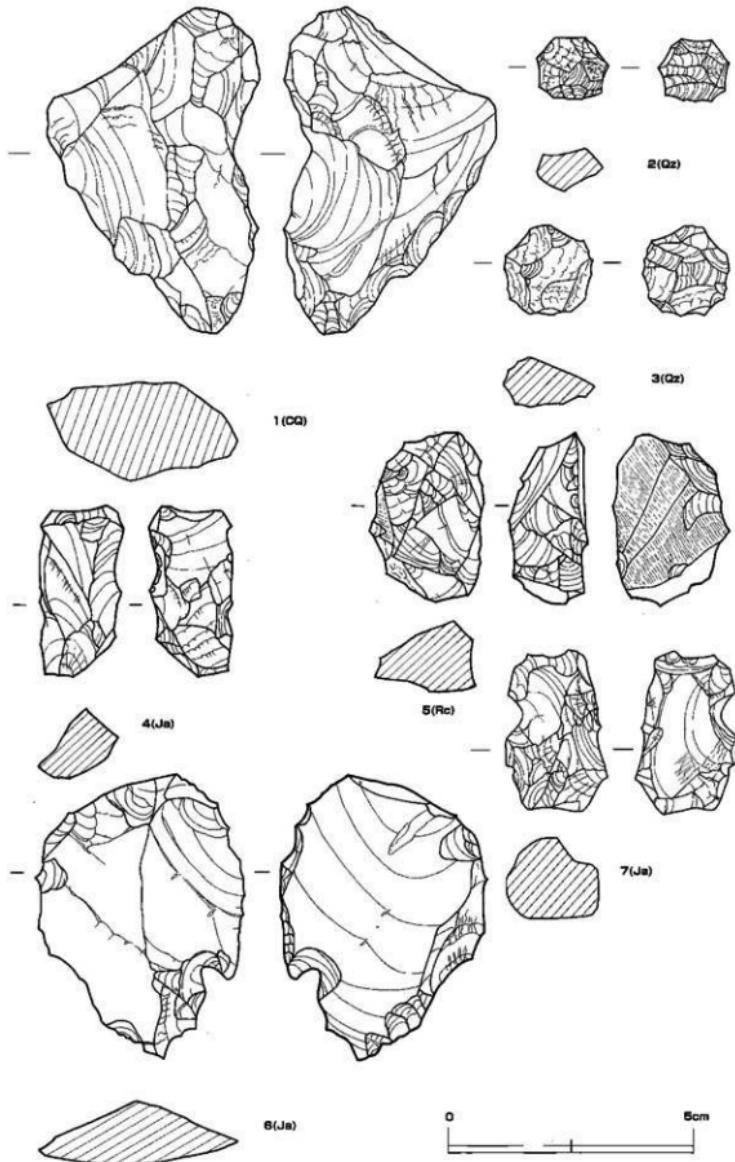
は逆ハの字状に立ち上がる須恵器の坏（第95図1）が出土。玉未成品は角石製の剥片素材（第97図1）や水晶製平玉未成品（第97図2、3）が出土している。剥片素材は縁辺部に加工痕が残る。石核の可能性もある。平玉未成品は全面に剥離調整を施す。暗茶褐色粘質土からは口縁端部が屈曲する蓋（第95図2）と高台皿（第95図3）が出土。高台皿は内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り未調整。色調は灰白色を呈し、焼成は不良。第95図4～6は高台部分のみが残る。いずれも短い高台がハの字状につく。6は蓋の底部で、回転糸切り痕が残る。第95図7は大型の高台皿。底部から外方向に広がる。口縁端部は嘴状に屈曲し、内面は強いナデによる凹線がみられる。口縁部外面には波状文が残る。第98図2、3は土製支脚。いずれも破損品。2の脚部底部は凹む。3は1支だけが残る。指頭圧痕とヘラケズリによる調整がみられる。玉未成品は碧玉製管



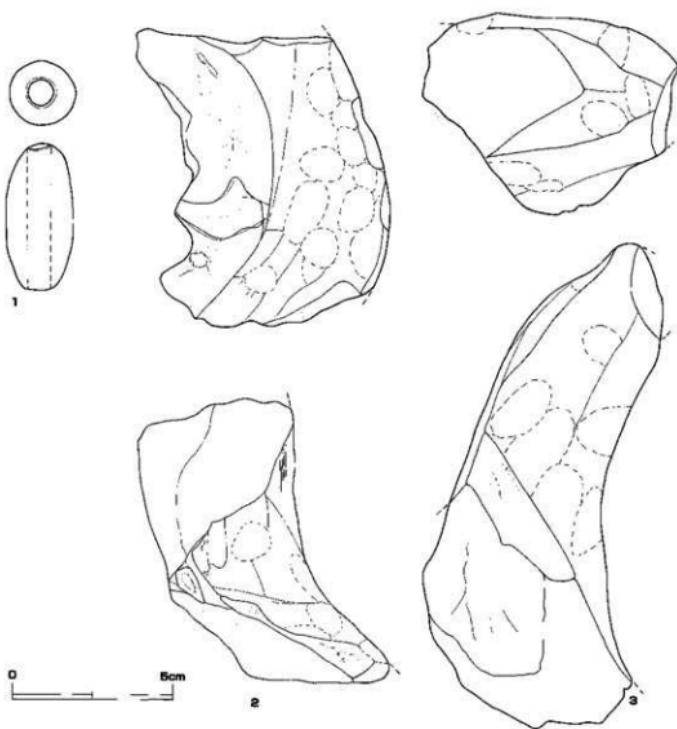
第95図 SK01・SD01・SX01・02覆土出土土器実測図



第96図 SK01・SX01覆土出土玉未成品実測図



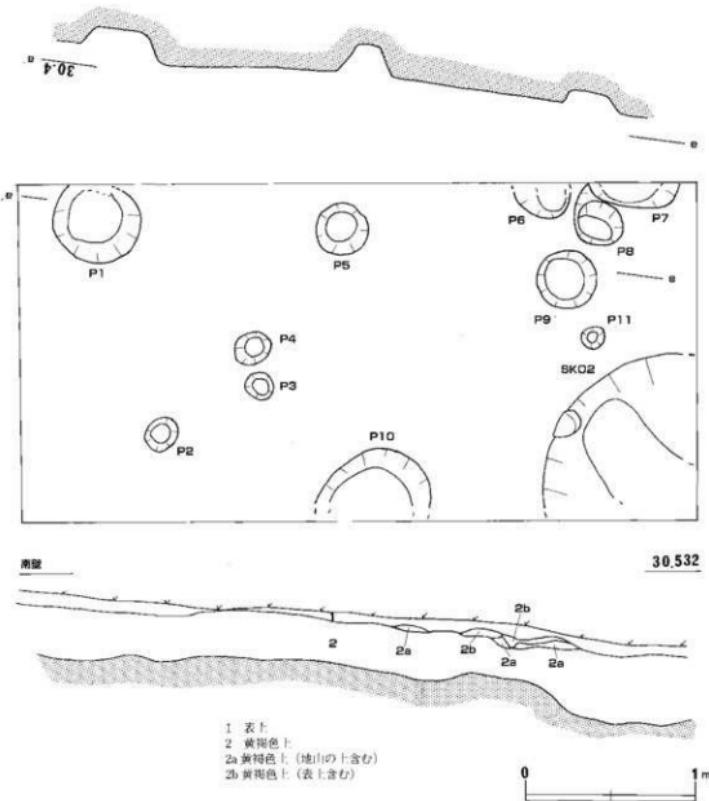
第97図 SD01・SX01・02覆土出土玉未成品実測図



第98図 SX01・02覆土出土土製品実測図

玉木成品(第96図1)、碧玉製勾玉木成品(第96図4)、碧玉製の調整剥片(第96図5)、めのう製の調整剥片(第96図6)が出土。1は全面に研磨を施し、断面は八角形をなす。4は片面には大きく主要剥離面を残すが、上端部、側面と細部調整を入れる。断面は直方体をなす。5は側面に細かい剥離調整を施す。断面は多角形。管玉未成品を意識した角柱状の剥片素材。6は両面に素材面および主要剥離面を残すが、両側縁部には階段状剥離を加える。明茶褐色粘質土からは須恵器の蓋(第95図8)、皿(第95図9)が出土。いずれも口縁部が屈曲する。蓋はヘラ切りによる切り離しがみられ、皿の底部には回転糸切り痕が残る。第95図10は古式土師で、複合口縁をもつ甕。口縁部が長くのび外反し、口縁端部をやや平坦に仕上げる。玉木成品は断面が三角形をなす碧玉製石核(第97図4)が出土する。

SX02の平面形は南東に弧を描いて蛇行気味にのび、南端で先細りになる。黒褐色粘質土に掘り込まれおり、検出された西壁はやや傾斜して立ち上がる。深さは0.2mを測る。両端はトレチの壁にぶつかるので全形は不明。出土した須恵器は甕(第95図16)、口縁部が外反する皿(第95図17)、甕(第95図18)がみられる。甕は単純口縁をもち、頸部はくの字状に屈曲する。砲弾



第99図 SK02・P1～P11実測図

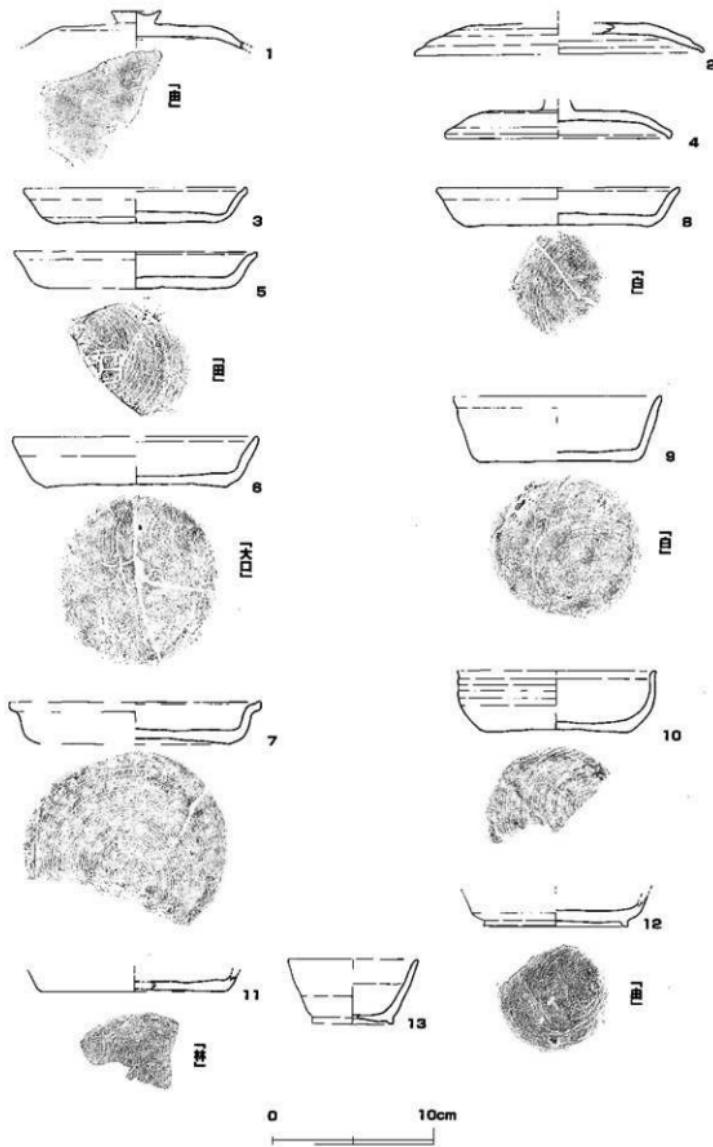
形を呈す七錘（第98図1）も出土。外面には煤が付着する。玉未成品は剥片素材（第97図5、6）が出土。5は水晶製で、断面が三角形で、片面と側面に剥離調整が認められる。6は碧玉製の大型剥片素材で、縁辺部に加工痕が残る。

ピット群（第99図）

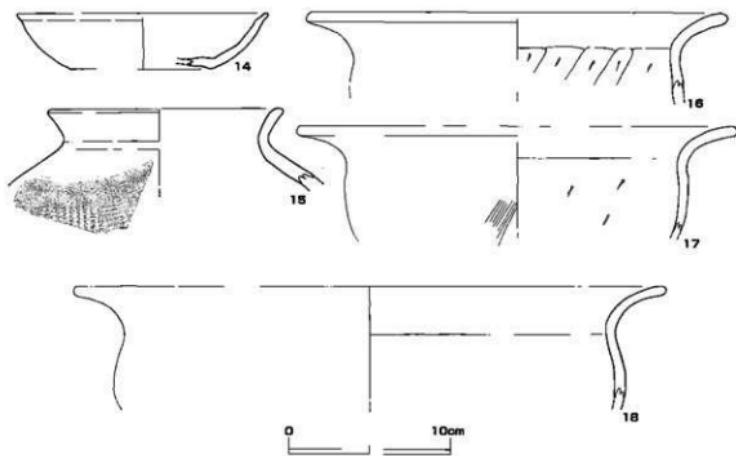
表土下0.2mで地山が検出され、径0.1~0.6mのピットが11穴掘り込まれていた。いずれもほぼ正円形をなし、深さは0.1~0.2mと浅い。ピットからの出土遺物はみられなかった。

遺構に伴わない遺物（第100図～103図）

第100図10、13はピット群付近の地山で、それ以外は溝状遺構や土壠などが検出された上層の包含層で遺物が出土した。第100図、第101図15は須恵器。1、2、4は蓋。1はヘラによる切り離



第100図 包含層出土土器実測図

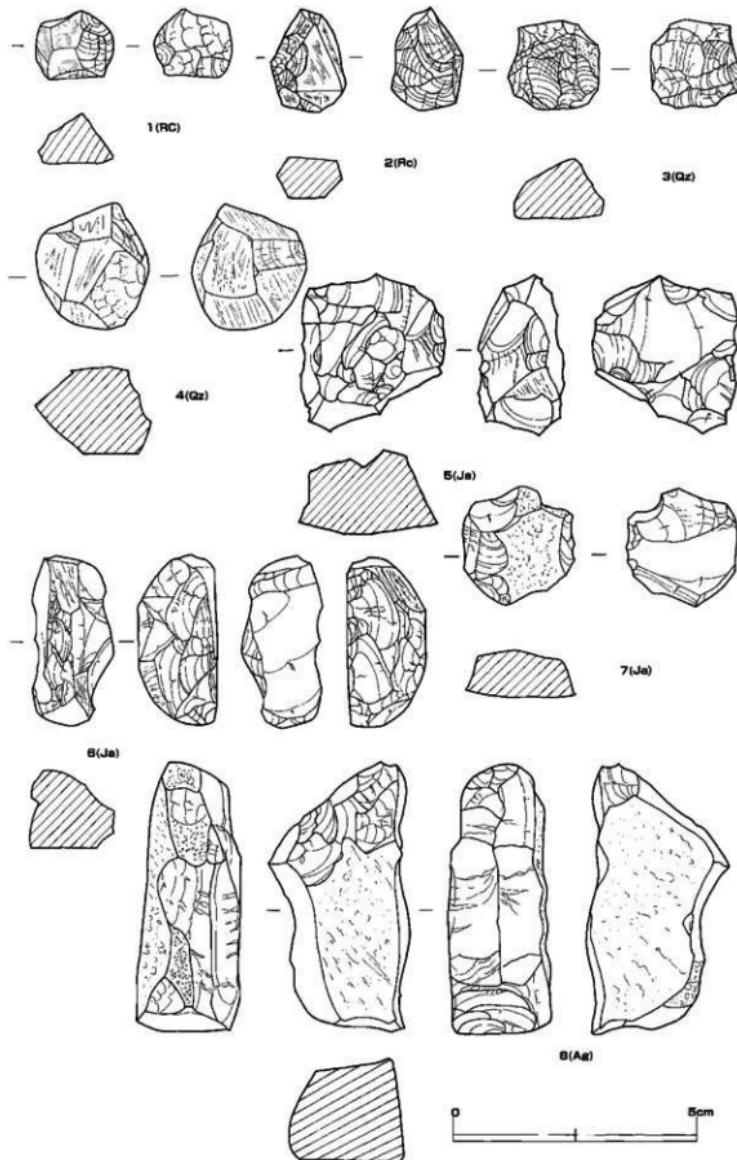


第101図 包含層出土土器実測図

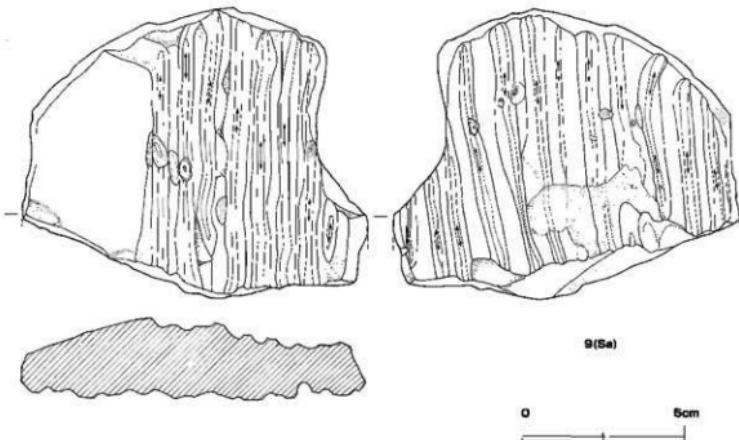
しがみられ、内面には「由」の字が記される。上面がやや凹んだ扁平なつまみがつく。2、4は口縁端部が嘴状に屈曲する。3、5~8は皿。底部に回転糸切り痕を残す。3、5、6は口縁端部がやや屈曲し、内面に稜をもつ。7はやや器壁が厚く、端部内面にも強いナデによる凹線を残す。5、6、8の底部外面には「田」、「大」、「白」の文字がみられる。9~11は壺。底部は回転糸切りによる切り離し。9は底部から逆ハの字状にひらき、底部には「白」の文字が残る。10は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く屈曲する。国庁IV形式のもの。11は底部片で外面に「林」の文字が記される。12、13は高台壺。短い高台がやや外側につき、底部には回転糸切り痕が残る。12の底部には「由」の字がみられる。13は小型品。いずれも8世紀代後半以降のものと考えられる。第101図14は赤褐色を呈す土師質の土器。口縁端部が屈曲する。15は口縁部が外反する須恵器の甕。第101図16~18は土師器の甕。いずれも単純口縁をもち、口縁部が外反する。内面の調整は摩滅が著しく不明。土製品は土鍤（第125図7~9）が3点と土製支脚（第125図10）が出土する。土鍤は砲弾形を呈し、指頭圧痕が残る。土製支脚は1支だけが残る。包含層からは水晶製玉本成品（第102図1~4）が多く出土している。1、2は結晶面を大きく残す剥片素材に剥離調整を加える。3は平玉本成品。断面が三角状を呈し、分厚い。4は原石に近いが、側縁部には階段状剥離が認められる。第102図5~7は碧玉製。5は剥片素材か右核か明確ではない。6は筈玉を意識した角柱状の剥片素材。素材面を残しながら、剥離調整を施す。7は周縁部に加工痕を残す平玉未成品。8はめのう製で板状の剥片素材。両面に自然面を大きく残す。第103図9の筋砥石は表面8条、裏面11条の溝が残る。断面はヒ字状を呈し、かなり使い込まれ、溝の内面は摩滅する。溝以外の平坦面も砥面として使用され、平滑である。

第4調査区（第104図）

平成8年度に調査を実施した地区。史跡公園のすぐ西側に隣接している緩斜面で、畠地が広が



第102図 包含層出土玉未成品実測図



第103図 包含層出土石実測図

る。範囲が広いので、畑地中央に東西方向に流れる水路を中心に、北側をA地区、南側をB地区として、それぞれに6ヶ所、12ヶ所のトレンチを設定した。A、B地区の両端部は比較的浅く、地山がすぐに検出されたが、東西中央部は深く、地山までの深さは2.7mほどあった。このことからこの地点は谷間の底面であったと推定される。さらにA、B地区的西側沿いに南北に走る作道から西側の調査区をC地区とし、11ヶ所のトレンチを設定した。

A地区

SD01・ピット群（第105図）

本調査区北側の表土下0.3mの地山に掘り込まれている。SD01は幅0.25m、深さ0.05mの深い溝で、底面は平坦である。南北にやや蛇行しながらび、北端部は丸く閉じる。溝の先端部付近に2穴のピットが穿たれる。ピット群はこの溝の周辺にみられる。ほぼ正円形をなし、径0.05mから0.3mの大小さまざまなものが計10穴ほど検出された。遺物の出土はみられない。

B地区

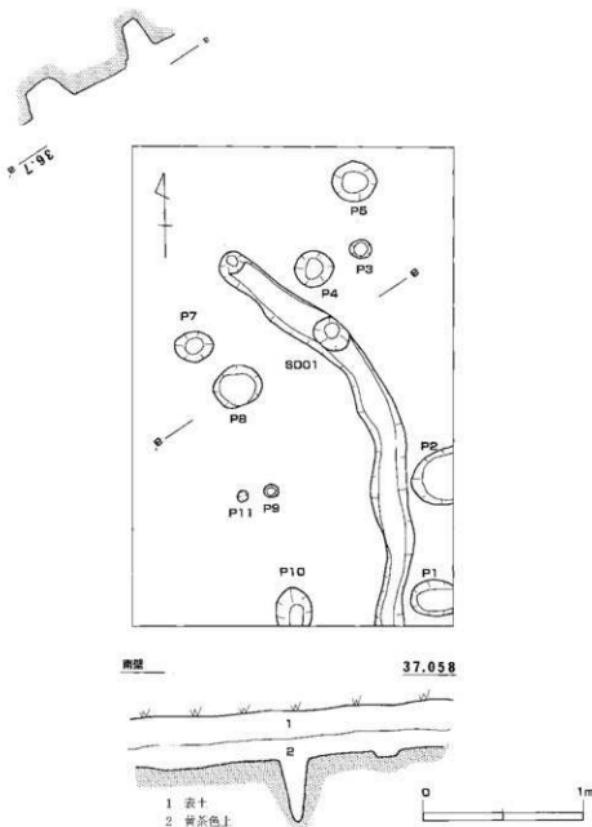
SK01・02（第107図～109図）

SK01はほぼ東西方向を長軸として、梢円形に広がる土壤。全形は不明。表上下1.2m付近の明褐色粘質土に掘り込まれており、底面はほぼ平坦で、東壁は比較的緩やかに立ち上がる。上坡には灰色粘土が0.4m堆積し、中央部では炭化物や遺物を多く含む。遺物は須恵器が目立つ。第108図1は蓋。端部が嘴状に屈曲する。切り離しは回転糸切り後ヘラケズリ調整を行なう。裏の大井部にも丁寧なナデ調整がみられる。擬宝珠状のつまみがつく。2は坏底部から逆ハの字状にひらく。底部には回転糸切り痕が認められる。国字V形式のものか。

SK02はSK01の西側8m付近で検出された。表下1mの明褐色粘質土に掘り込まれており、断



第104図 第4調査区構造配置図



第105図 A地区SD01・P1～P11実測図

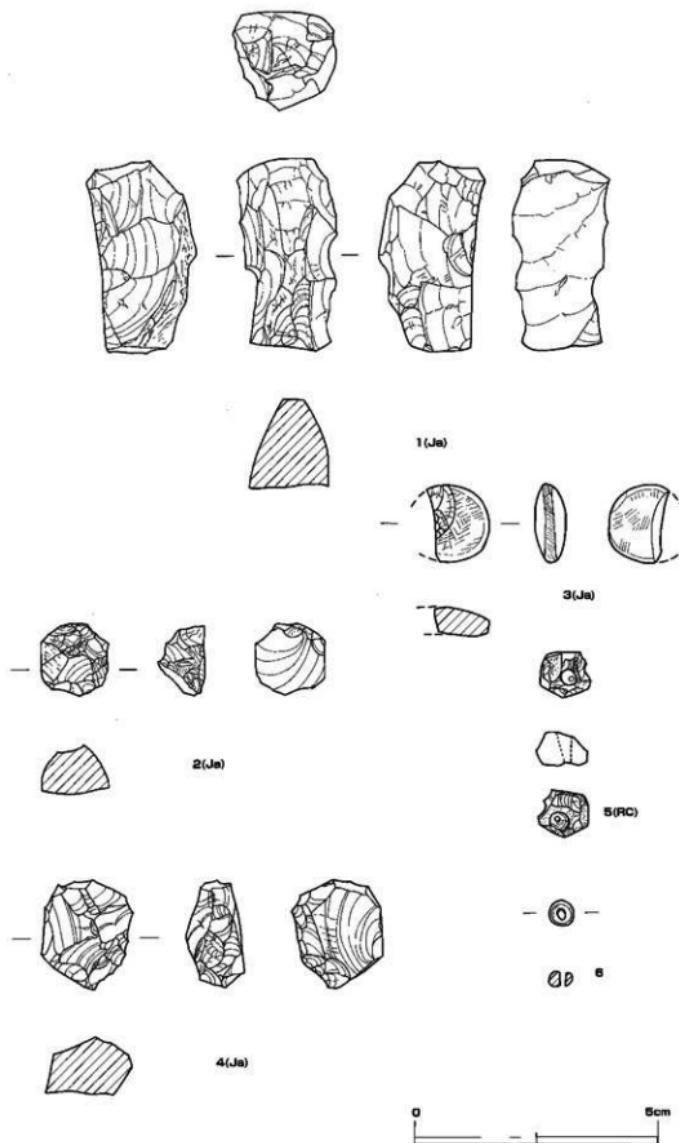
面はすり鉢状を呈す。付近から水が湧き出るため、底面は検出できなかったが、深さは0.6mを測る。内部には粘土が堆積し、上層から黒灰色粘土、灰白色粘土、灰色粘土、淡灰白色粘土が詰まる。上層の黒灰色粘土から遺物が少量出土。

SD01（第110図）

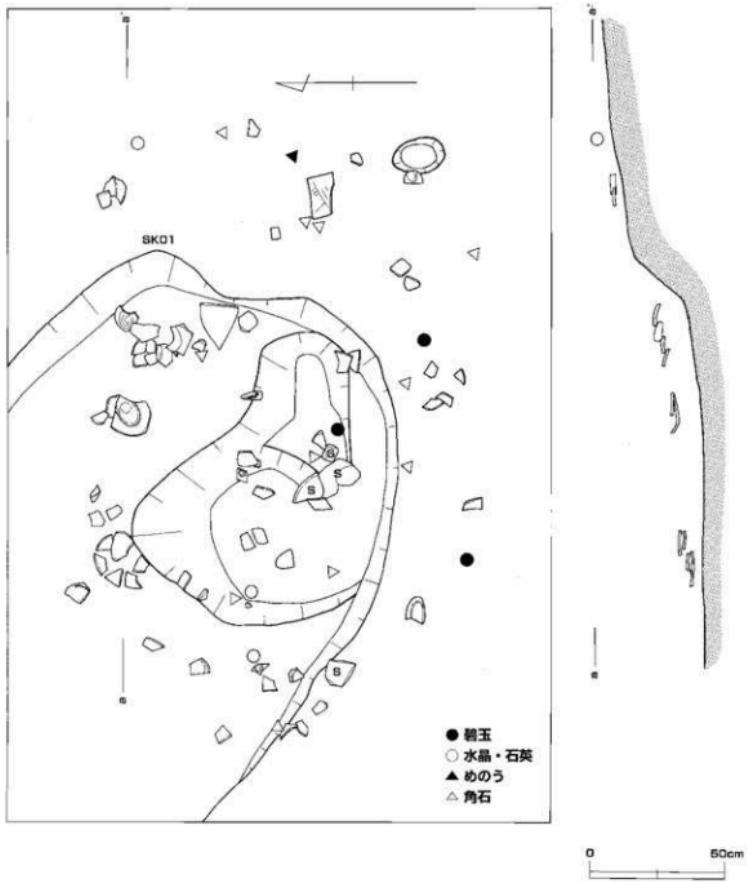
SK01より南に約10m離れた地点で検出された。ほぼ東西にまっすぐに走るが、両端ともトレンチ外に延びるので全形は不明。幅0.8m、深さ0.4mを測る。地山の橙色粘土に掘り込まれ、断面はV字状をなす。

ピット群（第111図）

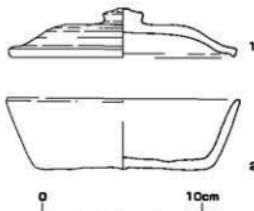
本調査区南側の0.2mほど堆積した耕作土下の地山に掘り込まれていた。径0.1mから0.3m、深さ0.15mのピットが20穴検出された。ほとんどが正円形だが、楕円形、不整形のものもある。



第106図 A地区包含層出土玉未成品、ガラス玉実測図



第107図 B地区SK01実測図



第108図 B地区SK01
覆土出土土器実測図

C地区

集石造構（第115図）

南側から北側にむかってなだらかに傾斜している表土下0.5mの地山で、多量の礫が検出された。とくに北側の底にあたる部分には多量の礫がみられ、拳大の礫が地山に張り付いており、人頭大の大きな礫がその上にのりかかった状態で出土した。規則性は認められず、深い部分にむかって無作為に投げ込まれたものと考えられる。礫の間からは碧玉や角石の玉材が出土している。

SD01・02・03（第116図～第119図）

SD01は本調査区の最西端の史跡公園から温泉街に抜ける遊歩道の南側で検出された。表土下0.2～0.4m付近の地山に掘り込まれている。南北方向にのび、中央付近でY字状に分岐する。幅0.2～0.4m、深さ0.2mを測る。南側には長さ0.3m、幅0.2mのテラス状の平坦面があり、溝との接点部分には径0.2mのビットがみられる。溝内からは水晶製平玉未成品や貝岩製の玉材が多量に出土した。須恵器（第117図）は口縁端部が屈曲する蓋が出土。

SD02、03は集石造構の西下方で検出された。いずれも表土下0.3mの地山に掘り込まれ、断面はほぼV字状を呈す。両者の上層部は擾乱が著しく、溝内の土層は観察できなかった。SD02は幅0.4m、深さ0.1mで、東西にほぼまっすぐのびるが、西端はやや幅広になる。SD03は幅0.3m、深さ0.35mでやや蛇行しながら南北に走るが、北端は加工段にぶつかる。溝内の北端部には3穴のビットが隣接した状態で穿たれている。SD02とSD03は直交した形で切り合っている。SD02からは碧玉、めのうの玉材が、SD03からは碧玉やめのう製勾玉未成品（第119図1）が出土した。Cの字状の小型品ではほぼ完成品だが、先端部は折半している。穿孔があり、仕上げ研磨と思われる綺かな研磨痕が背部に認められる。

SX01・02（第116図）

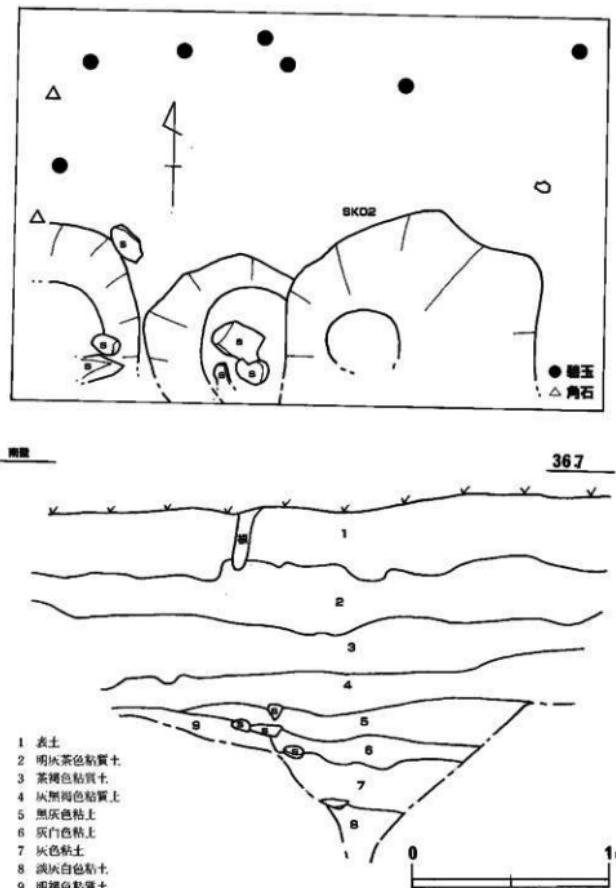
SX01はSD01の東側で検出された。長軸1.2m、短軸0.7mを測り、平面形は南北を長軸に梢円形を呈す。最深部は0.5mで、東側は階段状に落ち込み、西側はやや垂直気味に立ち上がる。覆土は2層に分かれ、上層に暗灰茶褐色粘質土、下層には灰色粘土のブロックが混じるロース色粘質土が堆積する。遺物は須恵器、碧玉の玉材が多く出土する。

SX02はSD01の北側に検出された。西側がトレンチの壁に隣接し、全形は不明。検出された東壁はやや角度をもって立ち上がる。碧玉の玉材が出土する。

造構に伴わない遺物（第106図、第112図～114図、第120図～123図）

A地区(第123図1～6、第106図1～6)

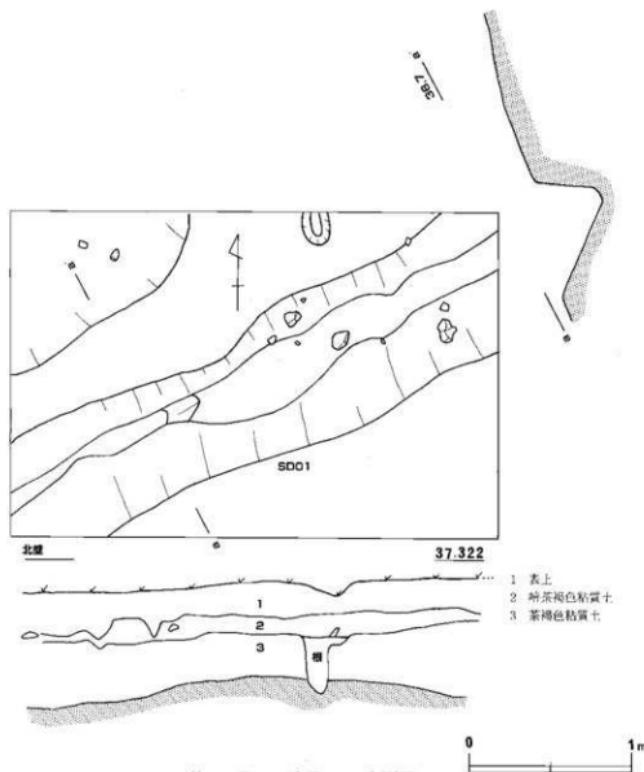
第123図1～3は須恵器。1は蓋。口縁端部は屈曲する。破片のため調整は不明。2は高台皿。口径20.5cmと大型品。口縁は逆ハの字状に短く立ち上がる。短い高台がやや内側よりに内傾気味に付く。底部はナデ調整で仕上げた後、外面中央に「桐家」の文字を記す。3は高台環。底部外面には回転糸切り痕が残る。内外面ともに丁寧なナデ調整がみられる。4～6は弥生時代後期の



第109図 B地区SK02実測図

土師器。いずれも複合口縁をもつ甕。口縁部はやや長くのび、外傾し、頸部は短く屈曲する。摩滅が著しいが、口縁部外面には擬円線文が施される。弥生時代後期の土師器はいずれもA地区の地山面から出土しており、他に同時期のものと思われる低脚甕や高甕の脚部が出土している。

第106図1~6は下未完成品。1は碧玉製管玉未完成品。片面に素材面を残す角柱状の剥片素材。上端部にも剥離調整が認められる。2~4は碧玉製半玉未完成品。2は裏面に主要剥離面を残す。表面と側面に剥離調整と部分研磨が認められる。3は側面に平坦面をわずかに残すが、全面に研磨を



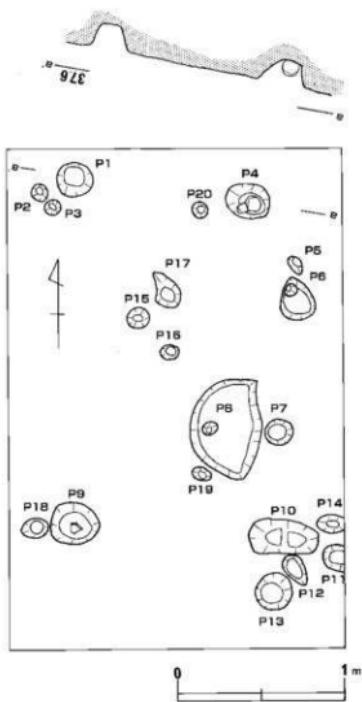
第110図 B地区SD01実測図

施し、完成品に近い。4はやや分厚いまつ剥離調整を加える。5は水晶製丸玉未完成品。自然面が残るが、片面穿孔が認められる。6は径5mmのガラス玉。コバルトブルーを呈す。

B地区（第123図7～21、第112図～第114図、第126図14、15）

第123図7～13は須恵器。7は蓋。端部が嘴状に屈曲する。8、9は体部が逆ハの字状に広がる皿。10、11は杯。10は大きく外方向にひらくタイプだが、11の体部は内湾気味に立ち上がる。8～11の底部には回転糸切り痕が残る。12は高台壺の底盤。太く、短い高台がつく。底部外面には回転糸切りの後ナデ調整を行い、ヘラにより「林」の文字を入れる。13は壺、甕類の底部。内面には同心円状タタキ、外面には平行タタキを施す。14は弥生土器の壺。複合口縁をもち、長くのび、外反する。頸部は短く屈曲する。口縁部外面には凹線文を施す。弥生時代後期と考えられる。20、21は小型の製塙土器。20は砲弾形をなすが、底部は平坦に仕上げる。21は円筒形。いずれも手捏ねで指頭圧痕が残る。

第112図1～8は平玉未完成品。そのうち1～7が碧玉製。いずれも素材面および主要剥離面を残し、剥離調整を加える。1、2、6は断面が分厚く、やや不整形。3、4は向側面に剥離調整を入れ、平坦にする。5は一側面に自然面が残る。8は良岩製で、径13mmの小型品。9、10はめのう製。9

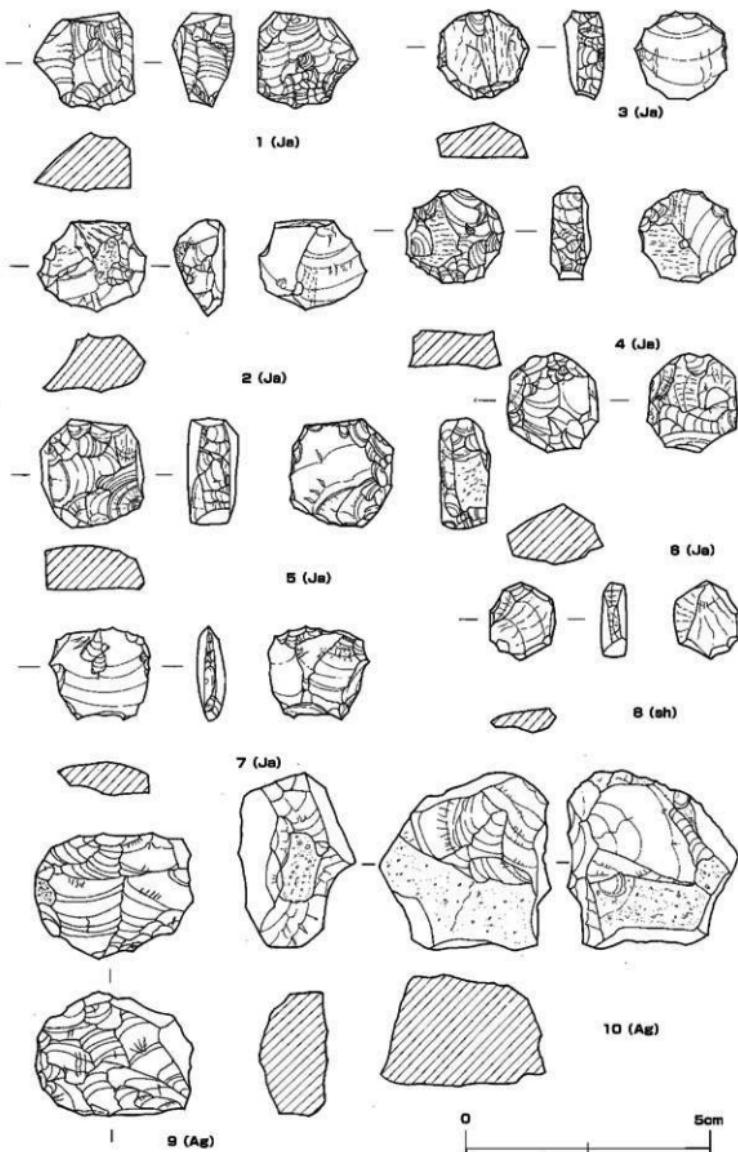


第111図 B地区ピット群実測図

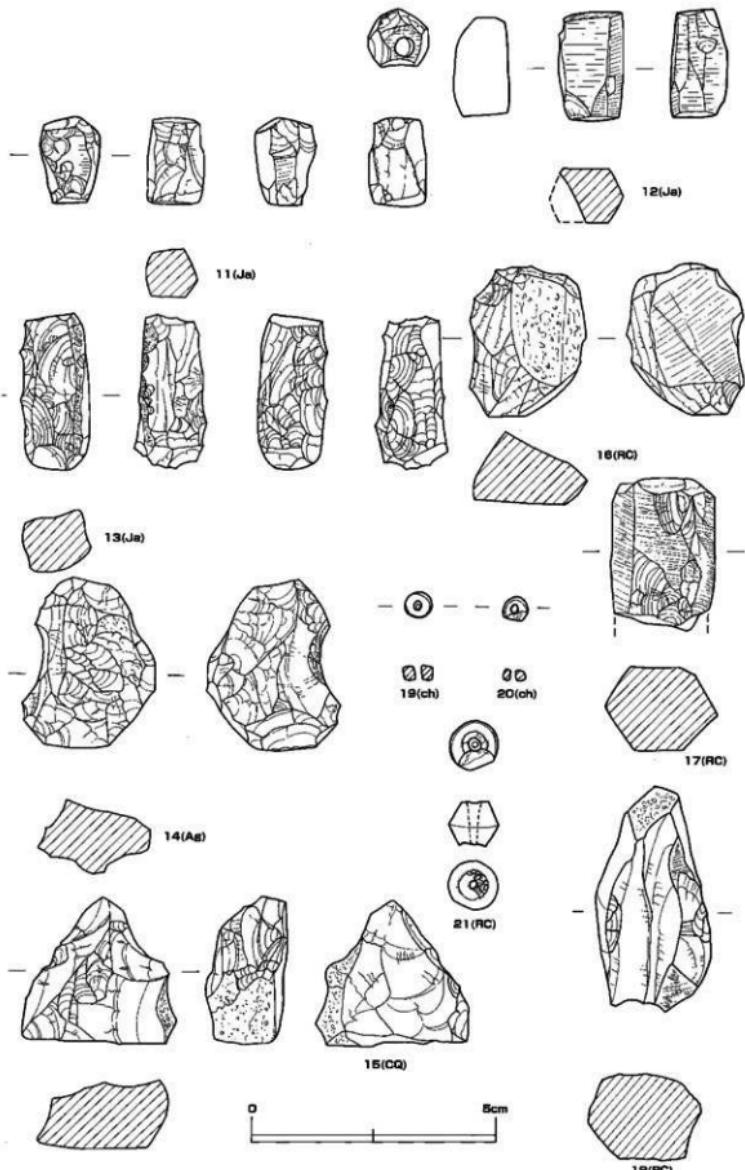
は剥離調整のある剥片素材。10は石核状の剥片素材。第113図11～13は碧玉製管玉未成品。11は穿孔途中で廃棄されたもの。両側面、上下端部に調整研磨痕が残る。12は全面に調整研磨を施し、短軸方向に短い擦痕が残る。一部欠損しているが、多面体を形づくる。13はほぼ四角柱状未成品。断面は直方体に近い。一侧縁部には細かい滑れも観察できる。14はめのう製勾玉未成品。腹部を意識して、全面に剥離調整を施す。15は角石製。部分的に自然面が残る。残核か。16～18は水晶製。16は結晶面を多く残したまま剥離調整を加えた剥片素材。17、18は加工痕のある剥片素材。原石の六角柱の面が残る。19、20は緑泥石製臼玉未成品。穿孔が認められるほぼ完成品。20の側面には研磨痕が残る。21は水晶製算盤玉。ほぼ完成品。片面穿孔で、穿孔面の周辺には細かい剥離調整がみられる。第114図22、23は筋砥石。いずれも大きく割れた欠損品。22には3条の浅い溝が残るが、他の平坦面も砥面として使用。23は5条の溝が残る。溝の断面は幅広のUの字状。残存する溝はいずれもほぼ等間隔で、まっすぐにのびる。第126図14、15は鉄製品。いずれも両端が欠失している。14は断面が扁平な長方形を呈すタガネ状鉄製品。

C地区(第123図15～19、第120図～第122図、第124図15)

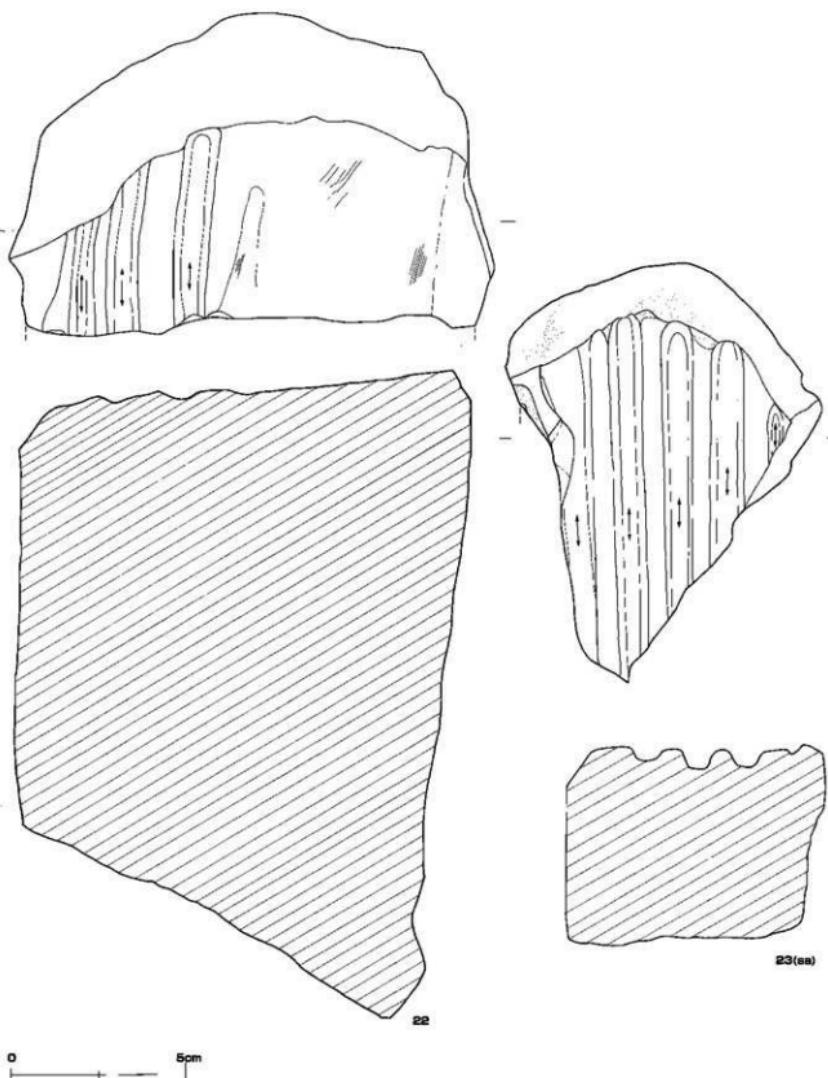
第123図15～17は須恵器。15は蓋。口縁端部が短く屈曲する。16は高台坏。坏部はやや深い。



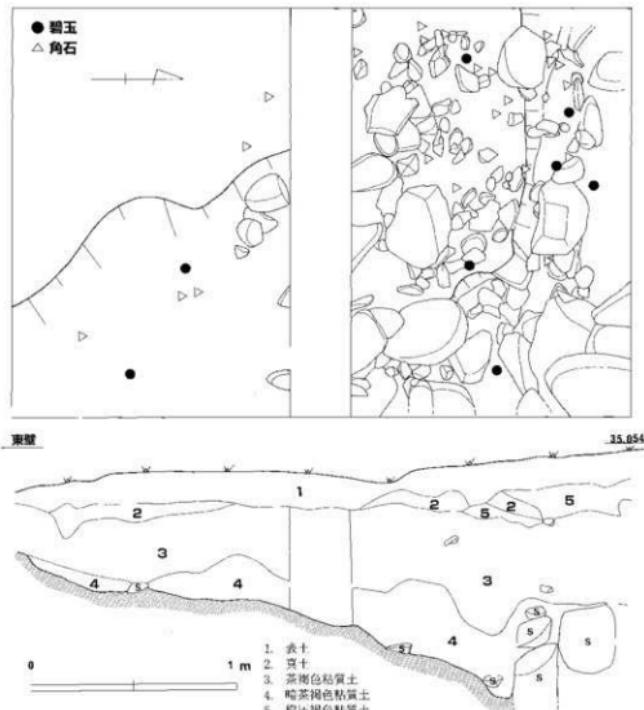
第112図 B地区包含層出土玉未成品実測図



第113図 B地区包含層出土玉未成品実測図



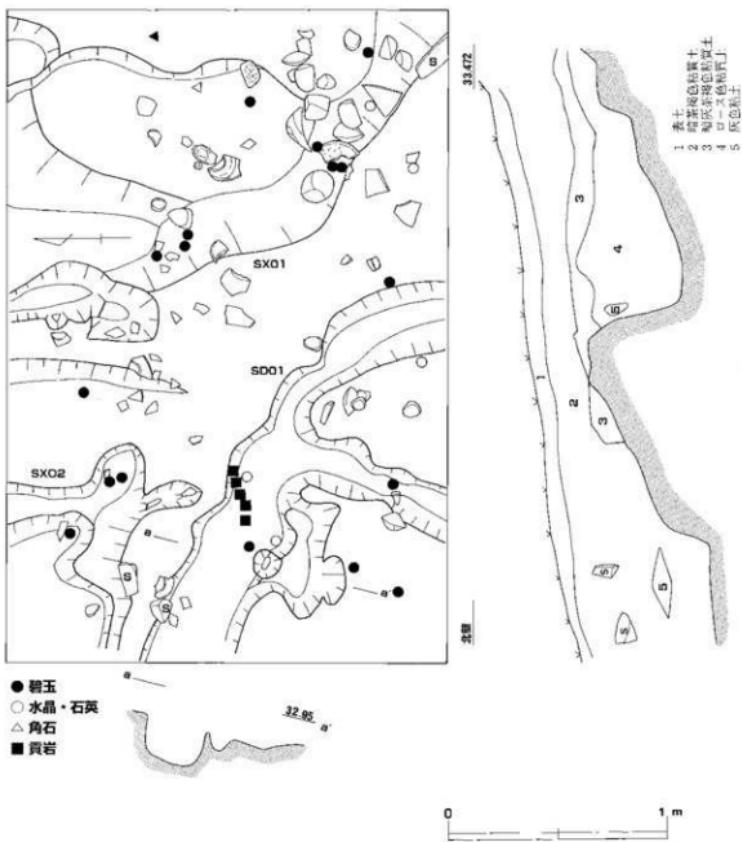
第114図 B地区包含層出土砾石実測図



第115図 C地区集石遺構実測図

底部外側に高台がつく。底部はヘラ切りか。17の壊底部外面には「白田」の文字が残る。18は上師器。低脚壊の脚部。やや外反気味に外に張り出し、端部は丸い。19は底部から逆ハの字状にひらく壊。赤褐色を呈す土師質の須恵器。調整は摩滅が著しく不明。16、19は9世紀後半のものと思われる。このうち15～17は地山から出土した。その他、図示できなかったものの、複合口縁をもつ凸式上師や高壊の脚部なども出土している。第124図15は青白磁製合子の蓋と考えられる。

第120図1～15は平玉未成品。1は黒色珪質灰岩製の完成品。ほぼ正円形をなし、径20.9mmを測る。断面はレンズ状をなす。2～7は貝岩製。2は全面に研磨を施し、側面には稜線の残る研磨調整痕が規則的に並ぶ。3～7は両面に素材面を残しながら剥離調整を施す。5には若干、縁辺部に加工痕が認められる。2、3、5～7の断面はほぼ直方体を呈す。8～11は石英および水晶製。8の側面は小さな剥離調整を施した後、細かく敲打する。断面にはまだ厚さが残る。9は細かい敲打痕を残し、全面に粗い研磨を施す。10は剥離調整を加えた後、やや粗い敲打を部分的に加える。断面はほぼ直方体に近い。11は全面に剥離調整を施すが、側面には横方向から一定の細長い剥離調整を加える。12は剥離調整を残しながら、やや粗い研磨を施す。断面はやや丸味を帯

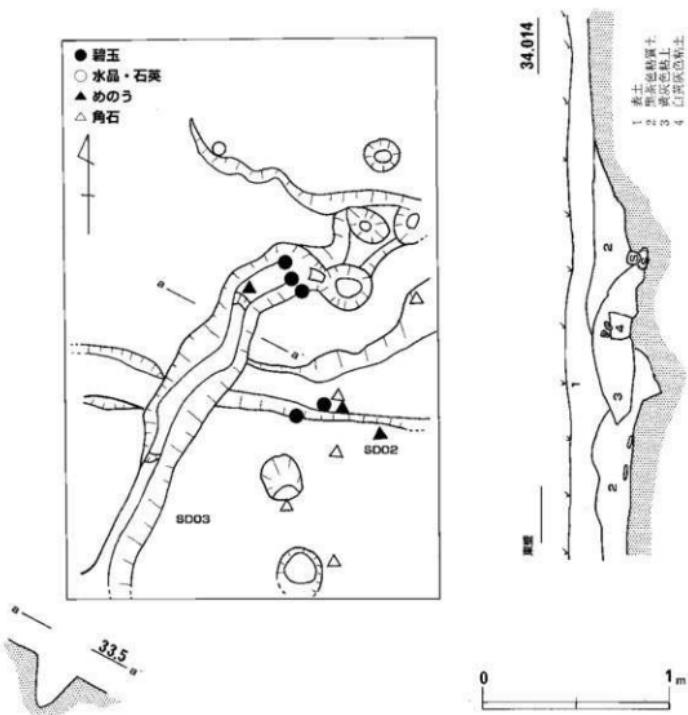


第116図 C地区SD01・SX01・02実測図



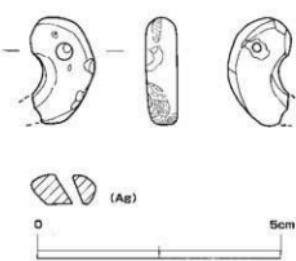
第117図 C地区SD01覆土出土
土器実測図

びる。13、14は碧玉製。両面に素材面を残し、側面に剥離調整を入れる。15は水晶製管玉未成品。長さ12.5mmの小型品。6面に細かな剥離調整を加え、全面を平坦に加工し、四角柱を作り出す。16は角石製勾玉未成品。黄土色を呈す。全面に研磨を施し、断面はほぼ楕円形を呈す。第121図17～19は縁泥石。17、18は白玉未成品。平面はほぼ正方形をなす。17は平面中央に穿孔がみられる。19は勾玉形未成品。全面に研磨を施す。片面からの穿孔がある。20、21はめのう製勾玉未成品。20は板状の剥片素材。両側面に剥離調整、一側面には研磨痕が残る。半月形を呈す。21は全面に剥離調整を加える。断面はほぼ五角形を呈す。22～24は碧玉製。22、23は勾玉未成品。全面に剥離痕を残す。22は腹部を意識し、側面には細かい剥離調整

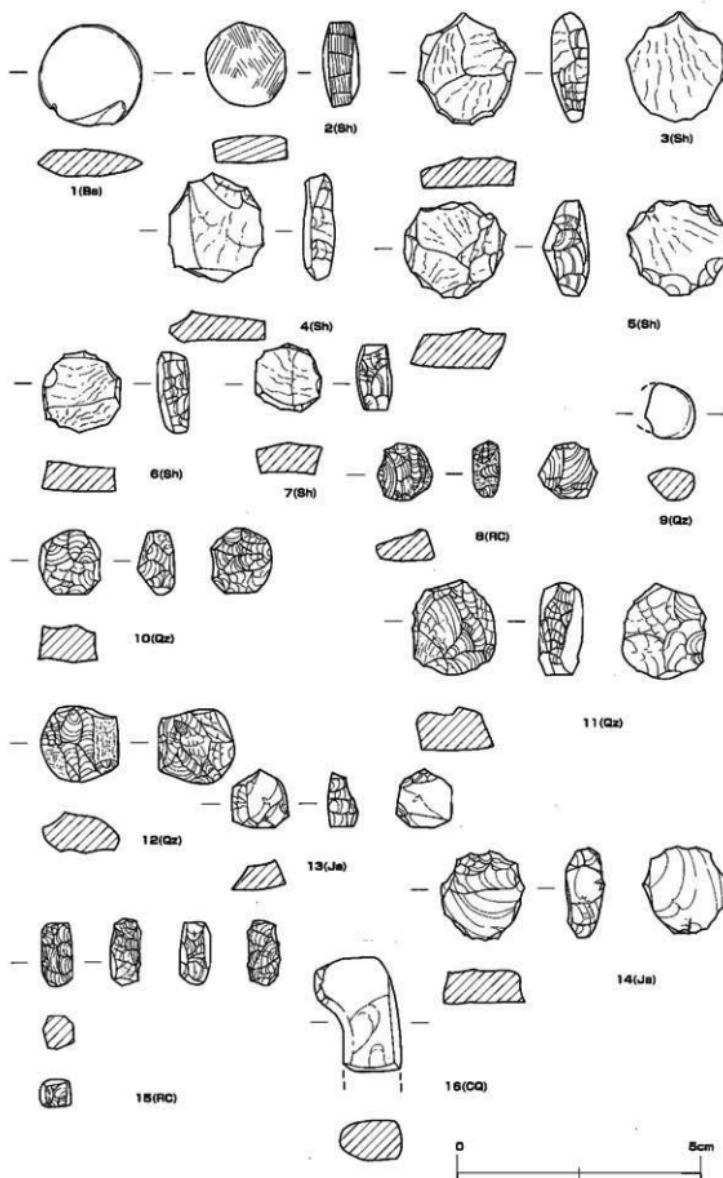


第118図 C地区SD02・03実測図

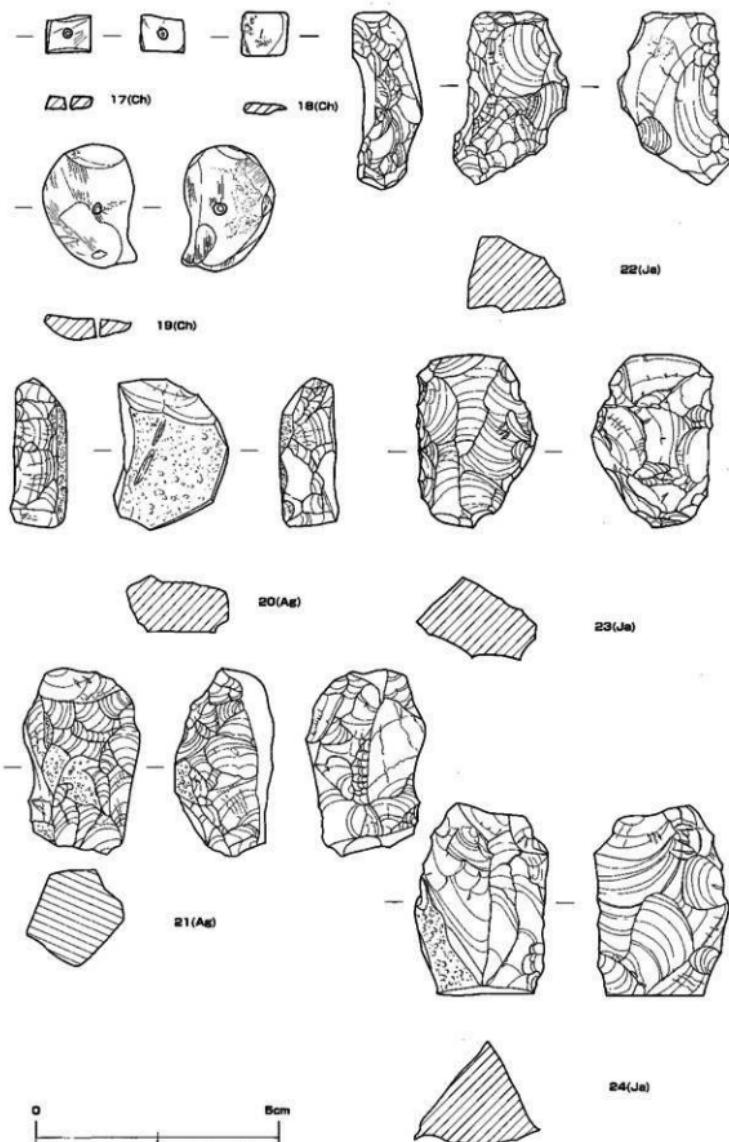
を加える。23は半月形を呈す。24は剥離調整が認められる剥片素材。断面は三角形。第122図25はめのう製。板状の剥片素材。縁辺部や側面に剥離調整がみられる。上端部など部分的に細かく潰れた敲打痕も残る。敲石としても使用されたものか。26、27は筋砥石。26は砂岩製。風化が著しいが両面に溝が残る。溝の断面は、浅い半月形をなす。27は長軸方向に浅い溝が5条残る。割れた石の平坦面を意図的に砥石として使用している。28は黄土色の角石製石核と思われる。色調は黄土色を呈す。角石を素材とした製品はほとんど出土をみないので、目的の器種は明らかではない。



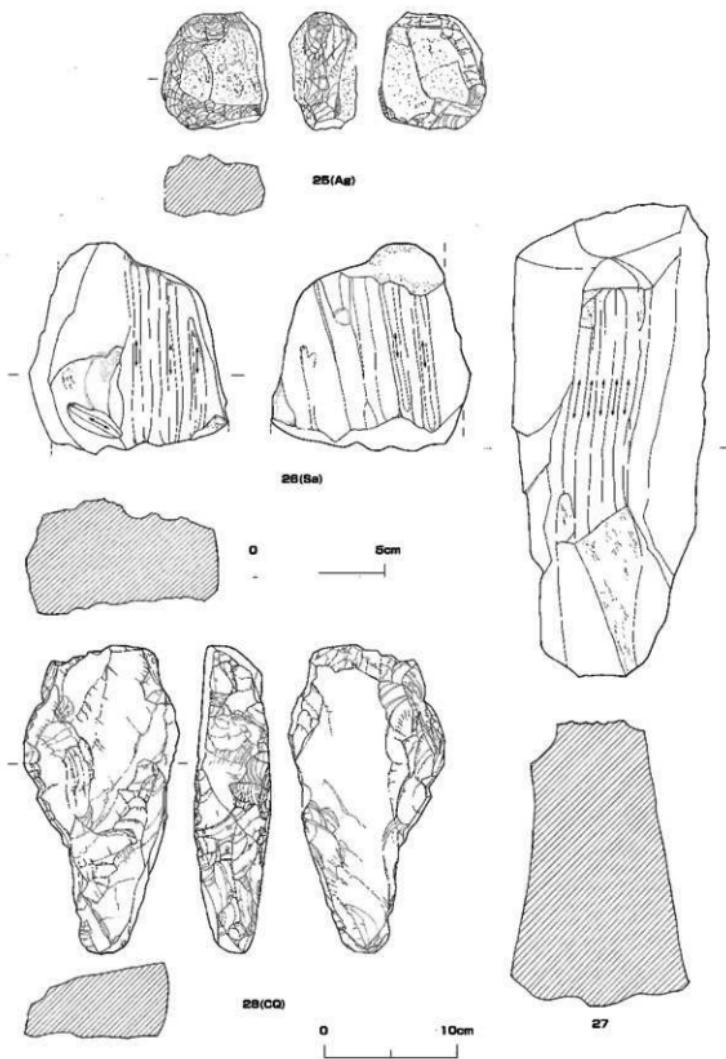
第119図 C地区SD02覆土出土玉未成品実測図



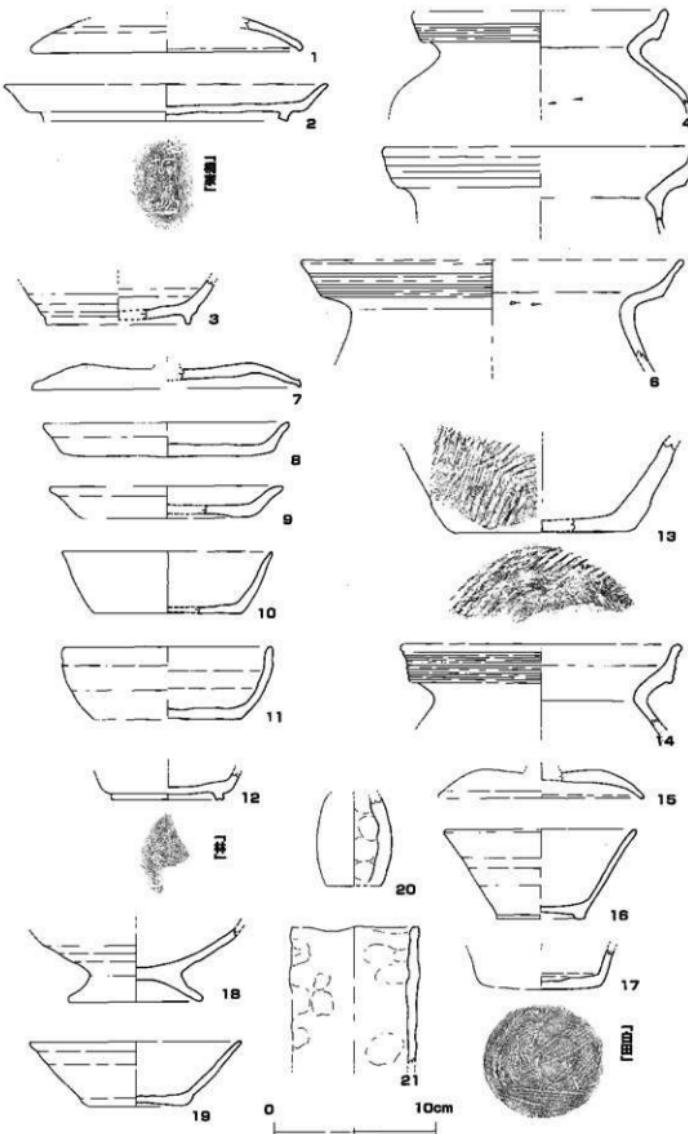
第120図 C地区包含層出土玉未成品実測図



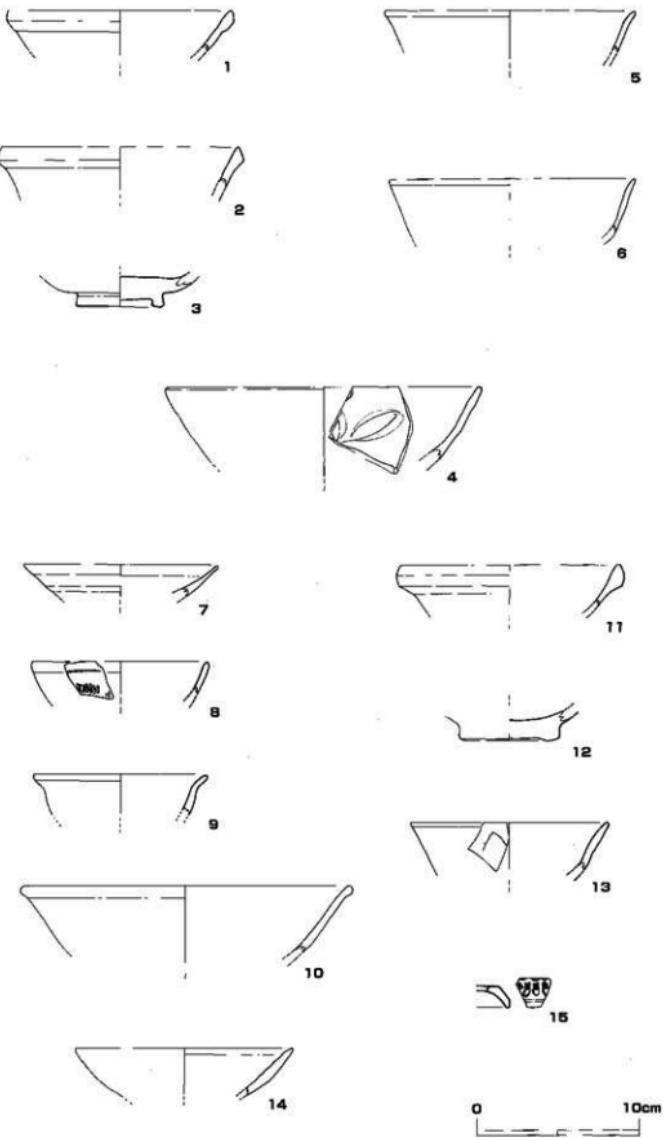
第121図 C地区包含層出土玉未成品実測図



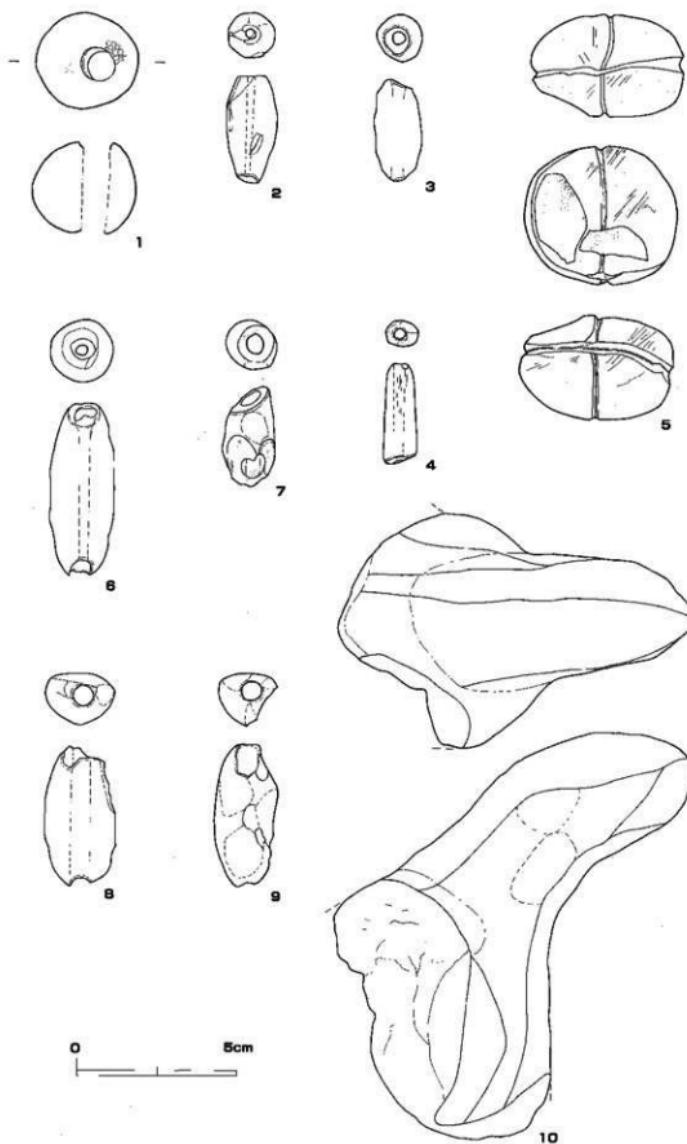
第122図 C地区包含層出土敲石、砾石、玉未成品実測図



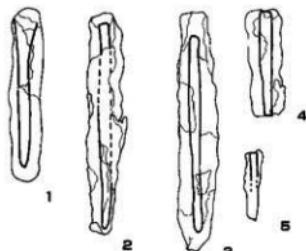
第123図 A・B・C地区包含層出土土器実測図



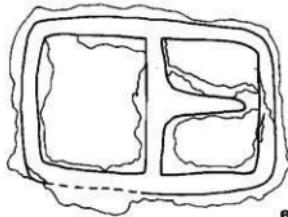
第124図 蛇喰遺跡出土輸入陶磁器実測図



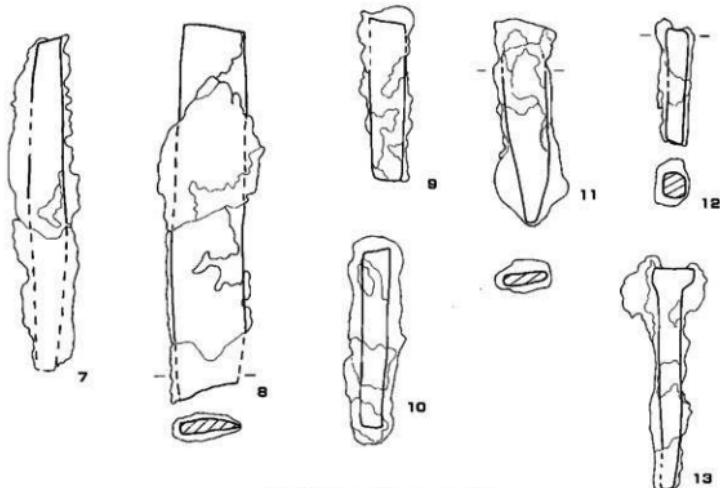
第125図 第1・2・3調査区包含層出土土製品実測図



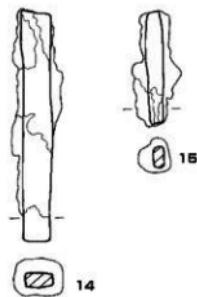
第2調査区A地区2層出土



第2調査区C地区SX01 5層出土



第2調査区C地区SI01覆土出土



第4調査区B地区出土



第126図 蛇喰遺跡出土鉄製品

第5章

1. 島根県玉湯町蛇喰遺跡出土のヘラ書き須恵器

平川 南

島根県松江市の西に位置する玉湯町には碧玉の原石を産出する花仙山があり、その原石を加工する土作の工房が古墳時代から平安時代に活動していた。

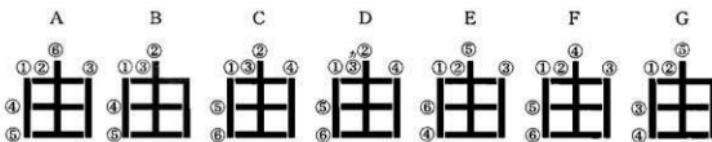
その遺跡の一つ蛇喰遺跡出土の土器には503点のヘラ書き文字が確認されている。これらのヘラ書き土器は、蛇喰遺跡から出雲國庁跡へ向う途中の湯崎窯跡（未発掘・表探資料）であり、その年代は8世紀後半から9世紀前半であるとされている。

一、記載文字と筆順

これら蛇喰遺跡のヘラ書き文字のうち、判断可能な筆順をとり上げることとする。

画数の比較的明瞭な「由」の筆順を模型的に表わしたのが、図1である。

〔ヘラ書「由」の筆順〕



これほど画数の少なく、使用頻度の高いと考えられる漢字「由」の文字〔正しい筆順〕でさえ、一群の中に少なくとも七種類の筆順が想定される。いうまでもなく、通常同一人物が數種類の筆順で文字を記すことはないであろう。

この事実は古代地方社会における文字の習熟の問題を象徴的に示してい

るといつてよい。しかも、八世紀後半から九世紀前半という時期は、一般的

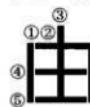


図1

には律令行政が末端にまで浸透し、文字が村々に普及したとされている。墨書き土器が広範囲かつ多量に分布はじめた時期である。それにもかかわらず、須恵器工人の文字の習熟度は、「由」の筆順さえ十分に習得しえない状況であったのである。

筆者は、すでに墨書き土器の分析から、古代の集落遺跡から出土する墨書き土器について字形を中心として検討した結果、墨書き土器が文字の普及のバローメーターとは直接的にはなりえないであろうとした（註1）。また、郡家に留め置かれた膨大な籍帳類は、正倉院文書や漆紙文書でみる限りでは数多くの誤字・脱字を確認できるのである。一般集落内においても、特異な字形や集団内の字形変化（図2）および筆

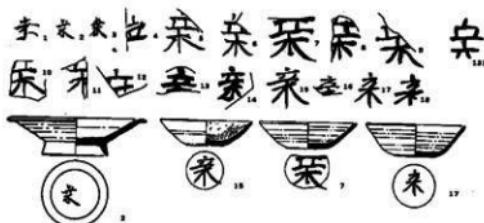


図2 「桑=桑」の字形群と字形変化〔山形県熊野田遺跡〕

順の実態は数多くの文字の破綻状況を如実に示している。

こうした検討をへて、筆者は次のようにその見通しを指摘した（註2）。

古代社会においては、ごく限定された階層の人々が文字を基礎から練習し、習熟することができた。それに対して写経生・都書生のように、文字を書写する技術を一定程度、習得することにより職を得ることができた人々は、一般集落の文字普及に一定の役割を果たしたといえるが、その習熟度は意外と低かったのではないかと推察される。

この見通しに加えて、蛇喰遺跡出土のヘラ書上器で確認した筆順は、その習熟度を判断する有力な“ものさし”的役割をもつものといえよう。

二、ヘラ書き文字と地名（図3・図4・図5）

- 「林」「林」は、出雲国意宇郡内の「拝志郷」に相当し、現在も玉湯町の西部に林村という大字がある。
 - 「忌」「忌」は、意宇郡内の「忌部郷」に相当し、現在も玉湯町に隣接する松江市西忌部町が所在している。
 - 「由」「由」は、例えば『和名類聚抄』によれば、石見国延摩郡の湯泉郷を「由」と訓じ、伊馬国二方郡の温泉郷を「由」と訓じている。「由」は湯に通じ、玉造温泉の地、現玉湯町を指すとみてよいであろう。
 - 「白田原」「白田」「白」

「出雲國風土記」意宇郡条によれば、黒田の駅 郡家と同じ處なり。郡家の西北のかた二里に黒田の村あり。土の体、色黒し。故、黒田といふ。(下略) とみえる。

この「黒田」の地名起源説話を参考とすれば、「白田原」および「白田」は、地味にもとづく命名と推測できよう。(註3)。

蛇喰遺跡出土の須恵器記載文字は、その部位と記載文字が明らかに対応している。例えば「白田」の場合は、环または皿は底部外面に、蓋は内面に、それぞれ記銘している。このことは同一時期の一括資料であり、記載文字が須恵器の



図3 蛇喰遺跡とその周辺

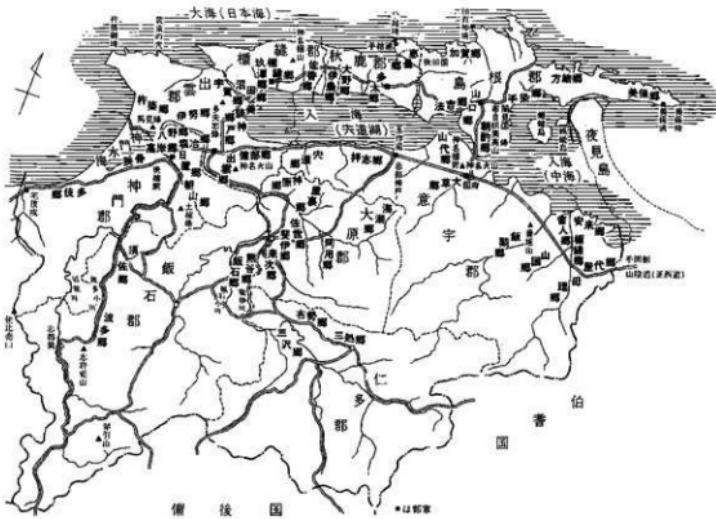


図4 出雲国 郡郷各分布図 [山本清編「風土記の考古学③出雲国風土記の卷」同成社1995年]

製作工人に関わるものであることを意味していると判断できよう。したがって、記銘目的は明らかに工人の識別にあることを示しているのである。

上記のような「林」「忌」「由」「白田原」などのヘラ書き文字は、遺跡周辺の地名と理解できる。

この蛇喰遺跡と全く同様な例は、千葉県印旛郡栄町竜角寺・龍角寺五斗蔵瓦空跡出土のヘラ書瓦である(註4)。図6・図7

「服止門」「皮止門」は、「ハトリ」と訓み、「服部」を字音で表記したものである。現在、五斗蔵瓦窯跡のすぐ東に成田市「羽鳥（ハトリ）」という地名がある。また、「朝布」は、「アソフ（ウ）」と訓み、古代の下総国埴生郡麻生（生）郷に相当し、現在、五斗蔵瓦窯跡のすぐ北に「麻生」という地名がある。

このような地域名のあり方は、これまでの文献史料や出土文字資料にも散見しているのである。例えば、「日本靈異記」中巻「力女、捨力シ試みる縁 第四」の冒頭に「三野の国片縣の郡小川の市に一の力女有り」とみえる「小川の市」は、美濃國方県郡内の郷名には該当するものはない。「小川」はむしろ市に設置された地域名と考えるべきであろう。

一方、全国各地の古代遺跡から出土する文字資料には、国都都

安瀧郡
波補
多川舍
通廢縣
訖夷長
大家
安瀧郡
刺鹿
邑尾
佐渡
湯東
静間
高田
井上
新里
大國
押道
高田
久喜
大國
新里

図5 出雲国郡郷名
〔元和古活字那波道円本
「諸本集成 倭名類聚抄」
臨川書店〕

制下の郷名に該当せず、しかも現在、字名等で遺る地域名が頻出している。古代東国の一例であるが、一、二例あげておこう(註5)。

古代東国の神社支配の拠点である香取神宮の近くにある千葉県佐原市吉原の地に、吉原二土遺跡が所在する。この古原二王遺跡の豎穴住居跡から数多くの墨書き土器(九世紀頃)が出土しているが、その中に「吉原仲家」「吉原大島」と記されたものが日立っている。現在の佐原市内に字名「吉原」が存在し、遺跡の立地する地点がまさに吉原の地であり、遺跡名ともなっているのである。

もう一例も、墨書き土器である。甲府盆地の北西部、現山梨県韮崎市藤井は「和名類聚抄」の郷名としてはみえず、初見は宇波刀(うわと)神社の附神像の銘にある大文十二(1543)年の年紀をともなう「藤井保」である。この地域の発掘調査(宮ノ前遺跡)で九世紀の豎穴住居跡から「葛井」(ふじい)と墨書きされた土師器が出土した。「藤(葛)井」という地名は、古代にも存在したことが明らかとなった。

蛇喰遺跡出土のヘラ書き須恵器および五斗蒔瓦窯跡出土のヘラ書き瓦に記されたこれらの地名は、須恵器や瓦の生産に従事した工人集団が住む地域名と考えられる。この地名こそが、在地社会における共同体の生産単位を示す地域名であるとみてよい。おそらく、里(郷)名は、例えばヘラ書きの「林」が意志郡拌志郷に通じるように、それらの地名の一つを単(郷)名に採用したにすぎないのであろう。

古代の地名については、これまで六国史をはじめとする編纂物および宮都や地方官衙跡から出土する律令税制等に關わる木簡や漆紙文書などにみえる国都単(郷)制に基づく地名表記にのみに研究の眼が専ら向かれていた傾向は否定できない。しかし、全国各地から出土する墨書き土器に加えて、今回の蛇喰遺跡のヘラ書き須恵器や五斗蒔瓦窯跡のヘラ書き瓦に記された地名は、在地社会に広範に分布した伝統的な地域名であり、その地域は須恵器や瓦などの生産単位母体をはじめとして、様々な形で古代国家の中で有効な単位として活用されていたと想定される。その意味では蛇喰遺跡の多量のヘラ書き須恵器は古代の在地社会における地域単位について、再検討する大きな資料を提示したのではないか。

以上のように、蛇喰遺跡出土のヘラ書き須恵器は、古代社会における文字の習熟度の実態と、国都



図6 龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土のヘラ書き瓦

「服止」

「皮止」

「皮止

里(郷)名以外の地域名称の存在を鮮やかにものがたるきわめて貴重な資料群であるといえよう。



図7 龍角寺五斗蔵瓦窯跡とその周辺 [同報告書より]

三

- (1) 挫「墨書き器とその字形 古代村落における文字の実相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集1991年。
 - (2) 挫「古代社会における文字の習熟度は、どの程度であったか?」『国文学』1996年5月号。
 - (3) 地名について、「黒」と「白」を標識する地域で対比して使用している例としては、下野と陸奥の国境において下野郡の那須郡「黒川郡」に対して、陸奥国磐梯の白河郡「白川郡」が存在する。
 - (4) (財) 印旛郡市文化センター、「千葉県印旛郡鶴見町 龍角寺五斗町瓦窯跡」1997年。
 - (5) 木簡・漆筆文書・墨書き器などの古文書資料から地名と考えられるものを集成した成果は、最近刊行された(財) 鳩川文化振興財団「古代名地名大系」(鶴見町、1997年)に収められている。

2. 蛇喰遺跡出土の玉について

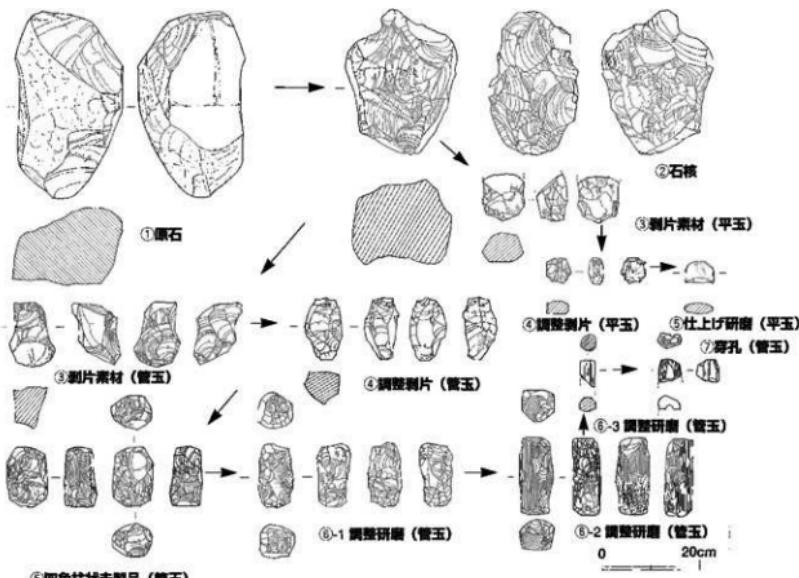
片岡 時子

1) 玉の制作工程について

玉には平玉、管玉、勾玉、丸玉、切子玉、算盤玉、臼玉があるが、出土資料が比較的多い碧玉製管玉・平玉、水晶（石英）製平玉・丸玉、貝岩製平玉の製作工程について、検討を加えた。

碧玉製管玉未成品（第1図）

大きく分類すると①原石②右核③剥片素材④調整剥片⑤四角柱状未成品⑥調整研磨⑦穿孔⑧仕上げ研磨という工程になる。原石採取に際しては、現時点では、採掘遺構が花仙山周辺で確認されていないことや、花仙山は地すべり地帯のため、当時、崩落により落下した玉材が、谷間やその付近で数多く採取できたのではないかと考えている。図示している①は原材に近いものと考えられ、剥離作業を行った痕跡も認められる。両面ともに自然面が残り、原材の表皮や玉として不適格な部分を剥離作業により除去したものと思われる。②の右核にはやや円盤状の剥離痕が残る。右核からは③のような四面体を意識した目的剥片をとる。④は剥片素材に剥離調整を加えた調整剥片。断面が板状、方形状、不整多角形のものと分かれる。⑤は四角柱状未成品。上下端面、側面と全面に二次調整を施す。側縁部には細かな打裂痕も認められる。⑥は調整研磨。全面に研磨を施し、多面体を形成する。これは、面を平坦にし安定させることにより、次の作業である穿孔を容易に行うことも兼ねている。⑦は穿孔。図示しているものは片面穿孔が残る欠損品。最終段階の仕上げ研磨は図示できるものが無いが、多面体の稜線を丁寧に研磨し、円柱状に仕上げる。



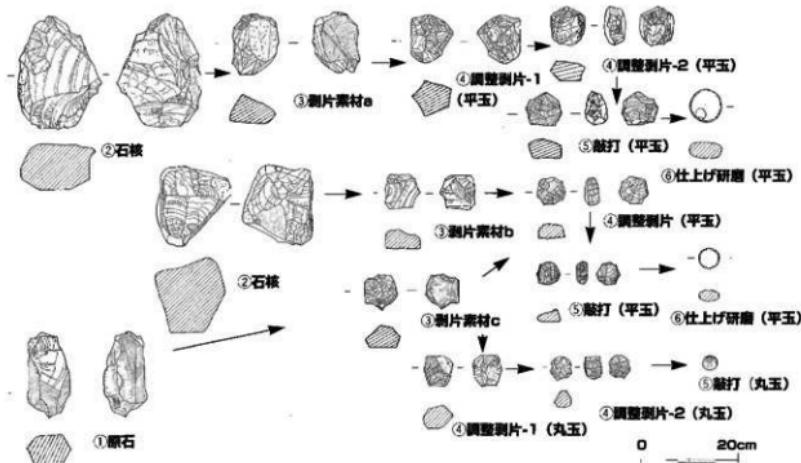
第1図 碧玉製管玉・平玉製作工程

碧玉製平玉未成品（第1図）

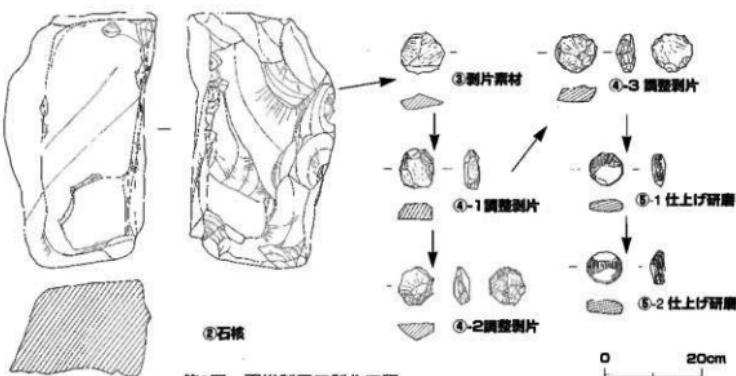
製作技法の工程は、①原材②石核③剥片素材④調整剥片⑤仕上げ研磨となる。平玉の場合は③でやや厚みのある剥片素材をとる。④で剥離調整を加え、形を整えるが、両面に剥離調整を加えるものと、平坦な素材面を生かし、片面と周縁部のみに剥離調整を行うものがある。いずれも側面には比較的細かな剥離調整を入れ、平坦にし、直方体の断面をつくる。⑤最後に全面に研磨を施す。断面は棱円形を呈す。

水晶・石英製平玉未成品（第2図）

製作技法は①原材②石核③剥片素材④調整剥片⑤敲打⑥仕上げ研磨という工程が考えられる。



第2図 水晶・石英製平玉・丸玉製作工程



第3図 頁岩製平玉製作工程

剥片素材にはa石核状の剥片素材、b主要剥離面もしくは素材面を残した剥片素材、c六角柱の水晶を分割した剥片素材の3種類がみられる。a、bは石核の形状から③の目的剥片の採取に違いがみられるが、cの場合は目的器種の大きさに見合った原石を直接、剥片素材として利用している。④ではaの状態の素材には全面に剥離調整を入れ、bやcの素材には片面あるいは両面の平坦面を残したまま周縁部と側面に剥離調整を入れ、目的の形に整える。⑤いすれも細かい敲打を加え、整形調整を行い、⑥研磨仕上げをする。

水晶・石英丸玉未成品（第2図）

検討資料が少なく、明確ではないが、製作技法の工程は、①原材②石核③剥片素材④調整剥片⑤敲打⑥仕上げ研磨と考えられる。③の丸玉を目的とする剥片素材は、cの六角柱の水晶を分割した剥片素材が主に使用されている。④剥片素材に細かい剥離調整を入れ、球形に整える。⑤細かい敲打を加え、研磨を行う。

頁岩製平玉未成品（第3図）

製作工程は①原材②石核③剥片素材④調整剥片⑤仕上げ研磨となる。③石核から円盤状の剥片素材をとる。頁岩は板状剥離するので、比較的簡単に手頃な剥片素材が採取できる。④次に平坦な素材面を生かしたまま、周縁部に簡単な剥離調整を加え、円形にする。側面に比較的細かな剥離調整を施す。⑤研磨により剥離痕の稜線をとり、角が丸くなるまで磨き、平玉に仕上げる。

2) 蛇喰遺跡の玉生産について

古墳時代においては、装身具として各地で盛んに生産されていた玉だが、奈良～平安時代においては激減する。それは7世紀以降、衣服染色の技術が進み、冠位十二階の制定により、冠や衣服の質と色で身分制度を確立したためアクセサリーとしての玉は不用となったともいわれる。全国的にみると奈良時代以降、玉生産を続けていた地域は、琥珀製玉を作る岩手県久慈市周辺、島根県では出雲国府に隣接する大庭工作と玉湯町に限定されているようである。この時代の主な玉の用途としては、¹⁾『出雲国風土記』意字の条天平五年（733年）や²⁾『延喜式』の臨時祭の条にみると祭祀や、太刀や刀子、仏具の装飾、寺院の鎮壇具、佩飾品、墓石などに使用されたり、³⁾墳墓に埋納されている例が挙げられる。

今回の蛇喰遺跡の発掘調査では多くの玉未成品が出土した。玉の種類には平玉、管玉、勾玉、切子玉、丸玉、算盤玉、臼玉があり、玉材には碧玉、石英、水晶、めのう、頁岩、黒色珪質頁岩、緑泥石が使用されていた。そのうち平玉未成品は75%の出土量を誇り、その多くは8世紀後半～9世紀代の須恵器に伴って出土した。蛇喰遺跡の平玉にはすべて穿孔がみられないこと、古代においては、寺院の鎮壇具や墓石として使用されていたことを考えると、平玉は身を飾る装飾品としてはほとんど用いられなかったと推定できる。

¹⁾ 总部神戸。郡家の正西二十一里二百六十步なり。圓造、神吉詞奏しに、朝廷に参向ふ時の御沫の急玉作る。故、急部と云ふ。以下省略

²⁾ 凡出雲国進御富岐玉六十進三時大殿祭料三十八連、臨時祭竹四連毎月上旬以前、令意宇都神、長作氏造備并使進上加藤義成「文献にみる玉作について」『松江考古』第2号1979年

本文中で、玉の献上の意味として因國神賀詞「延喜式」の「白玉の御白髪座し、赤玉の御阿良良座し、青玉の水江の行相に大八嶋國知りしめす天皇命の手長の第御代を以下省略」を、白玉の如く白髪までご長命で、赤玉の如く健康であられ、青玉の端々しく速なっているように天下をお治めになるようにこの神宝を捧げますと要約され、玉は折持の御玉、護符にあたると指摘されている。

³⁾ 秋山浩三「奈良・平安時代における墳墓と珠玉」『古代文化』第49巻第12号・同第50巻第1号参照

蛇喰遺跡出土の平玉の玉材には水晶、石英、碧玉、頁岩、黒色珪質頁岩が使われ、そのうち石英、水晶が68%と群を抜き最も多い。すでに加工を施し、原形をとどめない石英と水晶は区別しがたいが、六角柱で、ほぼ無色透明なものを水晶、半透明で不規則な形をしたものを行英として扱った。ただし、蛇喰遺跡でみられる水晶はガラスのように透き通るような良質の水晶はみられない。水晶と石英を比較すると、水晶7%、石英61%で、石英製平玉未成品の出土量が極めて多い。それは、水晶の原石が少なかったことや、採取しても毛製作には適しない大きさであったということが、水晶製平玉の生産が少ない要因でもあるが、¹⁾供給先では、その希少性と透明さから両者は多少なりとも区別して使用されていたのではないかと考える。また、碧玉製平玉未成品の出土がわずか15%と少ないのは、同時期の²⁾畿内における遺跡からの碧玉製玉の出土例が少ないとからも同える。頁岩製平玉未成品については16%と碧玉製平玉未成品とほぼ同率で出土している。「出雲國風土記」の嶋根の条に島根半島の玉結浜（現美保関町玉江浦）では、多くの黒色頁岩の砂礫が打ち上げられているとの記載や、現在でも採取できることから、この付近から運ばれたものにちがいない。板状剥離をする石材の性質から、比較的加工しやすく、「出雲國風土記」の嶋根の条にも碁石、砥石を産するとの記載があることから、そういった用途に使用されていたと考えられる。一方、黒色珪質頁岩の出土は1%と極めて少ない。これはいわゆる那智岩といわれる艶のある石で、現代でも碁石として使用される。

管玉未成品は全体の14%出土しており、ほとんど碧玉で作られている。勾玉未成品はめのう製、碧玉製と両方の石材で作られているが、7%と出土は少ない。切子玉、算盤玉、丸玉未成品はいずれも水晶製で、出土量は合わせて4%にすぎない。緑泥石は全体の2%の出土で、臼玉がつくられている。緑泥石は九州地方で産出される滑石に類似しており、やや光沢があり、非常に軟質な石材である。出雲地方では子持ち勾玉や有孔円盤などに使用されている。

今回、蛇喰遺跡で出土した碧玉製玉の統計をみると、花仙山という碧玉の産出地があるにもかかわらず、全体の27%と出土量が少ない。隣接する出雲玉作跡出土の玉の組成を年代順にみてみると、古墳時代前期の工房址である71C II号址では碧玉製管玉未成品が150個以上出土し、原石、剥片が大量に出土している。メノウ、石英も若干の出土をみるが、多くは剥片素材で、目的器種は明らかではない。71C II号址よりやや新しい71B I号址でも碧玉が最も多く使われ、管玉未成品（60%）、勾玉未成品（25%）、丸玉未成品（7%）の順に作られている。水晶・石英と緑泥石はほぼ同量の出土で、水晶・石英では管玉、丸玉が作られ、緑泥石では臼玉が作られている。古墳時代中期の71A I号址では碧玉（62%）、石英（28%）が主な石材ではあるが、玉未成品出土量の総数は古墳時代前期のT房址からの出土量と比較すると激減する。ここでは碧玉製管玉未成品と水晶・石英製算盤玉未成品が出土している。古墳時代後期の69A I号址では碧玉と水晶・石英が同率で出土するようになり、碧玉製管玉と水晶・石英製丸玉が主に作られる。時期と生産内容により若干違いはあるが、出雲玉作跡では、古墳時代における碧玉製玉未成品の出土量はほぼ70%に達するが、時期が下るにつれて減少し、逆に水晶製玉の生産が増えて

1) 奈良時代においては透明なガラスを作るのが難しく、透明な質感を求める場合に水晶を用いたとされるが、水晶は諸經典に記く七宝のひとつでもあった。また、秋山階三氏によると東大寺金堂や興福寺中金堂の水晶塔は透明度の高いかなり上質なものだか、塔基から出土するものはやが落ちると指摘されている。

2) 「近畿出土の古代珠玉類の集成とその特質」『研究調査報告』大阪府埋蔵文化財調査研究センター第1集 1997年 近畿地方における古代の珠玉出土例一覧表参照

いくようである。

一方、碧玉未成品は8世紀中頃～後半を中心とした六反出遺跡で大量にみられる。ここでは碧玉製半玉未成品が69%、水晶・石英製平玉未成品が31%という数字で、多量に碧玉を使っていたことがわかる。その他にめのう製勾玉未成品が2点、碧玉製管玉未成品が1点確認されている。最近の調査で明らかになった8世紀中頃～9世紀代の玉作工房址がある岩屋玉作遺跡では、出土した玉未成品の多くは水晶・石英、頁岩製の平玉未成品で、碧玉製半玉未成品は少ない。「出雲国計会帳」「正倉院文書」天平五年（733年）の文献の記事にも、進上水精玉壹匁伍拾粒事同口進上水精玉壹百顆事の記載があり、8世紀代に水晶製品が作られていたことがわかる。供給先での碧玉製玉の使用例も少ない。碧玉製平玉は、寺院の鎮壇具や正倉院宝物の双六玉には使用されていないこと、¹⁾ 碧玉製勾玉は正倉院御物の金銅輪幡鉸具と²⁾ 元興寺塔の鎮壇具にわずかにみられること、碧玉製管玉は平城京内で1点の出土しかみないこと、³⁾ 古代墳墓においても碧玉製長の埋納は確認されず、水晶製玉が圧倒的に多い。また、島根県下でも⁴⁾ 8世紀後葉～9世紀前半とされる安来市中山火葬墓の石製骨蔵器から穿孔が認められない水晶球が2点、いずれも火を受け、割れた状態で出土している。奈良時代以降は管玉、勾玉が一般に用いられなくなると、碧玉の需要も激減し、かわりに水晶製玉が多く作られる傾向がある。

以上のことを考え合わせると、古墳時代に花仙山周辺で碧玉を主体に玉を生産していた集団は、国家に仏教思想が浸透し、古墳築造が衰え墓の形態も変化し、さらに各地に寺院が建立されるようになると、水晶製玉の生産に移行してきたと考えられる。そして、⁵⁾ 出雲国造家と密接な関係がある花仙山の麓にある玉作の地だけが⁶⁾ 神寶洞奏上儀礼に合わせた祭祀用の特別な玉を細々と作り続け、「続日本後紀」天長10年（833）の豊持をもって奏上記事に現れなくなったと同時にそれも衰退していく。一方、⁷⁾ 政治的支配力を失った国造家のわりに、台頭してきた在地の氏族である⁸⁾ 林氏によって玉の生産は引き継がれ、林氏の本拠地と考えられる⁹⁾ 卡瀬川左岸の林地区周辺に玉作工房が移り、林氏のもとで、石英、水晶製玉を主として生産するようになり、献上品として少なくとも¹⁰⁾ 11世紀初頭までは玉を生産していたのではないかと考える。

1) 石川茂助「奈良時代における玉の種類と用途」「考古学雑誌」第二十卷第五号昭和15年

2) 秋山浩三「近畿島の古代珠玉類の集成とその特質」「研究調査報告」1997年

3) P151註2 参照

4) 「中山遺跡・谷林遺跡」「一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ」建設省松江道工事事務所・島根県教育委員会1994年3月

5) 内田律雄「『出雲國風土記』所載の林臣について」「青山考古」第6号1988年4月

内田律雄氏は木府の律令制下の生産のなかで、律令制時代には花仙山周辺と国府に限定された玉作工房が存在し、出雲国下に付随した国工の玉生産の開始は時期的にはほぼ出雲国造による神寶洞奏上儀礼に対応すると指摘する。

6) 出雲国造、神寶洞を委す。玉五十八枚赤水精八枚、白水精十六枚、青石玉三十四枚以下省略「延喜式」加藤義成「文献にみる工作りについて」『松江考古』第2号1979年

本文中、先生は古代において、六角の結晶になる水晶と水晶のよう透明さと光沢のあるメノウとを総称して「水精」といったと考えられ、「赤水精」は赤メノウ、「白水精」は白メノウ、青メノウは「青石玉」であったと解釈されている。

7) 内田律雄「出雲國風土記」大井浜の須恵器生産（下）古代学研究第120号1990年

8) 出雲国堂宇郡の都心で、「出雲國風土記」に主政外少初位上齋士二等林臣とその名がみえる。その出自は意宇郡志志郡と考えられ、林村別所には私寺と推定される松之前磨寺がある。付近の包含層から、研磨痕の残るめのう裏勾玉未製品が1点出土している。

9) 奈良時代以降の玉作遺跡は林地区に集中しており、水晶製平玉未製品の出土が圧倒的に多い。

10) 「主税院正税還却帳」「九条家文書」西暦2年（1078）左弁貴民保二年貢官、六月一日進上水精二百丸、総八百拾參束人所司四年八月一日御帳、進上水精丸九料幅八百拾參束 これは出雲の税額を返却した記録で、卡を進上しただけ税額が返却されていることがわかる。

3.まとめ

片岡 詩子

1) 土器の特徴と年代

5カ年にわたる調査で多量の土器が出土した。須恵器の器種は、蓋、皿および壺の高台のつくもの、つかないもの、壺、甕、さらには、円面鏡や金属器を模した須恵器や水滴として使用したと考えられる小型の菱壺形上器など特殊なものもみられ、非常にバラエティに富んでいた。以下に最も多く出土した蓋、皿、壺についての特徴を簡単にまとめてみたい。

蓋は内面にはかえりがなく、つまみは扁平なものが多い。口縁端部は嘴状に屈曲するものが多く、器高は低めで天井部は平坦になるものが日に付く。切り離しはヘラ切りのものと回転糸切りのものがあり、天井部周辺のみに回転ヘラケズリを施し、回転ナデ調整するものがある。

皿は口縁部で外反するものと口縁部端部の内面に段をもつものと2通りのタイプがある。前者はヘラ切りによる切り離し、後者には回転糸切りの切り離しがみられる。高台のつく皿にも同じ傾向がみられる。

壺は大きく3型式に分けることができ、1.底部から外傾気味に立ち上がるものの2.内湾気味に立ち上がり、口縁端部が肥厚するものの3.逆ハの字状に大きくひらき、底径がやや小さいものと分類でき、切り離しは1は回転糸切りのものとヘラ切りのもの、2、3は回転糸切りのものがある。高台のつく壺は底部から外傾気味に立ち上がるものと、逆ハの字状に大きくひらき、壺部が深いものがあり、いずれも切り離しには回転糸切りとヘラ切りの2通りがみられる。皿、壺の底部の切り離し後の調整は、回転糸切りの後は未調整、ヘラ切りのものはナデ調整を施している。

焼成にはばらつきがあり、灰色や、レンガ色で硬質のもの、白灰色、淡褐色で軟質なもの、赤褐色を呈し、土師器に近いものなど様々である。

律令時代においては各地で在地産の窯が築かれ、出雲地方でも最近の発掘調査でその所在が明らかになっている。社邊氏の本拠地とする池ノ奥窯跡群（松江市大井町）、古曾志古窯跡群（松江市古曾志町）、小松古窯跡（八束郡宍道町）、木船遺跡（平田市平田町）、発掘調査はされてはないが、この玉湯町に隣接している湯崎窯跡（松江市忌部町）など7世紀～10世紀までの窯が存在している。とくに8世紀代には国庁など官衙整備のため、全国的に須恵器生産が活発になり、ここ出雲地方でも8世紀の終わり頃から須恵器窯が増えてくる。

供給先のひとつである出雲（幻）¹⁾でも複数の窯からの搬入品が認められるが、この蛇喰遺跡でも同様な傾向がみられる。とくに¹⁾口縁端部に段をもつ皿類は、「由」や「林」などヘラ書き文字が記され、湯崎窯のものと同じ特徴をもっていることから、ほぼこの窯で焼かれたものと思われる。同じく出雲国でも「由」や「白出」、「門」など湯崎窯と思われるヘラ書き土器が出土している。その他にも律令期の各窯の特徴をもつと思われる須恵器がみられるが、今の段階では产地を特定できない。

消費地で搬入された土器から年代設定を行うのはやや問題があるが、様々な特徴から検討して出雲国序IV・V型式にほぼ併行する須恵器と考えられ、蛇喰遺跡は8世紀後半～9世紀代の遺跡であると推定できる。

1) 内田伸雄「『出雲國風土記』所載の林抜について」『青山考古』1988年

2) 蛇喰遺跡の性格

次に蛇喰遺跡の性格について触れてみたい。掘立柱建物跡は現時点で3棟の建物を想定したが、残念ながら全面を検出できなかったので、全容は把握することはできなかった。建物跡に伴って出土した遺物も少なく、同時期と思われる周辺の包含層出土の遺物から円面鏡、綠釉、そして¹⁾製塙上器が多量に出土している。須恵器は壺、皿の類いが多く、とくに壺は赤褐色を呈する須恵器の出土が目立った。一方、玉未成品は多量の平玉が出土したが、いずれも完成品に近い。一般的に円面鏡、綠釉、製塙上器の出土状況が寺院、官衙施設など公的施設に多いことや完成品に近い玉が出土することを考えると、ほぼ仕上がった玉を集積して管理する官衙的な建物跡ではなかったかと推定する。明確な時期は明らかではないが、出土した須恵器から9世紀代を中心機能していたと思われる。

竪穴住居状遺構の覆土中からは多量の遺物が出土している。とくに須恵器が多く、489点の出土をみた。そのうちヘラ書き土器が62点、床面から出土した5点を合わせると、総計67点出土している。また、器種別でみると蓋、皿、壺類の出土が圧倒的に多かった。その他、煤のついた土師器甕、鍋、土製支脚といった煮炊き用具も出土する。製塙土器は二次焼成をうけたものが多くいた。一方、玉未成品は土器に比べると出土量は少なかったが、碧玉、水晶・石英、めのう、頁岩の玉材が出土している。そのうち、碧玉製玉材が最も多く、管玉、勾玉未成品がみられた。その他、鉄製品、スラグなども出土する。古墳時代の玉作工房址の玉の出土量と比較すると極め



第1調査区出土「林」文字入り須恵器



出雲玉作資料館20周年記念シンポジウム「ヘラ書き土器のなぞ」(平成10年3月22日)

1) 内田律雄「鳥取県・島根県」「日本土器製造研究」近藤義郎編吉木書店1994年

本文の奈良・平安時代の埴輪土器から推定すると、蛇喰遺跡で大量に出土している埴輪土器の多くは六連式と呼ばれるもので、出雲国庁などに出土をみる。

て少ないが、この時代における玉の需要を考えると妥当であり、さらに煮炊き用具が出土することから住まいと兼用の作業小屋の要素の強いものだったと思われる。床面から出土した須恵器から8世紀後半～9世紀初頭の時期と考えられる。

さて、ヘラ書き須恵器が総数503点と一遺跡からは全国的にも類をみないほどの多量の出土をみた。この文字が一体何を語るのかは、今後、充分に検討する必要があるが、私なりに以下のように若干の考察を加えてみた。

平城京や出雲国府では施設名や役職名、土器の器種や用途を表わす墨書き土器が出土する。また、¹⁾ 岩手県久慈市源道の玉作遺跡で出土した墨書き土器の文字は数量を表したものとされている。それに対し、蛇喰遺跡では「白田」、「由」、「林」など地名を想定させるヘラ書きが數多く記されているにもかかわらず、そういう類いの文字のある須恵器の出土が非常に少ないのはなぜであろうか。律令制が浸透しているこの時代には生産管理は徹底し、文字がその手段として使用されていることは、明らかである。推察ではあるが、水晶（石英）をモチーフとする玉作りが多くみられることや「白田」の文字の出土量が最も多いことを考えると、²⁾ 「白田」の「白」は水晶（石英）を表し、「白田」は水晶の玉作りの集落を示唆し、同じく「由」、「林」など地名が表記されているヘラ書き土器も、モチーフを牛座していた地域と関係があるのではないかと考える。仮にモチーフの各集落から蛇喰遺跡に玉未成品を搬入し、集積していたのならば、本遺跡から环、皿類が多量に出土していること、多量に出土した平糸には孔があいていないことから、搬入する際には、玉の生産地名が表記してある須恵器に入れて運び、管理されていたのではないかと推定する。深い壺だと玉の出し入れがしにくく上、壺も確認しにくいため、浅い容器に入れて運ぶほうが効率がよいと考えられる。

以上の点から、時期的な変遷はあると思われるが、蛇喰遺跡は奈良から平安時代における玉の生産、集積、管理を総合的に委ねられた公的な機関であるといえよう。

七湯町はモチーフの一大産地として、全國的にも稀にみるほど多くのモチーフの玉作遺跡が存在している。古墳時代における玉作遺跡も3件の国指定を受け、そのうちの宮坂地区はすでに史跡公園としての整備が行われ活用され、残る宮ノ上、玉ノ宮地区も公園整備の青写真がすでに作成されている。蛇喰遺跡の発見はそれに統くものであり、弥生時代終末期に始まった七湯町のモチーフ作りが、奈良時代以降においても実施され、長期間にわたってモチーフ作りを行っていたことが証明された。また、遺跡の性格も古墳時代の玉作りとはやや趣を変え、官衙的支配が強いものと推定される。

本遺跡が史跡公園の隣接地であることから、将来的には史跡公園の範囲を広げ、歴史的な玉の産地として保存し、古代モチーフ作りの里として有効な活用を目指したい。

1) 『源流遺跡発掘調査報告書』(財) 岩手県埋蔵文化財センター昭和58年 遺構外ではあるが「九万」という数字や大きさを表す墨書き土器が出土している。

2) 『出雲國風上記』の意郡の条では、現在の能登郡伯太町に水晶を産する長江山や島川とも書かれた伯太川の記載があり、「白田」と水晶の関連性が伺われるが、七湯町七湯湖の通称トチハタ谷でもやや大型の石英・水晶が採取される。

最後になりましたが、多くの仕事を抱えているにもかかわらず、報告書作りに専念させて下さった勝部術館長と惜しない力を与えて下さった金森みのりさんに、この紙面を借りて心から感謝致します。

出雲国出土のヘラ書き須恵器

一覽表

遺跡名	文字の種類と数量	器種	遺跡所在地(律令時代の郡名)
出雲國庁跡	門・山(4)・苗代 白田・社邊・口市 邊・大(2)	壺(外面)・蓋壺 (内面)など	松江市大草町(意宇郡)
福富I遺跡	社邊(3)	高台壺(底面外面) 壺(底部内面・外面)	松江市乃木福富町(意宇郡)
吉木遺跡	社邊	蓋壺(内面)	八束郡八雲村(意宇郡)
半床II遺跡	由	壺(側面・底部外面)	八束郡玉湯町(意宇郡)
湯峰窯	由(10)・林・櫻	高台壺・瓶・高台瓶 (底部外面) 蓋壺(内面)	松江市忌部町(意宇郡)
史跡出雲玉作跡	由・白・門	小片のため不明	八束郡玉湯町(意宇郡)
大堤II遺跡	由	壺(底面)	八束郡玉湯町(意宇郡)
古曾志遺跡	見	壺(底部外面)	松江市古曾志町(秋鹿郡)

平安至成基

NO	玉村	壺	径	高	厚	底	年	地区	上局	備考	出所番号
1	鶴谷	3.9	15.0	15.5	0.9	97	A	1			5540209
2	鶴谷	3.9	16.4	16.5	1.0	97	A	1			5540217
3	鶴谷	3.2	12.7	13.4	0.5	97	A	1			5540248
4	石英	5.3	16.0	16.7	0.7	97	A	1			
5	石英	2.8	15.8	16.5	0.5	94	A	1			
6	石英	3.7	17.1	17.5	0.5	97	A	1	穴打		
7	石英	3.5	15.5	17.5	0.5	97	A	1			
8	石英	3.5	16.0	16.5	0.5	94	A	1	穴打		
9	石英	5.5	19.1	21.9	0.6	97	A	1			
10	石英	3.9	17.6	18.1	0.5	97	A	1			
11	石英	3.2	12.3	12.8	0.6	97	A	1			
12	石英	3.9	16.9	18.3	0.8	97	A	1			
13	石英	3.6	17.1	17.7	0.5	97	A	1			
14	石英	1.9	12.8	13.5	0.5	97	A	1			
15	石英	2.9	16.0	16.5	0.5	97	A	1			
16	石英	2.9	18.0	18.0	0.5	97	A	1			
17	木桶	2.2	14.4	14.4	0.4	97	A	1			5540204
18	木桶	3.3	16.9	16.9	0.1	97	A	1			5540202
19	石英	3.5	15.0	15.2	0.0	97	A	1			5540203
20	石英	4.5	18.8	19.7	0.2	97	A	1			
21	石英	3.8	17.0	18.0	0.5	97	A	1			
22	石英	1.6	15.2	17.0	0.5	97	A	1			5540205
23	石英	2.6	19.5	20.2	0.1	94	A	2			5540206
24	石英	1.6	14.3	14.3	0.5	94	A	2			5540207
25	石英	7.2	21.5	22.3	0.2	94	A	2			5540219
26	石英	2.3	13.7	15.7	0.1	94	A	2			5540221
27	石英	3.7	16.8	17.8	0.2	94	A	2			5540220
28	石英	2.6	16.8	20.2	0.2	94	A	2			5540218
29	石英	2.2	15.2	16.3	0.5	97	A	2			5540217
30	石英	4.9	20.6	21.0	0.3	94	A	2	穴打		
31	石英	2.3	14.9	15.7	0.7	97	A	2			
32	石英	4.8	17.2	19.1	0.0	94	A	2			5540219
33	石英	6.0	20.0	21.3	0.7	94	A	2			5540204
34	石英	2.1	12.5	13.9	0.2	94	A	2			
35	石英	2.1	12.6	13.8	0.2	94	A	2			5540215
36	石英	2.9	14.2	14.8	0.3	97	A	2			5540216
37	石英	2.9	15.7	17.8	0.5	94	A	2			
38	水晶	1	11.5	11.9	0.8	97	A	4			5540234
39	水晶	2	15.1	15.1	0.0	97	A	4	穴打		
40	石英	3.4	16.7	17.2	0.1	94	A	4			
41	石英	2.4	14.9	15.7	0.5	94	A	4	穴打		
42	石英	2.6	15.6	15.6	0.9	97	A	4			5540237
43	石英	2.6	15.6	15.6	0.9	97	A	4			5540235
44	石英	2.8	16.0	16.0	0.6	95	A	4			5540236
45	石英	2.3	15.3	16.6	0.1	97	A	4			
46	石英	2.9	17.2	17.2	0.3	97	A	4	穴打		
47	石英	0.4	8.9	8.9	0.5	97	A	4			5540238
48	石英	3	16.4	16.4	0.8	94	C13	5			5540236
49	石英	2.8	16.2	16.2	0.2	97	A	4			5540237
50	石英	2.6	15.5	15.5	0.4	97	A	5			5540238
51	石英	5.8	18.6	18.6	0.7	97	A	5			5540240
52	石英	3.2	18.1	18.1	0.5	97	A	5	穴打		

青玉未品

227 青玉	13.1	19.7	29.7	16.1	94	A	1		第400511
278 青玉	8.1	14.8	30.7	16.5	94	A	1		
279 青玉	10.5	18.9	31.5	14.0	94	A	1		
280 青玉	10.5	18.9	31.5	15.2	94	A	1		
281 青玉	15.5	25.0	35.5	15.2	94	A	1		
282 青玉	4.8	12.1	22.4	11.2	94	A	2		第42427
283 青玉	12.4	17.5	20.5	15.6	94	A	2		第42324
284 青玉	8.5	15.6	23.9	10.5	94	A	8		
285 青玉	8.5	15.6	23.9	10.5	94	A	8		
286 青玉	5.8	12.7	25.3	12.5	94	C14-4.5	3		第78082
287 青玉	16.3	17.4	25.5	14.9	94	C18	1		第83061
288 青玉	5.2	16.1	18.1	13.4	94	C18	1		
289 青玉	9.0	14.0	18.0	13.5	94	C18	1		
290 青玉	9.0	12.2	12.7	5.5	94	AT16	1		
291 青玉	7.6	14.1	30.0	12.0	94	AT13	1		
292 青玉	4.1	11.9	26.0	8.3	93	AT12SD04	6		第7801
293 青玉	10.6	14.6	31.1	15.5	95	BT1	2		第10246
294 青玉	11.1	15.5	14.9	15.1	95	BT1	2		
295 青玉	9.2	18.5	27.7	15.6	95	BT18	3		
296 青玉	9.2	21.4	29.7	13.7	95	BT18	3		
297 青玉	6.7	14.6	24.2	13.2	95	BT18	3		
298 青玉	10.5	18.5	27.5	15.5	95	BT18	3		
299 青玉	6.0	14.0	14.5	11.5	95	AT16	1		
300 青玉	3.1	13.1	29.5	7.1	95	AT16	2		
301 青玉	16.8	29.0	37.8	7.4	95	AT16	2		第10021
302 青玉	9.9	17.2	27.5	9.5	95	BT12	3		
303 青玉	4.2	7.7	20.5	6.5	95	BT12	3		
304 青玉	3.2	11.1	17.9	10.5	95	BT12	3		第113212
305 青玉	6.3	13.6	24.5	12.9	95	BT12	3		第113211
306 青玉	6.4	13.8	22.1	11.4	95	BT18	4		
307 青玉	5.1	13.2	26.0	10.4	95	BT18	4		
308 青玉	10.1	18.4	26.4	15.3	95	BT18	9		
309 青玉	5.3	15.5	32.1	7.5	95	BT11	1		
310 青玉	8.5	13.6	31.1	12.2	95	BT11	1		
311 青玉	2.7	11.5	25.5	10.5	95	BT11	1		第113213
312 青玉	6.1	14.1	27.5	12.0	95	CT17	3		
313 青玉	1.1	6.3	9.5	-6.3	95	A	3		
314 青玉	2.7	15.4	21.8	14.2	95	A	3		
315 青玉	15.2	16.2	29.3	13.9	95	AT18	4		第113212
316 青玉	7.5	15.4	24.2	14.5	95	CT15D03	5	S	第52821
317 青玉	7.7	16.4	32.2	13.8	95	CT18	3		
320 青玉	20.2	25.5	28.0	12.5	94	CT18	3		第78041
321 青玉	2.5	9.4	29.0	13.5	95	AT17	4		第113211
322 青玉	2.6	9.6	29.4	9.0	95	AT17	4		
323 青玉	6.2	15.9	21.8	12.0	95	CT18	4		
324 青玉	6.7	20.6	22.8	14.4	95	AT12	4		第113210
325 青玉	6.5	25.3	13.5	11.5	97	A	2		第52822
326 青玉	12.2	24.2	27.5	15.5	97	A	2		第52822

勾玉未品

327 勾玉	9	16.0	28.8	12.3	97	A	2		第4228
328 勾玉	4.9	10.2	26.2	7.2	97	A	4		第42346
329 勾玉	4.7	12.3	27.5	7.3	94	A	2		第42348
330 勾玉	1.7	11.5	25.5	7.5	95	AT18	2		
331 勾玉	2.3	9.5	21.5	5.5	95	CT15D01	2		
332 勾玉	4.8	12.6	23.3	8.3	95	CT16	1		
333 勾玉	2.3	23.2	24.5	15.7	95	BT1	1		第113204
334 勾玉	3.7	11.5	25.5	7.5	95	CT16	1		
335 勾玉	23.1	24.5	43.1	13.9	95	CT16	1		
336 勾玉	10.1	17.7	29.2	16.2	95	CT12	2		第113202
337 勾玉	8.6	16.2	38.7	14.9	95	CT19	2		
338 勾玉	2.0	9.4	31.1	11.4	95	CT18	2		
339 勾玉	17.6	25.5	34.5	14.6	95	A	2		
340 勾玉	10.8	17.8	34.3	10.3	95	CT11	2		
341 勾玉	13.5	22.5	34.0	14.7	95	CT17	2		第121202
342 勾玉	1.7	11.5	25.5	7.5	95	CT17	2		第121203
343 勾玉	4.8	20.8	14.3	6.2	94	CT15	3		第78043
345 勾玉	15.3	30.3	23.8	13.4	95	BT16	4		
346 勾玉	18.1	35.5	14.8	17.1	95	CT16	2		第1212021
347 勾玉	8.5	25.7	11.5	12.0	95	BT15D01	2		第52812
348 勾玉	0.8	11.5	25.5	7.5	95	CT15D01	2		
349 勾玉	17.5	38.5	25.3	13.6	95	AT15SD02	2		第52811
350 勾玉	25.0	30.0	24.9	16.1	93	AT13	4		第122418
351 勾玉	1.1	11.1	11.0	6.2	94	CT14	3		第78045

丸玉

352 木晶	0.5	7.2	7.2	7.2	97	A	5		第44656
353 木晶	0.4	6.8	6.8	6.8	97	A	9		第44656

切子玉

354 木晶	4.3	13.1	16.3	11.9	97	A	1		第446510
--------	-----	------	------	------	----	---	---	--	---------

算盤玉

355 木晶	0.9	9.8	8.9	98	BT11	2			
--------	-----	-----	-----	----	------	---	--	--	--

網子玉

356 網子	0.1	4.8	4.8	2.9	95	AT13	2		第10656
--------	-----	-----	-----	-----	----	------	---	--	--------

その他

358 螺形石	2.7	13.3	15.7	9.5	94	A			
359 螺形石	39.6	47.7	31.0	16.5	95	AT13	4		第122419

螺旋形石

360 螺形石	3.3	25.0	—	5.6	95	CT18	5		第122419
---------	-----	------	---	-----	----	------	---	--	---------

有孔円盤

361 螺形石	8.3	44.3	—	6.8	93	CT15D02	(2)		第22356
---------	-----	------	---	-----	----	---------	-----	--	--------

白玉

362 鹿角石	0.1	5.0	5.0	2.5	—	BT11	3		第1132019
364 鹿角石	0.5	9.6	9.4	3.4	93	AT15SD02			第44655

鹿角石

365 鹿角石	0.3	9.1	9.1	2.8	95	CT17	3		第1212418
---------	-----	-----	-----	-----	----	------	---	--	----------

石核

366 細石核	1.8	29.0	16.0	3.5	97	A	19	—	第44656
---------	-----	------	------	-----	----	---	----	---	--------

369 細石核	0.7	25.0	14.0	3.2	94	BT12	3		第446512
---------	-----	------	------	-----	----	------	---	--	---------

蛇喰遺跡出土ヘラ書き須恵器

一覧表

NO	遺物NO	文字	基種	部位	出土位置	土層	備考	貯蔵番号
3	1-1-1	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		971501
3	1-1-2	白山	高台形	内	94CT-SI	3		972201
3	1-1-3	白山	高台形	底部外	94CT-SK02	5		951015
4	1-1-4	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		972807
5	1-1-5	白山	高台形	底部外	94CT-SI	2		9725017
6	1-1-6	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		974015
7	1-1-7	白山	高台形	内	94CT-SI	3		972802
8	1-1-8	白山	高台形	底部外	94CT-SK02	5		
9	1-1-9	白山	高台形	底部外	94CT-SK01	4		
10	1-1-10	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		972516
11	1-1-11	白山	高台形	内	94CT-SI	2		960213
12	1-1-12	白山	高台形	内	94CT-SI	3		972803
13	1-1-13	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		974020
14	1-1-14	白山	高台形	底部外C	94CT-SI	3		972845
15	1-1-15	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		
16	1-1-16	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		
17	1-2-1	白山	高台形	底部外	94CT-SK02	5		
18	1-2-2	白山	高台形	底部外C	94CT-SK02	5		
19	1-2-3	白山	高台形	底部外	94CT-SI	2		
20	1-2-4	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		973509
21	1-2-5	白山	高台形	底部外C	94CT-SI	3		973506
22	1-2-6	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		973504
23	1-2-7	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		9735011
24	1-2-8	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		9735010
25	1-3-1	白山	?	外	95S001		JBYS-30CT1.4に対応	
26	1-3-2	白山	?	底部外	94CT-SK02	5		975010
27	1-3-3	白山	?	底部外C	94CT-SI	3		974017
28	1-3-4	白山	?	底部外	94CT-SI	3		973508
29	1-3-5	白山	?	内	94CT-SI	3		
30	1-3-6	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		974018
31	1-3-7	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		974014
32	1-3-8	白山	高台形	底部外	94CT-SI	3		974008
33	2-1-1	山	高台形	底部外	94CT-SK01			
34	2-1-2	山	高台形	底部外	93A12S01			
35	2-1-3	山	高台形	底部外	94CT-SK02	5		
36	2-1-4	山	高台形	底部外	94CT-SK02	5		
37	2-1-5	山	高台形	底部外	94CT-SK02	5		
38	2-1-6	山	(重力崩壊)	内	93A12	1		
39	2-1-7	山	高台形	底部外C	94CT-SI	2		967526
40	2-1-8	山	高台形	底部外	94CT-SI	3		972503
41	2-1-9	山	高台形	底部外C	94CT-SI	3		9811010
42	2-1-10	山	高台形	底部外C	94CT-SI	3		973507
43	2-1-11	山	高台形	底部外	94CT-SI	3		
44	2-1-12	山	高台形	底部外	94CT-SI	3		
45	2-1-13	山	高台形	底部外	94CT-SI	3		
46	2-1-14	山	高台形	底部外	94CT-SI	3		
47	2-1-15	山	石立組	底部外	94CT-SK02			
48	2-2-1	山	石立組	底部外	94CT-SI	3		
49	2-2-2	山	石立組	?	94CT-SK01	5		
50	2-2-3	山	石立組	?	94CT-SI	5		
51	2-2-4	山	石立組	底部外	94CT-SK02	5		
52	2-2-5	山	石立組	底部外	94CT-SI	3		
53	2-2-6	山	石立組	底部外	94CT-SI	3		
54	2-2-7	山	石立組	底部外	94CT-SI	3		
55	2-2-8	山	?	底部外	94CT-SI	5		
56	2-2-9	山	石立組	底部外	95BYST1	3	96HとC地区の境	
57	2-2-10	山	石立組	底部外	94CT-SI	3		
58	2-2-11	山	高台形	底部外	94CT-SI	3		987402
59	2-2-12	山	高台形	?	97A	5		
60	2-2-13	山	高台形	?	95CT	4		
61	2-2-14	山	高台形	?	95CT	4		
62	2-2-15	山	高台形	?	95CT	4		
63	2-2-16	山	高台形	?	95CT	4		
64	2-2-17	山	高台形	?	95CT	4		
65	2-2-18	山	高台形	?	95CT	4		
66	2-2-19	山	高台形	?	95CT	4		
67	2-2-20	山	高台形	?	95CT	4		
68	2-2-21	山	高台形	?	95CT	4		
69	2-2-22	山	高台形	?	95CT	4		
70	2-2-23	山	高台形	?	95CT	4		
71	2-2-24	山	高台形	?	95CT	4		
72	2-2-25	山	高台形	?	95CT	4		
73	2-2-26	山	高台形	?	95CT	2		
74	2-2-27	山	高台形	?	95CT	3		
75	2-2-28	山	高台形	?	95CT	3		
76	2-2-29	山	高台形	?	95CT	3		
77	2-2-30	山	高台形	?	95CT	4		
78	2-3-1	山	?	内(C)	94CT-SI	3		
79	2-3-2	山	?	内(C)	94CT-SI	3		
80	2-3-3	山	?	内(C)	94CT-SI	3		
81	2-3-4	山	?	内(C)	94CT-SI	1		
82	2-3-5	山	?	内(C)	94CT-SI	3		
83	2-3-6	山	?	内(C)	95CT	3		96100012
84	2-3-7	山	?	内(C)	95CT	3		96100011
85	2-3-8	山	?	内(C)	95CT	3		
86	2-3-9	山	?	内(C)	95CT	4		
87	2-3-10	山	?	内(C)	95CT	4		
88	2-3-11	山	?	内(C)	95CT	4		
89	2-3-12	山	?	内(C)	95CT	4		
90	2-3-13	山	?	内(C)	95CT	4		
91	2-3-14	山	?	内(C)	95CT	4		
92	2-3-15	山	?	内(C)	95CT	4		
93	2-3-16	山	?	内(C)	95CT	4		
94	2-3-17	山	?	内(C)	95CT	4		
95	2-3-18	山	?	内(C)	95CT	4		
96	2-3-19	山	?	内(C)	95CT	4		
97	2-3-20	山	?	内(C)	95CT	4		
98	2-3-21	山	?	内(C)	95CT	4		
99	2-3-22	山	?	内(C)	95CT	4		
100	2-3-23	山	?	内(C)	95CT	4		
101	2-3-24	山	?	内(C)	95CT	4		
102	2-3-25	山	?	内(C)	95CT	4		
103	2-3-26	山	?	内(C)	95CT	4		
104	2-3-27	山	?	内(C)	95CT	4		
105	2-3-28	山	?	内(C)	95CT	4		
106	2-3-29	山	?	内(C)	95CT	4		
107	2-3-30	山	?	内(C)	95CT	4		
108	2-3-31	山	?	内(C)	95CT	4		
109	2-3-32	山	?	内(C)	95CT	4		
110	2-3-33	山	?	内(C)	95CT	4		
111	2-3-34	山	?	内(C)	95CT	4		
112	2-3-35	山	?	内(C)	95CT	4		
113	2-3-36	山	?	内(C)	95CT	4		
114	2-3-37	山	?	内(C)	95CT	4		
115	2-3-38	山	?	内(C)	95CT	4		
116	2-3-39	山	?	内(C)	95CT	4		
117	2-3-40	山	?	内(C)	95CT	4		
118	2-3-41	山	?	内(C)	95CT	4		
119	2-3-42	山	?	内(C)	95CT	4		
120	2-3-43	山	?	内(C)	95CT	4		
121	2-3-44	山	?	内(C)	95CT	4		
122	2-3-45	山	?	内(C)	95CT	4		
123	2-3-46	山	?	内(C)	95CT	4		
124	2-3-47	山	?	内(C)	95CT	4		
125	2-3-48	山	?	内(C)	95CT	4		
126	2-3-49	山	?	内(C)	95CT	4		
127	2-3-50	山	?	内(C)	95CT	4		
128	2-3-51	山	?	内(C)	95CT	4		
129	2-3-52	山	?	内(C)	95CT	4		
130	2-3-53	山	?	内(C)	95CT	4		
131	2-3-54	山	?	内(C)	95CT	4		
132	2-3-55	山	?	内(C)	95CT	4		
133	2-3-56	山	?	内(C)	95CT	4		
134	2-3-57	山	?	内(C)	95CT	4		
135	2-3-58	山	?	内(C)	95CT	4		
136	2-3-59	山	?	内(C)	95CT	4		
137	2-3-60	山	?	内(C)	95CT	4		
138	2-3-61	山	?	内(C)	95CT	4		
139	2-3-62	山	?	内(C)	95CT	4		
140	2-3-63	山	?	内(C)	95CT	4		
141	2-3-64	山	?	内(C)	95CT	4		
142	2-3-65	山	?	内(C)	95CT	4		
143	2-3-66	山	?	内(C)	95CT	4		
144	2-3-67	山	?	内(C)	95CT	4		
145	2-3-68	山	?	内(C)	95CT	4		
146	2-3-69	山	?	内(C)	95CT	4		
147	2-3-70	山	?	内(C)	95CT	4		
148	2-3-71	山	?	内(C)	95CT	4		
149	2-3-72	山	?	内(C)	95CT	4		
150	2-3-73	山	?	内(C)	95CT	4		
151	2-3-74	山	?	内(C)	95CT	4		
152	2-3-75	山	?	内(C)	95CT	4		
153	2-3-76	山	?	内(C)	95CT	4		
154	2-3-77	山	?	内(C)	95CT	4		
155	2-3-78	山	?	内(C)	95CT	4		
156	2-3-79	山	?	内(C)	95CT	4		
157	2-3-80	山	?	内(C)	95CT	4		
158	2-3-81	山	?	内(C)	95CT	4		
159	2-3-82	山	?	内(C)	95CT	4		
160	2-3-83	山	?	内(C)	95CT	4		
161	2-3-84	山	?	内(C)	95CT	4		
162	2-3-85	山	?	内(C)	95CT	4		
163	2-3-86	山	?	内(C)	95CT	4		
164	2-3-87	山	?	内(C)	95CT	4		
165	2-3-88	山	?	内(C)	95CT	4		
166	2-3-89	山	?	内(C)	95CT	4		
167	2-3-90	山	?	内(C)	95CT	4		
168	2-3-91	山	?	内(C)	95CT	4		
169	2-3-92	山	?	内(C)	95CT	4		
170	2-3-93	山	?	内(C)	95CT	4		
171	2-3-94	山	?	内(C)	95CT	4		
172	2-3-95	山	?	内(C)	95CT	4		
173	2-3-96	山	?	内(C)	95CT	4		
174	2-3-97	山	?	内(C)	95CT	4		
175	2-3-98	山	?	内(C)	95CT	4		
176	2-3-99	山	?	内(C)	95CT	4		
177	2-3-100	山	?	内(C)	95CT	4		
178	2-3-101	山	?	内(C)	95CT	4		
179	2-3-102	山	?	内(C)	95CT	4		
180	2-3-103	山	?	内(C)	95CT	4		
181	2-3-104	山	?	内(C)	95CT	4		
182	2-3-105	山	?	内(C)	95CT	4		
18								

95	4-1-4	外	外	地部外	C78	4		第100回6
96	4-1-5	白	?	地部外	94CT5SK02	5		
97	4-1-6	白	?	地部外	95C77	4		第100回9
98	4-1-7	白	黒	地部外	94CT4S	3		
99	4-1-8	白	?	外		7		
100	4-1-9	白	黒	外		97A地区		
101	4-1-10	白	?	外	CT4-5	3	白山の可逆性者り	
102	4-1-11	白	?	地部外	95CT7ND01	4		第92回14
103	4-1-12	白	?	地部外	94CT4S	3		第76回1
104	4-1-13	白	?	地部外	94CT4S	3		
105	4-1-14	白	黒	内	94CT5SK02	5		
106	4-1-15	白	?	地部外	95CT7	4		
107	4-1-16	白	?	地部外	95CT7	4		
108	5-1-1	白山屋	?	地部外	95CT7	4		
109	5-1-2	白山屋	?	地部外	94CT7	3		
110	5-1-3	白山屋	?	地部外	95CT4S	3	東のみ	第77回8
111	5-1-4	白山屋	?	外	95CT8	3	東のみ	
112	5-1-5	白山屋	?	内(C)	95BYST3西松樹夙			
113	5-1-6	白山屋	高白林4回	地部外	94AT9	2	東のみ	
114	5-1-7	白山屋	?	地部外	95CT7	4		
115	5-1-8	白山屋	?	地部外(C)	94CT1	2		
116	5-1-9	白山屋	?	内	94CT4S	3	地山	
117	5-1-10	白山屋	?	地部外	95CT7	4	田原	
118	5-1-11	白山屋	?	内	95CT4-4	2	田原、つまみの内に孚守り	
119	5-1-12	白山屋	?	地部外	95CT8	9-2	東のみ	
120	6-1-1	林	?	外	96AT6	2		
121	6-1-2	林	?	外	94CT4S	3		第77回4
122	6-1-3	林	?	地部外	95AT4	4		
123	6-1-4	林	?	地部外	95C71	2		
124	6-1-5	林	?	地部外	95CT71	4		第125回12
125	6-1-6	林	?	地部外	96CT5B	9-2		
126	6-1-7	林	?	地部外	95CT8	3		
127	6-1-8	林	?	地部外	95CT8	5		第100回14
128	6-1-9	林	?	地部外	94CT5SK02	5		第57回13
129	7-1-1	大張	高白林	地部外	94CT4S	3		第77回7
130	7-1-2	人豕	?	地部外	94CT4S	3		
131	7-1-3	人豕	?	内	94CT4S	3		
132	7-1-4	大張	?	(地部7)外	95CT7	3	東	
133	7-1-5	人豕	?	地部外	94CT5SK02	5	東	
134	7-1-6	大豕	?	地部外	JBYS12湯島	2		
135	7-1-7	人豕	?	地部外	JBYS13湯島	-1		
136	7-1-8	人豕	?	地部外	JBYS13各詮夙			
137	8-1-1	内	?	地部外	CT4-4			
138	8-1-2	内	?	地部外	94CT4S	3	地山	第81回4
139	8-1-3	内	?	地部外	94CT4-5	3		
140	8-1-4	内	?	地部外	94CT4S	3		
141	8-1-5	内	?	地部外	94AT2	2		
142	8-1-6	内	?	地部外	94CT2	3		
143	8-1-7	内	?	地部外	97A底ら込み			
144	8-1-8	内	?	内	95C71	3		
145	9-1-1	門	?	地部外	94CT4S	3		
146	9-1-2	門	?	地部外	96CT8	9-2		
147	9-1-3	門	?	地部外	94AT7	1		
148	9-1-4	門	?	地部外	96AT6	2		
149	9-1-5	門	?	内(C)	94AT5奥	2		第39回52
150	9-1-6	門	?	外	96AT4	4		
151	10-1-1	山田	?	地部外	94CT5SK02	5	山野園守藤山土の山に間敷	
152	10-1-2	光	?	地部外	94CT5SK02	5		
153	10-1-3	人曾寺	?	外	94CT4S	3		
154	10-1-4	?	?	内(C)	95C71	4		
155	10-1-5	?	?	地部外	94CT5SK02	4		
156	10-1-6	?	?	地部外	94CT4S	3		
157	10-1-7	?	?	地部外	95AT6	2		
158	10-1-8	?	?	地部外	94CT4-5	3		
159	10-1-9	?	?	外	94AT5P11	-		
160	10-1-10	森	?	板部外	CT4-5	3		第77回6
161	10-1-11	森	?	板部外	94CT4S	3		第77回5
162	10-1-12	山脚	?	地部外	95CT2SD01	4		
163	10-1-13	?	?	地部外	95CT1SD02	5		第22回3
164	10-1-14	山脚	高内林	地部外	94CT4-6	3		第81回29
165	10-1-15	人門	?	地部外	95CT8	4		第100回6
166	10-1-16	?	?	地部外	95AT4	5		第125回2
167	10-1-17	用	?	地部外	94CT5SK02	5		

蛇喰遺跡出土ヘラ書き文字分類表

No.	記載文字	A	B	C	合計	優位順
1	白田	32	36	36	104	1
2	山	42	18	21	81	2
3	有	10	5	2	17	3
4	白	13	3	1	17	3
5	白田原・□田原	2	3	7	12	5
6	林	4	2	3	9	6
7	大家・□家	4	3	1	8	7
8	内	4	2	2	8	7
9	門	2	2	2	6	9
10	邊			4	4	10
11	桑	3			3	11
12	田	1			1	12
13	由田	1			1	12
14	□勿		1		1	12
15	豕		1		1	12
16	光	1			1	12
17	桐家	1			1	12
18	大宮元寺	1			1	12
19	忌	1			1	12
21	大	1			1	12
22	田		1		1	12
23	日 _カ ・白 _カ ・白□ _カ	11	10	30	51	
24	由 _カ ・出 _カ ・□出 _カ	11	18	41	70	
	合計				400	

その他

25	記載文字不明			7	
26	破片のため判読不明			96	
	合計			103	

総計

503 点

・ABCは記載文字の残存状況のランク付け

A：文字が土器片にほぼ明確に残っているもの

B：やや欠落しているが判読できるもの

C：欠落が著しいが文字が推定できるもの

第6章 自然科学分析

蛇喰遺跡出土柱根の樹種鑑定

吉野 毅（島根大学 総合理工学部）・渡邊正巳（文化財調査コンサルタント（株））

はじめに

蛇喰遺跡は、島根県東部の八束郡玉湯町玉造地内に立地する。

本報は、玉湯町教育委員会から提供を受けた柱根4試料の樹種結果である。

提供を受けた試料から永久プレパラートを作成し同定を行った結果、2試料がカヤ属、2試料がクリであることが明らかになった。

永久プレパラート作成および観察・記載方法

玉湯町教育委員会から提供を受けた試料整形後の試料について、図1のフローチャートに従い永久プレパラートを作成した。また作成した永久プレパラートには整理番号を付け、当社にて保管管理している。

作製した永久プレパラートを、光学顕微鏡下で40倍～600倍の倍率で観察し記載した。記載に当たって同一分類群は一括して記載し、代表的な試料の3断面の顕微鏡写真を付けた。また用語などは基本的に鳥地ほか（1985）に従った。

樹種の鑑定と記載

表1に鑑定結果を示し、各分類群毎に記載を行った。

(1) カヤ属 *Torreya* sp.

① 試料番号：P3 整理番号：W98072802 製品名：柱（柱根） 年代：8C中頃～9C前半

② 試料番号：P10 整理番号：W98072804 製品名：柱（柱根） 年代：8C中頃～9C前半

記載：

構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭い。仮道管にはらせん肥厚があり、2本のらせんが対になる傾向がある。不顯著であるが有縫膜孔の孔口は凸レンズ状をなす。また、分野壁孔は不明瞭であるがヒノキ型で2～4個存在することなどから、カヤ属と同定した。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

① 試料番号：P1 整理番号：W98072801 製品名：柱（柱根） 年代：8C中頃～9C前半

② 試料番号：P2 整理番号：W98072803 製品名：柱（柱根） 年代：8C中頃～9C前半

記載：

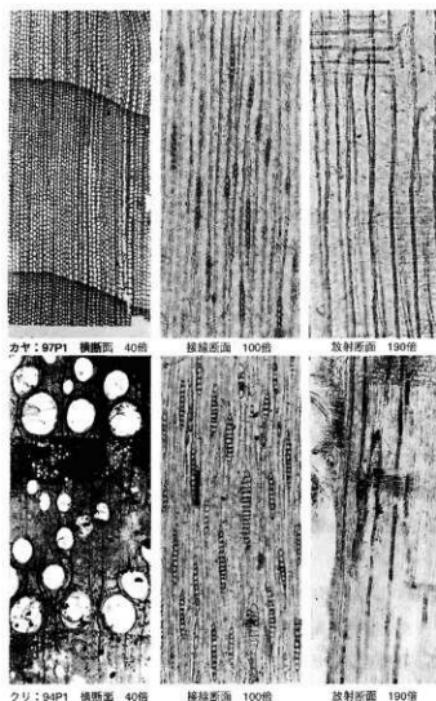
環孔材で大きい円形ないし梢円形の道管が単独で多列に配列し、孔圈部の幅はかなり広い。孔圈外の道管は小さく、やや火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが顯著に認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接戦状に配列するのが認められる。放射組織はすべて單列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

引用文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造, 276p. 文永堂, 東京,

試料番号	樹種名	
	和名	学名
P 1	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
P 3	カヤ属	<i>Torreya</i> sp.
P 2	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
P10	カヤ属	<i>Torreya</i> sp.

表1 樹種鑑定結果一覧表



写真A

報告書抄録

ふりがな	じやばみいせきはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	蛇喰遺跡発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編集者	片岡詩子					
編集機関	玉湯町教育委員会					
所在地	〒699-0202 島根県八束郡玉湯町湯町 1793					
発行年月日	西暦 1999 年 3 月 31 日					
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
蛇喰遺跡	八束郡玉湯町 玉造237	市町村	遺跡番号	35° 25' 40"	133° 5' 15"	19930712 ~ 19971218
		32202	E25			
調査原因	範囲の確認					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
蛇喰遺跡	玉作り跡 役所跡	奈良時代 平安時代	掘立柱建物跡 竪穴住居状遺構	須恵器 土師器 円面鏡 ヘラ書き土器 緑釉陶器 玉関係遺物	官衛跡の可能性もある	

図 版



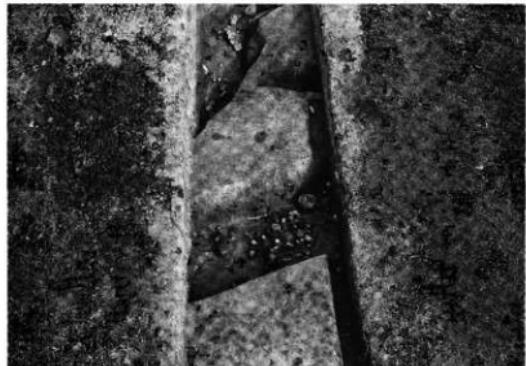
第1調査区A地区
SD01・02・03



B地区
暗茶褐色粘質土層
遺物出土状況



B地区
暗茶褐色粘質土層
土器出土状況



C地区SD01・02
(南より)

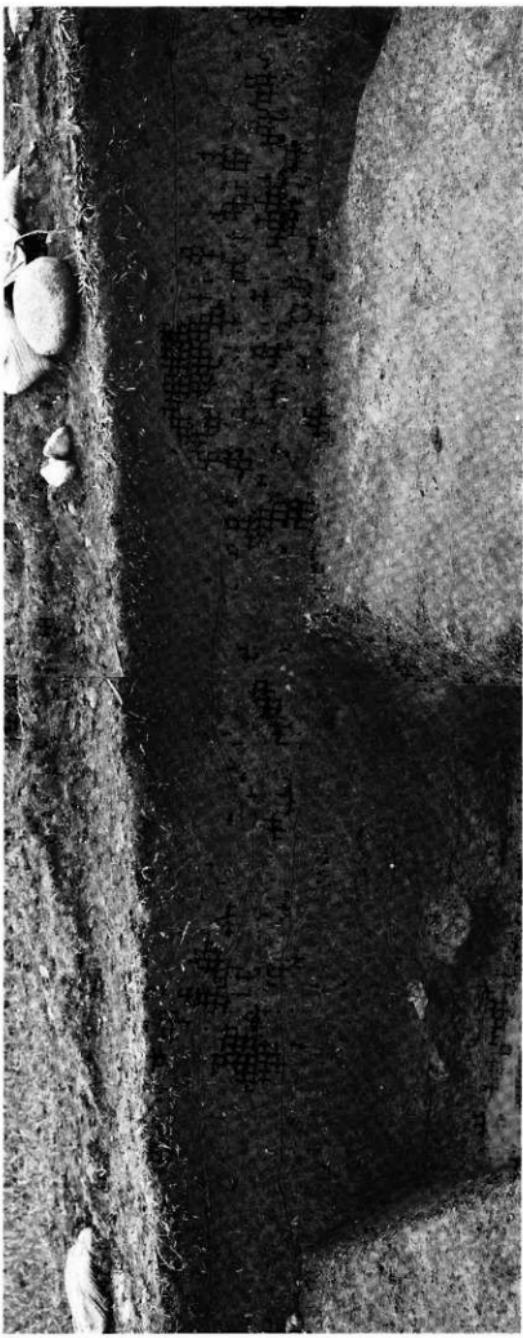


SD01遺物出土状況
(北より)



SD02遺物出土状況
(北より)

C地区 SD02西壁土层





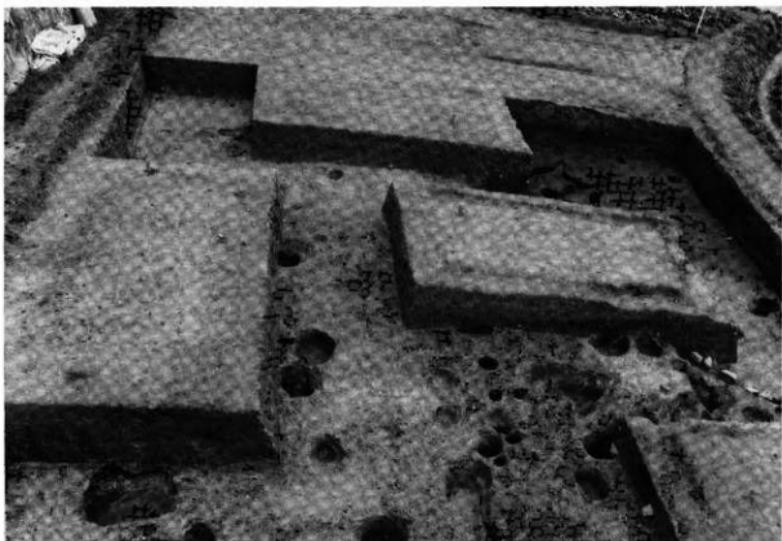
C地区SD03
(西より)



C地区石組遺構
(南より)



第2調査区近景



A地区全景（北より）



A地区堀立柱建物跡（北より）



A地区P1・6
(南より)



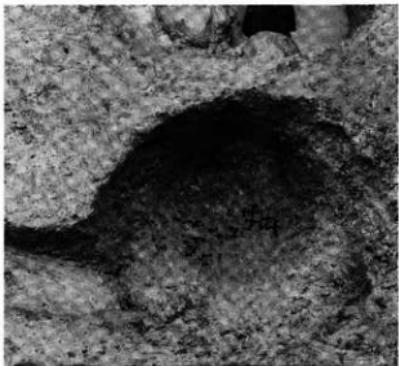
A地区P4・5・8・9
(東より)



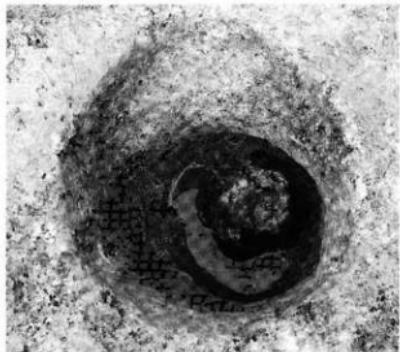
A地区北西丘陵
ピット群 (北より)



A地区P1・2（北より）



A地区P1柱根抜き取り後（東より）



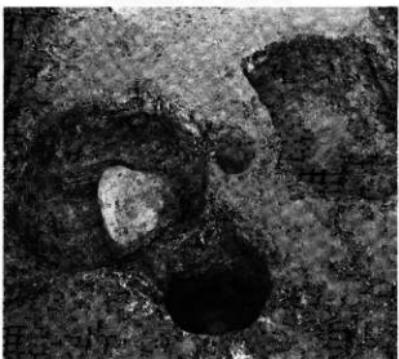
A地区P3（東より）



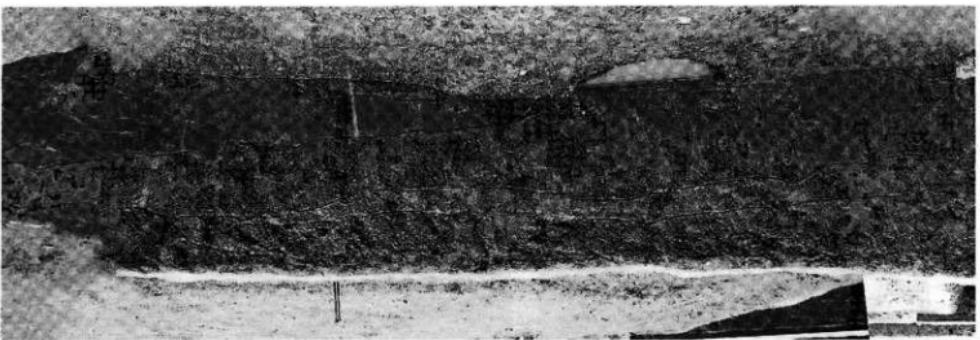
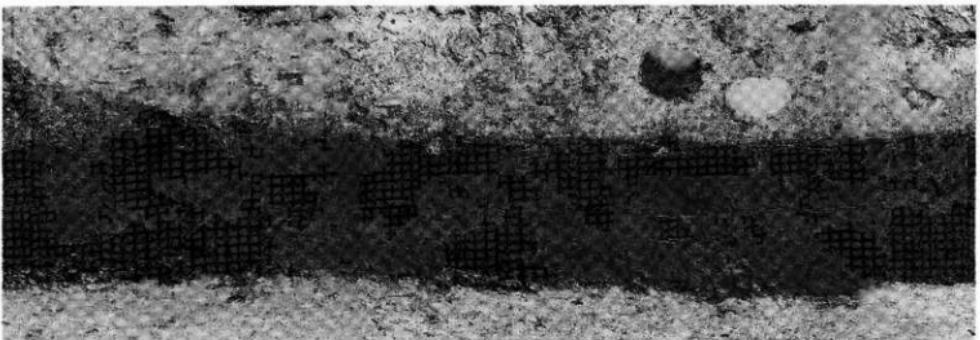
A地区P2・10（西より）

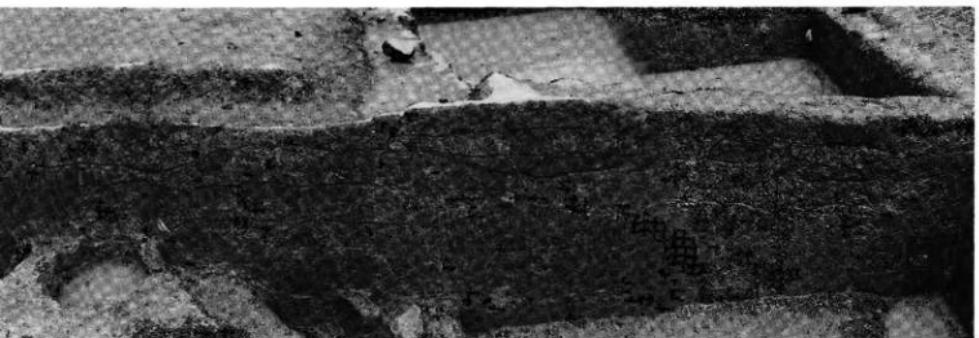


A地区SKOI（北より）

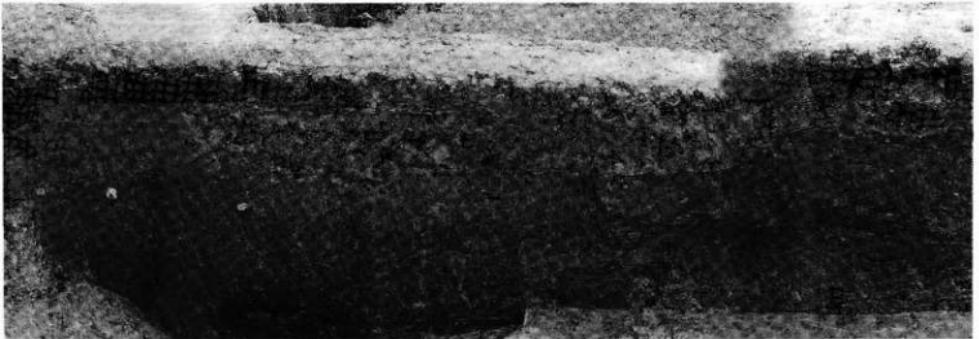


A地区P12・13（西より）





A地区土層A-a



A地区土層B-b



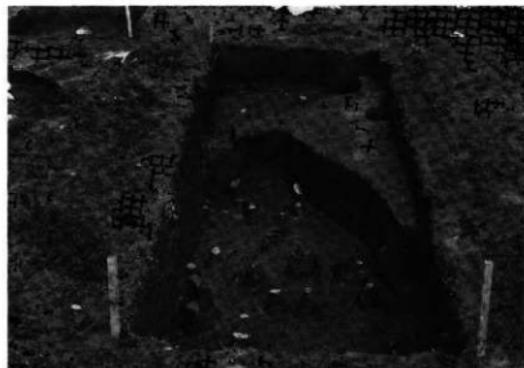
B地区SD01
(西より)



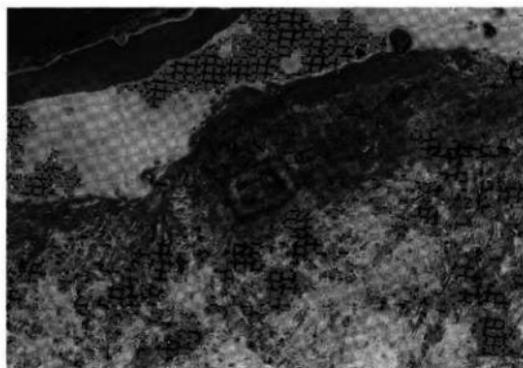
C地区SD01
(東より)



C地区
文字入り須恵器
出土状況「白田原」



C地区SX01・02
遺物出土状況
(西より)



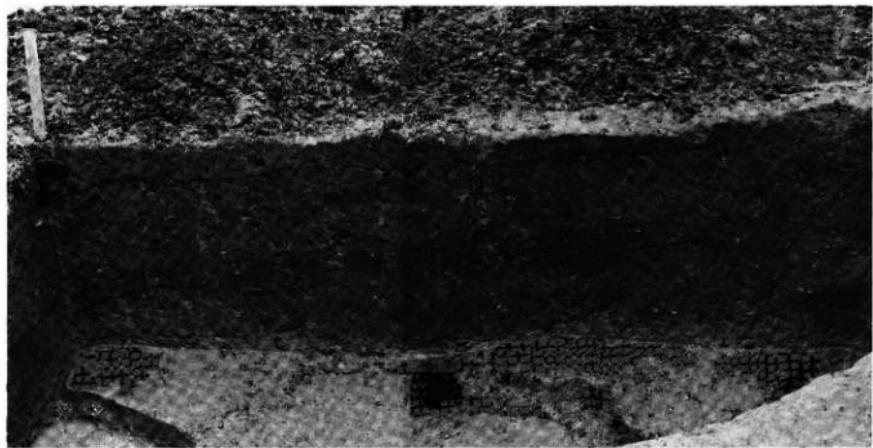
C地区SX01
鉄製鉗具出土状況



C地区
SX02平玉未成品
文字入り須恵器
'由'出土状況

C地区SX01・02

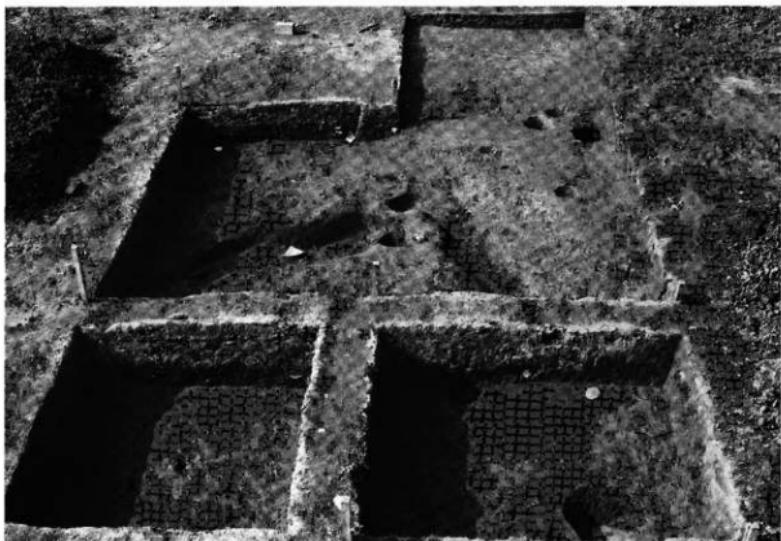
(西より)



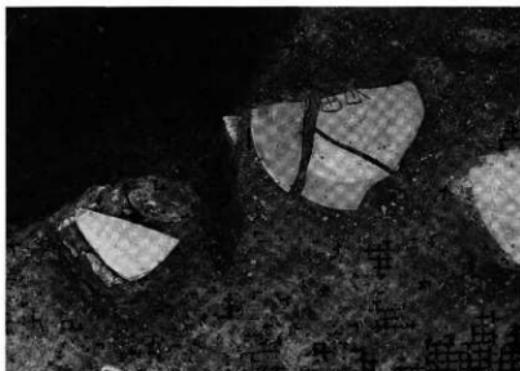
C地区SX02土層 (南壁)



C地区SI01覆土遺物出土状況（南より）



C地区SI01
(南より)



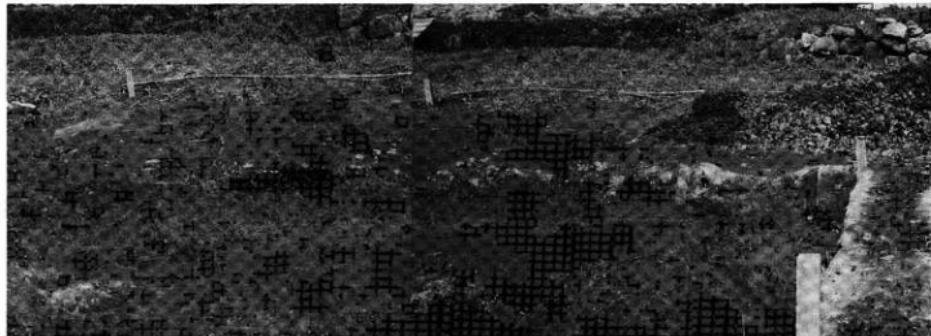
C地区SI01覆土ヘラ
書き土器出土状況
「白田」



「林」



「由田」



C地区SI01土層（東壁）



第3調査区SK01
(北より)



SX02
(西より)